

محمد رسول الله

پیامبر و سیاستمدار



تالیف: مؤتمری و ات  
ترجمہ: اسماعیل والی زادہ  
ناشر: کتاب فروشی اسلامیہ

297.6  
M872M

BORROWER'S NO.

ISSUE DATE

BORROWER'S NO.

ISSUE DATE

# DATE LABEL

29 DEC 1976

S. No. ~~3501~~ ~~3496~~ ~~3497~~ ~~3498~~ ~~3499~~ ~~3500~~ ~~3501~~ ~~3502~~ ~~3503~~ ~~3504~~ ~~3505~~ ~~3506~~ ~~3507~~ ~~3508~~ ~~3509~~ ~~3510~~ ~~3511~~ ~~3512~~ ~~3513~~ ~~3514~~ ~~3515~~ ~~3516~~ ~~3517~~ ~~3518~~ ~~3519~~ ~~3520~~ ~~3521~~ ~~3522~~ ~~3523~~ ~~3524~~ ~~3525~~ ~~3526~~ ~~3527~~ ~~3528~~ ~~3529~~ ~~3530~~ ~~3531~~ ~~3532~~ ~~3533~~ ~~3534~~ ~~3535~~ ~~3536~~ ~~3537~~ ~~3538~~ ~~3539~~ ~~3540~~ ~~3541~~ ~~3542~~ ~~3543~~ ~~3544~~ ~~3545~~ ~~3546~~ ~~3547~~ ~~3548~~ ~~3549~~ ~~3550~~ ~~3551~~ ~~3552~~ ~~3553~~ ~~3554~~ ~~3555~~ ~~3556~~ ~~3557~~ ~~3558~~ ~~3559~~ ~~3560~~ ~~3561~~ ~~3562~~ ~~3563~~ ~~3564~~ ~~3565~~ ~~3566~~ ~~3567~~ ~~3568~~ ~~3569~~ ~~3570~~ ~~3571~~ ~~3572~~ ~~3573~~ ~~3574~~ ~~3575~~ ~~3576~~ ~~3577~~ ~~3578~~ ~~3579~~ ~~3580~~ ~~3581~~ ~~3582~~ ~~3583~~ ~~3584~~ ~~3585~~ ~~3586~~ ~~3587~~ ~~3588~~ ~~3589~~ ~~3590~~ ~~3591~~ ~~3592~~ ~~3593~~ ~~3594~~ ~~3595~~ ~~3596~~ ~~3597~~ ~~3598~~ ~~3599~~ ~~3600~~ ~~3601~~ ~~3602~~ ~~3603~~ ~~3604~~ ~~3605~~ ~~3606~~ ~~3607~~ ~~3608~~ ~~3609~~ ~~3610~~ ~~3611~~ ~~3612~~ ~~3613~~ ~~3614~~ ~~3615~~ ~~3616~~ ~~3617~~ ~~3618~~ ~~3619~~ ~~3620~~ ~~3621~~ ~~3622~~ ~~3623~~ ~~3624~~ ~~3625~~ ~~3626~~ ~~3627~~ ~~3628~~ ~~3629~~ ~~3630~~ ~~3631~~ ~~3632~~ ~~3633~~ ~~3634~~ ~~3635~~ ~~3636~~ ~~3637~~ ~~3638~~ ~~3639~~ ~~3640~~ ~~3641~~ ~~3642~~ ~~3643~~ ~~3644~~ ~~3645~~ ~~3646~~ ~~3647~~ ~~3648~~ ~~3649~~ ~~3650~~ ~~3651~~ ~~3652~~ ~~3653~~ ~~3654~~ ~~3655~~ ~~3656~~ ~~3657~~ ~~3658~~ ~~3659~~ ~~3660~~ ~~3661~~ ~~3662~~ ~~3663~~ ~~3664~~ ~~3665~~ ~~3666~~ ~~3667~~ ~~3668~~ ~~3669~~ ~~3670~~ ~~3671~~ ~~3672~~ ~~3673~~ ~~3674~~ ~~3675~~ ~~3676~~ ~~3677~~ ~~3678~~ ~~3679~~ ~~3680~~ ~~3681~~ ~~3682~~ ~~3683~~ ~~3684~~ ~~3685~~ ~~3686~~ ~~3687~~ ~~3688~~ ~~3689~~ ~~3690~~ ~~3691~~ ~~3692~~ ~~3693~~ ~~3694~~ ~~3695~~ ~~3696~~ ~~3697~~ ~~3698~~ ~~3699~~ ~~3700~~ ~~3701~~ ~~3702~~ ~~3703~~ ~~3704~~ ~~3705~~ ~~3706~~ ~~3707~~ ~~3708~~ ~~3709~~ ~~3710~~ ~~3711~~ ~~3712~~ ~~3713~~ ~~3714~~ ~~3715~~ ~~3716~~ ~~3717~~ ~~3718~~ ~~3719~~ ~~3720~~ ~~3721~~ ~~3722~~ ~~3723~~ ~~3724~~ ~~3725~~ ~~3726~~ ~~3727~~ ~~3728~~ ~~3729~~ ~~3730~~ ~~3731~~ ~~3732~~ ~~3733~~ ~~3734~~ ~~3735~~ ~~3736~~ ~~3737~~ ~~3738~~ ~~3739~~ ~~3740~~ ~~3741~~ ~~3742~~ ~~3743~~ ~~3744~~ ~~3745~~ ~~3746~~ ~~3747~~ ~~3748~~ ~~3749~~ ~~3750~~ ~~3751~~ ~~3752~~ ~~3753~~ ~~3754~~ ~~3755~~ ~~3756~~ ~~3757~~ ~~3758~~ ~~3759~~ ~~3760~~ ~~3761~~ ~~3762~~ ~~3763~~ ~~3764~~ ~~3765~~ ~~3766~~ ~~3767~~ ~~3768~~ ~~3769~~ ~~3770~~ ~~3771~~ ~~3772~~ ~~3773~~ ~~3774~~ ~~3775~~ ~~3776~~ ~~3777~~ ~~3778~~ ~~3779~~ ~~3780~~ ~~3781~~ ~~3782~~ ~~3783~~ ~~3784~~ ~~3785~~ ~~3786~~ ~~3787~~ ~~3788~~ ~~3789~~ ~~3790~~ ~~3791~~ ~~3792~~ ~~3793~~ ~~3794~~ ~~3795~~ ~~3796~~ ~~3797~~ ~~3798~~ ~~3799~~ ~~3800~~ ~~3801~~ ~~3802~~ ~~3803~~ ~~3804~~ ~~3805~~ ~~3806~~ ~~3807~~ ~~3808~~ ~~3809~~ ~~3810~~ ~~3811~~ ~~3812~~ ~~3813~~ ~~3814~~ ~~3815~~ ~~3816~~ ~~3817~~ ~~3818~~ ~~3819~~ ~~3820~~ ~~3821~~ ~~3822~~ ~~3823~~ ~~3824~~ ~~3825~~ ~~3826~~ ~~3827~~ ~~3828~~ ~~3829~~ ~~3830~~ ~~3831~~ ~~3832~~ ~~3833~~ ~~3834~~ ~~3835~~ ~~3836~~ ~~3837~~ ~~3838~~ ~~3839~~ ~~3840~~ ~~3841~~ ~~3842~~ ~~3843~~ ~~3844~~ ~~3845~~ ~~3846~~ ~~3847~~ ~~3848~~ ~~3849~~ ~~3850~~ ~~3851~~ ~~3852~~ ~~3853~~ ~~3854~~ ~~3855~~ ~~3856~~ ~~3857~~ ~~3858~~ ~~3859~~ ~~3860~~ ~~3861~~ ~~3862~~ ~~3863~~ ~~3864~~ ~~3865~~ ~~3866~~ ~~3867~~ ~~3868~~ ~~3869~~ ~~3870~~ ~~3871~~ ~~3872~~ ~~3873~~ ~~3874~~ ~~3875~~ ~~3876~~ ~~3877~~ ~~3878~~ ~~3879~~ ~~3880~~ ~~3881~~ ~~3882~~ ~~3883~~ ~~3884~~ ~~3885~~ ~~3886~~ ~~3887~~ ~~3888~~ ~~3889~~ ~~3890~~ ~~3891~~ ~~3892~~ ~~3893~~ ~~3894~~ ~~3895~~ ~~3896~~ ~~3897~~ ~~3898~~ ~~3899~~ ~~3900~~ ~~3901~~ ~~3902~~ ~~3903~~ ~~3904~~ ~~3905~~ ~~3906~~ ~~3907~~ ~~3908~~ ~~3909~~ ~~3910~~ ~~3911~~ ~~3912~~ ~~3913~~ ~~3914~~ ~~3915~~ ~~3916~~ ~~3917~~ ~~3918~~ ~~3919~~ ~~3920~~ ~~3921~~ ~~3922~~ ~~3923~~ ~~3924~~ ~~3925~~ ~~3926~~ ~~3927~~ ~~3928~~ ~~3929~~ ~~3930~~ ~~3931~~ ~~3932~~ ~~3933~~ ~~3934~~ ~~3935~~ ~~3936~~ ~~3937~~ ~~3938~~ ~~3939~~ ~~3940~~ ~~3941~~ ~~3942~~ ~~3943~~ ~~3944~~ ~~3945~~ ~~3946~~ ~~3947~~ ~~3948~~ ~~3949~~ ~~3950~~ ~~3951~~ ~~3952~~ ~~3953~~ ~~3954~~ ~~3955~~ ~~3956~~ ~~3957~~ ~~3958~~ ~~3959~~ ~~3960~~ ~~3961~~ ~~3962~~ ~~3963~~ ~~3964~~ ~~3965~~ ~~3966~~ ~~3967~~ ~~3968~~ ~~3969~~ ~~3970~~ ~~3971~~ ~~3972~~ ~~3973~~ ~~3974~~ ~~3975~~ ~~3976~~ ~~3977~~ ~~3978~~ ~~3979~~ ~~3980~~ ~~3981~~ ~~3982~~ ~~3983~~ ~~3984~~ ~~3985~~ ~~3986~~ ~~3987~~ ~~3988~~ ~~3989~~ ~~3990~~ ~~3991~~ ~~3992~~ ~~3993~~ ~~3994~~ ~~3995~~ ~~3996~~ ~~3997~~ ~~3998~~ ~~3999~~ ~~4000~~ ~~4001~~ ~~4002~~ ~~4003~~ ~~4004~~ ~~4005~~ ~~4006~~ ~~4007~~ ~~4008~~ ~~4009~~ ~~4010~~ ~~4011~~ ~~4012~~ ~~4013~~ ~~4014~~ ~~4015~~ ~~4016~~ ~~4017~~ ~~4018~~ ~~4019~~ ~~4020~~ ~~4021~~ ~~4022~~ ~~4023~~ ~~4024~~ ~~4025~~ ~~4026~~ ~~4027~~ ~~4028~~ ~~4029~~ ~~4030~~ ~~4031~~ ~~4032~~ ~~4033~~ ~~4034~~ ~~4035~~ ~~4036~~ ~~4037~~ ~~4038~~ ~~4039~~ ~~4040~~ ~~4041~~ ~~4042~~ ~~4043~~ ~~4044~~ ~~4045~~ ~~4046~~ ~~4047~~ ~~4048~~ ~~4049~~ ~~4050~~ ~~4051~~ ~~4052~~ ~~4053~~ ~~4054~~ ~~4055~~ ~~4056~~ ~~4057~~ ~~4058~~ ~~4059~~ ~~4060~~ ~~4061~~ ~~4062~~ ~~4063~~ ~~4064~~ ~~4065~~ ~~4066~~ ~~4067~~ ~~4068~~ ~~4069~~ ~~4070~~ ~~4071~~ ~~4072~~ ~~4073~~ ~~4074~~ ~~4075~~ ~~4076~~ ~~4077~~ ~~4078~~ ~~4079~~ ~~4080~~ ~~4081~~ ~~4082~~ ~~4083~~ ~~4084~~ ~~4085~~ ~~4086~~ ~~4087~~ ~~4088~~ ~~4089~~ ~~4090~~ ~~4091~~ ~~4092~~ ~~4093~~ ~~4094~~ ~~4095~~ ~~4096~~ ~~4097~~ ~~4098~~ ~~4099~~ ~~4100~~ ~~4101~~ ~~4102~~ ~~4103~~ ~~4104~~ ~~4105~~ ~~4106~~ ~~4107~~ ~~4108~~ ~~4109~~ ~~4110~~ ~~4111~~ ~~4112~~ ~~4113~~ ~~4114~~ ~~4115~~ ~~4116~~ ~~4117~~ ~~4118~~ ~~4119~~ ~~4120~~ ~~4121~~ ~~4122~~ ~~4123~~ ~~4124~~ ~~4125~~ ~~4126~~ ~~4127~~ ~~4128~~ ~~4129~~ ~~4130~~ ~~4131~~ ~~4132~~ ~~4133~~ ~~4134~~ ~~4135~~ ~~4136~~ ~~4137~~ ~~4138~~ ~~4139~~ ~~4140~~ ~~4141~~ ~~4142~~ ~~4143~~ ~~4144~~ ~~4145~~ ~~4146~~ ~~4147~~ ~~4148~~ ~~4149~~ ~~4150~~ ~~4151~~ ~~4152~~ ~~4153~~ ~~4154~~ ~~4155~~ ~~4156~~ ~~4157~~ ~~4158~~ ~~4159~~ ~~4160~~ ~~4161~~ ~~4162~~ ~~4163~~ ~~4164~~ ~~4165~~ ~~4166~~ ~~4167~~ ~~4168~~ ~~4169~~ ~~4170~~ ~~4171~~ ~~4172~~ ~~4173~~ ~~4174~~ ~~4175~~ ~~4176~~ ~~4177~~ ~~4178~~ ~~4179~~ ~~4180~~ ~~4181~~ ~~4182~~ ~~4183~~ ~~4184~~ ~~4185~~ ~~4186~~ ~~4187~~ ~~4188~~ ~~4189~~ ~~4190~~ ~~4191~~ ~~4192~~ ~~4193~~ ~~4194~~ ~~4195~~ ~~4196~~ ~~4197~~ ~~4198~~ ~~4199~~ ~~4200~~ ~~4201~~ ~~4202~~ ~~4203~~ ~~4204~~ ~~4205~~ ~~4206~~ ~~4207~~ ~~4208~~ ~~4209~~ ~~4210~~ ~~4211~~ ~~4212~~ ~~4213~~ ~~4214~~ ~~4215~~ ~~4216~~ ~~4217~~ ~~4218~~ ~~4219~~ ~~4220~~ ~~4221~~ ~~4222~~ ~~4223~~ ~~4224~~ ~~4225~~ ~~4226~~ ~~4227~~ ~~4228~~ ~~4229~~ ~~4230~~ ~~4231~~ ~~4232~~ ~~4233~~ ~~4234~~ ~~4235~~ ~~4236~~ ~~4237~~ ~~4238~~ ~~4239~~ ~~4240~~ ~~4241~~ ~~4242~~ ~~4243~~ ~~4244~~ ~~4245~~ ~~4246~~ ~~4247~~ ~~4248~~ ~~4249~~ ~~4250~~ ~~4251~~ ~~4252~~ ~~4253~~ ~~4254~~ ~~4255~~ ~~4256~~ ~~4257~~ ~~4258~~ ~~4259~~ ~~4260~~ ~~4261~~ ~~4262~~ ~~4263~~ ~~4264~~ ~~4265~~ ~~4266~~ ~~4267~~ ~~4268~~ ~~4269~~ ~~4270~~ ~~4271~~ ~~4272~~ ~~4273~~ ~~4274~~ ~~4275~~ ~~4276~~ ~~4277~~ ~~4278~~ ~~4279~~ ~~4280~~ ~~4281~~ ~~4282~~ ~~4283~~ ~~4284~~ ~~4285~~ ~~4286~~ ~~4287~~ ~~4288~~ ~~4289~~ ~~4290~~ ~~4291~~ ~~4292~~ ~~4293~~ ~~4294~~ ~~4295~~ ~~4296~~ ~~4297~~ ~~4298~~ ~~4299~~ ~~4300~~ ~~4301~~ ~~4302~~ ~~4303~~ ~~4304~~ ~~4305~~ ~~4306~~ ~~4307~~ ~~4308~~ ~~4309~~ ~~4310~~ ~~4311~~ ~~4312~~ ~~4313~~ ~~4314~~ ~~4315~~ ~~4316~~ ~~4317~~ ~~4318~~ ~~4319~~ ~~4320~~ ~~4321~~ ~~4322~~ ~~4323~~ ~~4324~~ ~~4325~~ ~~4326~~ ~~4327~~ ~~4328~~ ~~4329~~ ~~4330~~ ~~4331~~ ~~4332~~ ~~4333~~ ~~4334~~ ~~4335~~ ~~4336~~ ~~4337~~ ~~4338~~ ~~4339~~ ~~4340~~ ~~4341~~ ~~4342~~ ~~4343~~ ~~4344~~ ~~4345~~ ~~4346~~ ~~4347~~ ~~4348~~ ~~4349~~ ~~4350~~ ~~4351~~ ~~4352~~ ~~4353~~ ~~4354~~ ~~4355~~ ~~4356~~ ~~4357~~ ~~4358~~ ~~4359~~ ~~4360~~ ~~4361~~ ~~4362~~ ~~4363~~ ~~4364~~ ~~4365~~ ~~4366~~ ~~4367~~ ~~4368~~ ~~4369~~ ~~4370~~ ~~4371~~ ~~4372~~ ~~4373~~ ~~4374~~ ~~4375~~ ~~4376~~ ~~4377~~ ~~4378~~ ~~4379~~ ~~4380~~ ~~4381~~ ~~4382~~ ~~4383~~ ~~4384~~ ~~4385~~ ~~4386~~ ~~4387~~ ~~4388~~ ~~4389~~ ~~4390~~ ~~4391~~ ~~4392~~ ~~4393~~ ~~4394~~ ~~4395~~ ~~4396~~ ~~4397~~ ~~4398~~ ~~4399~~ ~~4400~~ ~~4401~~ ~~4402~~ ~~4403~~ ~~4404~~ ~~4405~~ ~~4406~~ ~~4407~~ ~~4408~~ ~~4409~~ ~~4410~~ ~~4411~~ ~~4412~~ ~~4413~~ ~~4414~~ ~~4415~~ ~~4416~~ ~~4417~~ ~~4418~~ ~~4419~~ ~~4420~~ ~~4421~~ ~~4422~~ ~~4423~~ ~~4424~~ ~~4425~~ ~~4426~~ ~~4427~~ ~~4428~~ ~~4429~~ ~~4430~~ ~~4431~~ ~~4432~~ ~~4433~~ ~~4434~~ ~~4435~~ ~~4436~~ ~~4437~~ ~~4438~~ ~~4439~~ ~~4440~~ ~~4441~~ ~~4442~~ ~~4443~~ ~~4444~~ ~~4445~~ ~~4446~~ ~~4447~~ ~~4448~~ ~~4449~~ ~~4450~~ ~~4451~~ ~~4452~~ ~~4453~~ ~~4454~~ ~~4455~~ ~~4456~~ ~~4457~~ ~~4458~~ ~~4459~~ ~~4460~~ ~~4461~~ ~~4462~~ ~~4463~~ ~~4464~~ ~~4465~~ ~~4466~~ ~~4467~~ ~~4468~~ ~~4469~~ ~~4470~~ ~~4471~~ ~~4472~~ ~~4473~~ ~~4474~~ ~~4475~~ ~~4476~~ ~~4477~~ ~~4478~~ ~~4479~~ ~~4480~~ ~~4481~~ ~~4482~~ ~~4483~~ ~~4484~~ ~~4485~~ ~~4486~~ ~~4487~~ ~~4488~~ ~~4489~~ ~~4490~~ ~~4491~~ ~~4492~~ ~~4493~~ ~~4494~~ ~~4495~~ ~~4496~~ ~~4497~~ ~~4498~~ ~~4499~~ ~~4500~~ ~~4501~~ ~~4502~~ ~~4503~~ ~~4504~~ ~~4505~~ ~~4506~~ ~~4507~~ ~~4508~~ ~~4509~~ ~~4510~~ ~~4511~~ ~~4512~~ ~~4513~~ ~~4514~~ ~~4515~~ ~~4516~~ ~~4517~~ ~~4518~~ ~~4519~~ ~~4520~~ ~~4521~~ ~~4522~~ ~~4523~~ ~~4524~~ ~~4525~~ ~~4526~~ ~~4527~~ ~~4528~~ ~~4529~~ ~~4530~~ ~~4531~~ ~~4532~~ ~~4533~~ ~~4534~~ ~~4535~~ ~~4536~~ ~~4537~~ ~~4538~~ ~~4539~~ ~~4540~~ ~~4541~~ ~~4542~~ ~~4543~~ ~~4544~~ ~~4545~~ ~~4546~~ ~~4547~~ ~~4548~~ ~~4549~~ ~~4550~~ ~~4551~~ ~~4552~~ ~~4553~~ ~~4554~~ ~~4555~~ ~~4556~~ ~~4557~~ ~~4558~~ ~~4559~~ ~~4560~~ ~~4561~~ ~~4562~~ ~~4563~~ ~~4564~~ ~~4565~~ ~~4566~~ ~~4567~~ ~~4568~~ ~~4569~~ ~~4570~~ ~~4571~~ ~~4572~~ ~~4573~~ ~~4574~~ ~~4575~~ ~~4576~~ ~~4577~~ ~~4578~~ ~~4579~~ ~~4580~~ ~~4581~~ ~~4582~~ ~~4583~~ ~~4584~~ ~~4585~~ ~~4586~~ ~~4587~~ ~~4588~~ ~~4589~~ ~~4590~~ ~~4591~~ ~~4592~~ ~~4593~~ ~~4594~~ ~~4595~~ ~~4596~~ ~~4597~~ ~~4598~~ ~~4599~~ ~~4600~~ ~~4601~~ ~~4602~~ ~~4603~~ ~~4604~~ ~~4605~~ ~~4606~~ ~~4607~~ ~~4608~~ ~~4609~~ ~~4610~~ ~~4611~~ ~~4612~~ ~~4613~~ ~~4614~~ ~~4615~~ ~~4616~~ ~~4617~~ ~~4618~~ ~~4619~~ ~~4620~~ ~~4621~~ ~~4622~~ ~~4623~~ ~~4624~~ ~~4625~~ ~~4626~~ ~~4627~~ ~~4628~~ ~~4629~~ ~~4630~~ ~~4631~~ ~~4632~~ ~~4633~~ ~~4634~~ ~~4635~~ ~~4636~~ ~~4637~~ ~~4638~~ ~~4639~~ ~~4640~~ ~~4641~~ ~~4642~~ ~~4643~~ ~~4644~~ ~~4645~~ ~~4646~~ ~~4647~~ ~~4648~~ ~~4649~~ ~~4650~~ ~~4651~~ ~~4652~~ ~~4653~~ ~~4654~~ ~~4655~~ ~~4656~~ ~~4657~~ ~~4658~~ ~~4659~~ ~~4660~~ ~~4661~~ ~~4662~~ ~~4663~~ ~~4664~~ ~~4665~~ ~~4666~~ ~~4667~~ ~~4668~~ ~~4669~~ ~~4670~~ ~~4671~~ ~~4672~~ ~~4673~~ ~~4674~~ ~~4675~~ ~~4676~~ ~~4677~~ ~~4678~~ ~~4679~~ ~~4680~~ ~~4681~~ ~~4682~~ ~~4683~~ ~~4684~~ ~~4685~~ ~~4686~~ ~~4687~~ ~~4688~~ ~~4689~~ ~~4690~~ ~~4691~~ ~~4692~~ ~~4693~~ ~~4694~~ ~~4695~~ ~~4696~~ ~~4697~~ ~~4698~~ ~~4699~~ ~~4700~~ ~~4701~~ ~~4702~~ ~~4703~~ ~~4704~~ ~~4705~~ ~~4706~~ ~~4707~~ ~~4708~~ ~~4709~~ ~~4710~~ ~~4711~~ ~~4712~~ ~~4713~~ ~~4714~~ ~~4715~~ ~~4716~~ ~~4717~~ ~~4718~~ ~~4719~~ ~~4720~~ ~~4~~

[illegible]



# محمد پیامبر و سیاستمدار

تألیف

پرفسور و . مونتگمری وات

رئیس بخش عربی دانشگاه ادینبورو

---

در دارالترجمه ایران - مک گرو هیل زیر نظر  
اسماعیل والی زاده به زبان فارسی برگردانده  
شده و مقابله و تنقیح گردیده است .

## از انتشارات کتابفروشی اسلامیّه

تهران - خیابان بوذرجمهری تلفن ۲۱۹۶۶

اردیبهشت ۱۳۴۴

\*( چاپ اسلامیّه )\*

CHECKED

K. UNIVERSITY LIB  
Acc. No. 113620  
Date 14/3/74

81/83

297.6

872.01

مقدمه ناشر

برای بنگاه انتشاراتی اسلامیة مایه سرافرازی است که پیوسته خدمت به نشر آثار اسلامی را وجهه همت خود قرار داده است و همواره در صدد است که هر کتاب خوبی را که به معرفی این دین یاری می کند در دسترس طالبان و مشتاقان بگذارد و از این راه دینی را که به دین گرامی خود دارد ادانماید. کتاب حاضر که اینک ترجمه آن انتشار می یابد کتاب سودمندی است که آقای موننگمری وات محقق انگلیسی تألیف کرده است و بی شک در معرفی شخصیت حضرت رسول اکرم به اروپاییان تأثیر فراوان دارد و برای مسلمانان نیز خواندن آن خالی از فایده نخواهد بود. غرض ما از نشر این اثر و آثاری نظیر آن این است که مسلمانان، هم به ارزش جهانی دین خود بیشتر واقف شوند و ارج این گوهر گرانقدر را بدانند و هم از داوریهای دیگران در باب پیشوای مسلمانان آگاه شوند زیرا این گونه آگهیها مایه گرایش بیشتری به سوی سازش و تفاهم خواهد بود و تعصبات ناشی از جهل رخت از میانه بر خواهد بست و دودین بزرگ یکتاپرستی یعنی مسیحیت و اسلام در کنار هم زندگی بهتری خواهند داشت، چنانکه خواست شارع مقدس اسلام نیز همین بوده است.

نکات گفتنی در باب ارزش جهانی دین اسلام بسیار است و امیدواریم همچنانکه آقای وات پیشنهاد کرده است محققان اسلامی نیز دست به کار شوند و آنچنانکه در خور يك محقق قرن بیستم است،

نگات عالی و اخلاقی و حقوقی و اجتماعی اسلام را متقابلاً به جهانیان عرضه دارند تا معلوم شود که اسلام شایستگی آن را دارد که یک دین جهانی بشود و اگر تا کنون کوتاهی شده است نقص از دین نبوده است بلکه شاید بتوان گفت که پیروان و متولیان چنانکه باید حرمت این امامزاده را نگاه نداشته اند و به درستی عمل نکرده اند. این ما هستیم که باید به زبانهای زنده جهان اهمیت اسلام و اصول آن را به جهانیان بشناسانیم. ایرانیان که در زبان و ادبیات عرب زمانی گوی سبقت از قوم عرب ربوده بودند فقط و فقط قصدشان از کسب تبخرو مهارت در زبان عربی خدمت به دین اسلام و گسترش حقایق آن در جهان آن روز بود. امروز هم علمای ما برای گسترش دین خود در جهان یا لااقل برای معرفی حقایق آن به دانستن کامل یکی از زبانهای زنده جهان نیاز مبرم دارند تا به جای آنکه یک نفر خارجی در باب دین اسلام داد سخن بدهد عالمان اسلامی دست به این کار بزنند و جهانیان را به حقایق این دین مستقیماً آشنا سازند. دیگر این کافی نیست که مسلمان کتاب برای مسلمان بنویسد امروز باید مسلمان کتاب برای جهانیان و غیر مسلمانان بنویسد نه حتماً برای آنکه غیر مسلمان مسلمان بشود بلکه برای آنکه غیر مسلمان اسلام را بشناسد با آن تفاهم پیدا کند ولی آزاد باشد در این که آن را بپذیرد یا از آن پیروی نکند. به هر حال امیدواریم این خدمت بنگاه انتشاراتی اسلامی به مورد قبول قرار گیرد و چقدر خوشحال خواهیم بود که در آینده نزدیک بتوانیم آثار مورخان و محققان معاصر اسلامی را به زبانهای زنده دنیا چاپ کنیم و در بازارهای دنیا به محققان دیگر کشورهای جهان

غرضه بداریم.

در پایان این مقال لازم می‌دانیم از سازمان انتشارات و خدمات فرهنگی ایران - مک گرو هیل که موجب ترجمه این کتاب را فراهم آورده اند مخصوصاً از زحمات دانشمند محترم حضرت آقای شعرانی که این کتاب را مطالعه و نظرهایی در بعضی از موارد داده اند و همچنین دانشمند گرامی آقای اسماعیل والی زاده که در ترجمه و تنقیح و مقابله کتاب بیش از شش ماه زحمت کشیده و رنج برده اند صمیمانه سپاسگزاری کنیم و توفیق همه را از درگاه احدیت خواستار باشیم.

« ناشر »

### سخنی چند در باب این کتاب

کتاب «محمد؛ پیامبر سیاستمدار» که اینک ترجمه آن به مشتاقان تحقیق در زندگی پیغمبر اسلام تقدیم می شود تألیف و .  
مونتگمری وات رئیس بخش عربی دانشگاه ادینبورو حاکم نشین اسکاتلند است این کتاب سومین کتاب از چهار کتاب مونتگمری وات است که راجع به پیغمبر اسلام نوشته و آنها را به ترتیب «محمد در مکه» و «محمد در مدینه» و «محمد پیامبر سیاستمدار» و «اسلام و همبستگی جامعه» نام نهاده است. از مطالعه دو کتاب اخیر مخصوصاً کتاب چهارم که امیدواریم توفیق گزارش آن نیز حاصل آید. وسعت اطلاع و دقت مؤلف در تحقیق و عاری بودن وی از اغراض و تعصبات چنانکه در خور یک مرد محقق است به خوبی آشکار است. مؤلف دانشمند منابع بسیار معتبر و اصیل اسلامی و همچنین مآخذ اروپایی را به دقت تمام از زیر نظر گذرانیده و با وسعت نظر و سعه خاطر وظیفه ای را که هر حقیقت جویی در دفاع از حقوق یک انسان بزرگ در برابر مخالفان بی خبر و نا آگاه وی دارد ادا کرده است.

وی در این کتاب که نه فصل دارد علل توفیق پیغمبر اسلام را در راه هدف مقدسی که در پیش داشته تجزیه و تحلیل کرده و کوشیده است که کلیه تدابیر او را برای تأسیس جامعه اسلامی توجیه کند و صحیح و معتبر بودن آنها را نشان دهد.

گرچه نویسنده، کتاب حاضر را برای مسلمانان ننوشته و فقط

دفاعی است که از خاتم النبیین در برابر همکیشان خود و برخی از محققان و مورخان کج اندیش غربی کرده است ولی به نظر ما خواندن آن، لا اقل از باب اطلاع به طرز تفکر محققان جدید اروپا درباره اسلام، برای محققان اسلامی نیز ضروری و مفید است بنا بر این اگر گاهی مطالبی در آن عنوان شده است که با تعصبات خاص و با طرز تفکر و معتقدات دینی ما سازگار نیست باید آنها را با حوصله و سعه خاطر تلقی کنیم و بیش از آنچه به قال بنگریم به حال پردازیم و نظر يك مرد مسیحی را در باب پیغمبر اسلام که در همه جا از او به نیکی یاد کرده است سرسری نگیریم.

شکی نیست که محمد يك مرد جهانی است و به هیچ قوم و ملت و خاندان خاصی تعلق ندارد و هر فردی می تواند درباره اینچنین مردی از زاویه دید خود داوری کند و او را آنچنانکه می بیند منعکس سازد. در اینجا است که به جای قال و مقال باید وجه مشترك این دیدهای مختلف را اتخاذ کرد و آن را اساس وحدت نظر در مسائل اجتماعی قرار داد و از بحث آنچه مایه اختلاف نظر است دوری جست تا امکان سازش در این گونه مسائل بیشتر باشد. در این کتاب نیز اگر تعبیرهای نادری هست که با مذاق ما سازگار نیست در مقابل موارد بسیاری هست که نویسنده از تجلیل پیغمبر اسلام و بیان حقانیت او در تدابیر منخذه فروگذار نکرده است. مونتگمری وات دور از هر گونه تعصب دینی در این کتاب کوشیده است که با بیانی که برای محققان و مردم مغرب زمین و پیروان مسیح قابل فهم باشد شخصیت پیغمبر اسلام را معرفی کند و به کسانی که در طی قرون



متمادی مخصوصاً در قرون وسطا ناجوانمردانه به وی می تاخته اند و منکر رسالت او بوده اند جواب بگوید و نیز جماعتی را ، که ممکن است هنوز نسبت به این شخصیت بزرگ خدایی افکار آشفته ای داشته باشند، از اشتباه بیرون بیاورد. به نظر ما وات در این کار توفیق کامل یافته و معتقدیم که این گونه آثار به تفاهم و نزدیکی اسلام و مسیحیت که بیش از نیمی از مردم جهان از آن دو پیروی می کنند یاری مؤثری می کند و این حقیقتی است که زمان نیز مقتضی آن است .

در کتاب « عُدَّ ، پیامبر و سیاستمدار » قهرمان کتاب شخص رسول اکرم است و زندگی هیچ شخصیت دیگر اسلامی در آن مطرح نیست مگر به مناسبتی نامی از آنان برده شده باشد. دلیل اتخاذ این رویه آن است که طبعاً مؤسس هردین از بین شخصیت های دیگر اهمیت بیشتری است و پیش از شناختن او شناختن قهرمانان دیگر چندان مفید نمی تواند بود از این روست که مؤلف فقط شخص رسول اکرم را آنچنانکه منابع اصیل تاریخی و استنباطات يك مورخ اجازه می دهد معرفی نموده و خود را در اختلافات مذاهب و مکاتب داخل اسلام گرفتار نکرده است . او می خواهد عُدَّ را با همه عظمت افکار و محاسن تدابیر او در راه تأسیس جامعه اسلامی به اروپاییان بشناساند و با بیانی که در مذاق يك اروپایی مسیحی پسندیده باشد اصالت پیغمبری او را تأیید و تثبیت کند و بگوید دلایلی که برای رسالت حضرت ختمی مرتبت هست کمتر از آن چیزی نیست که برای رسالت موسی و عیسی پذیرفته شده است و مخصوصاً در کتاب بعدی برتری

دین اسلام را از بابت اقتصادی و برنامه های اجتماعی و سیاسی و فرهنگی و همبستگی با آداب و رسوم و همبستگی با زندگی عقلی و معنوی و روانی و مانند آنها بیان داشته و آن را دینی با فلسفه عمیق اجتماعی معرفی کرده و در این راه آنچه لازمه دقت نظر و نقد و موشکافی است مرعی داشته است.

اما روش ما در ترجمه کتاب حاضر آن بوده است که امانت را نگهداریم و کتاب را به مفهوم واقعی ترجمه به فارسی برگردانیم لذا چنانکه رسم بعضی ترجمانان است از نقل به معنی و دخالت دادن قراین و استنباطات شخصی در ترجمه ، و مانند آن دوری جسته ایم . کتاب کلمه به کلمه و جمله به جمله ترجمه شده واصل آیات قرآن را که مؤلف ترجمه آنها را آورده است از قرآن استخراج کرده و در جای خود گذاشته ایم . در پیدا کردن اسامی خاص رجال و امکنه به منابع رجوع کرده و صورت درست آنها را در جای خود قرار داده ایم و تا آنجا که ممکن است در ترجمه به سادگی گراییده ایم فهم مطالب برای عده بیشتری از مردم مسلمان میسر باشد . کار کتاب چهارم که وعده ترجمه آن را به عنایت الهی موکول می داریم تا حدی دشوارتر است زیرا در آن کتاب بسیاری از مسائل اجتماعی و اقتصادی و حقوقی مطرح شده است که مستلزم مراجعه بیشتر به منابع فقهی و اصولی است که اگر بخواهیم حق کتاب را تضییع نکنیم ناچار زمان درازتری باید صرف آن بشود . عجالتاً این کتاب را تقدیم علاقه مندان می کنیم و امیدواریم این خدمت ما و ناشر

محترم در پیشگاه سید المرسلین مأجور باشد زیرا آن بزرگوار  
مرد جهان است و در پیشگاه مردان جهان هر خدمتی که به تألف  
قلوب و وحدت افکار جهانیان یاری کند دارای ارج و قیمتی است.  
دارالترجمه ایران - مك گروهیل

## فهرست مندرجات

### فصل ۱- یتیم نابغه

صفحه ۱

رقابت قدرتهای بزرگ - زندگی در مراکز بازرگانی

« ۱۶

### فصل ۲- دعوت به پیامبری

قم فانذر - نخستین پیام قرآن (رحمت و قدرت خدا - معاد یا بازگشت به سوی خدا برای قضا - مسئولیت بشر و سپاسگزاری و پرستش - پاسخ بشر به رحمت خدا) - حرفه خصوصی نخل - مسلمانان اولیه - نفوذ یهود و مسیحیت - تناسب اجتماعی اندیشه های دین جدید .

« ۷۱

### فصل ۳- مخالفت و اعتراض

در خانه ارقم - واقعه آیات شیطانی - مهاجرت به حبشه - جدال عقلی - تحریم و طرد قبیله بنی هاشم - خیانت ابولهب .

« ۱۰۶

### فصل ۴- مهاجرت به مدینه

دعوت مردم مدینه - مشکلات و نگرانیهای مدینه - هجرت .

« ۱۴۸

### فصل ۵- خشم مردم مکه

لشکر کشی یا غزوه اول - نخستین خونریزی - قطع رابطه با یهود - غزوه بدر - مشخصات و اهمیت غزوه بدر .

« ۱۵۹

### فصل ۶- شکست و اکنش مکیان

محکم کاری در مدینه ، اخراج قبیله قینقاع - لشکر کشی سال ۶۲۴ م - جنگ احد - بعد از احد - اخراج دوم یهود - اصلاح ازدواج و ارث - لشکر کشی های ۶۲۶ -

محاصره مدینه - اعدام یهودیان قریظه

فصل ۷- پیروزیهای مکیان « ۲۲۱

افقهای تازه - لشکر کشی و پیمان الحدیبه - فتح خیبر -  
افزایش قدرت - مکه در سراسیمه زوال - تسلیم مکه -  
جنگ حنین - تحکیم پیروزی .

فصل ۸- حاکم عربستان « ۲۶۶

موفقیت پس از حنین - زوال موقت ایران و نتایج آن -  
پیشرفت به سوی شمال - وسعت قدرت محمد - ماههای آخر .

فصل ۹- مزایا و مشخصات « ۲۸۶

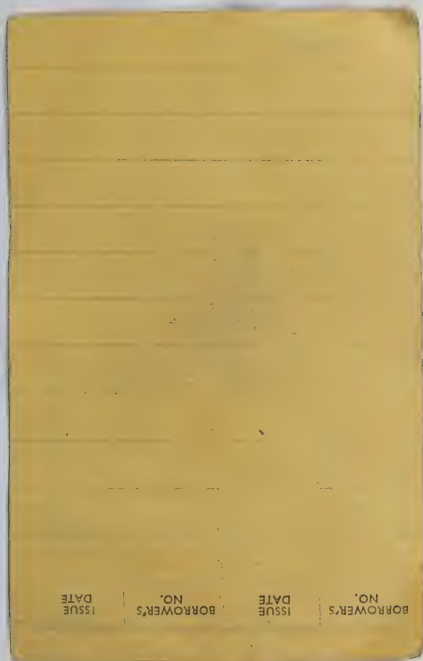
منظر و رفتار - مبانی بزرگ - آیا محمد پیامبر بود -  
نکاتی چند در باره منابع - تذکراتی در باره کتابها .

علطہای چاپی پایین را تصحیح فرمایید

صفحه	سطر	نادرست	درست
۵	۱۰	حفظ	حفظ
۵	۱۰	عربی	غربی
۶	آخر	سال در	در سال
۸	۴	کرده	کرد
۱۶	۹	به بینیم	بینیم
۳۲	آخر	که کلمه‌ای	که کلمه‌ای که
۳۴	۶	بعصی	بعضی
۴۸	۸	اعصای	اعضای
۹۲	۱۷	تجارت	تجارب
۱۱۳	۱۲	به هفتاد و پنج	هفتاد و پنج
۱۳۷	۶	مکن	ممکن
۱۴۲	۷	بیش	پیش
۱۴۲	۱۴	آن مشخص	مشخص آن
۱۴۲	۲۰	با تجر	همکاری با تجر و سیاست‌اورا
۱۴۳	۱۴	در ولی	ولی در
۱۴۳	۱۴	در این	این
۱۵۱	۱۸	قبلا	قلاً
۱۶۶	۱۳	شکل	مشکل
۱۶۶	۱۶	شکست	شك
۱۶۸	۴	نظر	نظایر



صفحه	سطر	نادرست	درست
۱۶۹	۴	دیگر که	دیگر
۱۷۵	۱۹	آنچه	آنجا
۱۸۷	۲۱	ولی افراد	ولی در افراد
۱۹۹	۸	که طی	که در طی
۲۰۸	آخر	نمی توانست	نمی دانست
۲۱۶	۱۴	یا	با
۲۲۱	شماره فصل	۶	۷
۲۲۴	۲۱	چه	که
۲۲۸	۱۷	سوریه به	سوریه به مکه
۲۳۰	آخر	علمی	عملی
۲۳۹	اول	می داده	می داد
۲۵۲	۱۸	گشت	کشت
۲۵۸	۲۱	منصانه	منصفانه
۲۶۵	آخر	جنگیده اند	جنگیده است
۲۶۷	اول	تنها	نه تنها
۲۸۱	۱۳	نظام	این نظام





## یتیم نابغه

در سال ۶۰۰ میلادی کاروانی از بازرگانان عرب با اشتران بار کرده، در سوریه، زیر آفتاب سوزان یک روز تابستان، آهسته به سوی جنوب در حرکت بود. این کاروان چهل روز پیش، از مکه به راه افتاده بود. کالای آن کندر عربی، ادویه هندی و ابریشم و دیگر کالاهای تجملی بوده است که کاروانیان آنها را در بازارهای سوریه یا دمشق فروخته بودند و اینک با کالای دیگری به شهر و دیار خود باز می گشتند.

در نزدیکی شهر «بُصری» بردامنه جبل «دُرُوز» برابر صومعه راهب مسیحی به نام «بحیرا» رسیدند. مردان این کاروان پیش از آن نیز چند بار از برابر این صومعه گذشته بودند اما راهب توجهی به آنان نکرده بود، ولی آن روز راهب آنان را به جشنی فرا خواند. مردان کاروان دعوت راهب را پذیرفتند و جوانترین خود را به نگهبانی کاروان گماردند.

اما راهب به این که یکنفر در کاروان بماند رضا نداد زیرا او

می خواست همه کاروانیان بی استثنا در جشن او شرکت کنند، او کتابی از علوم قدیمه داشت که از راهبان گذشته دست به دست گشته و باورسیده بود. راهب در آن کتاب خوانده بود که در این کاروان شخصیت بزرگی هست و دیده بود که ابری و درختی او را از آفتاب سوزان در آسمان میدارد و می خواست بداند که این شخص دارای نشانه های دیگری نیز که در کتاب بدان اشاره شده هست یا خیر؟ زیرا چنین کسی در آن کتاب پیامبر بزرگی معرفی شده بود.

به اصرار راهب کاروانیان قبول کردند، که آن جوان نیز در جشن و مهمانی وی شرکت کند. راهب می خواست درباره این جوان هر چه ممکن بود بیشتر بداند لذا از عموی او سؤالاتی کرد و سپس مدتی دراز با خود جوان به گفتگو پرداخت. به پشت جوان نظری افکند و نشانه ای در میان دو شانه او یافت که نشانه و مهر پیامبری بود. راهب در عقیده خود راسخ شد و چون کاروان به حرکت در آمد به عموی او گفت: برادر زاده خود را به خانه ببر و خوب از او نگهداری کن، اگر یهودیان او را ببینند و از آنچه من می دانم آگاه شوند، بی شک گزند و بد خواهند رسانید، زیرا او در آینده مرد بزرگی خواهد شد.

### «این پسر محمد (ص) بود»

البته این داستانی است که بر اساس عقاید بدوی ساخته شده است. از نوع داستانهای است که در میان مردمی یافته میشود که به تمام نوشته ها به نظر سحر می نگرند، ولی از آن جهت مهم است که مبین نظر مسلمانان نسبت به محمد ﷺ است، که او را مردی می دانند که

از همان جوانی و حتی پیش از تولد با خصوصیات و نشانه‌های فوق طبیعی مشخص و ممتاز بوده است.

نظر بعضی از اروپاییان دربارهٔ محمد ﷺ برخلاف این است. بدتر از همه در قرون وسطی بود که نام او به «مجاوند» تحریف شده بود و آن را نام شیطان می‌دانستند. این مطلب چنانکه در بادی نظر عجیب می‌نماید چندان عجیب نیست. باید به خاطر بیاوریم که در نخستین حملهٔ عرب پس از رحلت محمد ﷺ سرزمین‌هایی مانند سوریه و مصر که مسیحیت در آنها به وجود آمده بود، از تصرف مسیحیان بیرون آمد، و از قرن هشتم به بعد نیز به مرزهای مسیحیان در جنوب و جنوب شرقی دست اندازی شد. بنابراین آیا جای تعجب است که مسیحیان آنچه ممکن بوده است دربارهٔ این دشمنان خود و رهبر آنان بد گفته باشند. اگر چیزهائی را که دربارهٔ قیصر و هیتلر «البته غیر از ناپلئون» در این اواخر گفته میشود به خاطر بیاوریم جای تعجب نخواهد بود که چرا اروپاییان قرون وسطی فکر می‌کردند که دشمنان شان نیروی خود را از منابع شیطانی به دست آورده‌اند. وقتی مردم کشورهای غربی اروپا، که دارای زندگی ساره ای بودند مشاهده می‌کردند که حکمرانان مسلمان اسپانیا در تجمل و نعمت بسر می‌بردند متعجب می‌شدند.

عقاید مسیحیان قرون وسطی دربارهٔ اسلام کمی بهتر از تبلیغات زمانهای جنگ و به‌طور محسوسی دروغ بود و به مسیحیت بیش از اسلام صدمه میزد. به مردان جنگی تبلیغ می‌کردند که مسلمانان ظالم و درنده‌خو هستند، ولی چون در برخوردهای جنگی با جمع کثیری از رزم‌آوران جوان مرد و مهر آیین اسلام روبه‌رو می‌شدند از ایمان آنان

به مسیحیت کاسته می‌شد . لذا از اواخر قرن دوازدهم دانشمندان در  
 صدر دفع اشتباهات گذشته برآمدند ، با این همه هنوز آثاری از تبلیغات  
 غلط و ناروای قرون وسطی دربارهٔ محمد ﷺ در اروپا باقی مانده و منابع  
 تحقیقی جدید نیز به برطرف ساختن آنها قادر نشده‌اند . پس چگونه  
 می‌توانیم نظر سالم و صحیحی راجع به شخصیت محمد ﷺ به دست آوریم .  
 اگر او نه پیامبر خدا بوده و نه ( چنانکه یکی از علمای انگلستان  
 در سال ۱۶۹۷ گفته است ) مردی گزافه‌گوی کهنه کار ، پس چه  
 بوده است ؟ جواب این سؤال آسان نیست زیرا نه تنها باید در بارهٔ  
 اطلاعات مستند داوری کرد بلکه این داوری باید شامل مسائل اخلاقی  
 و الهیات نیز باشد . قسمت اعظم این کتاب برای آنکه مورد پذیرش  
 عامه واقع شود ، به ارائه حقایق مربوط خواهد بود که داوری غایی  
 باید براساس آنها استوار باشد .

### رقابت قدرتهای بزرگ :

داستان بحیرای راهب اگرچه از اصل افسانه‌ای بیش نیست ،  
 ولی نوع دنیایی را که محمد ﷺ میزیسته است به خوبی آشکار می‌کند .  
 محمد ﷺ در مکه متولد شد و بیشتر پنجاه سال اول زندگی خود را  
 در آنجا گذرانید . مردم مکه تاجر بودند و کاروانها را به سوریه ،  
 می‌فرستادند و شك نیست که محمد ﷺ حد اقل چند بار با این کاروانها  
 همراه شده ، و به احتمال قوی به اتفاق عموی خود ، سفر کرده است .  
 در اینجا يك حقیقت پر معنا و قابل توجهی است و آن این است که مکه  
 شهر کوچکی در بیابانها یا جلگه‌های نزدیک ساحل غربی عربستان  
 بوده ولی به هیچ وجه از امپراتوریهای بزرگ آن روز جدا نبوده است .



در بعضی از منابع آمده است که اسلام در این شهر کوچک ظهور کرد و مطالعات دقیقتر نشان می‌دهد که سرتاسر عربستان در شبکه سیاستهای قدرتهای بزرگ روز محصور بوده است.

یکی از این قدرتهای بزرگ امپراتوری بیزانس بود. هنگامی که بازرگانان مکه کالای خود را به دمشق یا غزه حمل می‌کردند ناچار بودند از قلمرو بیزانس بگذرند. این امپراتوری که به نام امپراتوری روم یاروم شرقی نیز شناخته شده است باقیمانده امپراتوری روم قدیم بود. روم غربی در قرن پنجم مورد تاخت و تاز بربرها قرار گرفته و مضمحل شده بود اما روم شرقی که پایتخت آن قسطنطنیه بود نه تنها مرزهای خود را از هجوم بربرها حفظ کرده بود بلکه قسمتی از امپراتوری روم غربی را نیز از تصرف بربرها پس گرفته بود. در سال «۶۰۰» میلادی امپراتوری بیزانس که شامل آسیای صغیر، سوریه، مصر، و اروپای جنوب شرقی تا حدود رود دانوب بود. همچنین علاوه بر نظارت بر جزایر مدیترانه و قسمتهایی از ایتالیا، اندک تسلطی نیز بر سواحل آفریقای شمالی داشت. امپراتوری بیزانس رقیب بزرگی داشت و آن ایران بود که ساسانیان بر آن حکومت می‌کردند. قلمرو این حکومت از سرزمینهای حاصلخیز عراق تا افغانستان و رود جیحون کشیده می‌شد. برای عربستان این دودولت، قدرت بزرگ زمان بشمار میرفتند. رقابت آن دو در نیمه دوم قرن ششم منجر به یک رشته جنگهایی شد که صلح و آرامش آن دوره‌های بسیار کوتاهی داشت. شدت این جنگها تقریباً در سالهای آخر زندگی محمد ﷺ بود. ایرانیان دولت بیزانس را

شکست دادند. سوریه و مصر را متصرف شدند و در سال ۶۱۴ میلادی به اورشلیم در آمدند و صلیب مسیح را به غنیمت بردند. امپراتوران روم با شکست‌هایی بسیار کوشش‌ها کردند تا این شکست را جبران کنند و عاقبت نزاع‌های داخلی که در خاندان سلطنتی ایران شیوع داشت رومیان را در حصول این آرزو یاری کرد. در سال «۶۲۸» میلادی ایرانیان پیشنهاد صلح دادند و ایالات بیزانس را که تصرف کرده بودند تخلیه نمودند و در سال «۶۳۰» صلیب مقدس را به اورشلیم باز گردانیدند.

این جنگ‌ها و کشمکش‌های طولانی این دو دولت نیرومند در وضع عربستان بی‌تأثیر نبود. ایرانیان منطقه نفوذی در خلیج فارس و سواحل جنوبی عربستان داشتند، تمام امیرنشینها و شیخ‌نشینهای کوچک به نوعی تابع ایران بودند و اغلب، یکی از قبایل و احزاب به حمایت ایران به قدرت می‌رسید. از قرن چهارم به بعد نفوذ ایرانیان در یمن نیز افزایش یافت و در سال «۵۷۰» نیروی دریایی عظیمی برای تصرف آنجا فرستادند، و پس از آن سعی کردند تجارت یمن را از طریق خشکی تا عراق توسعه دهند.

علاقه رومیان به راه‌های تجارتي عربستان غربی از لشکرکشی آنان در سال ۲۴ پیش از میلاد که با ناکامی و شومی همراه بود به خوبی آشکار است. در سال «۳۵۶» نیز یکی از امپراتوران بیزانس برای ختنی کردن نفوذ ایرانیان اسقفی به یمن فرستاد تا مسیحیت را در آنجا نشر دهد، امپراتوران بیزانس به اندازه‌ای برای این قسمت از عربستان اهمیت قایل بودند که ~~صلیب~~ «۵۲۱» امپراتور بیزانس پادشاه ~~در سال~~

حبشه را تشویق و وادار کرد که یمن را تصرف کند ، حال آنکه بین امپراتور بیزانس و پادشاه حبشه اختلاف دینی و سیاسی وجود داشت . رومیان ، مسیحیت خود را ارتدکس می نامیدند و حبشیها را رافضی و يك ذاتی ( کسی که عقیده دارد مسیح دارای يك ذات است و بس ) می دانستند ولی همین رافضیها را بر ایرانیان و کشورهای تحت حمایت آن برتری می نهادند . در سال « ۵۷۰ » ایرانیان حبشیهارا از یمن بیرون راندند و سیاست روم باشکست رو ببرد و شد . کمی بعد ( در حدود سال ۵۷۰ ) دولت بیزانس در صدد برآمد که باروی کار آوردن عملی از طرفداران خود مکه را تحت تسلط و نفوذ خویش در آورد ، هر چند رابطه مردم مکه با بیزانس بهتر از رابطه آنان با ایران بود ولی میل نداشتند تحت نفوذ و تسلط هیچیک از این دو قدرت در آیند لذا هر دو را از سر زمین خود بیرون راندند . دولت بیزانس و ایران هیچیک مستقیماً در صدد مطیع کردن طوایف عرب بر نیامدند زیرا با آن وسایل ارتباطی و اسلحه ای که در دسترس بود انجام دادن این کار حتی از عهده يك امپراتوری بزرگ بیرون بود . روشی که هر دو امپراتوری به کار می بردند آن بود که از یکی از امرای مرزنشین بین بادیه و رودخانه سون حمایت می کردند تا مانع هجوم اعرابیان بد ساکنان جزیره بشود . ایرانیان از سلسله لخمیان ، که در حیره نزدیک فرات می زیستند و پیروانی از طوایف بدوی داشتند ، حمایت می کردند . دولت بیزانس نیز از سال « ۵۲۹ » به حمایت از شاهزادگان غسانی برخاست ، که بر ناحیه شرقی اردن و شام تسلط داشتند .

در عربستان علاوه بر نفوذ سیاسی نفوذ فرهنگی و دینی نیز دارای

اهمیت بود. غسانیان از مدتها پیش به دین مسیح گرویده بودند و در اواخر قرن ششم میلادی پادشاه لخمی نیز به دین مسیح در آمد و در اثر تشویق و تبلیغ قدرتهای بزرگ، مسیحیت در میان طوایف چادر نشین توسعه پیدا کرد، در زمان عمر بن الخطاب عده ای از افراد این طوایف به دین مسیح گرویده و بعضی از قبایل نیز یکجا مسیحی شده بودند اما تعیین اندازه تعلق خاطر واقعی آنان به مسیحیت موضوعی است که بیان آن دشوار است، آنچه مسلم است بین دین و سیاست پیوستگیهایی وجود داشته است. از مذاهب و فرق مسیحیت ارتدکس و یک ذاتی از لحاظ سیاست با نظریات بیزانس وفق می داده است و به طوری که گفته شد امپراتوران بیزانس ارتدکس و شاهزادگان غسانی و حبشه تابع مذهب یک ذاتی بودند، در برابر آنها نسطوریان (کسانی که عیسی را دارای دو ذات جداگانه می دانند) نیز که از بیزانس رانده شده و در عراق مریدانی بدست آورده بودند، با سیاست ایران پیوستگی داشتند. علاوه بر این عده ای یهودی نیز در عربستان می زیستند که گروهی از آنان از قتل عام گریخته بودند و گروهی دیگر عربهایی بودند که دین یهود را پذیرفته بودند، به عللی نامعلوم که شاید یکی از آنها مخالفت مسیحیان بیزانس بوده است یهودیان بیشتر طرفدار ایرانیان بوده اند. احتمال قوی می رود که بازرگانان مکه از سیاستی که در پیرامون آنان جریان داشته اطلاع کافی نداشته اند. با همه این جمعی به سوریه و گروهی به عراق مسافرت می کرده اند و ناچار به اوضاع و احوال آشنا بوده اند. همچنین به رقابت ایران و روم پی برده بودند و

از سازش روم و حبشه نیز آگاهی داشته اند و وابستگی دین و سیاست از نظر آنان دور نبوده است. برای فهم و درك زندگی محمد ﷺ این نکات را باید همیشه در نظر داشت .

### زندگی در مراکز بازرگانی

گفته شده است که محمد ﷺ در عام الفیل ولادت یافت. این سالی بود که شاهزاده حبشی که نایب السلطنه یمن بود، با سپاهی که شامل فیلهایی نیز بود تا مکه پیش رفت ، محققان ، عام الفیل را در حدود « ۵۷۰ » میلادی می دانستند ولی کشفیات اخیر در جنوب عربستان نشان می دهد که در همین سال بود که ایرانیان حکومت حبشیه را در یمن بر انداختند، بنابراین تاریخ لشکر کشی حبشیان یک یا دو سال پیش ازین تاریخ بوده است ، بی شک تجار مکه که محمد ﷺ نیز در آنجا بزرگ شد خود را با موقعیتی که ایرانیان در اثر تصرف یمن به وجود آورده بودند مطابقت می دادند و از آن استفاده می کردند .

پدر محمد ﷺ ، عبدالله پیش از تولد او در گذشته بود و نگهداری او بر عهده جدش عبدالمطلب رئیس بنی هاشم افتاده بود . شکی نیست که محمد ﷺ بیشتر سالهای کودکی خود را با مادرش گذرانیده است ولی بنا بر عادت بسیاری از خانواده های مکه یک یا دو سال، او را برای آشنا شدن با زندگی بادیه به خارج از مکه فرستاده ، و پرستاری از طوایف بدوی به نگهداری او گمارده اند . محمد شش ساله بود که مادرش نیز در گذشت و کاملاً تحت پرستاری پدر بزرگش در آمد که او نیز دو سال بعد زندگی را وداع گفت و عمویش ابوطالب رئیس جدید قبیله بنی هاشم سرپرستی او را به عهده گرفت.

در قرن ششم میلادی در مکه، اطفال یتیم موجودات خوشبختی نبودند. گرچه بنا بر آداب و اصول قدیم چادر نشینی، رئیس هر قبیله نسبت به بینوایان مسؤولیتهایی داشت، اما در آن هنگام در مکه هر کسی در فکر منافع خصوصی خود بود، و رؤسای قبایل به مسؤولیتهای اخلاقی که به حکم رسوم و سوابق به عهده آنان گذاشته شده بود اعتنا و توجهی نداشتند. توجه سرپرستان محمد علیه السلام از وی فقط به اندازه ای بود که او از گرسنگی تلف نشود و بیش از آن برای آنان مقدور نبود، زیرا ثروت و منزلت رئیس قبیله بنی هاشم در آن زمان رو به تنزل بود. طفلی یتیم و بی سرپرست، که کسی توجه بمسائل مورد علاقه او نداشت، زندگی بازرگانی خود را با فقر و بیچارگی آغاز کرد و این تنها راهی بود که می توانست انتخاب کند. محمد علیه السلام در مسافرت هایی که در معیت ابو طالب به سوریه کرد تجربه هایی اندوخت ولی استفاده از این تجارب بی داشتن سرمایه ممکن نبود.

دانش ما، درباره وضع مکه، در زمان کودکی و آغاز جوانی محمد علیه السلام کم است، و از اطلاعات آنچه در دست است با افسانه آمیخته است و جدا کردن تاریخ از افسانه کار دشواری است، این داستانها فقط تصویر شهری را ارائه می دهد که تجارت آن به طور روزافزون در توسعه و قدرت آن رو به افزایش بوده است.

کمی پیش از سال «۵۹۰» دو واقعه مهم رخ داد که تا اندازه ای با محمد علیه السلام بی ارتباط نبوده است. نخستین حادثه وقوع رشته جنگهایی است که به جنگ فجار معروف است که محمد علیه السلام همراه عموی خود در آنها حضور داشته است ولی معلوم نیست که در آن شرکت مؤثری



گرده باشد. این جنگ با منازعه بین دو طایفه بزرگ آغاز گردید که یکی از آن دو کاروانی را که از عراق می آمد، از سرزمین دیگر عبور می داد تا به بازار بزرگ ویست و یک روزه عکاظ در نزدیک مکه، برساند. این بازاری بود که همه ساله تشکیل می شد. از مدت ها پیش مردم مکه و طوایفی که با آنان متحد بوده اند نقش متجاوز داشتند و طوایف دیگر که به هوازن معروفند در طرف دیگر بودند. پس از چند شکست سرانجام مردم مکه فاتح شدند و این موجب توسعه روابط و گسترش کارهای بازرگانی آنان گردید و نظارت بر بازار عکاظ و شهر مجاور آن طایف را به دست گرفتند. این شهر رقیب مکه بود و مایل بود که بیشتر با ایرانیان سودا کند.

شکی نیست که این موفقیت اثرات گوناگون در روابط گروه های مختلف مردم مکه داشته است. ظاهراً اندکی پس از آن بود که یکی از تجار بزرگ مکه از دادن قرض به یکی از تجاریمن که به مکه آمده بود امتناع کرد و علت آن بیشتر مربوط به مسائل اصولی بود نه مسائل تجارتنی و هدف اصلی آن ممانعت از آمدن تجاریمنی به مکه و دخالت آنان در کارهای تجارتی آنجا بوده است یا به بیان دیگر می خواستند در تجارت، آنان را به همان یمن محدود کنند، در صورتی که تشکیلات کاروانها را تجار مکه کاملاً در دست داشتند.

این اقدام واکنش شدیدی در فرق مختلف در مکه داشته و آنان را وادار به تشکیل اتحادیه ای از رؤسای قبایل کرده است که آن را اتحادیه، پرهیزکاران و پاکان بایدنام نهاد هر چند اسامی دیگری (مراد پیمان حلف الفضول است) نیز به آن داده اند. در جلسه ای که این پیمان

بسته شد محمد ﷺ حضور داشت و حتی در آخر عمر خود نیز از آن به نیکی یاد کرده است. هدف این اتحاد، يك هدف تجارتي بوده ولی بدان وسیله می خواسته اند مانع دخالت تجار یمنی در بازار مکه بشوند و قبایلی که این اتحادیه را تشکیل دادند آنهایی بودند که خود قدرت فرستادن کاروان به یمن نداشتند؛ با آنکه حرفه و شغل آنها بازرگانی در مکه و سوریه بوده است.

جای تأسف است که اطلاع بیشتری در باره اتحادیه « حلف الفضول » نداریم در صورتی که سهم مؤثری در زندگی مکه داشته است و قسمت اعظم آن بر ضد مردان و سیاستهایی هدایت شده است که بعدها محمد ﷺ خود را با آنها مواجه دید، مخصوصاً هنگامی که قبيله محمد ﷺ یعنی بنی هاشم رهبری اتحادیه را به عهده گرفتند . علاوه بر مسائل دینی، نظریات سیاسی بنی هاشم و قبایل همدست آن نیز سبب شد که از محمد ﷺ حمایت کنند .

با وجود تفرقه ای که در اثر این واقعه در مکه ظاهر شد منافع تجارتي موجب گردید که بین آنها اتحاد بر قرار شود . هیچ چیز ناگوارتر از جنگهایی نبود که موجب تفرقه در جامعه مدینه شد و این واقعه پیش از سال ۶۲۲ میلادی که محمد ﷺ در آنجا اقامت گزید، رخ داد. اهالی مکه به حلم معروف بودند که ترکیبی از رشد و خویشتن داری و خلاف تندخویی و غرور و بیباکی اعراب است . به عبارت دیگر مردم مکه می توانستند بر احساسات خود هر جا که به منافع آنان لطمه می زد غالب آیند .

در چنین دنیا و جامعه تاجر پیشه و فاقد اصول اخلاقی ، جوان

یتیمی هر چقدر نابغه هم که باشد چگونه می توانست راه خود را پیدا کند؟ یکی از طرق کامیابی چنانکه معمول بود یافتن زن ثروتمندی بود که با او ازدواج کند و در کارهای تجارتي شريك او باشد. وضع و موقعیت زنان مکه در آن زمان تاريك است جز آنکه در کارهای تجارتي و امور اجتماعی به نام معدودی از زنان برمی خوریم که توانسته اند استقلالی به دست آورند و ثروتی به هم رسانند و با پول خود تجارت کنند طلاق در مکه رواج داشت و مرگ زودرس مردان که فراوان رخ می داد موجب می شد که زنی سه یا چهار بار ازدواج کند و این رسم کار زنان مستعد را در تحصیل آزادی بسیار آسان می کرد.

احتمال دارد که محمد ﷺ در جستجوی چنین زنی برآمده باشد فهرستی از زنان در دست است که سخن ازدواج محمد ﷺ با یکی از آنان برسر زبانها می گذشته است و در میان آنان نام زنی است که به سال از وی بزرگتر بوده است و پیش از آنکه محمد ﷺ اصلاً در صدد ازدواج برآید تصور زناشویی او با آن زن می رفته است و اگر این ازدواج سر می گرفت حاصلی از آن به دست نمی آمد. در عوض با خدیجه که زنی ثروتمند و مستقل بود ازدواج کرد، خدیجه پیش از ازدواج با محمد ﷺ دوشوهر دیگر کرده بود. وی پیش از آنکه به ازدواج محمد ﷺ درآید در صدد آزمایش او برآمد و او را به عنوان نماینده خویش با کاروانی به سوره فرستاد. چون محمد ﷺ مأموریت خود را با موفقیت به انجام رسانید، خدیجه به او پیشنهاد ازدواج کرد. محمد ﷺ در آن زمان ۲۵ سال بیش نداشت لذا این ازدواج در سال «۵۹۵» میلادی صورت گرفته است. گفته شده است که خدیجه چهل سال داشته ولی احتمال

دارد که این سن صحیح نباشد و چند سالی جواتر بوده است زیراوی  
چهار دختر و دو پسر آورد که یکی از پسران در همان کودکی  
در گذشت .

این ازدواج اهمیت بسیاری برای عجل علیه السلام داشته است زیرا موجب  
تقویت روحی او شد و به او فرصت داد که نبوغ خود را تنها در راهی  
که مورد توجه مردم مکه بود یعنی در تجارت به کار اندازد . او خدیجه  
سرمایه کافی داشتند و می توانستند به کارهای سودمند دست بزنند . اطلاعی  
در باره این که آیا عجل علیه السلام پس از ازدواج مجدداً به سوریه رفته است یا  
خیر در دست نیست ولی احتمال دارد که به این سفر نرفته باشد .

خدیجه پسر عمی داشت به نام ورقه « ورقه بن نوفل » که به دین  
مسیح گرویده بود و گفته می شود از هنگامی که عجل علیه السلام معتقد شده  
بود که به او مانند پیامبران سلف و وحی می رسد ورقه از وی حمایت و پشتیبانی  
می کرده است . همچنین عجل علیه السلام هر گاه که تنهایی ماند و در مأموریت  
خود برای پیامبری دچار تردید می شد به خدیجه روی می آورد ، پس ،  
ازدواج با خدیجه نقطه تحول بزرگی در زندگی عجل علیه السلام بود و بدین سبب  
است که تازمانی که خدیجه حیات داشت وی زن دیگری نگرفت .

از حوادث متعاقب این واقعه ، تا پانزده سال ، خبری در دست  
نیست . گفته می شود که عجل شهرتی در امانت و درستی به دست آورده و به  
لقب « امین » معروف شده بود . دختران خود را به ازدواج اشخاص نسبتاً  
مهم در آورده بود که همه از جهتی با او یا با خدیجه خویشی و بستگی  
داشته اند و در بعضی از کارها نیز برادر زاده شوهر دوم خدیجه به او  
یاری می کرده است . بدین ترتیب در این مدت يك دوره آرامی را

گذرانده، اما هنوز احساس می کرده که از نبوغ وی چنانکه باید استفاده نشده است. او دارای استعداد اداری فوق العاده ای بود که می توانست بزرگترین کارهای مکه را اداره کند، ولی تجار بزرگ مکه او را به جمع خود راه نمی دادند. لذا نا رضایی خود وی او را به جنبه های ناراضی کننده زندگی در مکه متوجه ساخت، و در همین سالهای گوشه گیری و اختفاء بوده است که درباره اینگونه مسائل مطالعه می کرده و آنچه را در مغز خود می پرورانیده بعد ها آشکار ساخته است.

## دعوت به پیامبری

« قُمْ فَأَنْذِرْ »

به خوبی آشکار است که نهضت دینی اسلام زاینده اوضاع و شرایط مکه در زمان محمد است یکنه جدید بی انگیزه و محرك به وجود نمی آید تجربه محمد ﷺ و پیروان اولیه او نیازمندیهای را نشان می داد که با اعمال و احکام دین نارس و ناقص ارضا و بر آورده می شده است این نیازمندیهای ارضا نشده و شرایط نامساعد چه بوده است موضوعی است که عقاید و نظریات مختلف در باره آنها اظهار شده است. پیش از آنکه وارد این بحث بشویم لازم است به بینیم چه وقایعی دعوت به پیامبری را در بر گرفته و نخستین پیامهای قرآن چه بوده است.

توجه محمد ﷺ به آشفتگیها و اضطرابات مکه موجب شد که وی گوشه گیری اختیار کند. در یکی از تپه های سنگی و بایر مجاور غاری بود که گاهی چندین شب بآنجا می رفت تا تنها باشد و به عبادت

و تفکرپردازد . در این ایام انزوا و شب رنده‌داریها بود که تجارب عجیبی به دست آورد که نخستین آنها تجارب رؤیا ماندی بود که دو تا از آنها اهمیت بسیار دارد و اطلاعاتی درباره آنها در دست است که در قرآن (سوره: ۵۳ آیات ۱۸-۱ و سوره: ۸۱ آیات ۲۵-۱۵) آمده است. در شهود نخستین، موجود باشکوهی در نظر وی مجسم شد که راست در اوج آسمان نزدیک به افق ایستاده بود، سپس پایین آمد و چندان به او نزدیک شد که فقط به اندازه دو کمان یا کمتر با وی فاصله یافت . آنگاه وحیی بر او فروخواند که موضوع چند صفحه از قرآن است. در شهود رؤیا مانند دیگر نیز، همان موجود باشکوه بود که او را، در نزدیکی درخت کناری به کنار باغی دید، و آن درخت به طرز شگفت انگیزی پوشیده شده بود.

این باید نشانه و دلیل معتبری از تجارب اساسی محمد ﷺ باشد. بدین گونه بود که وی وقتی به گذشته نگاه کرد. مطلب برای او روشن شد و این عالیت‌ترین دلیل بود به این که او پیامبر خداست «این رؤیاها از آن جهت در قرآن ذکر شده است که تایید کند که آنچه محمد ﷺ می گوید و مدعی است که از طرف خدا به او وحی شده پندار اختراعی و باطلی نیست. این رؤیاها برای خود محمد ﷺ معانی بسیاری داشته است. وقتی کارها بر وفق مراد پیش نمی رفت و نسبت به آینده بدبین می شد، این رؤیاها را به خاطر می آورد و ایمان او به مأموریت خدایی وی نیرویی تازه می گرفت.

در آغاز گمان می برد که آن موجود با شکوه همان خداست، بعدها شاید معتقد شده است که آن موجود عالی فرشته‌ای است که روح

نام دارد و سرانجام آن را همان جبرئیل دانست. تغییر این تعبیر (۱) احتمال دارد در نتیجه اطلاع از تعلیمات یهودیان باشد که عقیده دارند خدا نامرئی است. تعبیر رؤیا چندان مهم نیست، آنچه دارای اهمیت است این است که محمد ﷺ به خود اعتماد و ایمان پیدا کرد در این که از جانب خدا مأموریت خاصی به او واگذار شده است.

داستانهایی است دایر به این، که محمد ﷺ چگونه به هنگام نوه میدی میخواست بر بالای تپه‌های سنگی به راه افتد و می‌اندیشید که خود را از یکی از پرتگاه‌ها فرو اندازد و چگونه فرشته‌ای به او ظاهر شود به یاد او آورد و گفت: «تو پیامبر خدا هستی». اگر این داستانها صحیح باشد، پس محمد ﷺ بین این تجلیات و رؤیاهای امتیازی قایل بوده است. رؤیاهای تجارب اولیه او بودند که او را از پیامبری وی آگاه ساختند، ولی مشاهدات و تجارب بعدی که در درجه دوم اهمیت قرار داشت و شاید از طرف يك نیروی فوق طبیعت هدایت می‌شده برای یادآوری تجارب نخست بوده است.

برای درك زندگی محمد ﷺ این تجارب نخستین هر گز نباید فراموش بشود. چه سادقایقی که محمد ﷺ در تنگدلی و افسردگی به سر آورد که با توجه به مشکلات طاقت فرسایی که با آنها مواجه بود چندان عجیب به نظر نمی‌آید. ولی هر گز این فکر و عقیده را از دست نداد که خدا او را خواسته و کاری خاص به او واگذار کرده است که باید در زمان خود و برای نسلهای آینده انجام دهد، این عقیده او را

---

تردید حضرت رسالت صحیح نیست و آنحضرت و سایر انبیاء در وحی خداوند هرگز شك نمی‌کردند.



در برابر مخالفت، استهزا، بهتان و افترا و آزار حفاظت می کرد و چون ایام موفقیت فرا رسید افکار تغییر نکرد بلکه در این عقیده استوارتر شد که خدایی که او را به سوی خود خوانده است، در همه وقایع تاریخی برای توفیق در کار بوده است.

علاوه بر مأموریت خاصی که به محمد ﷺ واگذار شده بود پیوسته وحی یا پیامهایی از جانب خدا دریافت می کرد. یکی از آن پیامها در همان رؤیای اول دریافت کرد. این نزول وحی به مدت بیست سال یعنی تا آخر زندگی محمد ﷺ ادامه داشت او و پیروانش آنها را از بر می کردند و در مراسم عبادت و نماز، که او به وجود آورده بود، می خواندند. احتمال دارد که اغلب آنها در زمان حیات محمد ﷺ ثبت و نوشته شده باشد، اما چون وسایل نوشتنی در مکه و مدینه نایاب بود برخی را عقیده بر آن است، که پس از درگذشت پیغمبر، یکی از کاتبان او، قطعاتی از این پیامها را که بر کاغذ، سنگ، برگ خرما استخوانهای شانه و دندۀ شتر و قطعات چرم نوشته شده بود، به دست آورد. احتمال می رود که هدف از این بیان و روایت، غلو در سادگی زندگی زمان محمد ﷺ بوده باشد لذا نباید آن را جدی تلقی کرد. احتمال قوی این است که سوره، یا فصول قرآن در زمان خود محمد ﷺ به صورت فعلی در آمده است اما گردآوری تمام مطالب وحی شده و تنظیم و ترتیب آنها به صورت قرآنی که اکنون در دست است در سال «۶۵۰» میلادی یا بیست سال پس از درگذشت محمد ﷺ انجام گرفته است.

قرآنی که فعلاً در دست است خواه به زبان اصلی عربی باشد یا ترجمۀ انگلیسی آن، مجموعه ای است از وحی و الهاماتی که محمد ﷺ

دریافت داشته است ، به طور کلی خدا گوینده است و مخاطب آنها محمد ﷺ یا مسلمانان یا عموم خلایق می باشد و در آنها کلمه « ما » که پادشاهان آن را به کار می برند مکرر به کار رفته است . پیامهای نخست اغلب به صورت دستورهایی است که به محمد ﷺ داده شده است . بنابر عقیده مسلمانان قرآن کلام خداست و محمد ﷺ خود نیز با این دیده به آن می نگریسته است و مسلماً به این امر ایمان کامل داشته و تصور می کرده است که می تواند افکار خود و آنچه را از بیرون به او می رسیده است از هم تمیز دهد . هنگامی که با آزارها و دشمنیها مواجه می شد . ادامه دعوت غیر ممکن بود ، مگر به سایقه ایمانی که به فرستاده بودن خود از جانب خدا داشت و دریافت الهامات را قسمتی از اعموریت خود به شمار می آورد . اگر او این وحی و الهام را عقاید و افکار خود می دانست ، به احتمال قوی همه اصول وی از صورت نهضت دینی بیرون می رفت .

گفتن این که محمد ﷺ در عقاید خود یکدل و راستگو بود دلیل آن نیست که معتقدات وی همه درست بوده است . ممکن است کسی در موضوعی یکدل باشد ولی اشتباه کند . برای نویسندگان جدید ، غرب زمین نشان دادن این ، که محمد ﷺ ممکن است اشتباهاتی کرده باشد چندان دشوار نیست . آنچه ظاهراً از « بیرون وجود کسی » به او وحی می شود ممکن است ناشی از بی خبری باشد ، ولی این حل نهایی مسئله نیست ، بلکه بیان شکل پندارهای محمد ﷺ و پندارهای دیگر پیغمبران عهد عتیق است که همیشه گفته اند : « خداوند چنین می گوید » ولی اصل و محتوی این تجارب و پندارها را شرح نمی کنند . این سؤال

پیچیده‌ای است که در فصل آخر کتاب حاضر درباره آن سخنی چند خواهیم گفت. بی آنکه از یافتن پاسخ این سؤال صرف نظر شود می‌توان قرآن را مجموعه‌ای از افکار دانست و ارزش و اهمیت اجتماعی و تاریخی آنها را مورد مطالعه قرار داد.

عقیده و ایمان عَلَيْهِ السَّلَام به این که وحی از جانب خدا به او نازل می‌شده است مانع وی از مرتب کردن و به عبارت دیگر حک و اصلاح آنها نبوده است. در قرآن آیه‌هایی هست که خدا به او می‌گوید مطالبی را فراموش کند و مطالعه دقیق قرآن نشان می‌دهد که کلمات و عباراتی به آن اضافه شده است. این اضافات البته انشای خود عَلَيْهِ السَّلَام نیست (۱). ظاهر آ برای گوش دادن به الهامات روشی مخصوص داشته است و اگر وحیی به او نازل می‌شد که احتیاج به اصلاح داشت آن را اصلاح می‌کرد. پیروان اصولی اسلام همیشه بر این بوده اند که قسمتهایی از قرآن که شامل دستورهای برای مسلمانان بوده است در اثر دستورهای بعدی منسوخ شده است، به طوری که دستورهای اصلی کاملاً معلوم نیست. داستان آیات اهریمنی (در فصل آینده خواهد آمد) نمونه‌ای است از اصلاح آنچه به عقیده عمومی وحی و الهام است. در دو رؤیای اول به وسیله آن موجود مقدس و با شکوه الهاماتی به عَلَيْهِ السَّلَام شده بود، ولی طرز دریافت تمام الهامات یکسان نبوده است. در بسیاری از آنها، کلمات به طرز مرموزی به قلب (= فکر) او الهام شده بی آنکه حتی به خیال او رسیده باشد که چیزی

---

(۱) به عقیده ما مسلمانان این مطالب صحیح نیست قرآن کلام خداست و به لفظ پر آن حضرت القا می‌شد و او تصرف در آن نمی‌فرمود.

شنیده است.

معنای حقیقی «و حی» نیز همین است. در یکی از قسمتهای قرآن که مربوط به این موضوع است (سوره ۴۲ آیه ۵۰) ذکر شده است که خداوند «از ماورای حجاب» با مردی سخن می گوید. اگر این مطلب درباره تجربه خود محمد ﷺ نیز صادق باشد نشان می دهد که او از راه خیال چیزهایی می شنیده است بی آنکه به طریق خیال چیزی دیده باشد. و شاید نخستین بار این واقعه برای موسی رخ داده است بدان زمان که درخت آتش گرفت (قرآن سوره ۲۰ آیه ۹۹) در همین عبارت درباره خدایی سخن می گوید که پیامبری برای بشر می فرستد و احتمال دارد توضیحی در باره نخستین رؤیای محمد ﷺ باشد که بعداً آن را تفسیر کرده است، ولی مسلمانان را عموماً عقیده بر این است که وحی بیشتر توسط جبرئیل به او می رسیده است و احتمال دارد که در سالهای آخر، دریافت وحی با تصویر خیالی فرشته‌ای توأم بوده است.

دریافت وحی در بعضی از موارد با اضطرابات جسمانی نیز توأم بوده است، یعنی بدنش درد می گرفته و صدایی مانند ارتعاش زنگ به گوش او می رسیده است، حتی در یک روز سرد حاضران دیدند که هنگام دریافت وحی دانه‌های عرق مانند مروارید بر پیشانی او نشست. این گونه اخبار سبب شده است که بعضی از نقادان غربی محمد ﷺ را به صرع منسوب دارند ولی دلایلی برای اثبات این نسبت نیست چه صرع موجب فساد و ضایعه فکری و جسمی می شود و چنین نشانه‌هایی در محمد

ﷺ دیده نشده بلکه برعکس وی تا پایان حیات از سلامت کامل قوای دماغی و جسمی بر خوردار بوده است . توام بودن این گونه عوارض جسمانی با آزمایشها و پندارهای دینی مورد توجه روانشناسان دینی است ولی اثبات یا عدم اثبات حقیقت این تجارب میسر نیست . این موضوع مربوط به الهیات و علم دین است که در خاتمه کتاب مورد بحث قرار خواهد گرفت .

در خور یادآوری است که حتی از نقطه نظر مسلمانان نیز، که قرآن را همگی کلام خدا می دانند و معتقدند که در مرحله ارسال به وسیله محمد ﷺ بیش و کم در آن راه نیافته است، قرآن گواه طرز دید و چشم انداز محمد ﷺ و مسلمانان است . این به دو دلیل است: دلیل نخست آنکه محمد ﷺ قرآن را مانند حقیقتی پذیرفته بود و اگر خود او افکار آن را به وجود نیاورده باشد بی شک این افکار اندیشه های او را در تصرف داشته و آنها را در قالب خود می ریخته است . از این رو اگر بگوییم که افکار قرآن متعلق به خود محمد ﷺ است چندان ناروا نگفته ایم هر چند که محمد ﷺ خود این افکار را صادقانه و به اعتقاد راسخ از ورای وجود خود می دانست که به وی وحی می شد .

دلیل دوم آنکه مخاطب قرآن، عرب آغاز قرن هفتم است لذا، نه تنها می بایست کاملاً به زبان عربی باشد بلکه می بایست در قالب فکر عرب نیز درآید، مگر آنجا که جنبه انتقاد داشته باشد، پس با مطالعه قرآن می توان مطالبی در باره محیط فکری محمد ﷺ و مسلمانان اولیه به دست آورد.

آیاتی که معمولاً تصور می‌رود نخستین بار، وحی شده است از

این قرار است :

إِقْرَأْ بِاسْمِ رَبِّكَ الَّذِي خَلَقَ.

خَلَقَ الْإِنْسَانَ مِنْ عَلَقٍ.

إِقْرَأْ وَرَبُّكَ الْأَكْرَمُ.

الَّذِي عَلَّمَ بِالْقَلَمِ .

عَلَّمَ الْإِنْسَانَ مَا لَمْ يَعْلَمْ . (۱)

در این آیات ، مانند دیگر آیات نخستین ، جمله ها کوتاه و  
موزون است و به قافیه و یا سجع پایان می گیرد . این آیات را می توان  
با آیات دیگری مقایسه کرد که بعضی عقیده دارند که وحی اول است :

يَا أَيُّهَا الْمَدَّثِرُ . قُمْ فَأَنْذِرْ . وَرَبُّكَ فَكَبِيرٌ . وَثِيَابَكَ

فَطَهِّرْ . وَالرُّجْزَ فَاهْجُرْ . وَلَا تَمْنُنْ تَسْتَكْثِرُ . وَلِرَبِّكَ

---

(۱) بخوان به نام پروردگارت که آفرید . انسان را از قطعه خون

آفرید . بخوان پروردگار تو بسیار کریم است . که به قلم تعلیم داد .  
و به انسان آموخت آنچه نمی دانست .

دانشمندان و محققان بعدی درصدد برآمدند که این دورا به هم مربوط سازند و گفتند که آیه اول، نخستین وحی است و پیش از همه نازل شده است و دومی نخستین وحی پس از گذشتن يك زمان طولانی بوده است. ولی این حدسی بیش نیست. در اواخر زندگی محمد ﷺ اوضاع و احوال طوری تغییر کرده بود که مردم چگونگی دوران آغاز اسلام را فراموش کرده بودند. احتمال دارد که بعضی از آیات قرآن تقدّم زمانی بر این آیات داشته باشند یا شاید بعضی از آیات از قرآن حذف شده باشد. چنانکه مکرر دیده می شود.

آنچه مورد توجه است اهمیت و اولویت منطقی این دو آیه است. کلمه «اقرأ» با کلمه «قرآن» هم ریشه است که می توان آن را «قراءة» ترجمه کرد. کلمه قرآن نیز ظاهراً از کلمه «قریانا» ی سریانی مشتق شده است و به معنای درس کتاب مقدس است که به وسیله مسیحیان در مراسم و عبادتهای همگانی تلاوت می شده است، پس دستور «اقرأ» نشان می دهد که عبادتهای جمعی و گروهی باید بر اساس پرستش مسیحیان سریانی زبان باشد و فقط به جای خواندن کتاب مقدس این وحی باید تلاوت شود و وقتی وحی های دیگر رسید آنها را نیز باید بخوانند و کلمه «قرآن» هم به يك يك «وحی» ها و هم به مجموعه آنها اطلاق می شود. پس الهامی که به عنوان نخستین وحی شناخته

(۱) ای که خود را در جامه پیچیده ای بر خیز مردم را بپنده و پروردگار خود را بزرگدار و جامه های خود را پاک کن و از پلمیدی بهره یز و چون بسیار بدهی منت مگذار و برای پروردگار خود شکیبایی نمای.

شده است دارای تقدم منطقی است.

وحی دوم نیز دارای اهمیت خاصی است زیرا در آن چنین آمده

است: «قُمْ فَأَنْذِرْ»

در سالهای نخست عَلَيْهِ السَّلَام فعالیت پیامبری را از جنبه اجتماعی دنبال و تعقیب می کرد و خود را «بر حذر دارنده» می دانست و وظیفه اش آن بود که به مردم مکه تذکره دهد که باید به خدا که قاضی یوم الآخر است روی آورند و چون در این نظر خود اصرار می ورزید، از قبول هر گونه مقام مهم در زندگانی سیاسی و اقتصادی مکه و یاتمایل به داشتن آن خودداری می کرد. دستور «قُمْ فَأَنْذِرْ» منطقاً آغاز فعالیت های اجتماعی او را نشان می دهد زیرا بر حذر داشتن دلیل آن است که اشخاصی بوده اند که می بایست آگاه و بر حذر باشند.

برای فردی که در قرن هفتم در شهر دور افتاده ای مانند مکه زندگی می کرد پیدا شدن این ایمان که از جانب خدا به پیامبری مبعوث شده است شگفت انگیز است. پس جای تعجب نیست اگر می شنویم که عَلَيْهِ السَّلَام را ترس و شبهه فرا گرفت. در این باره شواهدی در قرآن و احادیث مربوط به زندگی او یافته می شود و معلوم نیست چه وقت اطمینان حاصل کرد که خدا او را زیاد نبرده است.

احتمال دارد که قسمتی از ترس او ناشی از همان عقیده سامیهایی قدیم بوده است که خدا را چیز خطرناکی می دانستند و نمونه هایی از آن در کتاب عهدعتیق دیده می شود. و شاید برای حفاظت خود بوده است که عبا در بر می کرده و به (عبا پوش) معروف شده است. هر چند که امکان آن نیز هست که عبا را از باب آمادگی جهت دریافت



فوحی در بر می گرده است. ترس دیگر او ترس از جنون بود زیرا عرب در آن زمان معتقد بودند که این گونه اشخاص در تصرف ارواح یا جن هستند. عده ای از مردم مکه الهامات محمد ﷺ را این گونه تعبیر می کردند و خود او نیز گاهی دچار این تردید می شد که آیا حق با مردم است یا خیر؟ (۱)

مهمترین منبع شك و تردید او باید طرز شگفت انگیز اعلام پیامبری او بوده باشد. اغلب «وحی های» مکی دوره آخر، که با مخالفت شدید مردم این شهر روبه روشد، نشان می دهد که چگونه این مخالفتها مانع ادامه کار پیامبری او نشد، چه وی پی برده بود که پیامبران سابق نیز دائم با مخالفت مردم مواجه بوده اند. می گویند که در روزهای نخست و دریافت نخستین «وحی»، زن او خدیجه و پسر عم زنش ورقه او را تشویق کردند به این، که قبول کند که به پیامبری برگزیده شده است. ورقه خود به مسیحیت گرویده بود و ظاهراً با کتاب مقدس آشنایی داشته است در صورتی که در آن زمان عربهای مسیحی متوسط اطلاع کافی در باره کتاب مقدس نداشتند. پس آنچه درباره ورقه گفته شده است به حقیقت نزدیک است اما اطلاعات او نیز کامل نبوده است. با این همه شهادت يك مسیحی به این، که طرز نزول «وحی» برای محمد ﷺ شباهت کامل به طرز نزول «وحی» برای موسی دارد محمد ﷺ را در عقیده خود تقویت کرده است. این گونه شهادتها از روی عقل و منطق ضروری به نظر می آید.

---

(۱) تردید داشتن آن حضرت صحیح نیست «آمن الرسول بما انزل الیه

من ربه - افتمارونه علی ما یری، .

هر چند جزئیات مطلب تاریک و نامعلوم است ولی به طور یقین می توان گفت که محمد بن عبدالله در آغاز قرن هفتم در مکه شروع به وعظ و ادعای پیغمبری کرد . اگر سال « ۶۱۰ » میلادی را سال تقریبی نخستین وحی بدانیم پس سال « ۶۱۳ » آغاز دعوت آشکار او برای مردم مکه بوده است .

### نخستین پیام قرآن

برای درك زندگی محمد صلی الله علیه و آله لازم است بدانیم که نخستین دعوت او چه بوده است . ولی این مطلب چنانکه به نظر می رسد چندان ساده نیست زیرا قرآن به ترتیب زمانی مرتب نشده است . عده ای از دانشمندان اروپا کوشیده اند که حتی المقدور تاریخ تقریبی سوره های مختلف و آیات هر سوره را تعیین کنند ولی در این خصوص، خاصه درباره آیه های اول توافقی حاصل نشده است . آنچه بیشتر مورد قبول است عقیده این دو تن از دانشمندان **تفود ورنولد** که **وریچارد بیل** است که اولی عقیده خود را در سال ۱۸۶۰ و دومی در سال ۱۹۳۷-۳۹ اظهار داشته اند . معقولترین روش برای کشف آیات اولیه قرآن مطالعه درباره آیاتی است که این دو تن آنها را بر همه مقدم دانسته اند . با وجود این تحقیق بیشتری در این باره ممکن است . چه در این آیات ذکر از مخالفت شده است و مسلم است که وعظ و ادعای باید قبلا چیزی بگوید تا مردم را به مخالفت برانگیزد و شوندگان به گفته های او معترض باشند . پس مواعظ و دعوت محمد بن عبدالله پیش از ظهور مخالفت، باید بر همه مقدم باشد چه ناچار همین آیات یا قسمتی از آنها بوده است که تولید مخالفت کرده است . اگر بخواهیم به طور

مطمئن نخستین آیات قرآن را معلوم داریم باید خود را به مطالعه آیاتی محدود کنیم که دو شرط در آنها جمع شده باشد .

الف : تولد که، و بل هردو، آنها را از آیات مقدم بدانند.

ب: ذکری از مخالفت با عَلَيْهِ السَّلَام در آنها دیده نشود.

آیاتی که دارای این دو شرط هستند از این قرار می باشند (از روی شماره گذاری گوستا و فلو گل): (س ۹۶: ۱ تا ۸۱) (س ۷۴: تا ۱۰) (س ۱۰۶) (س ۹۰: ۱ تا ۱۱) (س ۹۳) (س ۸۶: ۱ تا ۱۰) (س ۸۰: ۱ تا ۳۲) به استثنای آیه ۲۳ (س ۸۱: ۱ تا ۹، ۱۴) (س ۸۴: ۱ تا ۱۲) (س ۸۸: ۱۷ تا ۲۰) (س ۵۱: ۱ تا ۶) (س ۵۵) و قسمتهایی از سوره ۵۲ موضوع اصلی این آیات را می توان تحت پنج عنوان طبقه بندی کرد.

#### ۱- رحمت و قدرت خدا

نخستین و مهمترین موضوعی که در آیات نخستین دیده می شود بیان رحمت و قدرت خداست. این موضوع در بسیاری از پدیده های طبیعی نشان داده شده است. مخصوصاً خلقت آدمی. آیه ای که عموماً عقیده دارند مقدم بر همه نازل شده است درباره خلقت یا ساختمان بدن آدمی از رحمت است و آیاتی چند نیز مربوط به تولد و رشد و نمو انسان می باشد.

مِنْ أَيْ شَيْءٍ خَلَقَهُ ،

مِنْ نُطْفَةٍ خَلَقَهُ فَقَدَرَهُ ،

ثُمَّ السَّبِيلَ يَسَّرَهُ ،

ثُمَّ أَمَاتَهُ فَأَقْبَرَهُ ،

ثُمَّ إِذَا شَاءَ أَنْشَرَهُ ، (سوره ۸۰: آیات ۱۸ تا ۲۲)

سَبِّحْ اسْمَ رَبِّكَ الْأَعْلَى ،

الَّذِي خَلَقَ فَسَوَّى ،

وَالَّذِي قَدَّرَ فَهَدَى (سوره ۸۷ : آیات ۱ تا ۳)

در تمام کارهای طبیعت قدرت خدا به چشم می خورد.

أَفَلَا يَنْظُرُونَ إِلَى الْإِبِلِ كَيْفَ خُلِقَتْ .

وَإِلَى السَّمَاءِ كَيْفَ رُفِعَتْ .

وَإِلَى الْجِبَالِ كَيْفَ نُصِبَتْ .

وَإِلَى الْأَرْضِ كَيْفَ سُطِحَتْ (سوره ۸۸: آیات ۱۷ تا ۲۰)

رحمت خدا در تهیه و تدارك مواد برای مخلوق خود آشکار می شود.

أَنَا صَبَبْنَا الْمَاءَ صَبًّا ،

ثُمَّ شَقَقْنَا الْأَرْضَ شَقًّا ،

فَأَنْبَتْنَا فِيهَا حَبًّا ،

وَ عِنْبًا وَ قَضْبًا ،

وَ زَيْتُونًا وَ نَخْلًا ، وَ حَدَائِقَ غُلْبًا ،

وَفَاكِهَةً وَأَبًّا . (سوره ۸۰: آیات ۲۵ تا ۳۱)

رحمت خدا در چیزهای دیگر نیز هویدا است. پس قریش، مردم مکه به پرستش خدادعوت می‌شوند زیرا خدا آنان را از خشکسالی نجات داده و از ترس و وحشت محافظت کرده است. (سوره‌های ۱۰۶ و ۳) خود عَلَيْهِ السَّلَام نیز در ساعات تیره و تاریکی از نیکیهای خدا نسبت به خود یاد می‌کند و می‌گوید:

مَا وَدَّعَكَ رَبُّكَ وَمَا قَلَىٰ ،

وَلِلْآخِرَةِ خَيْرٌ لَّكَ مِنَ الْأُولَىٰ ،

وَلَسَوْفَ يُعْطِيكَ رَبُّكَ فَتَرْضَىٰ ،

أَلَمْ يَجِدْكَ يَتِيمًا فَآوَىٰ ؟

وَوَجَدَكَ ضَالًّا فَهَدَىٰ ؟

وَوَجَدَكَ عَائِلًا فَأَغْنَىٰ ؟ (سوره ۹۳ آیات ۳ تا ۸)

با این همه جنبه‌های تاریک زندگی نیز فراموش نشده است . خدا موجب می‌شود که بشر بمیرد و دفن شود. او چرا گاههای سبز بهاری و تابستانی را به برگهای سیاه بدل می‌کند و دستخوش توفان وادی می‌سازد . (سوره ۸۷: آیه ۵) ناپایداری مخلوقات برای نشان دادن ابدیت خالق به کار می‌رود .

كُلُّ مَنْ عَلَيْهَا فَانٍ ،  
وَيَبْقَىٰ وَجْهُ رَبِّكَ ذُو الْجَلَالِ وَالْإِكْرَامِ .  
(سوره ۵۵ آیات ۲۶ و ۲۷)

این موضوع که رحمت خدا و قدرت او باید در آیات مقدم تسلط داشته باشد خلاف گفته‌های سابق ماست .  
تصورات قبلی متکی به تکامل بعدی اصول اسلامی است که وحدانیت خدا مورد توجه قرار گرفت و بی اعتباری بتها اعلام شد. به عبارت دیگر مواعظ اولیه عَلَيْهِ السَّلَام انتقاد از شرک و بت پرستی نبود بلکه برای کسانی بود که عقیده سطحی به خدا داشتند و هدف استحکام بخشیدن به عقیده این افراد از راه جلب توجه آنان به وقایع مخصوص و پیشامدهای طبیعی بود که ید قدرت خدا در آنها دیده می‌شود.  
یکتا پرستی مبهمی که مورد قبول مردم متفکر مکه و پیش از همه خود عَلَيْهِ السَّلَام قرار گرفته بود موجب شد که خداوند کعبه را همان خدای یگانه بدانند . این مطلب در یکی از آیات قرآن دیده می‌شود که مردم مکه را دعوت می‌کند که «خداوند این خانه را پرستش کنند» (سوره ۱۰۶ : آیه ۳) یکی بودن خداوند کعبه و خدای اسلام مطلبی است که احتیاج به دلیل و برهان نداشته است، زیرا در این باب تأکیدی نشده و قضا و داوری مخصوصی نیز لازم نبوده است . به عبارت دیگر مردم مکه در تحت نفوذ و تأثیر دین یهود و مسیح خود به خود به طرف یکتا پرستی کشیده شده بودند، آنچه باعث تسهیل این نهضت شده این است که کلمه ای در عبری برای خدا به کار می‌رود

«الله» است که به معنای خداست، در زبان یونانی نیز همین طور است  
 هو تئوس (Ho Theos) ممکن است در اصل نام خدای مخصوص مثلاً «معبد  
 آپولون دلفیک» در روزگار شرك باشد اما امروز همان خداست . پس  
 در زبان عربی نیز به کار بردن ربّ الکعبه به جای «الله» به معنی خالق  
 موجودات و آسمان بوده است.

یکتاپرستی در نظر مردم مکه مبهم بود و به آن به نظر مخالف  
 کامل شرك نگاه نمی کردند و این موضوع در داستان «آیات شیطانی»  
 تصریح شده است. محمد ﷺ که در اثر مخالفت اهالی مکه خسته و  
 فرسوده شده بود در انتظار وحیی بود که اشکالات رؤسای مکه را بر  
 طرف سازد. در این حال وحیی آمد که از دو یاسه آیه تجاوز نمی کرد  
 و اجازه میانجیگری به بعضی از خدایان معابد اطراف مکه می داد.  
 پس دریافت که این آیات از جانب خدا به وی الهام نمی شود بلکه  
 وسوسه های شیطانی است. نخست می خواست آنها را بپذیرد و این نشان  
 می دهد که وی در این مرحله از یکتاپرستی از ادای احترام و دعا  
 نسبت به بعضی از موجودات فوق طبیعت که آنها را نوعی فرشته  
 می دانستند امتناع نداشته است (۱).

پس هدف قرآن در بیان فضل و رحمت و قدرت خدا چیست؟ این بیان  
 بر ضد چه کسی است؟ بدیهی است که مخالفت با ماده پرستی تجار مکه  
 است که خود را، با ثروت و نفوذی که داشتند، خدایان کوچکی

---

(۱) البته این مطلب که پس از این به تفصیل آن پرداخته صحیح نیست و  
 موافق آنچه ما می دانیم و آیات قرآن بر آن دلالت دارد ممکن نیست آیات  
 شیطانی بر زبان حضرت رسالت جاری شده باشد.



می‌شمردند که می‌توانستند به هر شکلی که بخواهند در سیاست و تجارت مکه دخل و تصرف کنند. ولی این موضوع بیشتر مربوط به مطلب سوم است.

## ۴- معادیا بازگشت به سوی خدا برای قضا

دانشمندان اروپادر باره ترس از روز آخرت یا روز «قضا» که در اسلام آمده است بحثهای بسیار کرده‌اند. بعضی راعقیده براین است که انگیزه اصلی برای برگزیده شدن ﷺ به پیامبری و تأسیس دین همین ترس بوده است. عده دیگر انکار کرده و گفته‌اند که ترس از روز آخرت در الهامات و مکاشفات اولیه نبوده، بلکه در سالهای آخر زندگی او در مکه آشکار گردیده است. گروه سومی هستند که می‌گویند: ﷺ پیش از آنکه درباره روز قیامت سخن بگوید درباره آفات و بلیات دنیوی که ممکن بوده است برای کفار پیش آید سخن می‌گفته است.

این مطالب در قرآن موجود است، اختلاف فقط در تعیین تاریخ آنهاست. اگر انتخابی که از آیات مقدم کرده ایم صحیح باشد می‌توان چنین نتیجه گرفت که در آیات مقدم، نظیر آنچه در سور مکی بعدی دیده می‌شود، از آفات دنیوی برای کفار ذکر نشده است و عقلا نیز باید چنین باشد زیرا اهل کفر که مستحق این گونه مجازات می‌باشند کسانی هستند که پیام پیغمبر را دریافت داشته و رد کرده‌اند. از طرف دیگر عقیده به روز قیامت به طرق مختلف از زمانهای قدیم وجود داشته است. مفهوم آیه «قم فأنذر» (سوره ۷۴: آیه ۲) چنین است که به ﷺ می‌گوید باید مردم مکه را از خبر بد و نامطبوعی آگاه سازی

و آن خبر، خبری جز خبر روز آخرت نیست. در سه آیه بعدی کلماتی است که آنها را باید به «فرار از خشم» ترجمه کرد. کلمه عربی «رُجَز» باید همان کلمه سریانی «رقزا» باشد که به معنای خشم است و در ترجمه عهد جدید به «خشم آینده» ترجمه شده است. در آیاتی که منتهی به رؤیای اول است چنین گفته شده است:

إِنَّ إِلَىٰ رَبِّكَ الرُّجْعَىٰ (سوره ۹۶- آیه ۸)

قضا و داوری درباره اعمال بشر نیز در روز معاد و بازگشت مردگان انجام می گیرد (سوره ۸۰: آیه ۲۲) و در (سوره ۸۶ آیه ۴) چنین می گوید:

إِنَّ كُلُّ نَفْسٍ لَّمَّا عَلَيْهَا حَافِظٌ.

شرح کامل روز آخرت در آیات مقدم، اذان قرار است:

إِذَا السَّمَاءُ انشَقَّتْ ، وَأَذِنَتْ لِرَبِّهَا وَحُقَّتْ

وَإِذَا الْأَرْضُ مُدَّتْ ، وَأَلْقَتْ مَا فِيهَا وَتَخَلَّتْ

وَإِذَا أُذِنَتْ لِرَبِّهَا وَحُقَّتْ ، يَا أَيُّهَا الْإِنْسَانُ إِنَّكَ كَادِحٌ إِلَىٰ رَبِّكَ كَدْحًا فَمُلَاقِيهِ ، فَأَمَّا مَنْ أُوْتِيَ كِتَابَهُ يَمِينًا .

فَسَوْفَ يَحَاسِبُ حِسَابًا يَسِيرًا ، وَنُقَلِّبُ إِلَىٰ أَهْلِهِ مَسْرُورًا  
وَأَمَّا مَنْ أُوْتِيَ كِتَابَهُ وَرَاءَ ظَهْرِهِ ، فَسَوْفَ يَدْعُوا ثُبُورًا

وَيَصْلِي سَعِيرًا . (سوره ۸۴ آیات ۱ تا ۱۲)

نتیجه این بحث آن است که فکر رستخیز برای داوری درباره اعمال و دادن پاداش و کیفر از همان آغاز کار دیده می شود. ولی ترس از تنبیه تنها انگیزه دین اسلام نبوده است.

### ۴- مسئولیت بشر - سپاسگزاری و پرستش.

چون خدا رحیم و تواناست پس بر بشر است که سپاسگزار او باشد و او را پرستد. معنای سپاسگزاری، قدردانی قلبی و باطنی از خداست برای آنکه خالق و حافظ بشر است و حیات وی به او وابسته و متکی است، و زیستن و در حیات بودن بهتر از مردن و معدوم شدن است؛ پرستش بیان و نشانه این وابستگی و اتکاست.

آرای مخالف دیگری نیز در این باره اظهار شده است. باید توجه داشت که کلمه کافر، که در زبان عربی به جای بی ایمان به کار می رود، پیش از آنکه در بین مسلمانان مصطلح شود ممکن است به معنای ناسپاس بوده است. این می رساند که مسلمانان عقیده داشتند که کافران کسانی بودند که به خدا ناسپاسی نمودند و پیامبر او را رد کردند. در میان مسلمانان کلمه ای هست که می توان آن را به « گستاخی » ترجمه کرد و در زبان عربی به « طغیانی » اطلاق می شود که در اثر باران به وجود آمده و از حد اصلی تجاوز کرده باشد و به مردمانی گفته می شود که از حد خود تجاوز کرده و جسور شده باشند. در قرآن منظور از آن کلمه کسی است که بی توجه به مسائل دینی و اخلاقی پیش می رود و به نیروی شخصی خود فریفته و مغرور است.

کلمه دیگری که در قرآن مذکور شناخته شده و مبین بی‌ایمانی به خداست « غرور مال دنیا است » که پیدا کردن مرادف آن به انگلیسی مشکل است، معنی اصلی آن « فارغ از احتیاج » و مستغنی بودن است ولی علاوه بر آن مفاهیم « ثروت و استقلال » را نیز در بر دارد . باید زندگی چادر نشینان را در نظر گرفت که نه ثروت داشتند و نه ستر و پوششی و دیر یا زود مجبور بودند از گروه ثروتمندتری استمداد کنند و متکی به آنان باشند. این کلمه ثروت در قرآن نه تنها مال دنیا است بلکه آن حالت روحی نیز هست که ثروت در تجار مکه به وجود آورده بود. رهبران قوم به علت قدرت مالی که داشتند خود را از هر گونه قدرت دیگر بری و مستغنی می‌دانستند و نظارت بر کارهای شبه جزیره عربستان را در دست گرفته بودند.

گستاخی و غرور ثروت و مال دنیا، دلالت بر شکوه و جلال و قدرت مخلوق دارد و موجب انکار خالق است و سبب می‌شود که صاحب ثروت مخلوق بودن خود را از یاد ببرد، در صورتی که قرآن مردم را دعوت می‌کند که تنها به خدا توکل جویند و او را پرستند. عَلَيْهِ السَّلَام می‌گوید : کامیابی و توفیق در دست خداست و باید در خدمت و اطاعت او بود. هر چند جزئیات پرستش تاریک است اما می‌دانیم از همان ابتدا در جامعه محمدی مقام برجسته‌ای داشته است . خود پیغمبر پیش از نزول نخستین وحی اغلب اوقات خود را صرف عبادت می‌کرده است و مدتی او و پیروانش شبها را به عبادت و نماز می‌گذرانیدند و احتمال دارد که گاهی اعمال عبادت را در ملاء عام انجام می‌داده‌اند. پس از ظهور مخالفان، پرستش آشکار مورد حمله قرار گرفت چنانکه در قرآن (سوره ۹۲-

آیه ۹) به آن اشاره شده است که مانع عبادت مسلمانان می شده اند و از بشر به نام « برده و غلام » یاد شده است که ممکن است منظور برده به معنای حقیقی آن یا مراد عبادت و بندگی خدا باشد. در آیاتی که اشاره به شیطان شده است گفته می شود که تمام بزرگان قبایل مکه با مسلمانان در پرستش شرکت داشته اند، برای درک مفهوم این توقع که بشر باید خدا را پرستش کند دو نکته را باید در نظر گرفت: نخست آنکه پرستش برای مردم خاور میانه تنها یک امر ساده قلبی و باطنی نیست بلکه قبل از این عامل، ممکن است شامل پیروی از قبول و تأیید عامه باشد که هر کس می خواهد هم رنگ جماعت شود و سری توی سرها بیاورد. برای پیدا کردن چیزی شبیه آن در زندگی خود ما باید آن را به نمایش رنگهای حزبی در روز انتخابات تشبیه کنیم که کسی که از لباس یا علامت سرخ استفاده می کند نمی تواند لباس یا علامت آبی به کار برد زیرا این یک نوع خیانت محسوب خواهد شد. وقتی ما با خاور میانه سرو کار داریم باید توجه داشته باشیم که آیینهای دینی در این منطقه از این نوع نمایشهاست. نکته دیگر مربوط به نوع و طبیعت پرستش مسلمانان است. کلمه «صلوة» عربی معمولاً به معنای « نماز » است ولی کلمه پرستش مناسبتر به نظر می رسد، نماز چنانکه در طی قرنهای ماضی بوده است قسمتهای اصلی آن عبارت است از حرکات بدنی مانند راست ایستادن و سجده کردن و به خاک افتادن که با گفتن این عبارت، « الله اکبر » آغاز می شود و سوره فاتحه، « دیباچه قرآن » که دارای بعضی از اجزای دعای ربانی مسیحیان است تکرار می شود. اوج نماز هنگامی است که پرستش کننده زانو می زند و پیشانی خود

را به خاک می‌ساید و بدین ترتیب به عظمت و قدرت خدا اقرار می‌کند و خود را بنده او می‌خواند. این حالت به خاک افتادن احتمال کلی می‌رود که از همان آغاز در دعا گنجانده شده بوده است و در این صورت آنچه در باره معنی دعا گفته شده است تأیید می‌شود و آن اینکه بشر باید خدا را بپرستد.

#### ۴- پاسخ بشر به رحمت خدا

ایمان به رحمت خدا نه تنها موجب سپاسگزاری و پرستش اوست بلکه در کارهای عملی زندگی نیز ایجاد عادات مخصوص می‌کند. در آیات اولیه که مورد بحث و مطالعه ماست در این باره مطالب بسیاری دیده نمی‌شود جز دستوری که به خود عَلَيْهِ السَّلَام داده شده است و بی‌شک به پیروانش نیز تعلق می‌گیرد:

فَأَمَّا الْيَتِيمَ فَلَا تَقْهَرْ ،

وَأَمَّا السَّائِلَ فَلَا تَنْهَرْ ،

وَأَمَّا بِنِعْمَةِ رَبِّكَ فَحَدِّثْ <sup>(۱)</sup>.

(سوره ۹۳: آیات ۹ تا ۱۱)

اگر موضوع را وسیعتر مورد مذاقه قرار دهیم نتایج آن جالب خواهد بود. مثالهای ذیل از سوره‌هایی انتخاب شده که «نولد که» آنها را متعلق به دوره اول می‌داند و «بل» نیز آنها را از نخستین آیات مکی شمرده است. در بعضی از آنها ذکر از مخالفت می‌رود و احتمال

---

(۱) یتیم را خوار مکن ، وسائل را مران ، و اما به نعمت پروردگار

خود حدیث کن .

دارد زمان آنها کمی بعد از آیات مذکور در بالا باشد باوجود این دلیلی نشان می‌دهد که آیات مذکور متعلق به دوره اول است. نتیجه مطالعه در آیات حاکی از تعلق خاطر مردم زمان به ثروت و مال دنیا است یکی از آیات دوره اول چنین است:

وَيْلٌ لِّكُلِّ هُمَزَةٍ لُّمَزَةٍ ،  
الَّذِي جَمَعَ مَالًا وَ عَدَّدَهُ ،  
يَحْسَبُ أَنَّ مَالَهُ أَخْلَدَهُ <sup>(۱)</sup> .

(سوره ۱۰۴: آیات ۱ تا ۳)

آیات دیگری دو راه زندگی را مقایسه می‌کند و تضاد آنها

را نشان می‌دهد:

فَأَمَّا مَنْ أَعْطَىٰ وَ اتَّقَىٰ ،  
وَ صَدَّقَ بِالْحُسْنَىٰ ،  
فَسَيَسِّرُهُ لِّلْيُسْرَىٰ ،  
وَ أَمَّا مَنْ بَخِلَ وَ اسْتَغْنَىٰ ،  
وَ كَذَّبَ بِالْحُسْنَىٰ ،  
فَسَيَسِّرُهُ لِّلْعُسْرَىٰ ،

---

(۱) وای بر هر سخن چین عیب‌گوی ، و آنکه مال را فراهم و آماده

کرده است ، گمان دارد مال او را جاویدان میدارد .



وَمَا يُغْنِي عَنْهُ مَالُهُ إِذَا تَرَدَّى<sup>(۱)</sup>.

(سوره ۹۲: آیات ۵ تا ۱۱)

در آیات دیگر (سوره ۶۸- آیات ۱۷ تا ۳۳) مثالی است درباره باغهای آفت زده گروهی که تصمیم گرفتند محصول باغ خود را برباد دهند بی آنکه بگذارند فقر از آن سهمی داشته باشد، اما سحرگاهان که به باغ آمدند، محصول به یکباره محو و نابود شده بود. لذا از گستاخی خود پشیمان شدند و ناله و زاری بسیار کردند. با طرح این مثال از گمراهیهای مردم مکه مستقیماً انتقاد شده است.

كَلَّا بَلْ لَا تُكْرِمُونَ الْيَتِيمَ ،

وَلَا تَحَاضُّونَ عَلَى طَعَامِ الْمِسْكِينِ ،

وَتَأْكُلُونَ التَّرَاثَ أَكْلًا لَّمًّا ،

وَتَحِبُّونَ الْهَالَ حُبًّا جَمًّا<sup>(۲)</sup>.

(سوره ۸۹: آیات ۱۸ تا ۲۱)

و یادآوری گردیده است که این گمراهیها و خطاها به تنهایی

---

(۱) آنکه عطا دهد و پرهیز کند ، و به نیکویی اقرار آورد ، آسانی

برای او فراهم می آید و آنکه بخل ورزد و بی نیازی نماید و به نیکویی

تصدیق نکند سختی برای او آماده سازیم و مال او چون در مهلکه افتد

برای او فایده نکند .

(۲) هان که یتیم را عزیز نمیدارید و به طعام دادن مستمندان رغبت

نمی نمایید و مال میراث را جمع می کنید و می خورید و مال را بسیار دوست دارید .

منجر خواهد شد. سپس وضع کسی را که در روز آخرت محکوم شود  
چنین وصف می کند:

إِنَّهُ كَانَ لَا يُؤْمِنُ بِاللَّهِ الْعَظِيمِ ،  
وَلَا يَحْضُرُ عَلَى طَعَامِ الْمِسْكِينِ ،  
فَلَيْسَ لَهُ الْيَوْمَ هِيَئًا حَسِيمٌ <sup>(۱)</sup> ،

(سوره ۶۹: آیات ۳۳ تا ۳۵)

در آیات دیگری گفته می شود که آتش جهنم:

تَدْعُوا مَنْ أَدْبَرَ وَتَوَلَّى ،  
وَجَمَعَ وَأَوْعَى <sup>(۲)</sup> .

(سوره ۷۰: آیه ۱۷)

اما راجع به اشخاص زاهد و مقدس چنین گفته شده است

كَانُوا قَلِيلًا مِنَ اللَّيْلِ مَا يَهْجَعُونَ ،  
وَبِالْأَسْحَارِ هُمْ يَسْتَغْفِرُونَ ،  
وَفِي أَمْوَالِهِمْ حَقٌّ لِلْسَّائِلِ وَالْمَحْرُومِ <sup>(۳)</sup> ،

(سوره ۵۱: آیات ۱۷ تا ۱۹)

---

(۱) او به خدای عظیم ایمان نداشت و به طعام دادن مستمندان رغبت

نمی نمود ، امروز یاور و حامی ندارد .

(۲) می خواند آنکه راپشت کرد و اعراض نمود و مال فراهم و اندوخته کرد .

(۳) در شب کم می خوابیدند و در سحر استغفار می کردند و در اموال

آنهاست حقی معلوم برای سائل و نا امید از معاش .

طرز رفتار هر گس نسبت به همموعان خود نه تنها در آیات مقدم ذکر شده است بلکه در آیات بعدی نیز آمده است، شخص نباید همیشه در صدد جمع آوری ثروت باشد و به سبب مال دنیا بر دیگران فخر کند، بلکه باید از ثروت خود برای اطعام درماندگان به کاربرد و با یتیمان و ضعیفان با احترام رفتار کند و به آنان ستم روا ندارد این صفات البته خوب و عالی است ولی آنچه موجب تعجب و شگفتی است این است که اینها تنها صفاتی هستند که از آنها یاد شده است (علاوه بر پرستش خدای یگانه) . ولی چیزی درباره ارزش حیات و ثروت والدین و ازدواج و احتراز از دروغ دیده نمی شود و ظاهراً این اصول اساسی زندگی و تمدن را قبول شده دانسته است. فعلاً به این مقدار کفایت می کنیم و بحث درباره آن را به بعد موکول می داریم.

**حرفه خصوصی محمد (ص):**

موضوع کار و حرفه خود محمد ﷺ در آن دوره در آیات مقدم ذکر شده ولی تأکید نگردیده است. دستوری به او رسیده که « قم فأنذر » (سوره ۷۴ آیه ۲) و دستور دیگری نیز هست که شباهت بسیار به آن دارد « فذکران نفع الذکری » (سوره ۸۷ : آیه ۹)

در نظر اول چنین تصویری رود که اهمیت پیام از خود پیامبر بیشتر است و آنچه اصلی و اساسی است رابطه جامعه یا فرد با خداست و لازمه آن وجود کسی است که بتواند این پیام را به مردم برساند و پیامبر کاری جز رسانیدن پیام ندارد، اما بعدها دیده می شود که پیامبر وظیفه دیگری غیر از این داشته است. وقتی مردم مکه به دو دسته تقسیم شدند گروهی به مخالفت با پیغمبر برخاستند و گروهی دیگر او را

پذیرفتند و خواه و ناخواه وی در مقام رهبری گروه طرفداران خود قرار گرفت و چون کار او پیامبری بود این جنبش کوچک دینی با نهضت‌های دینی سابق که آنها نیز پیامبرانی داشتند متصل و ملحق گشت.

محمد ﷺ وقتی که به مدینه رفت مقام او در پیامبری تثبیت شده بود و در این سفر و مهاجرت، وی سمت رهبری داشت که البته این مقام نیز ناشی از جنبه دینی او بوده است نه خویشاوندی و امثال آن، و سبب گردیده است که دسته‌های متخاصم در اثر بیطرفی او به جانب صلح و سازش بگرایند. گرچه تمام این وقایع بعداً اتفاق افتاد ولی از روز نخست در این آیه «قم فأنذر» گنجانیده شده بود.

پیش از آنکه درباره اهمیت این پنج موضوع سخنی بگوییم جای آن دارد که به پیشرفت و نمو این نهضت دینی تا زمانی که نخستین مخالفت ظاهر شد نظری بیفکنیم.

### مسلمانان اولیه

عموم را عقیده بر آن است که نخستین کسی که قبول کرد که رؤیاهای محمد ﷺ از طرف خداست و مسلمان شد، همسروی خدیجه بود این موضوع با آنچه درباره روابط آن دو در داستانهای موثق دیگر گفته شده است کاملاً وفق می‌دهد. خدیجه زنی بود مسن‌تر از شوهر خود. وی بر امور جامعه آگاه بود و با پسر عمویش ورقه نیز که مسیحی بود رابطه بسیار دوستانه و صمیمانه داشت. او بی شک زنی بوده است متفکر و علاقه‌مند به مسائل مکه، و هنگامی که محمد ﷺ فعالیت خود را آغاز کرد و به یار و یاور نیازمند شد در صدر حمایت و تسلی خاطر شوهر برآمد. روابط دوستانه او با پسر عمویش نیز این

آمادگی را در وی به وجود آورده بود که رؤیایها و حوادثی را که برای محمد ﷺ پیش می آمد و وحی و الهامی از جانب خدا بداند و حقیقت نیز چنین حکم می کرد.

درباره نخستین مردی که به محمد ﷺ ایمان آورده است از زمان قدیم بحث و اختلاف نظر بوده است. بعضی عقیده دارند که او علی پسر ابوطالب و عموزاده محمد ﷺ بوده است که در زمان خشکسالی محمد ﷺ را به خانه خود برده و با آنکه از باب تهیه غذا برای فرزندان خود دچار عسرت بوده از وی نگهداری کرده است. این ادعا ممکن است حقیقت داشته باشد ولی دارای اهمیت چندانی نیست چه در آن موقع علی بیش از نه یا ده سال نداشته است. نظر عده ای دیگر نیز به یکی از اعضای خانواده خود محمد ﷺ معطوف است و اوزید بن حارثه است که از نژاد عرب بوده و به عنوان برده به مکه آورده شده بود و بعد به دست خدیجه و محمد ﷺ افتاده است و آنان پس از چندی او را آزاد کرده و به فرزندی پذیرفته اند و احتمال می رود این اقدام بر اساس سنتهای قدیم بوده نه به طور قانونی و رسمی چنانکه امروزه معمول است.

بین محمد ﷺ و زید دوستی و علاقه شدید به وجود آمد مخصوصاً هنگامی که محمد ﷺ فرزندان را که از خدیجه داشت از دست داد. محمد ﷺ اعتماد بسیار به زید داشت و زید نیز آینده درخشانی را نشان می داد که شاید درخشانتر از آینده علی بود چه در این هنگام وی در حدود سی سال داشت و بهتری می توانست معنی وحی و الهام محمد ﷺ را درک کند. پس احتمال قوی می رود که او نخستین مردی باشد که به اسلام گرویده است. شخص سومی که به اسلام گرویده ابوبکر بوده است که هر

چند نخستین فرد نیست که اسلام آورده است ولی گرویدن وی به اسلام دارای اهمیت بسیار است. ابوبکر دو سال از محمد ﷺ کوچکتر و به احتمال قوی سالها باهم دوست بوده اند.

ابوبکر نیز مانند اغلب بزرگان مکه زندگی خود را از راه تجارت می گذرانید ولی ثروت او حتی پیش از آنکه آن را صرف آزاد کردن بردگان مسلمان کند بیش از (۴۰۰۰) درهم نبوده و این خود دلیل آن است که تجارت او چندان وسعتی نداشته است ولی خدمات او به اسلام بزرگ و ارزنده است. گفته می شود که ابوبکر پنج نفر را به محمد ﷺ معرفی کرد که بعدها یعنی در سالهای آخر عمر محمد ﷺ و بعد از وفات او بنیان گذار دولت جوان اسلام شدند. اگر این داستان حاکی از اهمیت این افراد در زمانهای بعد باشد خود نشانه آن است که آنان از همان زمانهای اول به دین اسلام گرویده اند و باعث آن ابوبکر بوده است. بی شک پیش از آنکه محمد ﷺ از مکه به عزم مدینه خارج شود ابوبکر مقام مشاور و معاونت او را به دست گرفته بوده است و این مقام را تا زمان مرگ پیغمبر حفظ کرد و علت آن که او را به جانشینی انتخاب کردند نیز همین بود.

این ایمان آوردن افراد بی توجه به تقدم و تاخر آنان در فاصله بین وحی اول و آغاز دعوت عمومی رخ داده است و تاریخ تقریبی آن ۶۱۰ تا ۶۱۳ میلادی است. فهرستی مرکب از پنجاه نام ضبط شده است که اسامی کسانی است که در سالهای اول به اسلام گرویده اند یعنی پیش از آغاز دعوت عمومی و یا در ماههای اول آن. جزئیات زندگی آن مردان و زنان را نیز تا آنجا که مقدور بوده است نوشته اند و از مطالعه آن می توان گفت که چه اشخاصی به اسلام جلب شده اند

این اشخاص را می‌توان به سه گروه تقسیم کرد:

اول عده‌ای از جوانان که به با نفوذترین خانواده‌ها و قبایل متعلق بوده‌اند. این جوانان رابطه بسیار نزدیک با کسانی داشتند که در مکه دارای نفوذ و قدرت بودند و پیش از همه به مخالفت با محمد ﷺ برخاستند. در جنگ بدر که در سال ۶۲۴ بین مسلمانان و کفار رخ داد نمونه‌هایی از برادر، پسر، پدر، عمو و برادر زاده دیده می‌شد که در جبهه‌های مخالف هم می‌جنگیدند. برجسته‌ترین نمونه آن خالد بن سعید از خاندان امیه (یا عبد شمس) است که پدرش سعید در سالهای بعد یکی از قوی‌ترین و ثروتمندترین افراد مکه به‌شمار می‌رفت. به علل نامعلومی خالد بن سعید در نهضت بعدی اسلام سهم مهمی نداشته است. گروه دوم کسانی از خانواده‌ها و طوایف دیگر بودند که بسیار جوان بودند. بین این گروه و دسته اول وجه امتیاز خاصی وجود ندارد ولی چون به تدریج پایتزر برویم و به خانواده‌ها و طوایف ضعیفتر برسیم به اسامی کسانی بر خورد می‌کنیم که دارای نفوذ بسیار در بین خانواده و طایفه خود بوده‌اند. از بن کسانی که با محمد به مدینه هجرت کردند فقط يك نفر بود که سنش از شصت تجاوز می‌کرد و آن هم استثنائی بود، سن بیشتر کسانی که به محمد ﷺ ایمان آوردند کمتر و فقط سن دو یاسه نقر ازی و پنج تجاوز می‌کرد. گروه سوم کسانی بودند که تعلق به هیچیک از طوایف نداشتند. بعضی از این عده، بیگانگان رومی یا حبشی بودند که احتمال دارد به عنوان بردگان به مکه آمده باشند و لا اقل یکی از آنان به اندازه کافی ثروت داشته که بتواند کفار مکه را به خود جلب کند. معمولاً و اسم این اشخاص تحت حمایت طوایف یا قبایل بودند ولی قبایل علاقه‌ای به حمایت از

آنان نشان نمی‌دادند. عده‌ای دیگر از عرب بیرون مکه بودند که وابستگی به قبایل داشتند و آنها را «هم پیمان یا متفق» می‌گفتند. گاهی چنین استفاد می‌شود که این عده وابسته به یکی از رؤسای با قدرت طوایف مقتدر بودند که از آنان حمایت می‌کرد، و بنا بر این مقام رفیعی در جامعه نداشتند ولی همیشه پست یا فقیر نبودند چه رئیس قبیله مادر خود عمر بن عبدالمطلب از همین جماعت بوده است. به طور کلی اگر متفقی یافت می‌شد که مورد حمایت طایفه‌ای قرار نمی‌گرفت استثنائی بود. اغلب آنان اعضای ضعیف خانواده يك قبیله به شمار می‌رفتند و جزء گروه دوم محسوب می‌شدند.

مقصود از تجزیه و تحلیل وضع اجتماعی مسلمانان، نخست آن بود که نشان دهیم اشخاصی که در ابتدا به اسلام گرویدند «جوانان و ضعفا» بودند و مقصود از کلمه ضعیف کسانی هستند که تحت حمایت قبیله‌ای نبوده‌اند اگر نه پیروان محمد صلی الله علیه و آله اشخاصی ضعیف به معنی ناتوان نبودند بلکه همه طبقه جوان بودند. پس عقیده بعضی دایر بر این که این پیروان بیشتر مرکب از «طبقه عوام» یا اعضای گروه‌های پایین اجتماع بوده‌اند صحیح نیست.

امتیاز بین اشراف و عوام درباره جامعه مکه صادق نیست یا لااقل در باره آن قسمت که با بحث مربوط می‌شود صدق نمی‌کند. البته امتیازی بین قریش مرکزی و قریش حومه دیده می‌شود اما تمام کسانی که در منابع از آنان نام برده شد متعلق به «قریش مرکزی» هستند و خواه دوستان عمر بن عبدالمطلب باشند یا دشمنان وی، بین وضع و شریف آنان وجه امتیازی مساوی و نظیر آنچه بین مسلمان و کافر هست وجود نداشته است و تمام قبایل «قریش مرکزی» دارای نیاز مشترک شمرده می‌شدند. اختلافاتی که در زمان محمد صلی الله علیه و آله بین قبایل مختلف مکه وجود



داشته است بیشتر معلول قدرت بوده که آن نیز وابستگی بسیار به ثروت و موقعیت تجارتي آنها داشته است. در نیم قرن پیش از «۶۱۰» میلادی تغییری در وضع ثروت قبایل مختلف پیدا شده بود و بعضی بالا و پایین رفته بودند مثلاً مرگ زودرس یک رهبر دانا یا یک جوان لایق ممکن بود سبب شود که قبیله‌ای به قهقرا برود. مسئله دیگر نهضت‌های سیاسی بود که ممکن بود به طور غیر مترقبه در سرنوشت افراد تأثیر کند و برای آنان بدبختی یا کامیابی به بار آورد. طبقه بندی چندی در بین قبایل مکه دیده می‌شود که اساس آن بیشتر مبتنی بر منافع یار قابتهای تجارتي بوده است. حتی پایه اتحادیه های قدیم هم مانند اتحاد مقدسان بر منافع مادی عمومی استوار بوده است و هر چند در اتحادیه های قدیم حس وفاداری و امانت وجود داشته با این همه نمونه های چندی دیده می‌شود که قبایل از گروهی خارج شده و به گروه دیگر پیوسته‌اند و یا گروه جدیدی تشکیل داده‌اند.

هنگامی که محمد ﷺ دعوت خود را آشکار کرد پیشرفت تجارت در جامعه، طبقه بر جسته‌ای به وجود آورده بود که ثروتمندترین تجار مکه جزء آن طبقه بودند و در عین حال ریاست قوی ترین قبایل را داشتند و تجارت مکه را در انحصار خود در آورده بودند. در این طبقه دسته‌هایی بودند که با یکدیگر رقابت داشتند و بنا بر این گاهی از اصول اتحادیه های قدیم پیروی می کردند، گاهی آنها را زیر پا می گذاشتند و این طبقه بود که جداً با محمد ﷺ مخالفت می کرد.

بهترین وصفی که می‌توان از پیروان اصلی محمد ﷺ کرد این است که آنان طبقه‌ای از جامعه بودند که پایین‌تر از طبقه بر جسته

مخالف قرار داشتند و علت اینکه اکثر مردم مکه از او پیروی نمی کردند، به استنباط ما، آن بوده است که یا کاملاً در کارهای تجارتی آن طبقه محو و خیره شده بودند یا به طریقی طفیلی آنها بودند. کسانی که به محمد ایمان آوردند و از او پیروی کردند مردمی مستقل و از تبعیت طبقه بالا آزاد بودند. برادران و حتی بنی اعمام و خویشاوندان جوان تجار بزرگ نیز همه جوانان ثروتمندی بودند در صورتی که مردانی از قبایل دیگر مانند ابوبکر هنوز می کوشیدند تا خود را مستقل سازند.

احتمال دارد که بعضی از «افراد ضعیف» نیز همین هدف را داشته اند زیرا اگر مطیع کامل یکی از تجار معتبر می شدند آن تاجر از آنان حمایت می کرد. پس می بینیم نهضت تازه اسلام در عین حال که جنبش «جوانان» بود به هیچ وجه نهضت بی مایه و بی اساسی نبوده است.

### نفوذ یهود و مسیحیت

نخستین آیات قرآن نشان می دهد که اساس آن بر یکتاپرستی یهود و مسیحیت است که خدا را خالق می داند و عقیده به روز رستاخیز و قضا و وحی دارد. در آیات بعدی وابستگی آن به سنتهای کتاب مقدس مشهودتر است زیرا دارای مطالب بیشتری از عهد جدید و عتیق است. این موضوع در فهم این نکته تولید پیچیدگی می کند که علت دعوت محمد ﷺ، چنانکه در سال ۶۱۰ دیده می شود، چه بوده است. نخست باید تأثیری را که دین یهود و مسیحیت در محمد ﷺ داشته است تحت مطالعه قرار داد.

باید در نظر گرفت که امکان آن هست که وی کتابهای مقدس  
 یا دیگر کتب یهود و مسیحیت را خوانده باشد. مسلمانان متعصب را  
 را عقیده بر آن است که محمد ﷺ خواندن و نوشتن نمی دانسته است.  
 ولی این عقیده مورد شك محققان جدید غربی است زیرا می گویند  
 این بیان برای آن است که ثابت کنند، قرآن معجزه است، زیرا  
 يك فرد بی سواد نمی تواند چنین کتابی را به وجود آورد. از طرف  
 دیگر می دانیم که عده کثیری از مردم مکه خواندن و نوشتن  
 می دانسته اند لذا بعید به نظر می رسد که تاجر با استعدادی مانند محمد  
 ﷺ از این هنر بی بهره مانده باشد. طرز بیان مطالب کتاب مقدس  
 در قرآن نشان می دهد که او خود این کتاب را نخوانده بوده است و  
 همچنین نشان می دهد که از کتاب دیگری نیز استفاده نکرده است.  
 پس اطلاعاتی که او از عقاید یهودی و مسیحی داشته بی شك شفاهاً و به  
 طرق مختلف به وی رسیده است مثلاً با یهودیان و مسیحیان حشر و نشر  
 داشته و درباره مسائل دینی با آنان بحث و گفتگو کرده است زیرا  
 در آن هنگام عرب مسیحی در مرزهای سوریه بسیار بودند و یا حبشیهای  
 یمن امکاناً برای تجارت یا به عنوان برده در مکه آمد و شد  
 داشته اند. بعضی از قبایل یا طوایف چادر نشین نیز مسیحی بودند، که  
 امکان دارد برای شرکت در بازار سالیانه به مکه آمده باشند. همچنین  
 جمع کثیری از یهودیان در مدینه و شهرهای دیگر سکونت داشتند.  
 پس فرصت برای گفتگو با آنها وجود داشته است. مطابق اسناد  
 موجود محمد ﷺ بحثهای مفصلی با ورقه پسر عموی مسیحی خدیجه  
 کرده و در تمام دوران عمر دشمنان وی سعی داشتند که وحی و الهام

اورا نتیجه همین تماسها معرفی کنند.

ممکن است پس از آنکه محمد ﷺ عملاً مأموریت خود را به پیغمبری آغاز کرد و مدعی شد که همان پیامی را که موسی و عیسی آورده اند او نیز آورده است، در هر فرصتی برای گسترش دانش و اطلاعات خود درباره کتاب مقدس، از یهودیان و مسیحیان سؤالاتی می کرده است (۱) (هرچند همیشه چنین واهی نمود که اشاره به داستانهای کتاب مقدس در قرآن از طریق وحی به او نازل می شود)؛ در آیات نخستین دلیلی دیده نمی شود که حاکی از این باشد که محمد ﷺ به يك منبع شفاهی متکی بوده است، بلکه نشان می دهد که خانواده های تحصیل کرده مکّه با عقاید کتاب مقدس آشنایی داشته اند یا به عبارت دیگر تمام محیط علمی با این عقاید پر بوده است. چنانکه گفته شده؛ پیش از ظهور محمد ﷺ، عده ای از قوم عرب در جستجوی يك دين حقیقی که همان یکتا پرستی باشد بر آمدند، و در آیات اول قرآن گفته شده است که ربّ الکعبه که مورد پرستش آنها بوده است همان خالق جهان و جهانیان است.

تمام این مطالب نشان می دهد که مردم بعضی از مراکز مکّه نوعی یکتا پرستی مبهمی را قبول داشتند. قرآن هم با حمله مستقیم به

---

(۱) این مطالب به نظر مسلمانان هیچيك صحيح نیست چنانکه می فرماید:

«ذلك من انباء الغيب نوحيها اليك»، و هیچکس ندید آن حضرت از یهودی یا مسیحی در مکّه یا مدینه چیزی پرسیده و سؤالی کرده باشد و هر کس چنین دعوی کرد نتوانست شواهد معقولی برای آن ذکر کند و علمای ما در کتب خویش آن را به دلائل قطعی ثابت کرده اند.

کفر یا شرک آغاز نمی‌شود. این یکتاپرستی مبهم بود زیرا نه شکل خاصی برای آن وجود داشت و نه انکار بر شرک به طور محسوس دیده می‌شد. شرحی که در قرآن (سوره ۱۰۵) دربارهٔ رهایی مکه از دست حبشها، که با فیل به آنجا تاخته بودند، آمده است و نجات مکه را از دست آنان مدیون مداخلهٔ خدا دانسته، یک شرح و بیان اصیل خود قرآن نیست بلکه انعکاسی از عقاید جاری مردم روشنفکر و دیندار مکه بوده است. نتیجهٔ این بحث آن است که مُحَمَّدٌ ﷺ اطلاعات خود را دربارهٔ کتاب مقدس از محیط و اشخاص مکه به دست آورده است نه از راه خواندن کتاب مقدس یا داشتن ارتباط با اشخاص معین. بنا بر این اسلام از جهتی با اصول یهود و مسیحیت بی ارتباط نیست زیرا در محیطی به وجود آمده که افکار کتاب مقدس در آن رواج کامل داشته است.

در اینجا سؤالی که پیش می‌آید این است که چرا بعضی از افکار و عقاید کتاب مقدس تا این اندازه برای مُحَمَّدٌ ﷺ و مسلمانان حایز اهمیت بوده و چرا از بعضی از آنها صرف نظر یا غفلت شده است؟ جواب این سؤال پیش از مطالعه دربارهٔ مبادلات فرهنگی و تعیین یک نقطهٔ مبدأ ممکن نیست و این موضوعی است که جدیداً برای مطالعه و بررسی طرح شده است.

نقطهٔ باارزشی که تشخیص نکات برجستهٔ اوضاع و احوال آن زمان را از آنجا می‌توان آغاز کرد همان است که توسط سرهامیلتون گیپ پیشنهاد شده و متضمن سه قانون است که به حکم آنها فرهنگی در فرهنگ دیگر اثر و نفوذ می‌کند.

آن سه قانون عبارت است از:

۱- نفوذهای فرهنگی (۰۰۰ عناصر خالص متشابه) همیشه به

مدد يك فعاليت زنده در رشته‌های مربوط رخ می‌دهد و ۰۰۰۰۰۰ همین فعاليت زنده است که عامل کشش و جاذبه را به وجود می‌آورد که بی آن هیچ گونه انگیزه خلق و ابداع نمی‌تواند صورت وقوع پیدا کند.

۲- عناصر اقتباس شده تا آن مقدار موجب توسعه حیات فرهنگ اقتباس کننده می‌شود که غذای خود را از فعالیتهایی اخذ کند که در درجه اول، مورد نیاز باشد.

۳- يك فرهنگ زنده تمام عناصر فرهنگهای دیگر را که مخالف ارزشهای اساسی، تمایلات روحی و احساساتی و معیارهای زیبایی شناسی او باشد رد می‌کند.

نکته جالب این سه قانون روشن کردن این مسئله است که دین اسلام به سادگی در تحت نفوذ یهود و مسیحیت به وجود نیامده است بلکه در زندگی اولیه عرب فعالیتهایی وجود داشته که این نفوذها با آنها متناسب و مربوط بوده است چه نشانه‌هایی وجود دارد دال بر این که قبلاً نوعی از فعالیت جریان داشته که می‌توانسته است هم اقتباس از افکار کتاب مقدس و هم توسعه و تکامل يك دین جدید را تأویل و روشن کند.

می‌توان گفت که هدف این فعالیت قبلی کوشش برای یافتن دینی بوده است که قانع کننده باشد. داستانهایی درباره کسانی هست که سعی داشتند راه پرستش بی آرایش خدا را پیدا کنند. ولی روی

هم قسمت اعظم دین نوعی تقوا و پرهیزگاری شخصی است که در زندگی خصوصی کسی با معیارهای عدالت و راستی توأم شده است. این مفهومی از دین است که امروزه در همه جا رواج دارد ولی مطالعه بیطرفانه گذشته نشان می‌دهد که این يك امر استثنایی است و جامعه شناسان ممکن است پافرا تر بگذارند و بگویند این مرهون موقعیتهای خاصی است که مسیحیان معتقد و مؤمن در قرن گذشته با آن مواجه بودند. البته بعضی از مسیحیان معترف و معتقد متدرجاً با این نظر موافق شده‌اند که دورهٔ اخیر نیز استثنایی بوده است. در بیشتر جوامع خواه ابتدایی خواه پیشرفته، دین مستقیماً با غالب جنبه‌های زندگی اجتماعی مربوط است.

در مورد اسلام دلایل دیگری هست که نشان می‌دهد که فعالیت موجود اولیه، برای یافتن تقوا و پرهیزگاری محض شخصی و فردی نبوده است. اما علت آن که در بارهٔ سخاوت و احتراز از خست و لثامت اصرار شده است چیست؟ ممکن است آن را خلق و خوی فردی دانست ولی هنگامی که کسی آن را به دیگران توصیه می‌کند دلیل علاقهٔ او به رفاه و سعادت جامعه است. علاوه بر آن قرآن به یتیمان و کسانی که مورد تجاوز ثروتمندان قرار می‌گیرند علاقهٔ بسیار نشان می‌دهد و این از اصول رستگاری و دیانت فردی و شخصی بالاتر و وسیعتر است. همچنین اگر مسلمانان می‌خواستند به طریق خاص خود پرستش کنند، معلوم نیست چرا با آنان تا این اندازه بد رفتاری می‌شده و تا به آن حد شکنجه و آزار می‌دیده‌اند. اگر در پاسخ گفته شود علت بد رفتاری با مسلمانان حملهٔ آنان به شرك بوده که در این مورد

متضمن چیزی بالاتر از رستگاری فردی است. آخرین نکته این است که چرا مسلمانان پس از رفتن به مدینه يك زندگي آرام و مستقل برای خود انتخاب نکردند، تا بتوانند خدا را چنانکه می خواهند پرستش کنند؟ چرا حمله به کاروانهای مکيان کافر را آغاز کردند؟ پس اگر گفته شود که کوششهای موجود پيشين سعی در جهت یافتن يك دين قانع کننده برای رستگاری فرد بوده است، جواب تمام حقایق داده نشده است.

عقیده دیگری که شباهت به آن دارد این است که هدف فعالیتهای پيشين یافتن دواي دردهای اجتماعی مکه بوده است ولی به وضوح معلوم نیست که افکار دینی آیات اول قرآن چگونه با وضع اجتماعی زمان مطابقت می کند. بی تردید هر گونه بحث از رابطه افکار دینی یا مسائل اجتماعی، مسائل مشکلي تولید می کند و آنچه در اینجا گفته می شود بیان مختصری از وضع عمومی است که شرح موجود اصول اسلامی را متضمن است.

۱- زندگي اجتماعی تابع عوامل مادی است. عوامل مادی مشتمل است بر وضع جغرافیایی کشوری که جامعه در آن زندگي می کند، فئونی که با آن آشنایی دارد و رابطه آن با جوامع مجاور. به يك مفهوم، همه این عوامل اقتصادی هستند ولی کلمه وسیع مادی، بر آن مرجح است. نکته مهم آنکه در این عوامل نکات غیر قابل اجتنابی هست مثلاً اگر جامعه همسایه شما غلات بهتری دارد، برای کشت و تولید آن راه بهتری به کار می برد و در نتیجه می تواند به جمعیت بیشتری غذا برساند، پس (با در نظر گرفتن همان شرایط جغرافیایی) جامعه شما



شکست خواهد خورد و یا توسط جامعه دیگر نابود خواهد شد مگر آنکه بذر و اصول فنی کشت را از آن کشور دریافت کند. بذر و اصول فنی چیزهایی هستند که می توان اخذ و یا اقتباس کرد ولی در بعضی موارد از جامعه شماکاری ساخته نیست و نمی تواند مانع فنا و اضمحلال خود بشود .

۲. در هر محیط مادی بعضی از اصول اجتماعی از اصول دیگر مناسبتر است. در دوره های پیش از اسلام در جلگه های وسیع عربستان يك خانواده که واحد ساده ای مرکب از يك مرد و يك زن و چند كودك بود نمی توانست واحد قابل دوام و پایداری باشد. بنا بر این برای رو به رو شدن با مصائب یا حوادث در چنان محیطی، می بایست واحدهای بزرگتری وجود داشته باشد که ممکن است همان طایفه یا قبیله نامیده شود. تا زمانی که محیط مادی ثبات داشت نظام عشیره ای در عربستان با اتحاد و فکر و عقیده پیش می رفت. شاید يك نظام دیگر یا تغییرات و اصلاحات جزئی درین نظام، به خوبی پیشرفت داشته است ولی نظامات دیگری که به نظر ما می رسد چندان پیشرفتی نداشته است. سازگار کردن يك نظام اجتماعی با محیط مادی ناشی از يك رشته کوشش و خطاست که در جریان آنها شکل اجتماعی انسب باقی می ماند و آنهایی که کمتر مناسب هستند می میرند و یا متروك می مانند .

هر شکلی پیش از آنکه مورد آزمایش قرار گیرد باید پیشرفت آن برای کسی مسلم و آشکار شده باشد . پس محیط مادی لزوماً نظام اجتماعی را تعیین نمی کند، با وجود این به ترتیبی که در بالا توضیح

داده شد، محیط مادی غیر قابل اجتناب و امر مسلمی است و در نظام اجتماعی سهمی و نقشی دارد و معیار تناسب و یا ارزش پایدار هر نظام اجتماعی است.

۳- در جایی که محیط مادی تغییر می کند و ممکن است این تغییر نتیجه کشف فنون جدید یا تغییر رابطه با جوامع مجاور باشد، نظام اجتماعی موجود طبعاً تناسب خود را با آن جامعه از دست خواهد داد. يك دوره کوشش و خطا لازم است تا نظام اجتماعی مناسب محیط مادی جدید به وجود آید و آنچه به دست می آید همیشه کم و بیش تعدیل نظام اجتماعی موجود است.

۴- در يك جامعه ثابت و پا برجا که نظام اجتماعی آن به طور ارضا کننده ای با محیط مادی توافق دارد يك رشته افکار و عقاید دینی مناسب به وجود می آید. پذیرفتن این افکار و عقاید در اعضای جامعه نظریات مخصوصی نسبت به جامعه و محیط آن ایجاد می کند که بی وجود آنها زندگی جامعه راضی کننده نخواهد بود. در بعضی از موارد احتیاجی بدان نیست که اعضای جامعه از آنچه می کنند آگاه باشند، ولی این مسئله معمولاً اساسی است که آنان باید مثلاً ایمان داشته باشند به این، که زندگی جامعه آنان مجموعاً دارای معنا و مفهومی است.

۵- افکار و عقاید، مخصوصاً افکار دینی، در سازگار کردن نظام اجتماعی با تغییرات محیط مادی سهم مهمی دارد. چنانکه در بالا گفته شد نتیجه تغییر مادی آنی ناسازگاری اجتماعی است که موجب ناخشنودی و ناخرسندی اعضای جامعه می شود. در هر حال این تغییرات

از آن جهت که متضمن ترك عادات منتهی هستند و مؤثر واقع نمی-  
 شوند، مگر دارای هدف مثبتی باشند و در این صورت هم برای آنکه  
 مورد قبول اکثریت اعضای جامعه واقع شوند باید مبین افکاری باشند.  
 ۶- عادات آگاهانه که زندگی هر جامعه بر آنها استوار است  
 ریشه‌های عمیق نا آگاه دارد. به همین دلیل است که از آنها قویاً حمایت  
 می‌شود و برانداختن ریشه آنها غیر عملی است. برای ایجاد عادات و  
 اندیشه‌های جدید، به همان استحکام و استواری عادات و اندیشه‌های  
 قدیم، چندین نسل زمان لازم است، بنا بر این بشر به جای کندن ریشه  
 عادات و اندیشه‌های اساسی، سعی می‌کند آنها را اصلاح نماید و با  
 نظام اجتماعی مفروض سازگار کند. این عمل با اصلاحات ملایمی  
 در مجموعه افکار پذیرفته شده و تجزیه و تحلیل وضع جدید بر حسب  
 این افکار، انجام می‌گیرد و منتهی به طرح و ارائه هدفی می‌شود که  
 با این تجزیه و تحلیل مطابقت داشته باشد. لذا در مواردی که با وضع  
 مادی جدید سازگاری و توافق پیدا می‌شود افکار دینی نه تنها ایجاد  
 هدف مثبت می‌کند بلکه اندیشه‌ها و سنت‌های کهنه را نیز تحت این هدف  
 در می‌آورد و از این راه اندیشه‌های دینی به صورت قانونی از نهضت  
 اجتماعی در می‌آید. بی‌وجود افکار، اصولاً نهضتی به مفهوم واقعی کلمه  
 به وجود نمی‌آید اما يك ناخشنودی اجتماعی، بی آنکه جهت روشن  
 و مشخصی داشته باشد ایجاد می‌گردد. آنچه به طور خلاصه شرح  
 دادم ریشه و اساس اسلام بود و من سعی دارم رابطه آن را با افکار  
 انجیل توضیح دهم. محققان دلایلی آورده‌اند که نشان دهند یهود و  
 مسیحیت نفوذ قوی در اسلام داشته است ولی از نقطه نظر کنونی ما

جواب دادن به آن چندان مهم نیست بلکه آنچه مهم است تشخیص فعالیت‌های بین اعراب است که افکار انجیل با آنها تناسب داشته است.

### تناسب اجتماعی اندیشه‌های دین جدید

هنگامی که محمد ﷺ در مکه به وعظ و دعوت آغاز کرد. تغییر

مادی مهمی که از نیم قرن پیش یا زودتر آغاز شده بود، در سال‌های اخیر به ثمر رسیده بود. این تغییر، توسعه تجارت بود، تا آنجا که مکه، مرکز عملیات تجارتي دور و نزدیک شده بود. از همان زمان قدیم زیارتگاه و معبدی در مکه وجود داشت که همه ساله عده کثیری از چادر نشینان نقاط مختلف عربستان به زیارت آنجا می آمدند.

ماه‌های مقرون به زمان زیارت ماه‌های مقدس بودند و زمین‌های اطراف مکه نیز مقدس به شمار می رفت. در ماه‌های مقدس و در زمین مقدس جنگ‌های خانوادگی تحریم شده بود و زائران می توانستند بسی هیچ ترس و واهمه‌ای از خطر حمله و تجاوز، به زیارت بروند. در عین حال فرصت داشتند با تجار ملاقات کنند و محصولات زراعتی خود را با کالاهای تجارتي مبادله نمایند. در این ماه‌ها مالکیت و سدان‌ت حرام کعبه، چنانکه مردم مکه پیش از آن نیز توجه داشتند منبع درآمد خوبی بود. به سبب سنگلاخ بودن زمین مکه، کشاورزی در آنجا ممکن نبود و از طرفی احتمال نمی رود که ساکنان آنجا در زمان تولد محمد ﷺ تمام معاش خود را از راه تجارت گذرانیده باشند، بنابراین آنان می بایست زندگی چادر نشینی و عشایری داشته باشند. اغلب چادر نشینان یا بدوی‌های عربستان تقریباً می توانند با شتر چرانی زندگی کنند. در پایان باران‌های نامنظم زمستانی و بهاری چادر نشینان به

قسمتهایی از بیابان یا جلگه می روند که در آنجا سبزه و علف شادابی به مدت یکی دو ماه می روید. در قسمتهای شن زار حفر چاه هر گز میسر نیست ولی انسان می تواند مایع مورد نیاز بدن را از شیر شتر به دست آورد.

پس از آنکه این نباتات موقتی از میان رفت اعراب چادر نشین به مناطق دیگری که دارای چاه آب و خار و خاشاک دائم هستند نقل مکان می کنند و ما نام تعدادی چاه آب را که در مکه بوده است می شنویم.

غذای اصلی این چادر نشینان شیر شتر است و در بعضی از موارد شتری را می کشند و از گوشت آن استفاده می کنند. افرادی که نمی توانند تا اعماق جلگه های بی آب و علف پیش بروند گوسفند و بز دارند ولی از لحاظ جنگجویی و جسارت از آنان، که به شترهای خود متکی هستند ضعیف ترند، علاوه بر آن چادر نشینان به اموال یکدیگر یا چادر نشینان نزدیک خود دستبردهایی می زنند و یا برای نگهبانی قبایل و چادر نشینان، از تجاوز عشایر دیگر، و همچنین راهنمایی کاروانهای تجارتی دستمزدهایی از آنان دریافت می دارند. با این دستمزدها و فروش شتر و فراورده های آن می توانند مقداری غله و مایحتاج دیگر از نواحی کشاورزی خریداری کنند.

امکان دارد که پدر بزرگ پدر بزرگ پدر صلی الله علیه و آله که جد همه قبایل بزرگ مکه بوده است نخستین کسی باشد که ایجاد زیارتگاهی (۱) کرده است که مردم در تمام سال می توانستند به زیارت

---

(۱) زیارتگاه کعبه بنای ابراهیم خلیل الله «ع» است چنانکه خداوند\*

آن بروند و فرزندان او، از راه سدانت و نظارت زیارتگاه و شرکت در تجارت فصل زیارت ثروتی به دست آوردند و زیارتگاه به شهر کوچکی مبدّل شد. به دلایل نامعلومی تجارت آنان در نیمه دوم قرن ششم رونق و توسعه پیدا کرد، چنانکه در آغاز سال «۶۰۰» میلادی مردم مکه بیشتر تجارت عربستان غربی را در دست داشتند. علاوه بر محصولات محلی نظیر کندر عربستان جنوبی و کالاهای هندی و حبشی را نیز به سواحل مدیترانه حمل می کردند. کاروانهایی ترتیب داده بودند که مرتب به سمت جنوب و یمن و شمال یعنی دمشق و غیره می رفتند، همچنین مشاغل دیگری را نیز مانند استخراج معادن و غیره شروع کرده بودند. اما به طور کلی غالب مردم مکه زندگی خود را از راه تجارت می گذرانیدند.

بدین ترتیب بود که تغییر مادی مهمی از تبدیل اقتصاد شبانی و چادر نشینی به اقتصاد تجارتي به وجود آمد. مردم مکه دارای مؤسسات اجتماعی و عادات و خصوصياتی مانند دشمنیهای خانوادگی و وحدت منافع قبیله ای بودند که با زندگی عشایری بیابانی مناسبتر

---

☆ در قرآن می فرماید «فیه آیات بینات مقام ابراهیم و من دخله کان آمناً». اگر بنای ابراهیم نبود چگونه سنگی به نام مقام ابراهیم در آنجا از قدیم مشهور بود و چرا مردم عربستان هر کس را در آن حرم وارد می شد ایمان می ساختند و به اصطلاح بست آن را نمی شکستند و کسی غیر از ابراهیم در عرب معروف نبود تا به احترام او معبدی را طبعاً بدین گونه حرمت دارند و اگر بخواهیم نسبت آن را به ابراهیم منکر شویم باید نسبت طاق کسرا، راهم به کسرا منکر شویم.

بود. حتی اگر بعضی از آنان چادر نشین و عشیره ای خالص نبودند به اندازه کافی در نزدیکی بادیه زیسته و عادات آن را کسب کرده بودند. آنچه موجب ظهور اسلام گردید تضاد و تضادم بین دید چادر نشینی مردم مکه، و محیط جدید مادی (یا اقتصادی) بود که خود آن را به وجود آورده بودند.

در شرایط سخت زندگی بیابانی مردم مجبور بودند به هم نزدیک شوند و همکاری نمایند تا بتوانند زندگی کنند. این همکاری و نزدیکی بر اساس قرابت صورت می گرفت که آن را می توان قرابت طایفه ای یا قبیله ای نامید. وحدت منافع یا وفا داری با خویشاوند، دارای اهمیت بسیار بوده است و اگر کسی خویشاوند خود را در خطر می دید، بی آنکه به درستی و نادرستی اقدام خود بیندیشد. به یاری او می شتافت. در مکه منافع طایفه ای جای خود را به نفع فردی داده بود. ممکن است این حالت در بین بعضی از چادر نشینان شیوع پیدا کرده بوده است ولی در مکه، تمایل به انفراد و حفظ منافع فردی و شخصی، نتیجه رشد و توسعه تجارت بود. تجار بزرگ منافع تجارتی را بر همه چیز مقدم می داشتند و با مراکز تجارتی برضه معشیره های خود متحد می شدند. محمد ﷺ در سال آخر اقامت خود در مکه از این موضوع در رنج بود. زیرا عموی او ابولهب دوستانی در میان تجار بزرگ داشت که او را وادار می کردند بر برادر زاده خود بشورد. خلاصه، در اثر به وجود آمدن منافع مشترك بازرگانی، واحد جدیدی تشکیل یافته بود که دارای اندیشه ها و عقاید اجتماعی قدیم بودند و از عهده حل مسائل جامعه مکه بر نمی آمدند.

فرو ریختگی اصول طایفه‌ای و عشیره‌ای موجب شد که باضعیفان جامعه مانند زنان بیوه و یتیمان رفتار شود، بازرگانان فقط در فکر افزایش قدرت و نفوذ خود بودند. ثروت يك تاجر ممکن بود حاصل ریاست وی به قبیله باشد ولی دیگر حاضر نبود مسئولیتها و وظایف ریاست را انجام دهد و از اعضای ضعیف و بیچاره قبیله حمایت و نگهداری کند این یکی از نکاتی است که در قرآن به آن حمله شده است. تاجر البته بهانه کوچکی داشتند که می گفتند در وضع جدید حفظ و اجرای سنتهای قدیم اجتماعی که مناسب بیابان است میسر نیست. در آن هنگام ربع غنایم به رئیس قبیله تعلق می گرفت تا بتواند وظایف ریاست را عملی سازد ولی ثروت تاجر بیشتر حاصل افزایش نفوذ خود او بود نه از غنایم و بنابر این دیگر تعهد اخلاقی وجود نداشت که او را به حمایت فقرا و نگهداری آنان وادار کند. فرو ریختگی قبیله‌ای یا اصول خویشاوندی، همچنین موجب شد که عقیده عمومی نیز، که به تقویت اصول اخلاقی قبیله‌ای یاری می کرد، متزلزل شود. عقاید عمومی به یاری شاعران تقویت و حمایت می شده است. آنچه به نظر ما عجیب می آید این است که این شاعران در زمان خودکاری کرده‌اند که بی شباهت به کار غالب مطبوعات معتبر دورانهای اخیر نیست. آنان اشعاری در افتخارات قبیله خود و تحقیر دشمنان آن می سرودند، و هجو نامه يك شاعر معروف عمیقاً مایه ترس و وحشت بوده است. اما این شاعران تابع اربابانی از قبیل رئیس عشیره و قبیله بوده‌اند که حالا دیگر خوشبخت‌ترین آنان بازرگانان بزرگی بودند. بنابر این شاعر، حتی اگر به کار بستن موازین و سنتهای اخلاقی لازم بوده احتمال



نمی‌رود که از اربابان خود یا اربابان بالقوه انتقادی می‌کرده است به عبارت دیگر ثروت به آدمیان حتی امکان نظارت و تسلط بر افکار عمومی می‌دهد .

درهم ریختن اخلاق و شکست افکار عمومی با فساد و تزلزل زندگی دینی مردم مکه همراه بود . نیم قرن پیش از محمد ﷺ دین یک چیز مخلوط و درهمی بود . آیینهای کهنه متعددی در عربستان معمول بود که با معابد مختلف مربوط بودند و پرستشگاه مکه از مهمترین آنها بود . بسیاری از اعمال و تجارب کهنه حفظ شده بود خصوصاً آنجا که الزام زمان و مکان کار تجارت را با موقوف کردن دشمنیهای قبیلهای آسانتر می‌کرد . با وجود همه اینها به نظر می‌رسد که جای این آیینها در حاشیه زندگی عرب بوده است . داستانی از یک شیخ قوم نقل می‌شود که به نزد یکی از بتهای رفت و به مدد تیرها قرعه‌هایی کشید تا روز مناسب و خجسته‌ای پیدا کند ، که در آن برای کشیدن انتقام پدرش برود . پس از دریافت چندین پاسخ نامساعد تیرها را بر داشت و شکست و بر سر بت کوبید و گفت « اگر پدر تو کشته شده بود تو هرگز جواب ندهی » نمی‌دادی « آن شیخ حتی اگر مسیحی بود ، این داستان ممکن بود نشانه‌ای از خوی کفر و شرک تلقی شود - نوعی از یک آیین تدمانده اما با اندکی اعتقاد .

دینی که عرب داشت و برطبق اصول آن زندگی می‌کرد آن - را فقط بشردوستی و عشیره‌ای می‌توان نام نهاد . بنابراین دین به معنای زندگی و تجلی صفات عالی بشری است و این همه ، کیفیاتی است از قبیل مردانگی و برد باری که مورد توجه عرب بوده است . آنکه دایره‌ای

این صفات عالی است طایفه است نه افراد، و اگر فردی صاحب این صفات باشد، علت آن است که طایفه او دارای این مشخصات است. بزرگترین فکر و اندیشه يك فرد باید احترام به قبیله باشد. زندگی هنگامی دارای معنی است که با افتخار توأم گردد و باید از آنچه موجب رسوایی و بی حرمتی است به هر قیمت که باشد احتراز جست. دین انسان دوستی قبیله‌ای، دارای آیین و تشریفات خاصی نیست فقط رسم خواندن اشعار شباهت به اجرای آیینهای دینی دارد. یکی از وظایف عمده و مشکل شاعر بیان کارهای مهم اعضای قبیله بوده که شامل خود او نیز می‌شده است. در این اشعار صفات عالی قبیله متجلی می‌شد و گاهی شاعر می‌توانست از قبیله‌های دیگر انتقاد کند و ردایل آنها را بشمارد این کار را مفاخرة و مهاجاة می‌گفتند و هدف هر دو بر انگیزختن ایمان قبیله‌ای به عضویت طایفه دیگر و تبیین پر معنا بودن زندگی در آن طایفه بوده است. همین انسان دوستی قبیله‌ای بود که نخستین دین را برای بشر به وجود آورد.

در زمانهای اول زندگی محمد ﷺ مردم چندان در فکر مفاخره نبودند، فقط معیارهای اخلاقی زندگی بیابانی مایه افتخار شمرده می‌شد که قسمتی از آنها درباره مردم مکه صدق نمی‌کرد، زیرا آنان همیشه به فکر افزایش ثروت و قدرت بودند و معنای زندگی را در کثرت مکنّت می‌دانستند. و چون ثروت ایجاد قدرت می‌کند، افزایش قدرت و ثروت هدف زندگی آنان بود و این روش نه تنها اختصاص به ثروتمندان مکه داشت بلکه اکثر مردم نیز از آنان متابعت و تقلید می‌کردند. آنانکه اندك موقعیتی به دست آورده بودند کم کم به غرور

گراییدند و کارشان به «گستاخی» کشید و در اعتقاد به قدرت بشر غلو کردند. هنگامی که عَلَيْهِ السَّلَام به دعوت پرداخت اوضاع دینی مکه بر این منوال بوده است.

اینک اگر نظری به آیات قرآن، که قبلاً بدانها اشاره کردیم، بیفکنیم می‌بینیم نکاتی که در آنها تذکر داده شده است باوضع موجود مناسبت داشته است. چون به این نکات از نقطه نظر موقعیت نگاه کنیم به خوبی معلوم می‌شود که قرآن توجه مخصوص به جنبه های دینی آشفته گیهای مکه داشته است. مردم ادعوت می کند که به قدرت و رحمت آفریدگار خود اقرار کنند و او را نماز برند که نتیجه آن انکار قدرت ثروتمندان است. بدین وسیله است که قرآن درصدد اصلاح و از بین بردن گستاخی و غرور ناشی از ثروت بر آمده و آن را ریشه ماده پرستی بشر و باعث درهم ریختگی اساس جامعه در آن زمان دانسته است.

این موضوع را به طریق دیگر نیز می‌توان بیان کرد. بدین معنی، که قرآن برای زندگی بشر هنگامی ارزش و معنا قایل است که بر اساس صدق استوار باشد. هدف عالی زندگی، زیستن با مفاخرات یا قدرت و ثروت نیست، بلکه زیستن با صدق و راستی است تا آدمی بتواند از مزایای بهشت برخوردار شود. کسی که پیوسته در صدد جمع آوری ثروت باشد در قرآن «بخیل» خوانده می‌شود و بهشت را از دست خواهد داد. قرآن، برای آنکه نشان دهد «بخل» گناه بزرگی است می‌گوید پرستش خدا با پرستش ثروت و قدرت سازگار نیست.

اصول دین عَلَيْهِ السَّلَام بر این اساس است که بشر باید از ثروت

خود استفاده کند ، نسبت به یتیمان و بیچارگان سخی باشد و به اعضای ضعیف خانواده یا قبیله خود ظلم و تجاوز روا ندارد ، با تلقین این - گونه افکار قرآن ، اصول زندگی چادر نشینی را به یاد مردم می آورد که دستخوش تغییرات گشته بود و خویشاوندی گروهی درهم ریخته و خود پرستی جایگزین آن شده بود ، در این یاد آوری مخصوصاً تأکید در اهمیت روز قضا و جزا شده است ، که خداوند بشر را به تناسب اعمالش کیفر و پاداش خواهد داد . ترس از کیفر و امید پاداش از اصولی است که در جامعد ای که بر استقلال فرد استوار است اثر بسیار دارد . کوشش شده است که بعضی از اصول تقوا و اخلاق چادر نشینی وارد زندگی شهری بشود .

تأکید به سخاوت و احسان و حمایت از ناتوانان و مشهود نبودن ترصیه به توجه خاص به زندگی و ثروت و ازدواج که هر سه از ارکان اساسی زندگی اجتماعی هستند از آن جهت بوده است ، که خواسته اند با وضع موجود مکه که شرح آن گذشت مطابقت داشته باشد . تمام صفات و رفتارهای ناپسند ، ناشی از حرص و جمع آوری ثروت بوده است و هدف قرآن مبارزه با آن است ، و علت آن که قرآن تمام توجه خود را معطوف به این مسئله کرده همین است ، چه ، اجتناب از آنها را بزرگترین وظیفه بشر می داند . مسائل مهم دیگر نیز - مانند احتراز از قتل و دزدی و زنا که با اصول و سنتهای قدیم ارتباط پیدا می کرد و مخصوصاً کینه های قبیله ای مورد بحث قرار گرفته است ، زیرا انتقام قتل و جرح هنوز رواج داشت ، گرچه آیه « وَكُنْتُمْ عَلَيْهِمْ فِيهَا أَنْفُسُكُمْ وَالْأَنْفُسُ بِالنَّفْسِ وَالْعَيْنِ بِالْعَيْنِ وَالْأَنْفِ »

بالأنف والأذن بالأسن والسن بالسن والجروح قصاص فمن تصدق به فهو كفارة له» وضع را تعدیل کرده بود و در برابر حیات يك مرد بالغ، صد شتر مقرر داشته بود.

نمی توان گفت که آیات نخستین قرآن دارای عقیده واضح و صریحی راجع به واحد اجتماعی جدید بوده است. به اشخاص به چشم فرد می نگرد ولی فردی که عضو واحدی باشد و ظاهراً این واحد طایفه یا چیزی شبیه آن است. پیامبر نیز برای طایفه یا واحدی شبیه آن فرستاده شده است و همین فکر ساده بعدها رشد کرده و واحد اجتماعی را با دین مربوط ساخته است و از وقتی که جمعی از مردم مکه - محمد ﷺ را طرد کرده و در صدد مخالفت با او برآمدند، بن کسانی که به او ایمان آوردند و آنان که دعوت او را رد کردند وجه امتیازی قایل شده است. بدین ترتیب جامعه ای به وجود آمد که شامل کسانی بود که دعوت او را پذیرفتند و این جامعه بود که بر اساس دین استوار شده بود نه بر خویشاوندی. اما وقتی قرآن نخستین بار ابلاغ شد این موضوع را به آینده واگذار کرده بود.

پس از مطالعه رابطه قرآن با محتویات اجتماعی آن اینک مجدداً به سه قانونی که درباره نفوذهای فرهنگی ذکر کردیم باز می گردیم: قانون اول وجود يك فعالیت قبلی را ایجاب می کند و این فعالیت را نمی توان به طور کلی فعالیت برای سعادت مکه دانست، محمد ﷺ پیش از آنکه وحی به او برسد علاقه شدیدی به این موضوع داشت و در سراسر عمرش آن را ادامه داد.

پس از رحلت او نیز آثاری از این علاقه در افراد جامعه او دیده می شود و بی شک همین علاقه و فعالیت های عملی و عقلی سابق و مقدم بود ، که سبب گردید بر اساس قانون دوم نفوذ فرهنگی ، از عقاید کتاب مقدس در تقویت معارف اسلامی برخوردار شوند .

قانون سوم نفوذ فرهنگی ، یعنی احترام از يك فرهنگ زنده از عناصری که مخالف ارزش های اساسی خود آن فرهنگ باشد ، در رشته محدودی از مفاهیم انجیل که در قرآن یافته می شود به چشم می خورد . از آثار انبیای صاحب کتاب عهد عتیق و از تعلیمات عهد جدید چیزی در قرآن وجود ندارد ، زیرا این عقاید با جامعه ای که خود دارای چندین قرن تاریخ بود مناسب نداشت . مدینه و مکه به تازگی تغییر روش داده و از صورت چادر نشینی به صورت شهر نشینی در آمده بودند و جای شگفت نیست که می بینیم آنان فقط از آن قسمتهای انجیل استقبال کرده اند که منعکس کننده وضع اسرائیل در زمانی بود که چنین تغییراتی در زندگی خود داده بودند .

لذا می توان گفت که اسلام به سندهای انجیل یا « یهود - مسیحیت » و به بیانی که مانع از احتمال هر گونه تنزل شان باشد ، به سندهای حضرت ابراهیم قائم است و در عین حال از انعکاس ضعیفی از ادیان قدیم تر نیز خالی نیست و به طور کلی ترکیبی است از عناصر انجیل و حرکت کمال جوینده روح انسانی که ناشی از شرایط زندگی بوده است . همه این جنبه ها را در توضیح ولادت اسلام باید به خاطر داشت .

## مخالفت و اعتراض

### در خانه ارقم

بعدها مسلمانان فخر می کردند و می گفتند : عَلَيْهِ السَّلَام هنوز در خانه ارقم بوده است که یکی از اجداد آنان به وی گرویده است و مقصود دوره آغاز موعظه و دعوت عَلَيْهِ السَّلَام بوده است . دوره مقدمتری نیز وجود داشت ، ولی فقط عده کمتری می توانستند ادعا کنند که پدران و اجداد آنان پیش از ورود عَلَيْهِ السَّلَام به خانه ارقم ، به دین اسلام در آمده اند .

با آنکه تمام منابع به استثنای منابع مقدم درباره اهمیت این دوره موافقت دارند ، هنوز وضع آن تاریک و مبهم است . احتمال دارد که عَلَيْهِ السَّلَام پیش از یا پس از آغاز دعوت عمومی و شروع مخالفت به این خانه رفته باشد . دلیل وی برای رفتن به آنجا تابع تاریخ معینی است . نویسندگان دلایلی برای آن اقامه کرده اند ولی این

دلایل کم و بیش تصورات و حدسیات خود نویسندگان است. نه تنها در این موضوع، بلکه در مطالب دیگری هم که در این فصل مورد بحث قرار گرفته است تاریکی و ابهام وجود دارد. البته بیان تمام احتمالات ممکن نیست و فقط به ذکر مهمترین آنها اکتفا خواهد شد، با اذعان به این نکته است که بیان مطالب را آغاز می کنیم:

ارقم جوانی بوده است در حدود ۲۰ تا ۲۵ ساله، متعلق به طایفه مخزوم که از ثروتمندترین و با نفوذترین قبیله های مکه به شمار می رفت. خود او ظاهراً ثروتمند بوده و خانه وسیعی در نزدیکی مرکز مکه داشته است. راجع به پدرش اطلاع کافی در دست نیست چه وی در آن موقع وفات یافته بود. شکی نیست که ارقم نسبت به دیگر جوانان مکه دارای آزادی بیشتری بوده است.

احتمال دارد سالی که محمد ﷺ خانه ارقم را مرکز فعالیتهای خود قرار داد ۶۱۴ میلادی بوده است. گفته می شود که در آن زمان شماره پیروان وی سی و نه نفر بوده اند. محمد ﷺ در آن خانه زندگی نمی کرد بلکه اغلب اوقات خود را در آنجا می گذرانید و پیروانش او را در آنجا ملاقات می کردند، قرآن می خواندند و تعلیم می گرفتند و با هم، آیین نماز و پرستش را، که عبارت است از رکوع و سجود یعنی به خاک ساییدن پیشانی و اقرار به قدرت و عظمت خداوند، به جامی آوردند. همچنین احتمال دارد که پیروانش برای بحث درباره مشکلات و نارضایتیها و نگرانیهای مردم مکه به این خانه می آمدند.

به درستی نمی دانیم که پیش از رفتن محمد ﷺ به این خانه



مخالفت با او تا چه اندازه بوده است، ولی احتمال دارد که در آن موقع مخالفتها از انتقاد شفاهی تجاوز نمی کرده است. به عبارت دیگر، اگر مخالفتی هم وجود داشت چندان شدید نبوده و هنوز جای صلح و آشتی باقی می بوده است.

مخالفت کامل با محمد ﷺ هنگام اقامت وی در خانه ارقم آغاز گردید، که رهبری آن را جمعی از تجار معروف و مقتدر مکه در دست داشتند. یکی از بزرگان این جماعت مردی بود همسال خود محمد ﷺ از قبیله مخزوم به نام ابوجهل. روزی بر حسب اتفاق که محمد ﷺ را در کوچه دید او را تهدید کرد و ناسزا گفت اما محمد ﷺ جوابی نداد. زنی آزاده که از آنجا می گذشت شاهد ماجرا شد و واقعه را با عموی محمد ﷺ حمزه هنگامی که از شکار باز می گشت، در میان گذاشت و حمزه فوری به کعبه رفت و ابوجهل را پیدا کرد و بامشت زد، و خود که تا آن زمان کافر بود به مسلمانی اقرار نمود و به ابوجهل گفت « اینک من خود پیرو اسلام هستم آیا باز یارای آن داری که به برادر زاده من توهین کنی؟ » بعضی از خویشان ابوجهل در صدد طرفداری از او بر آمدند ولی او، شاید به سبب ترسی که از زور و نیروی حمزه داشته است آنان را از اقدام بازداشت و اقرار کرد که در هتک حرمت محمد ﷺ زیاده روی کرده است و این حادثه به همین جا خاتمه یافت ولی اسلام آوردن حمزه بر قدرت مسلمانان افزود. علت مخالفت شخصی مانند ابوجهل با محمد ﷺ چه بوده است؟ بعضی را عقیده بر این است که تجار مکه می ترسیدند توسعه و نفوذ دین جدید از اهمیت و تقدس مکه بکاهد و موجب کم شدن یا از بین رفتن

رونق و اعتبار تجارتي آن بشود. ولی دلایل چندی وجود دارد که این نظر را رد می کند. قرآن هنگامی که خدا را به عنوان « خداوند این خانه ، ( کعبه ) » معرفی می کند، حرم مکه را حرم خدا می خواند که پرستش حقیقی باید در آنجا انجام گیرد. اخبار و روایاتی هست که نشان می دهد از همان روز نخست مسلمانان اعمال پرستش را در خانه کعبه انجام می دادند پس عَلَيْهِ السَّلَام در صدد نبوده است که از اهمیت یا تقدس این زیارتگاه بکاهد، هدف حمله های بعدی قرآن نیز بتهای معابد دیگری غیر از کعبه بوده و نابودی و از بین بردن آن بتهارا می خواسته است. در تمام این مطالب چیزی دیده نمی شود که دلالت کند به این، که عَلَيْهِ السَّلَام و دین او در صدد تخفیف و کاهش تجارت مکه بوده است.

تنها راهی که به نظر می رسد قرآن تجارت را مورد تهدید قرار داده حمله هایی است که به زیارتگاههای خارج مکه کرده است. یکی از معابدی که مورد حمله قرار گرفت معبد طایف بود که مرکز تجارتي کوچکتری واقع در يك ناحیه کوهستانی بوده است. بعضی از تجار ثروتمند مکه املاکی در آن داشتند بنابر این بسته شدن این زیارتگاه به کسانی که به تجارت آنجا علاقه مند بودند لطمه می زد و جالب آنکه نخستین مخالفت با عَلَيْهِ السَّلَام نیز از طرف بعضی از مردم مکه که املاکی در طایف داشتند آغاز شد.

این علت احتمالا در باره بعضی از مردم مکه صادق است، اما نوشته یا مدرکی در دست نیست که نشان دهد که ابو جهل املاکی در طایف داشته است. پس دشمنی او را با عَلَيْهِ السَّلَام دلایل دیگری است. اندکی تعمق دو مطلب را روشن می کند: نخست آنکه تجار مهم مکه وقتی

که می‌دیدند محمد ﷺ مستقیماً از نظریات غلط آنان راجع به ثروت انتقاد می‌کند ناراحت و نگران می‌شدند، چه حمله به ثروت حمله به زندگی آنان بود. همچنین از اینکه قرآن آنان را «بخیل» می‌نامید و می‌گفت: «برخلاف آنچه تصور می‌کنند خدایان جهان نیستند» آزرده خاطر می‌شدند و نیز به خوبی توجه داشتند که اگر محمد ﷺ دارای فکر سیاسی باشد تعلیمات او تا آنجا مورد توجه و حمایت عموم قرار خواهد گرفت، که امکان آن هست که اتحادیه «حلف الفضول» را در برابر قبیله مخزوم و عشایر متحد آن برانگیزد.

دوم آنکه ادعای محمد ﷺ دایر بر تنزیل وحی از جانب خدا تهدید مستقیم نفوذ و قدرت سیاسی تجار ثروتمند بود. اعراب از مصمم قلب عقیده داشتند که کسی شایستگی ریاست بر آنان دارد که دارای حکمت و حزم و تدبیر و قدرت قضایی برجسته‌ای باشد. بنابراین اگر ادعای محمد ﷺ را می‌پذیرفتند آیا ممکن نبود که سرانجام متقاعد شوند که او بهترین کسی است که می‌تواند کارهای مکه را اداره کند؟ این تهدید هرچند آنی نبود ولی وجود داشت. تجار می‌گفتند که در طی ده یا بیست سال قدرت محمد ﷺ به جایی خواهد رسید که مقاومت با آن امکان پذیر نخواهد شد. مردان نسل گذشته که از سال ۶۱۳ قدرت در دست آنان بود چندان مخالفتی با محمد ﷺ نداشتند ولی همدوره‌های او مانند ابوجهل با وی به شدت مخالفت می‌کردند زیرا این دسته از آینده خود بیمناک بودند.

چه قسمت از شرك باعث شده است که ابوجهل در صف مخالفان محمد ﷺ در آید معلوم نیست.

ظاهراً شرك در برانگیختن او به مخالفت با محمد ﷺ در نوع خود انگیزه ضعیفی می بود، تنها چیزی که شخص را اندکی به تأمل وامی دارد این است، که قرآن در آیات مکی آخر سخت به بت پرستی حمله می کند. اگر ایمان مردم به دین قدیم ضعیف بوده است چرا قرآن تا این اندازه به آن حمله می کند؟ برای یافتن جواب این سؤال نخست باید به ذکر واقعه ای پردازیم که در خانه ارقم هنگام اقامت محمد ﷺ در آنجا رخ داده است.

### واقعه آیات شیطانی :

شرح جزئیات این واقعه متفاوت است، لذا بهتر است نخست به توضیح آنچه معتبر است پردازیم و بعد به آنچه مشکوک است نظری بیفکنیم، تا شرح کامل واقعه را ذکر کرده باشیم و سپس از قسمتهای مختلف آن انتقاد کنیم :

ظاهراً زمانی بوده است که محمد ﷺ آیاتی در قرآن آورده که احتمالاً شفاعت بهار اجازه می دهد. مضمون یکی از آن آیات این است (۱).

أَفَرَأَيْتُمُ اللَّاتَ وَالْعُزَّىٰ ، وَ مَنُوءَ الثَّالِثَةَ الْأُخْرَىٰ ،  
وَلِئَلَّكَ الْغَرَانِيقُ الْعُلَىٰ ، وَإِنَّ شَفَاعَتَهُنَّ لَتَرْجَىٰ .

(۱) مؤلف در آیات قرآن دقت کافی نکرده و افسانه مجعول را که ساخته افکار حشویان است حقیقت پنداشته است بی شک حضرت رسالت سوره نجم را از اول تا آخر يك جا بر کفار مکه قرائت کرد و چون به انجام رسید فاسجدوا لله و عبادوا همه مردم مشرك و مسلم يك بار سجده کردند و با آنکه پس از نام لات و منات فرمود آیا شما را پسر باشد و خدا را دختر (چون بتان را دختران خدا می گفتند) این قسمت غیر عادلانه است \*

چندی بعد وحی دیگری بر او نازل شد که آیات بالا را نسخ کرد و جای آنها را گرفت و آن آیات از این گونه بودند :

أَفَرَأَيْتُمُ اللَّاتَ وَالْعُزَّى ، وَمَنْوَةَ الثَّالِثَةَ الْآخِرَى ،  
 أَلَكُمُ الذَّكَرُ وَلَهُ الْأُنْثَى ، تِلْكَ إِذًا قِسْمَةٌ ضِيزَى ، إِنْ هِيَ  
 إِلَّا أَسْمَاءٌ تَسْمِيْتُهَا أَنْتُمْ وَآبَاؤُكُمْ مَا أَنْزَلَ اللَّهُ بِهَا مِنْ سُلْطَانٍ  
 إِنْ يَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ وَ مَا تَهْوَى الْأَنْفُسُ وَلَقَدْ جَاءَهُمْ مِنْ  
 رَبِّهِمُ الْهُدَى .

(سوره ۵۳ آیات ۱۹ تا ۲۳)

آیات اول و دوم هر دو در همه جا انتشار یافت و توضیح این اصلاح و نسخ ، آن بود ، که شیطان ، بی آنکه عَدَّ عِلْمَهُ بِاللَّهِ متوجه شود ، در آیات نخستین فرو لغزیده بود. این داستان بسیار عجیب و شگفت انگیز است. پیامبری که بزرگترین دین یکتا پرستی را تبلیغ می کند خود به شرك اختیار می دهد.

در حقیقت این واقعه به اندازه ای عجیب است که نشان می دهد اساس آن صحیح بوده است و تصور نمی رود که کسی آن را اختراع کرده و قبول آن را از مسلمانان خواسته باشد و انگهی در قرآن آیه دیگری است که تقریباً چیزی از این گونه بیان می کند.

---

\* این بتها فقط نامی است یعنی لفظی که شما و پدران شما به زبان آوردید و خداوند بر آن حجتی نازل نفرمود ... چگونه ممکن است در بین این آیات لفظی صریحاً متناقض آن آورده باشد و گوید شفاعت آنها پذیرفته است .

وَمَا أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ مِنْ رَسُولٍ وَلَا نَبِيٍّ إِلَّا إِذَا تَمَنَّى  
 أَلْقَى الشَّيْطَانُ فِي أُمْنِيَّتِهِ فَيَنْسَخُ اللَّهُ مَا يُلْقِي الشَّيْطَانُ ثُمَّ يُحْكِمُ  
 اللَّهُ آيَاتِهِ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ .  
 (سوره ۲۲ آیه، ۵۱)

گزارش ترجمه انگلیسی - پیش از تو خدا هیچ رسولی و پیغمبری  
 نفرستاد ، جز آنکه هر گاه او آرزو کرد ، شیطان مانع آرزوی او شد ،  
 اما خدا مداخله و مانع شیطان را لغو و زایل کرد . پس خدا آیاتش را محکم و  
 کامل می کند خدا علیم و حکیم است .

این آیه را به طرق مختلف ترجمه و تفسیر کرده اند و ترجمه  
 بالا با یکی از ترجمه های قدیم مطابقت دارد . گفته شده است محمد ﷺ  
 در صدد بود راه آسانی پیدا کند که تجار ثروتمند بتوانند دین اسلام  
 را بپذیرند و هنگامی که شیطان او را استیضاح کرد متوجه آن نشد .  
 خواه این داستان را قبول کنیم یا خیر ( هر چند ممکن است حقیقتی  
 در آن باشد ) ظاهراً چنین به نظر می رسد که محمد ﷺ نخست « آیات  
 شیطانی » را آورده و سپس آیات دیگری در نسخ آنها بر او نازل  
 شده است .

یکی از جنبه های جالب این داستان آنکه نظریه عقیده محمد ﷺ  
 را نسبت به زمان خود بر ما آشکار می کند . هر چند محمد ﷺ ایمان  
 داشت که گوینده این آیات او نیست و به وی نازل می شود ، در ابتدا  
 متوجه نشده بود که این آیات مخالف دینی است که او مبلغ آن است .  
 آیا معنی این آن است که خود او در این زمان مشرک بوده است ؟

دلایل چندی است بر اینکه جواب این سؤال منفی است : نخست آنکه باید توجه داشت که سه رب النوع با سه زیارتگاه ، واقع در فاصله دو روز راه از مکه، مربوط بودند، زیارتگاه لات شهر طایف بود ، عزّی بین طایف و مکه، و منات بین مکه و مدینه قرار داشتند . ظاهر امر نشان می‌دهد که نخستین اثر « آیات شیطانی » در شنوندگان این بوده که به آنان اجازه پرستش در این سه زیارتگاه را می‌داده است و نخستین اثر آیات بعدی که آنها را نسخ می‌کرد این بوده که باید از این پس، از عبادت در این زیارتگاهها خود داری کرد در نتیجه همین منع و نهی بود که چون دین اسلام قوت گرفت این سه زیارتگاه را منهدم کردند .

از نقطه نظر یکتاپرستی عَلَيْهِ السَّلَام این موضوع را چگونه توجیه کرده است؟ باید به خاطر داشت که معاصران عَلَيْهِ السَّلَام به دین او به نظر نوعی یکتاپرستی مبهم نگاه می‌کردند . کلمه رب النوع را در این مورد نباید با خدایان اساطیر یونان قدیم اشتباه کرد . ادیان سامی چنین داستانهایی درباره مظاهر خدایان خود ندارند .

خدانروی است که به شهر یاشیء خاصی تعلق ندارد . نامهایی که به کار برده می‌شود ، « الله » و « قادر مطلق » و تعیین کننده سر نوشتها است . احتمال دارد که اعراب روشنفکر زمان به این اسامی به دیده تجلی يك نیروی واحد می‌نگریستند و به طوری که می‌دانیم اعراب بعدها می‌گفتند که « خدا » نود و نه نام دارد . عبارت « دختران خدا » نیز با آن مغایرتی ندارد زیرا اعراب برای نشان دادن مناسبات مطلق از کلمات خواهری و پدیری و فرزندی استفاده می‌کردند . به این ترتیب

مُحَمَّدٌ ﷺ و پیروان او «آیات شیطانی» را به آن نظر می دیدند که به آنان اجازهٔ پرستش خدا را درسه زیارتگاه مذکور داده است و توجهی نداشتند که این عمل آنان شرك به شمار می رود . علت عدم توجه مسلمانان را به تشخیص این تضاد می توان به طرز ساده ای بیان کرد . مسیحیان و یهودیان عقیده به وجود يك نوع موجودات فوق طبیعت داشتند که اهمیتشان در درجهٔ دوم بود و آنها فرشتگان بودند . عقیده به فرشتگان و جن و دیگر موجودات فوق طبیعت جزء عقاید اعراب نیز به شمار می رفت و احتمال دارد که مُحَمَّدٌ ﷺ و پیروان او به رب النوعها به نظر چنین موجوداتی نگاه می کردند . البته در قرآن نیز آیاتی است که درستی این نظر را تاحدی تأیید می کند، مخصوصاً پس از آنکه حمله به پرستش آنها (رب النوعها) آغاز شده بود .

برای درك كامل مطلب (انتشار آیات شیطانی و نسخ آنها) لازم است به آنها با نظر وسیع تری نگریست . مدت زمانی، حتی اگر تعداد پیروان مُحَمَّدٌ ﷺ قابل توجه نبود ، امکان آن، که مأموریت او مورد تقویت قرار گیرد بسیار بود . مردم عادی نسبت به آن علاقه داشتند فقط ثروتمندان در شك و تردید به سر می بردند ولی ابراز دشمنی کامل نمی کردند خطر را در این می دانستند که مبادا مُحَمَّدٌ ﷺ در اثر تماس با منابع فوق طبیعت و حکمت بالغه روزی یکی از افراد بزرگ مکه بشود و افکار و عقاید او خریدار پیدا کند . از طرف دیگر تصور می کردند که یکی از علل عمدهٔ فعالیتهای مُحَمَّدٌ ﷺ عدم رضامندی او از مقامی است که در مکه دارد . مخصوصاً می دیدند که او از جمع تجار ثروتمند که تجارت را به خود منحصر کرده بودند و هر روز سودی



فراوان می بردند بیرون است . البته تصمیم گرفتند ، با وارد کردن محمد ﷺ در جرگه خود از خطر او بکاهند و به او اجازه دهند که در منافع آنان شریک باشد و با خانواده آنان ازدواج کند . آنان تاجر بودند و در عوض این امتیازات از محمد ﷺ می خواستند که به هر ترتیب هست با آیینهای گذشته موافقت کند . حال باید پرسید ، علت چه بود که مبارزه بین محمد و تاجر ثروتمند مکه درحول تنها مرکزیت یافت ؟ تاریخ مشاجرات دینی نشان می دهد که نکاتی که مرکز مخالفت است همیشه اساسی نیست بلکه مسائلی هستند که برای هر دو طرف واضح و آشکارند « زمینه ای است که می توان در باره آن به مشاجره و مبارزه پرداخت » و نخستین بار تاجر مکه به علت غرور ثروت مورد حمله قرآن قرار گرفتند و خود پرستی و خودخواهی آنان به علت برخورداری از ثروت مورد انتقاد واقع شد ( هر چند فعالیت های بازرگانی آنان موجب بالا رفتن سطح زندگی مکه بود ) ولی نمی توانستند از خود طوری دفاع کنند که عمل خود را در نظر مردم ، عادی و صحیح جلوه دهند . بعضی از آنان نیز می ترسیدند که مبدا در اثر از بین رفتن زیارتگاه های خارج مکه به تجارت آنان لطمه ای وارد آید و عده دیگری تصور می کردند تنها راهی که می توانند بی وسیله ای حمایت و پشتیبانی مردم را جلب کنند ، دفاع از دین قدیم است . از این جهت بود که از محمد ﷺ درخواست کردند مطالبی درباره خدایان بگویند یا به اصالت بعضی از مبانی دین قدیم اقرار و اعتراف کند . در ابتدا محمد ﷺ حاضر نبود با تقاضای آنان موافقت نماید زیرا آنچه را خواسته بودند در آیات شیطانی دریافت کرده بودند که

پرستش در سه زیارتگاه را مجاز دانسته بود. نسخ این آیات چه مدت طول کشیده است معلوم نیست، زیرا نخستین و بهترین منابع در این باره خاموش هستند، ولی ممکن است هفته ها یا ماهها طول کشیده باشد. ظاهراً ادامه آن تا موقعی بوده که عَلَيْهِ السَّلَام عدم امکان توافقی را در این مورد دریافته است یا شاید احساس کرده است که مردم به کاهنان رب النوعها به نظر افرادی مساوی و همطراز او نگاه می کنند یا محتملاً متوجه شده است که بین نهضت دین جدید او و شرک امتیازی قایل نیستند.

از این جهت وحی جدیدی که بر او نازل شده بود پذیرفته و آن را منتشر ساخته است. یکی از این وحی ها مربوط به نسخ آیات شیطانی و آوردن آیات جدیدی در جای آن بود و وحی دیگر، یا نسخ دعوت به همکاری، از این قرار است:

قُلْ يَا أَيُّهَا الْكَافِرُونَ - لَا أَعْبُدُ مَا تَعْبُدُونَ - وَلَا أَنْتُمْ عَابِدُونَ مَا أَعْبُدُ - وَلَا أَنَا عَابِدٌ مَا عَبَدْتُمْ - وَلَا أَنْتُمْ عَابِدُونَ مَا أَعْبُدُ - لَكُمْ دِينُكُمْ وَلِيَ دِينِ . (سوره ۱۰۹)

نسخ آیات شیطانی نشان می دهد که آیین سه زیارتگاه دیگر از آن پس رسمیت ندارد و مخالفت شدید با عَلَيْهِ السَّلَام از همین جا آغاز گردید و سر دسته مخالفان، تجار ثروتمندی بودند که املاکی در طایف داشتند و بی شک بی توجهی به زیارتگاهها و خدای آن موجب از دست رفتن تجارت می شد. بعدها تجار ثروتمند دیگر نیز به آنان

پیوستند زیرا بهانه خوبی به دست آورده بودند که می توانستند به محمد صلی الله علیه و آله حمله کنند. احتمال دارد که تغییر اوضاع نیز موجب به هم خوردن امنیت شده است و نا امنی سبب گردیده که تجار متوجه دین قدیم بشوند در صورتی که تا زمانی که به موقعیت آنان لطمه ای وارد نیامده بود توجه چندانی به آن دین نداشتند.

ظاهراً این موضوع برای محمد صلی الله علیه و آله نیز بهانه خوبی بوده است تا جنگ با تجار را آغاز کند و احتمال دارد که با گذشت زمان از نظریه یهودیان و مسیحیان نیز نسبت به بتها اطلاعات بیشتری کسب کرده و متوجه شده است که اگر بر ضد بت پرستی بر نخیزد با آنها یکسان خواهد بود آیاتی که در بالا ذکر شد اساس دین او را نشان می دهد و تفاوت آن را با بت پرستی و شرک مشخص می دارد. در عبارت دیگر از «دختران خدا» سخن می گوید که همان *Argumentum Hominen* است اعراب اهمیت بسیار به پسران می دادند و به داشتن پسر افتخار می کردند. آیا صحیح بود که خدا فقط دختر داشته باشد؟ تاکید کلام محمد صلی الله علیه و آله بر این بود که بتها قدرتی ندارند که به بشر صدمه یا سودی برسانند و روز قیامت و قضا از او شفاعت کنند. حقیقت در روز قضا بتها پرستش کنندگان خود را رد خواهند کرد. مبارزه ادامه داشت در مراکز فرهنگی مبارزه بین محمد صلی الله علیه و آله و تجار مکه بر سر خدایان و خدای واحد بود.

اسلام می گفت که تصور شرک برای «خدا» از بزرگترین گناهان است. این نظریه در قسمت اول کلمه شهادت ذکر شده است که می گوید «لا اله الا الله».

### مهاجرت به حبشه:

تاریخ مهاجرت به حبشه را باید پس از نسخ «آیات شیطانی» یا در حدود سال ۶۱۵ دانست. حقایق ماجرا واضح و آشکار است ولی دلایل آن نامعلوم و تاریک می باشد. منابع نخستین در باره جزئیات آن اختلاف دارند، هر چند که این داستان مورد قبول تمام مسلمانان است که مهاجرت دوبار صورت گرفته است. دسته اول هنگامی که از «آیات شیطانی» و مصالحه ع با دشمنانش آگاه شدند باز گشتند ولی دریافتند که این آیات منسوخ شده و مبارزه شدت یافته است. اینک ما سعی می کنیم این وقایع را تا آنجا که ممکن است تشریح و بیان کنیم.

آنچه مورد قبول عموم است آن است که عده ای از مسلمانان در حدود سال ۶۱۵ به حبشه رفتند و عده ای از آنان مجدداً به مکه باز گشتند و هنگام مهاجرت ع به مدینه در سال ۶۲۲ با او بودند، ولی عده دیگر تا سال ۶۲۸ در حبشه باقی ماندند. فهرستی از اسامی کسانی که به حبشه رفتند و آنان که به مکه باز گشتند و دسته سومی که در سال ۶۲۸ مستقیماً به مدینه آمدند در دست است که اندک تحریفی در آن مخصوصاً در نام اشخاص کوچک شده است، ولی در باره شرکت کنندگان اصلی شك و شبهه ای نیست. مهمترین سؤال که باید پاسخ داد آن است که چرا این مسلمانان به حبشه رفتند و چرا عده ای از آنان مدتی طولانی در آنجا باقی ماندند. سؤال دیگر این است که آیا محرك این مهاجرت مهاجران بودند یا ع بها. اشکالات و نارضایهایی که به علت نسخ آیات شیطانی ایجاد شده

بود ناچار در وقوع این مهاجرت مؤثر بوده است. همین سیاست مخالفت با محمد صلی الله علیه و آله موجب گردید که تجار و دوستان آنان در صدر برآمدند که عرصه را بر برادران و عموزادگان و دیگر اعضای جوان خانواده‌های خود که مجنوب این نهضت جدید دینی شده بودند، تنگ کنند. از یک نقطه نظر می‌توان این عمل را يك نوع آزار دانست ولی از نقطه نظر دیگر ایجاد نفرت و نارضایی نیز می‌کند. این موضوع بیشتر به خانواده‌ها و طوایف مربوط می‌شد. در آن زمان اصول و نظام قضا و امنیت اجتماعی در مکه وجود نداشت. باج‌نایات، توسط خویشاوندان و خونخواهی مستقیم مقابله می‌شد بدین معنی که هر قبیله ای خود انتقام صدمه ای را که به اعضای آن وارد می‌شد می‌گرفت، علاوه بر این اگر کسی بر افراد قبیله دیگر دست درازی می‌کرد برای او خطرناك بود. در خود قبیله نیز قدرت رئیس بیش از همه بود. اگر دستوری علیه یکی از افراد قبیله که مسلمان شده بود صادر می‌کرد فوری اجرا می‌شد و تغییر آن غیر ممکن بود زیرا کس دیگری جز رئیس قبیله وجود نداشت که از او تقاضایی بکند.

بعضی از منابع می‌نویسند که علت مهاجرت مسلمانان به نقاط دیگر اشکالاتی بوده است که برای آنان پیش آمده بود و دلایلی در دست است که این نظر را تأیید می‌کند. به استثنای دو نفر تمام مسلمانانی که می‌شناسیم و در مکه باقی مانده‌اند متعلق به گروهی مرکب از پنج طایفه می‌باشند که اول آنها قبیله بنی هاشم یعنی قبیله محمد صلی الله علیه و آله است و ظاهراً این گروه از باقی ماندگان «حلف الفضول» تشکیل یافته بود. پس این گروه کانون مخالفت با بازرگانانی بود که رهبری

تجارت را در انحصار خود داشتند. مُحَمَّدٌ عَلَيْهِ السَّلَامُ به افکار بازرگانان بزرگ حمله کرده بود آنان دشمنان نهضت او شده بودند پس طرح دوستی با مخالفان سیاسی آنان با مُحَمَّدٌ عَلَيْهِ السَّلَامُ يك امر طبیعی بود. البته معنی این مطلب آن نیست که تمام آنان مسلمان شده بودند بلکه فقط نشان می‌دهد که این قبایل برای کسانی که باقی ماندند افرادی بودند که به هیچ وجه مورد آزار قبیله خود قرار نگرفتند. از بین دوتن که در مکه باقی ماندند و تعلق به قبایل مزاحم داشتند یکی شاعر کوری بود که مقام خاصی داشت و دیگری ارقم بود که خانه‌ای بزرگ از آن خود داشت و به اندازه کافی صاحب قدرت و استقلال بود که کسی نتواند به او آزار برساند.

پس دلایل قوی در دست است که این عده برای فرار از شکنجه و آزار به حبشه مهاجرت کردند ولی نمی‌توان گفت که علت کلی مهاجرت همین آزارها بوده است زیرا پس از آنکه مسلمانان در مدینه ساکن شدند و دیگر شکنجه و آزاری وجود نداشت دیده می‌شود که عده‌ای در حبشه باقی ماندند. آیا علت دیگری برای این مهاجرت وجود داشته است؟

محتمل است که آنان برای تجارت به حبشه رفته‌اند، چه تجارت شغل طبیعی مردم مکه بود و برای این کار فرصتهایی در آنجا وجود داشت. کسانی که تا سال ۶۲۸ در حبشه باقی ماندند به تجارت سرگرم بودند. علاوه بر مهاجرت مسلمانان رابطه تجارتي بین مکه و حبشه وجود داشته است و به طور یقین می‌توان گفت که مسلمانان با آنجا تجارت داشتند، ولی این تنها علت برای ترك مکه نبوده است. فرار از

سر زمینی با این وضع و در حالی که نهضت اسلام در ترقی بوده است نوعی خیانت به نهضت محسوب می شد و اکثر کسانی که مهاجرت کردند اشخاص ضعیفی نبودند.

آیا می توان گفت که عجل نقشه دیگری داشته و این اشخاص را برای اجرای این نقشه به آنجا فرستاده است؟ آیا انتظار مساعدتهای نظامی از آنجا داشته است تا بتواند به وسیله آن نظارت بر مکه را در دست گیرد؟ حبشها همیشه در انتظار فرصتی بودند که بتوانند مستعمره از دست رفته را در عربستان دوباره به دست آورند و متحدان آنها یعنی دولت بیزانس نیز که سخت از ایرانیان شکست خورده بود میل داشت که دولت ایران در جبهه دیگری سر گرم شود یا شاید عجل عجله می خواسته است حبشه را مرکز حمله به تجارت مکه قرار دهد چنانکه بعدها مدینه را مرکز چنین اقدامی قرار داد. آیا احتمال آن هست که او می خواسته است جاده تجارتی دیگری از جنوب به امپراتوری روم ایجاد کند که از دسترس سیاست مکه بیرون باشد و انحصار تجارت تجار مکه را بشکند؟ نقشه و فکر عجل عجله هر چه بود موجب وحشت مردم مکه شد و فوری دو نفر نزد نجاشی امپراتور حبشه فرستادند و اخراج مهاجران را از او خواستار شدند که البته مورد اجابت واقع نشد ولی با آگاه ساختن امپراتور از ضعف عجل عجله در مکه مانع اجرای هدفهای او شدند.

احتمال دیگری باقی است و آن اینکه آیا در بین پیروان دین نوظهور اسلام اختلاف عقیده شدیدی بروز کرده بوده است؟ در بین کسانی که در مکه باقی ماندند پس از عجل مهمتر از همه ابو بکر بود

که او نیز متعلق به قبیله بسیار ضعیفی بوده است. آیا مسلمانان قبایل متنفذ حاضر بودند از او و سیاست او پیروی و پشتیبانی کنند، دلایل ضعیفی هست که نشان می‌دهد رقابتی بین گروه او و گروه دیگر وجود داشته است که ریاست آن با عثمان بن مظعون بوده است. عثمان متعلق به همان دودمان محمد ﷺ و ابوبکر بوده و پیش از شروع محمد ﷺ به دعوت و موعظه؛ زندگی منظمی داشته و از شراب پرهیز می‌کرده است. وی بعدها در صدد برآمد که اصول ریاضت را وارد اسلام کند ولی مورد قبول و تصویب محمد ﷺ قرار نگرفت زیرا وی با هوش و ذکاوتی که داشت پی برده بود که سیاست و راه و رسمی که از جانب کسانی نظیر ابوبکر پیشنهاد شود مورد قبول واقع نخواهد شد، زیرا ابوبکر در آن موقع نفوذی نداشت. عده دیگری نیز بودند که به دلایل مختلف مخالف هر سیاستی بودند که محمد ﷺ به پیشنهاد ابوبکر قبول کرده باشد. این سیاستها چه بوده است نمی‌دانیم، شاید علت مهاجرت بعضی از مهاجران آن بوده است که با بعضی از نظریات محمد ﷺ از قبیل دخالت بی‌اندازه در سیاست و مانند آن، که ایجاد مخالفت می‌کرده است، موافق نبوده‌اند.

اگر حقیقتی در این نکته اخیر باشد به هوشیاری ذاتی محمد ﷺ پی می‌بریم که فوری متوجه این نکته شده و در صدد علاج و مداوای آن بر آمده است و ممکن است که پیشنهاد کرده باشد که عده‌ای به حبشه مسافرت کنند تا بتوانند نقشه‌هایی را که مورد توجه و علاقه اسلام بوده است عملی سازند و چون هدف اصلی انجام نگرفته، جای تعجب نیست، اگر اطلاع کافی، درباره نقشه داده



نشده است.

عثمان بن مظعون و دیگران که پیش از ۶۲۲ به مکه باز گشتند به زودی با محمد و ابوبکر مصالحه و آشتی کردند و این خود دلیل آن است که انقطاع کامل صورت نگرفته بوده است لذا مهاجرت به حبشه هر چند حقیقت مسلمی است ولی تفسیر آن ممکن نیست. فقط اطلاع مختصری درباره اوضاع و احوال مسلمانان پس از ظهور مخالفت به دست می دهد.

### جدال عقلی

قرآن انعکاسی از جدال لفظی و فکری بین محمد ﷺ و مخالفان اوست که در سراسر بقیه زندگی او در مکه جریان داشته است. در عین حال که وی از دین جدید دفاع می کند و آن را تشریح می نماید دلائلی را هم که برضد او به کار برده اند متذکر می شود. تعیین تساریخ صحیح ممکن نیست اما نکات اصلی که از هر دو طرف ذکر شده است واضح و آشکار است یکی از انتقاداتی که از قرآن شده این است که تعلیمات آن درباره حشر مردگان مبهم و تاریک است مردم مکه چون به تن به نظر قسمت اصلی وجود آدمی نگاه می کردند نمی توانستند خود را متقاعد کنند که آدمی پس از مرگ که در قبر گذاشته می شود چگونه ممکن است بار دیگر زنده شود، و به نظر آنان این موضوع جواب خرد کننده به گفته های محمد ﷺ بود که می گفت:

وَإِذَا ذُكِّرُوا لَا يَذْكُرُونَ ، وَإِذَا رَأَوْا آيَةً يَسْتَسْخِرُونَ  
وَقَالُوا إِن هَذَا إِلَّا سِحْرٌ مُّبِينٌ ، إِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَّ

عِظَامًا ءِإِنَّا لَمَبْعُوثُونَ. (سوره ۳۸ آیات ۱۳ تا ۱۷)

موضوع حشر مردگان تنها نقطهٔ حمله بر محمد ﷺ نبود بلکه يك امر عقیده‌ای و دینی نیز بود.

وَقَالُوا مَا هِيَ إِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا نَمُوتُ وَنَحْيَا مَا يُمْهِلُكُنَا  
إِلَّا الدَّهْرُ وَمَا لَهُمْ بِذَلِكَ مِنْ عِلْمٍ إِنْ هُمْ إِلَّا يَظُنُّونَ .

(سوره ۴۳ - آیه ۲۳)

قرآن به طور مطلق با رستاخیز سروکار ندارد زیرا حشرو نشر قرآن شامل تعلیماتی دربارهٔ روز جزا و قضاست و اهمیت این تعلیمات براساس تقوای فرد و تأمین سجایای عالیۀ اخلاقی مانند بخشش و جوانمردی و غیره برای افراد است و قرآن برای آنها اهمیت بسیاری قایل است. کفار مکه مستقیماً به تعلیمات قرآن در بارۀ بخشش و جوانمردی حمله نکردند؛ زیرا خودپسند بودن عملاً آسان است ولی دفاع از خود پسندی به عنوان يك عقیده چندان سهل و ساده نیست، تعلیمات قرآن دربارهٔ روز رستاخیز اگر رد شود تعلیمات آن در باب سخاوت و جوانمردی نیز خود به خود مردود تلقی می‌شود، و حقیقت بی‌چون و چرای احیای مجدد اجساد پوسیده به نظر مخالفان محمد ﷺ دلیل روشنی بر نارسا بودن همهٔ عقاید او دربارهٔ اخلاق و حیات اخروی بود. قرآن برای روبه رو شدن با این انتقاد، دقت آنان را به «نشانه» های قدرت خدا که فعان مایشاء است جلب می‌کند. در بعضی از آیات

به قدرت و وجود خدا اشاره شده و در آیات دیگر از قدرت او دربارهٔ حشر مردگان سخن رفته است. خلقت بشر به قدرت بالغه خدا از طریق عمل باروری و رشد تدریجی جنین در رحم و تدارکات بعدی او برای حفظ حیات آدمی به عنوان نشانهٔ قدرت او تلقی شده است که می‌تواند بشر را پس از مرگ نیز بار دیگر زنده کند.

أَيَحْسَبُ الْإِنْسَانُ أَنْ يُتْرَكَ سُدًى ، أَلَمْ يَكُنْ نُطْقَةً مِنْ  
مِثْلِي يُمْنِي ، ثُمَّ كَانَ عَلَقَةً فَخَلَقَ فَسَوَّى ، فَجَعَلَ مِنْهُ الزَّوْجَيْنِ -  
الذَّكَرَ وَالْأُنْثَى ، أَلَيْسَ ذَلِكَ بِقَادِرٍ عَلَى أَنْ يُحْيِيَ الْمَوْتَى .  
(سوره ۷۵ آیات ۳۶ تا ۴۰)

با همهٔ این دلایل مخالفان متقاعد نشدند و به مخالفت خود ادامه دادند.

قرآن بود که در مسئلهٔ بتها و یگانگی خدا نخستین گام را برداشت به حمله پرداخت و کفار جنبهٔ دفاعی به خود گرفتند که نکات اصلی آن را توضیح دادیم. اما نکتهٔ دیگر علاقهٔ کفار به آیینها و سنتهای اجدادی بود که محمد ﷺ از آن نیز انتقاد می‌کرد و می‌خواست آنها را از به کار بردن آن باز دارد. اعراب عقیده راسخ داشتند که راه صحیح برای بشر، راهی که بتوان خیر با ارزشی به دست آورد متابعت از قوانین مسلم و معین است. این عقیده در اسلام نیز رسوخ کرده آنجا که به جای کلمه «رفض و فساد عقیده» «بدعت» به کار رفته است. وقتی مخالفان محمد ﷺ اصرار می‌ورزیدند و می‌گفتند: پدران آنان دارای دینی بوده‌اند و

آنان نیز باید از آن متابعت کنند. این يك تقاضای مشروعی بود که ته‌دل بسیاری از اعراب به آن پاسخ اجابت می‌داد.

پاسخ محمد ﷺ به این انتقاد در داستانهای انبیای قدیم یافته می‌شد. این داستانها محمد ﷺ و پیروان او را در رو به روشن شدن با مشکلات و سختیها تشویق می‌کرد. گاهی احساس می‌کردند که با این عمل، اجدادشان را از یاد برده‌اند مخصوصاً هنگامی که از آنان در باره وضع موجود و آینده کفار سؤال می‌شد داستانهای انبیای عهد عتیق و غیره به آنان مدرمی بخشید تا متوجه این نکته بشوند که، چون پیروان نبی هستند، دارای اجداد روحی مشخص و ممتازی می‌باشند و می‌توانند خود را عضو جامعه‌ای بدانند که ریشه‌های عمیق دارد و مانند اغلب طوایف عرب در باره مزایای قومی و شایستگیهای گذشتگان خود فخر و مباهات کنند.

علاوه بر بحثهایی که در باره آیات قرآن می‌شد از خود پیغمبر نیز به عنوان «پیامبر خدا» انتقاد می‌کردند. از مضمون انتقادها معلوم می‌شود که محمد ﷺ از همان ابتدا مدعی بوده است که آیات قرآن از طرف خدا به او وحی و نازل می‌شود. کفار در یکی از حمله‌های خود، اقرار دارند که تجارت و دستورهای محمد ﷺ حقیقی است و از جانب يك قوه فوق طبیعت صادر می‌شود، ولی می‌گفتند که از طرف خدا یا جن نیست بلکه خود محمد ﷺ جن دارد و دیوانه است. از غیب گویان و ساحران که بگذریم شعرا نیز از جن الهام می‌گیرند و برای آنکه محمد را به یکی از این گروه‌ها منسوب سازند می‌گفتند

که او نیز در تصرف جن است.

تمام این اظهارات در باره اصل و مبدأ وحی و الهام این اثر را داشت که مردم را به این فکر می انداخت که مواعظ و دستورهای محمد را جدی نباید تلقی کرد . موجودات فوق طبیعت که الهام یا وحی را نازل می کردند ممکن بود خود موجوداتی بدکار و فاقدان باشند. کسانی که این ادعاها را می کردند ممکن است خود به آن ایمان داشته اند و شاید فقط برای بی اعتبار کردن محمد ﷺ چنین اظهاراتی می کرده اند . در هر صورت می بایست جوابی به آن داده شود. قسمت مربوط به تشریح وحی های محمد ﷺ ( که در بالا مورد بحث قرار گرفت ) دلیل رد این بیان است که الهامات از يك اصل و منشأ شیطانی صادر شده است .

یکی دیگر از دلایل مخالفت با پیامبری محمد ﷺ این بود که او ادعا می کرد که دارای خلیفه و معاونی از جنس بشر است. در قرآن نامی از این معاون برده نشده است ولی منابع بعدی اسلام اسامی چندی را ذکر کرده اند که مخالفان محمد ﷺ آن را معاون او می دانستند . علت این موضوع چه بوده است؟ البته بیان آن مشکل است . همه را عقیده بر این است که محمد ﷺ خود کاملاً عقیده داشت که الهام و وحی از خود او نیست ، پس احتمال می رود که او بعضی از داستانهای را که اشخاص نامبرده ذکر کرده اند شنیده است البته نه به آن شکل و با همان منظور و دید که در قرآن ذکر شده است . اگر این داستانها مسموع باشد پس امکان موجه بودن این ادعا وجود دارد . شك نیست که دشمنان محمد ﷺ از تمام وسایل موجود برای بی اعتبار

کردن او استفاده می کردند .

حمله دیگری که به محمد ﷺ می شده است به مقام وانگیزه های او بوده است . می گفتند او دارای شخصیت بر جسته و مهمی نبود که بتواند پیامبر خدا باشد ، زیرا مردی بود ضعیف و مقام مهمی نیز نداشت عده دیگری تقاضا داشتند که مأموریت او با معجزه توأم باشد و می گفتند که خدا معمولاً فرشتگان را برای پیامبران می فرستد . در قرآن آیاتی است که نشان می دهد که دشمنان محمد ﷺ ادعای کردند که آنچه او را وادار به این کار کرده جاه طلبی او بوده است ، این ادعا چندین مرتبه تکرار شده و عده ای گفته اند که محمد ﷺ ناظر نیست بلکه فقط هشیار کننده ای است که وظیفه او تنها هوشدار دادن به مردم کشور خویش است و روزی خواهد آمد که روز پاداش و کیفر ابدی خواهد بود و محمد ﷺ مصرّاً مانند انبیای دیگر این پاداش را از آدمیان نمی جوید بلکه از خدا می خواهد . طبیعی است که ثروتمندان که جز مسائل مادی نظر دیگری نداشتند و از مشکلات محمد ﷺ مطلع بودند تصور می کردند که او نیز مانند خود آنان درصدد به دست آوردن ثروت و قدرت است ولی طرز رفتار او در تمام مدتی که در مکه بود امکان این تصور را نداد که ، جاه طلبی سیاسی او را به این کار واداشته باشد . هر چند هنگامی که در مدینه صاحب قدرتی شد از آن روی نگردانید ، ولی چنین وانمود که رهبری سیاسی نیز از طرف خدا به او عطا شده است .

#### تحریم و طرد قبیله بنی هاشم .

در حدود سال ۶۱۵ رهبری مخالفت با محمد ﷺ ، از جماعت

پیران یکی از همسالان محمد به نام ابو جهل از قبیله مخزوم منتقل شد. پیران میل داشتند با محمد <sup>صلی الله علیه و آله</sup> به نوعی مصالحه کنند و او را به سازش وادارند ولی تصمیم ابو جهل بر این بود که نهضت دین جدید را درهم شکند و از میان بر دارد. قسمتی از آنچه در باره این موضوع در کتابهای نخست نوشته شده است خالی از اغراق به نظر می رسد:

« ابو جهل مردی شریر بود و مردم قریش را علیه مسلمانان تحریک می کرد. وقتی می شنید که شخصی با نام و نسب و دارای دوستان نیرومند به اسلام گرویده است از لو به شدت انتقاد می کرد و به سرزنش و ملامت می گفت: « تو دین آبا و اجدادی خود را ترك کرده ای » او در چند از شما بهتر است ولی بی خردی شما دلیل جهل و قضای نادرست شماست و از افتخار شما می کاهد. اگر طرف تاجر بوده او می گفت « به خدا سوگند که کالای شما به فروش نرفته است و سرمایه خود را از دست داده اید » اگر محمد (ص) مرد با نفوذی نبود ابو جهل او را می زد و مردم را بروی می شورانید »

این روایت شدت مخالفت و حدود آن را مشخص می کند باید به خاطر داشت که اصول امنیت اجتماعی در مکه برای این اصل بود که هر قبیله ای از اعضای خود حمایت می کرد. اغلب قبایل به آن اندازه قوی بودند که می توانستند از بد رفتاری نسبت به افراد قبیله خود پیشگیری کنند از این جهت به شدت عمل و ضرب و جرح نیازی نبود. علمای مغرب زمین را عقیده بر این است که درباره شکنجه و آزار مسلمانان در مکه اغراق شده است و مبنای آن منابع اولیه ای مانند عبارت بالاست. از طرف دیگر در قرآن اشارات بسیاری درباره رفتار ناروای کفار مکه نسبت به مسلمانان دیده می شود که شاید علت آن رفتار ابو جهل و حامیان او در آزار مسلمانان بوده است.

این رفتار چندان شدید بود که نظیر آن حتی در سنتهای کهن عرب نبوده است. منتهای آزاری که ابوجهل وارد می آورد نسبت به افراد قبیله خود بود. یکی از برادران صلبی او و دو تن دیگر از جوانان عالیمقام هنگامی که در حبشه بودند به اسلام تمایل پیدا کردند پس از بازگشت از حبشه ابوجهل زندگی را بر آنان چنان مشکل ساخت که مدتی از طرف خانواده های خود زندانی شدند و از ملحق شدن آنان به محمد ﷺ در مدینه ممانعت شد. یکی از وابستگان قبیله و والدین پیر او را در وسط روز در زیر آفتاب نگه داشت چنانکه مادر او در اثر آفتاب زدگی در گذشت. از مسلمانان برای این گونه اشخاص کاری ساخته نبود.

ابوجهل و شرکای او از هر گونه فرصت استفاده می کردند و مردم را در فشار اقتصادی می گذاشتند. در موردی مدیونی از پرداخت دین قانونی خود به داین خودداری کرد زیرا وی در هیچیک از قبایل حامی و پشتیبانی نداشت. البته برای اشخاص بی نفوذ، مقاومت در برابر این گونه فشارها مشکل بود به طوری که گفته شده است، هنگامی که ابوبکر به دین اسلام درآمد ۴۰/۰۰۰ درهم سرمایه داشت و چون در سال ۶۲۲ خواست مکه را ترك گوید بیش از پنج هزار درهم برای او باقی نمانده بود و ظاهراً پول خود را صرف خریدن غلامان کرده است که فقط نام هفت تن از آنان ذکر گردیده و گفته می شود که یکی از این عده به تنهایی به ۴۰۰ درهم خریداری شده است. پس می توان تصور کرد که کم شدن ثروت او در اثر فشار اقتصادی مخالفان اسلام بوده است.



تنبیه و شکنجه‌های بدنی به علت وجود امنیت اجتماعی محدود به غلامان و کسانی بوده است که قبیله ای نداشتند تا از آنان حمایت کنند. در بین افراد گروه دوم که نام برده شده است آهنگرو تاجری از مردم بیزانس بوده اند. در زمان عادی این گونه اشخاص برای زندگی در مکه مشکلی نداشتند ولی اگر به نهضتی که دارای دشمنان قوی بود می پیوستند وضع آنان تغییر می کرد. گاهی ممکن بود قبیله‌ای عضویت یکی از افراد خود را انکار کند، ولی چون این عمل موجب پایین آوردن افتخار قبیله می شد تا زمانی که دلیلی قوی وجود نداشت چنین کاری نمی کردند. ممکن است چنین پیمامدی برای ابوبکر رخ داده باشد زیرا می شنویم که رؤسای یکی از قبایل چادر نشین نزدیک مکه او را در ظل حمایت خود گرفته است و او نیز به تنزل وابستگی به قبیله دیگر تن در داده است. به هر صورت می توان یقین داشت که قبیله او از قبایل قوی نبوده است.

عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ هنوز از حمایت قبیله خود برخوردار بود، هر چند بی حرمتیهای کوچکی نسبت به او روا می داشتند، چنانکه همسایگان وی زبانه‌های خود را مقابل در خانه او می ریختند. گفته شده است که ابوجهل يك یا دوبار از ابوطالب عموی عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ که رئیس قبیله بود خواسته است که یا از ادعای برادر زاده اش در اعلام دین جدید ممانعت کند و یا دست از حمایت او بردارد.

ابوطالب مقاومت کرد زیرا بیرون راندن عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ بی احترامی به قبیله بود و خود آنان نیز تمایلی نداشتند که به عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ اصرار کنند که دین خود را از دست بدهد. از طرف دیگر از بین رفتن عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ

موجب ضعف قبیله‌ای می‌شد که اتفاقاً در حال قهقرا بود، و آنان به آینده محمد صلی الله علیه و آله جوان امید واری بسیار داشتند. ممکن است عدم تمکین ابوطالب از ابو جهل علل عمیق‌تری نیز داشته‌است. هر چند ابوطالب و اکثر اعضای قبیله تعلیمات محمد صلی الله علیه و آله را نپذیرفته بودند ولی تعلیمات وی دارای اشارات و مطالب سیاسی بود که این قبیله بدانها علاقه‌مند بودند و مطابق با سیاست قبیله «حلف الفضول» بود که همواره سعی داشتند با تجار ثروتمند قبایل دیگر مخالفت نمایند، چه آنها همه چیز را در انحصار خود در آورده بودند. پس جانبداری و حمایت بنی هاشم از محمد صلی الله علیه و آله يك امر طبیعی بود. هر چند دین او را قبول نکرده باشند. البته تنها مسلمانان قبیله نیز نبودند که از آنان حمایت می‌شد. ابوطالب همچنین از خواهرزاده خود که پدرش از قبیله ابو جهل یعنی بنی مخزوم بود حمایت می‌کرد، زیرا در خطر آن بود که از طرف خانواده پدرش با او بد رفتاری شود. ابو جهل به مخالفت خود علیه محمد صلی الله علیه و آله شدیداً ادامه می‌داد ولی نتوانست او را از قبیله اش جدا کند. فقط در جدا کردن بنی هاشم از دیگر قبایل «حلف الفضول» موفق شد و شاید در حدود سال ۶۱۶ م بود که اتحادیه بزرگی در تمام قبایل مکه علیه بنی هاشم به وجود آورد که عهدنامه‌ای نوشتند و امضا کردند که به موجب آن مطرود بودن بنی هاشم مسجل شد و هیچیک از قبایل امضا کننده حق نداشتند با این قبیله روابط بازرگانی داشته باشند و یا با آنان ازدواج کنند. این طرد و تحریم ظاهر آدو سال طول کشیده است.

وضع و موقعیت بنی هاشم چنانکه گفته شده است سخت نبوده، کسی از تضییق شکایت نداشته و تهمتی بر محمد صلی الله علیه و آله وارد نیاورده‌است.

این مطلب، این نظر را تأیید می کند که علت طرد قبیله تنها دین محمد صلی الله علیه و آله نبوده است. بنی هاشم توانسته اند به بازرگانی خود به طرق دیگر ادامه دهند و شاید کاروانهای خود را به سوریه می فرستادند و کالای خود را به چادر نشینانی که به مکه می آمدند می فروختند. به علاوه عده ای از قبایل دیگر که بنی هاشم را طرد کرده بودند از طریق ازدواج با آنان رابطه داشتند لذا تحریم و طرد را به آن شدت که می بایست مراعات و اجرا نمی کردند. پس از چندی معلوم گردید که طرد و تحریم قبیله با شکست روبه رو شده و پس از چندی بر طرف گردیده است، البته نه با شکست و تسلیم بنی هاشم بلکه با فرو ریختن اتحادیه ای که توسط ابوجهل به وجود آمده بود، رهبری قبیله بدست افراد قبایلی افتاد که سابقاً متحد بنی هاشم بودند و یکی از آنان از قبیله مخزوم و کافر بود و مادر او از خواهران ابوطالب بود. شاید با گذشت زمان این متحدان سابق بنی هاشم متوجه شده بودند که تحریم موجب تقویت قبایل ثروتمندی شده است که می خواستند قدرت خود را توسعه دهند و در نتیجه، موجب ضعف موقعیت خود آنها خواهد شد.

تحریم هر چند شکست کامل نبوده ولی در جریان آن پیمان شکنی بزرگی در قبیله بنی هاشم نهفته است، و ابولهب و قبول او به عنوان ریاست نشان می دهد که در این قبیله بیش از اندازه معمول نارضایی وجود داشته است.

بروز این گونه مخالفتها با اسلام مانع از آن نشد که مردم بدان بگروند. یکی از شخصیت های مهمی که به آن ایمان آورد عمر بن خطاب بود که بعدها خلیفه دوم شد، وی مدتی از مخالفان سر سخت

اسلام به شمار می رفت و وقتی شنید که خواهر و شوهر خواهرش مسلمان شده اند به اندازه ای خشمگین شد. که خواهر خود را به سختی مضروب ساخت ، چنانکه خون از بدن او جاری شد. اما مشاهده همین خون احساسات او را برانگیخت و در حالی که سخت پشیمان شده بود نشست و خواهرش آیاتی چند از قرآن براو فرو خواند. عمر با شنیدن این آیات به اندازه ای تحت تأثیر قرار گرفت که فوری نزد عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ رفت و به ایمان خود به اسلام اقرار کرد. عمر یکی از دو یاسه شخصیت مهم قبیله خود بود که نسبتاً ضعیف و غیر متنفذ بود. و پس از اسلام آوردن وی ( که ممکن است پیش از تحریم باشد ) قبیله او دیگر در مخالفت با اسلام شرکت نداشتند. عده ای از اعضای این قبیله که در سال ۶۲۴ هنوز در مکه بودند سر بازانی به بدر فرستادند ولی پیش از آنکه جنگ آغاز شود از سپاه مکه جدا شدند.

ظاهراً عمر آخرین شخص مهمی بوده است که در دوره مکه به اسلام ایمان آورده است. مقاومت پیروزمندانه بنی هاشم در برابر تحریم نشان می دهد که کار این دو حزب به وقفه گراییده بود. اما پس از خاتمه آن، وقایع چندی رخ داد که سبب گردید موقعیت عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ به سرعت رو به تنزل برود.

### خیانت ابولهب

عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ در زمان کوتاهی که احتمال دارد سال ۶۱۹ باشد دوتن از حامیان و وفاداران خود را از دست داد که یکی عم وی ابوطالب و دیگری زنش خدیجه بودند. مرگ خدیجه چه اثری در عَلِیُّ بْنُ ابِی طَالِبٍ در این سالهای مخالفت داشته است نمی توان حدس زد.

هنگامی که برای نخستین بار این فکر در محمد ﷺ به وجود آمد که خدا او را به پیامبری دعوت کرده است، خدیجه بود که او را به حقیقی بودن این دعوت تشویق و تشجیع کرد. در سالهای بعد وقتی در تصمیم او خللی پیدا شد خدیجه او را تسلی داد و در مواقع لزوم از او حمایت و پشتیبانی کرد. مرگ خدیجه سبب شد که اعتماد محمد ﷺ به خود بیشتر شود و این برای موفقیت نهضت دینی او لازم بوده است. تا زمانی که خدیجه زنده بود محمد ﷺ زن دیگری نگرفت، اما پس از درگذشت وی زود ازدواج کرد. و علت آن شاید نیاز به وجود يك مونس روحی بوده است و احتمال می رود که انگیزه او در این عمل سیاست بوده باشد. زن جدیدی که محمد با او ازدواج کرد سوده نام داشت که خود تازه به دین اسلام در آمده بود و شوهرش نیز مسلمان بود، و تازه رخت از جهان بر بسته بود. شاید محمد ﷺ مصلحت دیده است که با او ازدواج کند تا وی شخص دیگری خارج از گروه او را به شوهری اختیار نکند. اما در مورد خود محمد ﷺ دلایلی در دست است که نشان می دهد که در آن هنگام روابط نفسانی جای خود را به مسائل عمیق دینی داده بوده است .

آثار مرگ ابوطالب برای محمد ﷺ شدیدتر بود. پس از مرگ او برادرش ابولهب ریاست بنی هاشم را به عهده گرفت که در زمان طرد و تحریم به اتحاد بزرگ، ملحق شده و در صف مخالفان اسلام در آمده بود و هنگامی که به ریاست قبیله رسید وعده داد که مانند برادرش از محمد ﷺ حمایت کند. زیرا احترام به خود و احترام به قبیله چنین چیزی را خواستار بود ولی او سابقا به یکی از احزاب قبایل مخالف

عُمر ملحق شده و توانسته بود خواهر ابوسفیان از قبیله عبدالشمس را به ازدواج خود در آورد و این ابوسفیان تاجری ثروتمند و با ابوجهل هم‌نسب بود (۱) و برای به دست آوردن مقام رهبری مکه رقیب او به شمار می‌رفت. شاید این ازدواج رشوه‌ای بوده است که به ابولهب داده شده تا او را از سیاست قدیم بنی‌هاشم جدا کند. از طرف دیگر ممکن است این ازدواج زودتر صورت گرفته و رشته‌های قرابت و سیله‌ای به دست مخالفان عُمر رَضِیَ اللّٰهُ عَنْهُ داده است تا بتوانند در ابولهب نفوذ کنند. زمانی بود که عُمر و ابولهب از افراد برجسته قبیله به شمار می‌رفتند و دو تن از دختران عُمر را برای پسران ابولهب نامزد کرده بودند ولی این روابط اینک از هم گسیخته بود.

طولی نکشید ابولهب بهانه‌ای به دست آورد که بتواند عُمر را از حمایت قبیله محروم سازد، چنانکه روایت شده است این بهانه را ابوجهل و یکی از اعضای قبیله عبدالشمس که با او دوست بود به ابولهب القا کردند. از عُمر در باره موقعیت فعلی پدر بزرگش سؤال کرد، عُمر رَضِیَ اللّٰهُ عَنْهُ جواب طفره آمیزی داد که ظاهراً قانع کننده بود ولی ابوجهل و دوست وی از ابولهب خواستند که مجدداً از عُمر رَضِیَ اللّٰهُ عَنْهُ پرسد که آیا پدر بزرگش فعلاً در جهنم است یا خیر، که عُمر رَضِیَ اللّٰهُ عَنْهُ مجبور شد جواب مثبت بدهد. بیان چنین مطلبی در باره رئیس سابق قبیله در حکم توهین به تمام قبیله بود و رئیس فعلی می‌توانست از حمایت او خودداری کند بی آنکه لطمه‌ای به حرمت او وارد آید. البته خودداری از حمایت فوری و به طور قطع صورت نگرفته است، بلکه پیشنهادهایی به او شده است

که مسلماً عَلَيْهِ السَّلَام از قبول آنها امتناع ورزیده است . جزئیات هرچه هست عَلَيْهِ السَّلَام از حمایت قبیله محروم گردید و دیگر نتوانست مانند سابق در مکه به کارهای تبلیغی خود پردازد ، اضطراب و تلخی این واقعه برای او در سوره (۱۱۱) قرآن منعکس شده و ابولهب و زوجه او را تقبیح کرده است . عَلَيْهِ السَّلَام چون نمی توانست بیش از آن به تبلیغ دین خود در مکه پردازد در صدد یافتن نقطه دیگری برآمد . نخستین محلی که مورد توجه او قرار گرفت طایف بود ، که نزدیکترین شهر به مکه بود و بیش از چهل میل با آن فاصله نداشت و به علت کوهستانی بودن دارای آب و هوای بهتری بود و عده ای از تجار ثروتمند مکه خانه یا ملکی در آنجا یا نزدیک آن داشتند . چنانکه زمانی رقیب تجارتی مکه بود ولی در این هنگام تحت نظارت و تسلط مکه قرار داشت .

عَلَيْهِ السَّلَام سفری به طایف کرد و با یکی از رهبران آنجا و برادرانش وارد مذاکره شد ، این گروه جزء آن دسته از ساکنان مکه بودند که با تجار مکه همکاری داشتند ولی عَلَيْهِ السَّلَام تصور می کرد که از بودن در تحت تسلط مکه ناراحت و ناراضی هستند . واضح است که او نه تنها در جستجوی حامی و پیرو بود بلکه می خواست به تبلیغ دینی که آورده و آن را از مکه آغاز کرده بود پردازد امانمی دانیم که آیا او امکان ایجاد دشمنی بین این دو شهر نظیر آنچه بعدها بین مکه و مدینه به وجود آمد داشته است ؟ به هر صورت به مردم طایف پیشنهاد کرد که راهی برای لغو نظارت مکه بر تجارت آنان پیدا کنند (۱)

---

(۱) در تواریخ معتبر ذکری از این پیشنهاد دیده نشده



ولی اهالی طایف خود را تا آن اندازه قوی نمی دیدند که بتوانند مکه را به مبارزه دعوت نمایند، بلکه می ترسیدند که مبادا به سبب مذاکره با محمد ﷺ مورد خشم قرار گیرند، لذا نه تنها پیشنهاد محمد را رد کردند بلکه مردم شهر را تشویق نمودند، که او را سنگباران کنند.

محمد با ناامیدی و تأثر بسیار عازم مکه شد. روایت کرده اند که شب هنگام در مکانی توقف کرد و هنگامی که سر گرم عبادت بود گروهی از جنّها آمدند و به دعای او گوش فرادادند و هنگام خروج به او ایمان آوردند. این موضوع در قرآن نیز آمده است (سوره ۷۲ آیه ۱) و باید گفت که در آن ساعت خطرناک که اوضاع و کارها روز به روز مشکلتر می شد، محمد ﷺ بیشتر خود را در پناه خدا گذاشته است، و پیشامد دیگری که رخ داده به طور خلاصه در قرآن بدان اشاره شده است (سوره ۱۷ آیه اول) و بعد از آن به صورت مسافرت های معجز آسا (معراج) ابتدا به اورشلیم و بعد به هر يك از هفت آسمان در آمده است.

محمد ﷺ تا زمانی که حمایت یکی از رؤسای قبایل دیگر را به دست نیاورده بود نمی توانست مجدداً وارد مکه شود. با مسافرت به طایف وی دیگر انتظار حمایتی از طایفه خود نداشت و عملاً نیز این حمایت از میان برخاسته بود. این مطلب که آیا ابولهب ضرب الاجلی برای محمد ﷺ تعیین کرده است که مکه را ترك کند یا محمد ﷺ با این مسافرت شرایط خود داری از تبلیغ را شکسته است به درستی معلوم نیست، فقط می دانیم رئیس سوم نیز هر چند مایل بود از محمد ﷺ حمایت کند ولی شرایطی داشت که فعالیت های او را محدود می کرد. اما در



هر صورت با این ترتیب می توانست به مکه باز گردد.  
 در این دوران پر زحمت که پس از مرگ ابوطالب برای محمد  
 ﷺ پیش آمده بود، اوسعی داشت حمایت بعضی از طوایف چادر نشین  
 را که در نزدیکی مکه بودند جلب کند، نام چهار طایفه برده شده  
 است که مراتع یکی از آنها نسبتاً نزدیکتر بود و به طوری که وقایع  
 نشان می دهد گروهی از این طایفه به طرف محمد ﷺ جلب شده بودند  
 دیگران از مسافتهای دورتر آمده و اغلب مسیحی بودند. شاید محمد ﷺ  
 انتظار داشته است که به این علت یا به علت سیاستهای محلی یکی از  
 این طوایف پیام او را دریافت کنند و از او حمایت نمایند و یا شاید  
 اصلاً در فکر متحد کردن اعراب بوده است. متأسفانه از این اقدامات  
 نیز نتیجهای به دست نیامد و محمد ﷺ مجبور شد در انتظار بماند.

## مهاجرت به مدینه

### دعوت مردم مدینه

نخستین نوری که در این تاریکی بر محمد ﷺ تابید واقعه ای بود که در فصل زیارت در تابستان ۶۲۰ م رخ داد. در بین زیارت-کنندگان که محمد ﷺ با آنان ملاقات کرد شش هزار نفر از اهل مدینه بودند که تحت تأثیر شخصیت و پیام او قرار گرفتند و فکر کردند که عقاید محمد می تواند به حل مشکلاتی که در مدینه برای آنان پیش آمده بود یاری کند. سال بعد یعنی در ۶۲۱ پنج نفر از آنان به اتفاق هفت نفر دیگر برای زیارت به مکه باز گشتند. این دوزاده نفر نماینده اغلب احزاب مردم مدینه بودند و به طوری که گفته شده است به محمد ﷺ وعده دادند که او را به سمت پیامبری بپذیرند و اطاعت و پیروی کنند و از بعضی معاصی دوری جویند. این پیمان به نام نخستین عهدنامه «العقبه» نامیده شده است.

به اتکای این پیمان عَلَيْهِ السَّلَام یکی از معتمدان خود را بایمن دوازده نفر به مدینه فرستاد که در قرآن درباره او سخن رفته است و وظیفه وی تعلیم دادن اسلام به اهالی مدینه بود و بی شک وظیفه دیگری نیز داشته است و آن این بود که مُحَمَّدٌ عَلَيْهِ السَّلَام را از اوضاع سیاسی آن شهر آگاه سازد. در آن زمستان اوضاع مدینه به نفع دین جدید بود عده ای از اشخاص و قبایل مختلف به دین اسلام گرویده بودند و دارای قدرت و اهمیتی بودند که مُحَمَّدٌ عَلَيْهِ السَّلَام می توانست به آن اعتماد داشته باشد. در ماه ژوئن ۶۲۲ محمد می توانست عده ای را مرکب از ۷۵ نفر مسلمان به نمایندگی انتخاب کند تا به مکه مهاجرت کنند. این گروه که دو زن نیز جزء آنان بودند شبانه مُحَمَّدٌ عَلَيْهِ السَّلَام را ملاقات کردند و پیمان بستند که نه تنها او را به پیامبری بپذیرند و از ارتکاب معاصی اجتناب کنند، بلکه در راه خدا و پیامبر به مبارزه نیز بر خیزند. این پیمان را پیمان دوم «العقبه» یا پیمان جنگ می گویند.

آنچه گفته شد روایت است. بعضی از محققان مغرب زمین را عقیده بر این است که فقط يك پیمان بوده است ولی نا گفته نماند که بعضی از اوقات تمام جزئیات يك روایت درست در نمی آید، ولی به طور قطع می توان گفت پیش از آنکه راجع به رفتن مُحَمَّدٌ عَلَيْهِ السَّلَام به مدینه تصمیم گرفته شود، ملاقاتهایی بین آنان رخ داده است. شاید اهالی مکه تصور نمی کردند که مُحَمَّدٌ عَلَيْهِ السَّلَام واضح و آشکارا علیه مردم آن شهر دفاع خواهد کرد، ولی به هر صورت ایجاد نگرانیهایی را پیش بینی می کردند و قول حمایت به وی داده بودند اگر نه بی درنگ به-

دست دشمنانش در مکه کشته می شد. چگونه مردم مدینه بر عکس اهالی مکه به آسانی محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ را به پیامبری پذیرفتند و اسلام را قبول کردند؟ مطلبی است که باید توضیح داده شود.

### مشکلات و نگرانیهای مدینه

وضع مدینه با مکه کاملاً متفاوت بود. در نزدیکی مکه امکان کشاورزی نبود، فقط چراگاههایی برای شتر چرانی وجود داشت. لذا حیات شهر کاملاً در گرو بازرگانی بود، مدینه که تقریباً در ۲۵۰ میلی شمال مکه قرار داشت واحه‌ای بود به مساحت ۲۰ میل مربع که زندگی خود را فقط از کشت خرما و حبوبات به دست می آورد. البته تجارتی نیز وجود داشته است. چه بازاری در آنجا بود که بیشتر به دست یهودیانی از طایفه بنی القینقاع اداره می شد، که نه تنها به تجارت اشتغال داشتند بلکه به کارهای زرگری و ساختن اسلحه نیز می پرداختند. احتمال دارد کاروانهای تجارتی نیز به سوریه می فرستادند ولی وسعت و اهمیت آن به اندازه کاروانهای تجارتی مکه نبود.

مردم مدینه از ریشه و نژادهای مختلف بودند. وقتی که محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ در سال ۶۲۲ به آنجا رفت از قرار معلوم یازده گروه مهم (که در اینجا آنها را قبیله می نامیم) و عده ای گروه کوچک وجود داشته است از گروههای مهم سه گروه آن یهودی بوده اند که معلوم نیست از اولاد پناهندگان یهود بوده اند یا از خانواده های عرب که به دین یهود درآمده بودند. به هر صورت یهودیان و اعراب با هم ازدواج می کردند و از طرز زندگی عمومی قبایل یهود به سختی از قبایل عرب تشخیص داده می شدند. زمانی بود که یهودیان

بر اوضاع سیاسی مدینه نظارت داشتند و باقیمانده اعراب سابق وابسته به آنان بودند، احتمال دارد که همین یهودیان کشاورزی را در مدینه رواج دادند، همان طور که در دیگر شهر های عربستان چنین کاری کرده بودند.

هشت قبیله اصلی عرب از اولاد خانواده هایی بودند که در زمان تسلط یهود بر مدینه در آنجا ساکن شدند و در اوایل قرن ششم استقلال خود را از دست یهودیان، گرفتند. و اینک قویتر شده بودند. قبایل یهود بنی النضیر و بنی قریظه هنوز بهترین سرزمینها را در اراضی مرتفع جنوب واحه ها متصرف بودند و بر گروه های کوچک اعراب برتری داشتند و این قبایل کوچک بیشتر متعلق به قبایل اوس و منات بودند که یا در داخل قلمرو یهود، یا نزدیک آنها متفرق بودند. با وجود استقلالی که قبایل یهود داشتند ناچار بودند برای صیانت خود با قبایل عرب متحد شوند و در این اتحاد یهود مقام پایستری داشتند.

در واحه ها دوشهر نزدیک هم وجود نداشت بلکه خانه های چندی در بین نخلستانها و مزارع پراکنده دیده می شد هر قبیله دارای تعدادی قلعه های محکم بود که اگر حمله ای به آنان می شد به آن قلاع پناه می بردند، عقیده عمومی در مدینه بر این بود که این قلاع را نمی توان حتی با یورشهای سهمگین توفانی متصرف شد و اگر زمانی یکی از این قلاع به دست متخاصم می افتاد جنگ متوقف می شد. احتمال دارد که رؤسای قبایل همیشه در قلاع ساکن بودند و دیگران هنگام خطر بدانجا پناه می بردند.

یک قرن پیش از ظهور محمد ﷺ جنگهای شدید و مکرر بین قبایل

رخ می داد که محتمل است علت آن افزونی فشار جمعیت بر منابع موجود بوده است، ولی نمی توان علت را کلاً همان دانست زیرا حتی چند سال پس از رحلت صلی الله علیه و آله هنوز زمینهای بکر برای کشاورزی وجود داشت گرچه این زمینها بازده ناچیزی داشته. در جنگهای بعد هدف قبایل تصرف زمینهای همسایگان ضعیف بوده است. در ابتدا جنگها منحصر به جنگ يك قبیله با قبیله دیگر بود اما بامرو زمان رؤسای قبایل توانستند چند قبیله را با هم متحد کنند و تحت ریاست و رهبری خود در آورند، در نتیجه عده کسانی که در جنگ شرکت می جستند دائم رو به افزایش بود و سرانجام به جنگ شدید سال ۶۱۸ در محلی به نام بوعیث منتهی شد که اغلب قبایل مدینه همچنین متحدان آنها، قبایل یهود و بعضی از قبایل چادر نشین مجاور در آن شرکت داشتند و کشتار عظیمی رخ داد و چون هر دو طرف خسته شدند دست از جنگ کشیدند ولی صلح برقرار نشد. پس از آن مدینه دوره سختی را گذرانید و یکی دوبار اتفاق افتاد که مردانی که شب هنگام به قلمرو قبیله دیگر قدم نهاده بودند، کشته شدند.

این اتحاد عاقبت منجر به تقسیم قبایل عرب به دو طایفه اوس و خزرج گردید و به طوری که گفته شده است این دو طایفه جمعیت عرب مدینه را تشکیل می دادند. در يك یا دو مورد استثنائی قبایل با بقیه عشیره خود مخالفت می ورزیدند، و این خود نشانه آن است که وفاداری و امانت قوی نسبت به عشیره خود وجود نداشته است. پس جای تعجبی نیست که نام طوایف و عشایر در قانون اساسی (که بعداً در باره آن بحث خواهیم کرد) برده نشده است و فقط نام قبایل دیده می شود. وضع

جدید که در اثر آمدن محمد ﷺ به مدینه به وجود آمده بود منازعات بین قبایل را کم کرد چنانکه دیگر خبری دربارهٔ چنین منازعاتی شنیده نمی‌شود و جنگها بیشتر بین طوایف بوده است. پس از رحلت محمد ﷺ که افق در نتیجه فتوحات مسلمانان وسیعتر شده بود، رقابت بین اوس و خزرج از صورت سیاسی بیرون آمد و هر دو طایفه به یکدیگر ملحق شدند و تشکیل طایفهٔ انصار را دادند که به معنای یاری دهندگان محمد ﷺ است و نامی افتخاری است که به آنان داده شده است.

علت اصلی جنگها و منازعات مدینه آن بود که معتقدات و اخلاق چادر نشینی که مردم مدینه هنوز از آن متابعت می‌کردند برای زندگی کشاورزی در واحه‌ها مناسب نبود و هر چه زندگی در مدینه بر اثر افزایش جمعیت مشکلتر می‌گشت جنگها در می‌گرفت و خونباریخته می‌شد. برای مقابله با این وضع رسم خونخواهی چادر نشینان تنه‌اره و روشی بود که به کار برده می‌شد. یعنی اگر کسی صدمه می‌دید یا کشته می‌شد مردان قبیلهٔ او نظیر چنین معامله‌ای را با افراد خانواده یا قبیلهٔ دیگر می‌کردند «چشمی درازای چشمی و دندانانی به دندانانی..» قصاص ممکن بود شامل چشم یا قطع رشتهٔ حیات کسی بشود ولی چنانکه گفته شد معمول شده بود که به جای قطع رشتهٔ حیات، یک صد شتر بدهند، در فضای باز جلگه‌ای این روش قابل تحمل بود زیرا رابطه بین مردم ضعیف بود. ولی در نواحی محدود واحه‌ای راضی کننده نبود، زیرا در این نواحی منازعات مکرر رخ می‌داد و احتمال عدم موافقت در بارهٔ این، که چیزی جایگزین چیز دیگر شود، بسیار بود. در قرن ششم میلادی اتفاقی افتاد که یکی از رؤسای یکی از قبایل کشته شد و برادر او به

خونخواهی برادر بر خاست و جوانی از طایفه قاتل را کشت ولی زندگی  
اورا حتی معادل بند کفش برادر خود نمی دانست. طایفه جوان مقتول  
طبعاً با این امر موافقت نداشتند و جنگ بزرگی بین دو طایفه در  
گرفت که چند سال طول کشید. اگر این واقعه دروادی رخ داده بود  
بیگمان زندگی در مدینه مشکل می شد.

در دوره پیش از اسلام در عربستان مردانی بودند که دارای عقل و  
درایت بودند و به عنوان حکم در منازعات مکرر مداخله می کردند ،  
اما دخالت آنان بدان شرط بود که دو طرف چندان خشمگین نباشند  
که حکمیت را نپذیرند.

حکم قدرتی در اجرای حکم نداشت ، بلکه هر دو دست را به قید  
قسم متعهد می ساخت که رأی اورا بپذیرند ولی این روش در منازعات  
واحه ها کمتر عملی می شد و بسیار کند پیش می رفت. آنچه آنها لازم  
داشتند قاضی و داوری بود که قدرت اجرایی داشته باشد. اگر صلی الله علیه و آله  
به مدینه نیامده بود امکان داشت که چنین اداره ای تأسیس یابد .  
گرچه یافتن کسی که همه به بیطرفی او ایمان داشته باشند کار  
دشواری بود. یکی از افراد برجسته قبیله خزرج عبدالله بن ابی بود  
که در جنگ بوعیث بیطرف مانده بود و اگر صلی الله علیه و آله به مدینه  
نیامده بود احتمال داشت که وی سلطان مدینه بشود، ولی حتی برای  
او نیز مشکل بود که تمام مردم مدینه را متحد کند ، زیرا همیشه  
مورد سوء ظن بود به اینکه از یک طرف جانبداری می کند.

برای مردم مدینه که در این موقعیت بودند آنچه در دعوت  
صلی الله علیه و آله جلب توجه می کرد حقیقت این بود که او بی طرف خواهد



ماندو در منازعات آنها بیطرفانه داوری خواهد کرد. یکی از جده‌های  
 ﷺ از قبایل مدینه بود ولی این تأثیری نداشت و چنین رابطه‌ای دلیل  
 آن نبود که ﷺ بیطرفی خود را نقض کند. در ضمن ﷺ  
 مراقب بود خود را به وسیله ازدواج با هیچک از قبایل مکه مربوط  
 نکند. آنچه به ﷺ یاری می‌کرد این بود که مردم مدینه در نتیجه  
 معاشرت با یهودیان به عقاید آنان آشنا شده بودند و می‌دانستند که  
 این قوم در انتظار آمدن مسیح موعود هستند لذا وقتی ﷺ  
 ادعای پیغمبری کرد زود او را پذیرفتند و چون مردم مکه او را طرد  
 کرده بودند جایی برای سوءظن وجود نداشت که مثلاً وی جاسوس مکه  
 باشد و برای توسعه نفوذ یا قدرت مکیان در مدینه کار کند.

بنابر این به دلایل چندی ﷺ مورد قبول و پذیرش مردم  
 مدینه قرار گرفت چه آنان امیدوار بودند که وی از زحماتی که دارند  
 نجاتشان خواهد داد و صلح جدید و پایداری برای آنان خواهد آورد.  
 با این افکار بود که به هفتاد و پنج تن از آنان در عقبه به ﷺ وعده دادند  
 که مانند اقوام خود از وی دفاع کنند. این وعده راه را برای هجرت  
 باز کرد.

### هجرت

حتی پیش از آنکه پیمان بسته شود (آغاز ماه ژوئن ۶۲۲) يك  
 یا دو تن از پیروان مکه‌ای ﷺ خود را به مدینه انتقال داده بودند.  
 پس از امضای پیمان که رفتن ﷺ مسلم گردید. دسته‌های کوچکی  
 از پیروان او پنهانی عازم مدینه شدند. احتمال دارد که کفار مکه از  
 آنچه رخ می‌داد آگاهی نداشتند به هر صورت کوششی برای مداخله

در کار آنان صورت نگرفت و همگی سالم به مدینه رسیدند. این مسافرت که در گرمای شدید تابستان صورت گرفت و طول آن ۲۵۰ میل بود نه روز طول کشید در چنین حال هفتاد نفر از پیروان به مدینه وارد شدند و مورد استقبال اهالی آنجا قرار گرفتند تنها افرادی که در مکه باقی ماندند و در صدمه هاجرت بودند خود محمد ﷺ و ابو بکر و تعدادی از خانواده های آنان بودند.

محمد ﷺ با فرستادن پیروانش به مدینه، پیش از خود، می خواست مطمئن شود که اشتباه طایف تکرار نخواهد شد و اگر اهالی مدینه تغییر رأی دادند لا اقل پیروان مکی خود را همراه خواهد داشت تا از او حمایت کنند. از طرف دیگر می خواست تا آخرین لحظه ممکن در مکه بماند و مانع از ایجاد تزلزل رأی در بین مسلمانان شود. محمد ﷺ تا واسطه سپتامبر نتوانست از مکه خارج شود و کمی پیش از آن مردم مکه به او سوء ظن پیدا کرده در صدد کشتن وی برآمده بودند.

از هر قبیله يك تن با هم پیمان بسته و تصمیم گرفته بودند او را بی درنگ با شمشیر بکشند تا خون او به گردن تقریباً تمام مردم مکه باشد و انتقام گیرندگان چاره ای جز دریافت خون بها نداشته باشند. روایت بر این است که این نقشه عقیم گذاشته شد چه محمد ﷺ شبانه از مکه خارج گردید و عبای سبز خود را بر تن علی ﷺ پوشانید و او را در بستر به جای خود خوابانید. این تدبیر زود کشف شد ولی مهاجمان صدمه ای به علی ﷺ وارد نیاوردند و در این هنگام محمد ﷺ مسافرتی

هر چند ممکن است این داستان کمی مشکوک به نظر برسد ولی دلیل آن است که عَلَيْهِ السَّلَام در خطر بوده و مخصوصاً در زمان بین مهاجرت از مکه به مدینه این خطر بیشتر احساس می شده است. تا زمانی که عَلَيْهِ السَّلَام در مکه بود شخصی حمایت او را به هنگام بازگشت از طایف بر عهده گرفته بود و همینکه به مدینه می رسید اهالی آنجا از او حمایت می کردند ولی اگر خون او در بین این دو شهر ریخته می شد قاتل مصونیت داشت لذا برای احتیاط و اجتناب از هر نوع خطر مجبور بود جانب همه گونه احتیاط را مرعی دارد چند شتر از طوایف چادر نشین اطراف مکه اجاره شده بود و او و ابوبکر به اتفاق خانه های خود را ترك کردند ولی به جای آنکه عازم مدینه شوند در غاری مخفی شدند که از مکه چندان دور نبود و یکی از آزاد شدگان ابوبکر عادت داشت که گوسفندان خود را در نزدیکی آنجا بچراند، عَلَيْهِ السَّلَام و ابوبکر سه روز در این غار ماندند تا آنکه سرو صدایی که مردم مکه به راه انداخته بودند فرو نشست. سپس با شتر و به اتفاق چهار نفر دیگر از آزاد شدگان ابوبکر عازم مکه شدند و صاحبان شترها آنان را هدایت می کردند. اغلب مسافت را از بیراهه طی کردند و با دشمنی برخورد نکردند. آخر الامر در ( ۲۴ سپتامبر ۶۲۲ ) به اقامتگاه قُبَا در حاشیه مدینه رسیدند. هجرت به سلامت به پایان رسیده بود.

کلاماً عربی هجرت ( که در لاتین گاهی هنوز به صورت هجیره ظاهر می شود ) به معنای فرار نیست بلکه بهترین معنی آن بیرون رفتن از شهری به قصد شهر دیگر است که اغلب مربوط به انتقال جغرافیایی

نیست بلکه بیشتر به معنای جدا شدن از يك خانواده و قبیله و ملحق شدن به قبیله دیگر است . مبدأ تاریخ اسلام که تمام نویسندگان مسلمان به کار برده اند روز اول سالی است که هجرت صورت گرفته است یعنی (۱۶ ژوئیه ۶۲۲) . محاسبه تاریخ اسلام و مسیحی کاردشواری است چه هر سال قمری اسلامی ۳۵۴ روز یا دوازده ماه قمری است بنابراین يك قرن مسیحی تقریباً شامل ۱۰۳ سال اسلامی می شود.

مسکن نهایی محمد ﷺ قبا نبود. دو یا سه روز بیشتر در آنجا توقف نکرد و طی آن ظاهراً خواسته است اطلاعات سیاسی خود را تکمیل کند و احتمال دارد که فوری پی برده است که این محل برای اقامت دائم جای مناسبی نیست. این محل در زمینهای مرتفعی در جنوب واحة قرار داشت در نزدیکی آن دو قبیله قوی یهود و متحدان عربی آنها می زیستند که به دعوت محمد ﷺ نگرویده بودند و نزدیک شدن به آنها موجب ضعف او می شد.

پس محمد ﷺ يك روز صبح از آنجا بیرون آمد و به زمینهای پست و فراختری یکی دو میل در طرف شمال عازم شد و تصمیم گرفت خود محل اقامت را انتخاب نکند بلکه هر جا شتر وی از رفتن باز ایستاد در همان جای رحل اقامت بیفکند. اتفاقاً جایی که شتر ایستاد محل کاملاً مناسبی بود. قطعه زمینی بود متعلق به دو یتیم، در منطقه قبیله بنی النجار، که یکی از جده های محمد ﷺ بدان تعلق داشت. به عللی که معلوم نیست قبیله های بی شمار و متعددی بودند که اهمیت آنها از لحاظ سیاسی حتی کمتر از قبیله های کوچک بود و رئیس مقتدری نداشتند بدین ترتیب محمد ﷺ امنیتی نسبی برای خود به دست آورد و از نظر به جانبداری

از یکی از عوامل مدینه خودداری کرد.

محمد ﷺ در یکی از خانه‌های مجاور ساکن شد و قطعه زمینی را که اختصاص به خشک کردن خرما داشت از آنها خرید و شروع به ساختن خانه‌ای برای خود کرد. پیروان مکه‌ای و مدینه‌ای اورایاری می‌کردند و خود نیز در این کار شرکت می‌جست. هر چند هدف اول از این ساختمان تهیه پناهگاهی برای خود محمد ﷺ و خانواده او و ایجاد تسهیل برای اداره امور بازرگانی بوده (۱) است، ولی احتمال دارد که قسمتی از آن را به عبادت مسلمانان اختصاص داده باشد چنانکه با گذشت زمان این جنبه اهمیت بیشتری پیدا کرد و پس از رحلت رسول و زوجة‌های او از آن ساختمان و حیاط آن فقط به عنوان مسجد استفاده شد و پس از تغییر و تبدیلهای بسیار که در آن داده شد اینک به صورت مسجد پیغمبر در مدینه در آمده است. در جانب مشرق این حیاط ساختمانهایی برای زنان محمد ساخته شده بود. کار ساختمان این خانه در اوت سال ۶۲۳ پایان یافته است.

### ماه‌های اول در مدینه

عملاً از وقایع مهمی که در شش ماه اول زندگی محمد ﷺ در مدینه رخ داده است اطلاع و تاریخ صحیح در دست نیست ولی شک نیست که در این مدت وقایع بسیاری رخ داده است. ناچار نویسنندگان شرحی درباره چگونگی وضع جدید نوشته‌اند و تعیین تاریخ نزول آیات مختلف قرآن که در این شش ماه نازل شده است دارای اهمیت

---

(۱) از تاریخ چنان معلوم می‌شود که اصلاً قصد آن حضرت بنای مسجد بوده است و در اطراف آن خانه‌هایی برای خود و خواص اصحاب ساخته شده.

بسیار است. ولی باید فقط به ذکر بعضی از مطالب گه از این نوشته‌ها استنباط می‌شود اکتفا کنیم، با اینکه ممکن است بعضی از آنها صحیح نباشد. حوادثی که رخ داد حوادثی نبود که مانع توسعه و ادامه مهاجرت شده باشد. پس از هیجان و آشوب سالهای بعد هیچ خاطره تاریک و غبار آلودی باقی نمانده بود. در دوره فقدان وقایع قابل توجه باید به شرح وضعی بپردازیم که محمد ﷺ و مهاجران پس از مهاجرت از مکه در ماههای اول با آن رو به رو شدند.

سندی در دست است که به نام قانون اساسی مکه معروف است. در صحت این سند شك نیست ولی تاریخ آن مورد شبهه و تردید است. بعضی از محققان آن را متعلق به آغاز دوره مدینه می‌دانند که البته طبیعی‌تر به نظر می‌رسد. از طرف دیگر در این مدرک نشانه‌هایی است که مؤید آن است که موضوعاتی از منابع مختلف در آن گنجانده شده است. گروهی از مطالب کاملاً شبیه عناوین گروه دیگر است و یک مطلب عیناً تکرار شده است. باز هر چند از گروههای یهودی چندی نام برده شده ولی اشاره مستقیمی به سه قبیله مهم یهودی نرفته است و ظاهراً آنها را به طور ضمنی شامل این قانون می‌دانستند زیرا به سختی می‌توان گفت که توجهی بدانها نبوده است. سومین قبیله یهود در زمستان سال ۶۲۷ از بین رفت و ظاهراً این سند پس از آن تاریخ به صورت کنونی در آمده است. اما دلایل نشان می‌دهد که بعضی از مواد آن قدیمی‌تر هستند و شاید متعلق به موافقت نامه بین محمد ﷺ و مردم مکه باشد به هنگامی که وی هنوز در مدینه بود. لذا می‌توان این سند را به عنوان شاعدی برای نشان دادن اوضاع سیاسی مدینه در آغاز سکونت محمد ﷺ

در آنجا دانست .

بند این گونه شروع می شود :

## بسم الله الرحمن الرحيم

این نوشته ای از محمد پیغمبر است بین مؤمنان و مسلمانان قریش و یثرب (مدینه) و کسانی که از آنان پیروی می کنند و به آنان پیوستگی دارند و همراه آنان جهاد می کنند آنان تنها جامعه ای هستند که از مردم دیگر ممتاز و مشخص می باشند .

پس از آن در نه ماده از نه قبیله یا گروه نام می برد و می گوید که هر يك مسئول پرداخت خونبهای هر يك از افراد خود می باشند و باید دیت هر يك از اعضای گروه را در صورت اسیر شدن بپردازند . دسته یا گروه نخست که باید نام برد مهاجران قریش هستند که پیروان محمد ﷺ در مکه بودند . هشت قبیله دیگر قبایل عرب یا گروهی از قبایل هستند که سه قبیله آن از عشیره اوس و بقیه از عشیره خزرج هستند . از بقیه مواد ، بیست ماده آن مربوط به جنبه های مختلف روابط پیروان و مؤمنان با یکدیگر و با کفار است و پانزده ماده آن در باره حقوق و وظایف یهودیان می باشد ، تعدادی از گروه های یهود ذکر شده است ، بیشتر نه به اسم بلکه به طور ساده و مختصر تحت عنوان ' یهودیانی که به فلان قبیله عرب منضم و ملحق است .

این سند یعنی قانون اساسی مدینه نشان می دهد که مردم این شهر واحد سیاسی جدیدی را که همان امت یا جامعه باشد تشکیل می دادند

که از بعضی جهات شباهت به اتحادیه‌ای از قبایل یا طوایف چادر نشینی داشته است و در اثر معاهدات و پیمان‌هایی به هم مربوط و متصل می‌شدند. نمونه‌های چندی از این گونه اتحادیه‌ها در تاریخ پیش از اسلام نیز دیده شده است که به ریاست افراد برجسته می‌زیستند. در این مورد رجحان و برتری نظامی عمر بن الخطاب نبود که مردم را به سوی او جلب می‌کرد و آنان را به قبول وی وامی‌داشت بلکه آنچه مؤثر بود مقام پیامبری او بود. پس اساس این جامعه بر اصول دینی پایه‌گذاری شده بود. برای اعراب زمان عمر بن الخطاب مشکل بوده است که به فکر تشکیل واحد سیاسی دیگری باشند جز آنچه با آن آشنا بودند یعنی طایفه یا گروه خویشاوند. در منابعی که مر بوط به زندگی عمر بن الخطاب است داستان‌هایی است که در آنها از امپراتور روم به نوعی سخن رفته است که گویی وی شیخ چادر نشینی بوده که مردان عشیره او را در معامله و رفتار با خود عدیل و نظیر خود می‌دیده‌اند.

جامعه در روابط خود با دوست یا دشمن مانند عشیره رفتار می‌کرده است. عمر بن الخطاب نیز مانند دیگر رؤسای عشایر از غنایم سهمی می‌برده است ولی به جای يك چهارم يك پنجم به او می‌داده‌اند. به این علل و دلایل دیگر تعریف جامعه به فوق عشیره و امت چنانکه معمول بوده بی‌مناسبت نبوده است.

عمر بن الخطاب به هیچ وجه عنوان فرمانروایی این امت را نداشته است مهاجران حکم قبیله‌ای را داشتند و عمر بن الخطاب رئیس آنان به شمار می‌رفت ولی هشت قبیله دیگر نیز بودند که هر يك رئیس جداگانه داشتند. اگر این قانون را دلیل شاهد بگیریم عمر بن الخطاب از رؤسای قبایل دیگر



به دو علت متمایز بوده است. نخست آنکه مردمی با این سند، که ما آن را قانون اساسی می نامیم، توافق کردند و اینان مؤمنان بودند یعنی کسانی عَلَيْهِ السَّلَام را به پیغمبری پذیرفتند و آنچه را بر او صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ نازل می شد به عنوان قانون قبول کردند و برای وی امتیاز در یافت وحی قایل شدند. این جماعت درایت و حکمت عَلَيْهِ السَّلَام را مخصوصاً در مسائل دینی بیش از افراد عادی می دانستند. البته مفهوم آن این نیست که عقاید او را در غیر موارد وحی قبول نداشتند.

دوم آنکه هر چند در قانون اساسی ذکر شده است هر گاه در موردی اختلاف داشتید آن را به خدا و عَلَيْهِ السَّلَام رجوع کنید، چنین به نظر می رسد که در عهد نامه منعقد بین عَلَيْهِ السَّلَام و مسلمانان این نکته گنجانیده شده است که اومی تواند بین رقیبان نقش حکم را داشته باشد و به ایجاد صلح در واحه یاری کند. در یکی از قسمت های قرآن (سوره ۱۰ آیه ۴۸) یکی از کارهای پیغمبر این گونه وصف شده است.

وَلِكُلِّ أُمَّةٍ رَسُولٌ فَإِذَا جَاءَ رَسُولُهُمْ قَضِيَ بَيْنَهُم بِالْقِسْطِ  
وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ.

اگر عقیده اهالی مکه نسبت به عَلَيْهِ السَّلَام هنگام سکونت در مکه تا این اندازه بوده است ناچار عده ای نیز احساس تردید می کرده اند ولی هنگامی که وی به مدینه آمد بر قدرت و اهمیت او افزوده شد. در قرآن اشاراتی به گروه مؤمنان هست دایر به این، که برای رفع منازعات خود به عَلَيْهِ السَّلَام رجوع کنند و چون این اشارات تکرار گردیده چنین بر می آید که این دستور همیشه مورد توجه و اطاعت واقع نمی شده است. می توان گفت که در این ماه های اول عَلَيْهِ السَّلَام فقط رهبری

دینی جامعه مدینه را به عهده داشته و از لحاظ سیاسی فقط رئیس قبیله مهاجران به شمار می رفته است و احتمال دارد که مقام او از بعضی از رؤسای قبایل دیگر کمتر بوده است و همچنین محتمل است که مقام سیاسی محمد در مدینه پس از توفیق او در جنگ بدر که در مارس ۶۲۴ رخ داد بالا رفته باشد اما پس از آن نیز یکی دو تن دیگر بودند که هنوز از لحاظ مقام و نفوذ با وی برابری می کردند و اهمیت بلامعارض سیاسی محمد صلی الله علیه و آله پس از شکست محاصره مدینه در آوریل ۶۲۷ آغاز گردید.

اغلب قبایل عمده عرب مدینه حتی پیش از هجرت هم صلی الله علیه و آله را به پیغمبری قبول کرده بودند. ظاهراً این عمل به صورت قبیله انجام گرفته است و از این رو تمام اعضای قبیله اسماً به اسلام گرویده اند. در این مورد استثنایی نیز وجود داشته است مخصوصاً گروهی از قبایل به نام اوس و منات از قبول صلی الله علیه و آله سرباز زدند. خانه ها و مراتع این قبایل در بین قبایل بزرگ نصیر و قریظه پراکنده بود احتمال دارد با آنها روابط نزدیک داشته اند. وقتی یهودیان از قبول پیغمبری محمد صلی الله علیه و آله خودداری کردند طبعاً این قبایل نیز از آنها طرفداری نمودند. فقط هنگامی که عده ای از رؤسای این قبایل کشته شدند یا مردند، بقیه به طور کلی محمد صلی الله علیه و آله را پذیرفتند و بعد آنها را جزء قانون اساسی در آوردند (مانند: اوس). علاوه بر این قبایل که ابتدا وارد جامعه اسلام نشدند یک نفر نیز بود که اهمیت بسیار داشت و چون با سیاست قبیله خود مبنی بر پذیرفتن محمد صلی الله علیه و آله به پیغمبری موافق نبود مدینه را ترک کرد و عازم مکه شد. او مردی بود به نام ابوعامر راهب، و لقب

راهب بدان جهت به وی داده شده بود که در سالهای پیش از ۶۲۲ خودسری عجیبی از خود نشان داده بود و به اندازه‌ای مخالف محمد ﷺ بود که به اتفاق عده‌ای از پیروان مدینه ای خود به سال ۶۲۵ در احد با یاران محمد ﷺ به جنگ بر خاست داستان زندگی این شخص چنانکه نشان می‌دهد باید با آغوش باز اسلام را پذیرفته باشد و دشمنی و خصومت او با اسلام بسیار شگفت انگیز است. احتمال دارد که پیشرفت سریع محمد ﷺ و افزایش ارج وی حسداورا برانگیخته و به مبارزه با محمد ﷺ تحریک کرده است. این گونه مخالفت منکرانه و کافرانۀ کسانی مانند ابوعامر را، که از پذیرفتن محمد ﷺ به پیامبری امتناع ورزیدند، باید با مخالفت رسمی مسلمانان تفاوتی نهاد. دستۀ اخیر کسانی بودند که رسماً مسلمان شدند ولی از لحاظ سیاسی با محمد ﷺ مخالفت داشتند. این گروه را معمولاً گروه «منافقان» می‌خوانند و مخالفت آنان پس از پیروزی محمد ﷺ در بدر به سال ۶۲۴ ظاهر شد.

ابتدا قرآن بدانها اشاره می‌کند و می‌گوید «کسانی که قلبشان بیمار است» و پس از جنگ احد در سال ۶۲۵ از آنان به نام «منافقان» یاد می‌کند و شاید علت آن باشد که پس از تمهید جنگ از آن خارج شدند اینان از سال ۶۲۵ تا ۶۲۷ مانند خاری در پهلوی محمد ﷺ بودند ولی در سال ۶۲۷ قدرت محمد ﷺ به اندازه‌ای افزونی گرفت که توانست بر آنان حمله کند و ضعفشان را آشکار سازد. در سال ۶۳۰ نامی از دستۀ دیگر از منافقان برده می‌شود ولی این گروه ظاهرأ شبیه دستۀ اول نبوده اند هر چند ممکن است که رابطه ای با

ابوعامر راهب داشته‌اند.

یهود مدینه نیز از مخالفان محمد ﷺ به شمار می‌رفتند هر چند نام یکی دوتن از آنان که مسلمان شده بودند برده شده است.

یهودیان مدتها بود که در مدینه بودند و حضور آنان سبب توسعه و نشر عقاید یکتا پرستی گشته و قبول پیامبری محمد ﷺ را تسهیل کرده بود، یهودیان در حدود بیست قبیله بودند که معروفترین آنها نضیر و قریظه و قینقاع بودند. قبیله اخیر چنانکه در بالا ذکر شد دارای زمینی نبودند بلکه بازاری را اداره می‌کردند و کارشان بیشتر زرگری و اسلحه سازی بود. دو قبیله دیگر دارای زمینهای حاصلخیز در قسمتهای مرتفع و جنوب واحة مدینه بودند و عده‌ای از اعراب در بین آنان می‌زیستند که از لحاظ سیاسی وابسته به آنان بودند. هر قبیله یهود با یک یا دو قبیله قوی عرب متحد بود و احتمال دارد که شریك ضعیفتر به شمار می‌رفته‌است. بدین ترتیب قبایل یهود تقسیم شده بودند و گروه واحدی را تشکیل نمی‌دادند.

هر چند ظاهراً یهودیان مدینه علم و اطلاع چندانی درباره دین و کتابهای دینی مردم مدینه نداشتند ولی می‌توانستند درك کنند که ادعای محمد ﷺ بامعتقدات یهود منافات دارد، و در این موضوع همه موافقت داشتند. یهودیان چون متحد قبایل عرب به شمار می‌رفتند از یک جهت جزء جامعه یا امت جدید مدینه محسوب می‌شدند و احتمال دارد که بین بعضی از آنان و محمد ﷺ پیمانی بسته شده بوده‌است. اما انتظار محمد بیش از این بود و بیشتر وقت خود را پس از هجرت صرف کسب معلوماتی از یهودیان در باب پیغمبری خود کرده است.

عَهد از همان ابتدای کار می دانست آیاتی که برای او نازل می شود شباهت به تعلیمات یهود و مسیحیت دارد و شاید ادعای او بر پیامبری نیز بر اساس همین شباهت پیامهای او با پیامبران سابق بوده است. از قرار معلوم پس از مهاجرت بود که عَهد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ در صدد آن بر آمد که اساس دین خود را بیشتر بر اساس دین یهود پی ریزی کند و چنانکه گفته شده است، پیش از مهاجرت از مکه، در صدد بوده است که مانند یهودیان، اورشلیم را قبله قرار دهد و ظاهراً روزهٔ عاشورا که روز مسیح یهودیان است توسط مسلمانان مدینه حفظ می شده است و روز جمعه که روز پرستش یا نماز جماعت است و اختصاص به مسلمانان دارد با روز شنبه بی ارتباط نیست چه در این روز بود که یهود خود را برای نماز «سبت» آماده می کردند.

قبول و وارد کردن بعضی از رسوم و آداب یهود سبب جلب توجه و دوستی آنان نشد. عَهد علاقهٔ بسیار داشت که از طرف یهودیان شناخته شود زیرا می دانست، که بی یاری و حمایت آنان، ساختمان افکاری که می خواست دین خود را بر روی آنها استوار سازد در حال فرو ریختن است حتی حاضر بوده است به آنان اجازه دهد که بعضی از اصول پرستش خود را حفظ کنند اما بدان شرط که او را مانند یکی از انبیای خود بشناسند. ولی یهودیان در صدد مخالفت بر آمدند و ازدانش خود که در عهد عتیق است برای انتقاد از این ادعای او که می گفت «قرآن کلام خداست» استفاده کردند. در يك محیط سواد و معرفت، برای آنان بسیار آسان بود، که ثابت کنند که قرآن در بعضی از مسائل با عهد عتیق تفاوت دارد و غلط است و نتیجه بگیرند که قرآن کلام خدا

نیست و محمد ﷺ نیز پیامبر او نمی باشد، به این علت مهم بود که محمد ﷺ در ماههای اول مبارزه این مسئله را یکی از کارهای عمده خود قرار داده بود.

به طور کلی موقعیت محمد ﷺ در این ماهها هنوز خطرناک بود. امتی در مدینه تشکیل یافته بود ولی هنوز کاملاً مستقر و مستحکم نشده بود و در حقیقت کوششی به کار رفته بود که وی موجودیت خود را برای مردم مدینه به اثبات رساند. زندگی در واحه ها هنوز بر اساس عادات قدیمی می گذشت از محاربه با دیگر مسلمانان خودداری می کردند و از مهاجران پذیرایی می شد و آنچه در آن زمان از جهات دینی از مسلمانان انتظار می رفت فقط شرکت در نماز جمعه بود. کسانی که در دین جدید تعصب بیشتر داشتند در نماز صبح و عصر و اغلب در نماز ظهر شرکت می کردند ولی دلیل کافی در دست نیست که نشان دهد نمازهای پنجگانه در زمان محمد ﷺ کاملاً اجرا می شده است. شب زنده داری که معمول مسلمانان مکه بود چندی بعد از هجرت در اثر نزول آیه ای متوقف گردید و آن زمانی بود که مسلمانان بیشتر وارد کارهای دنیوی شده بودند.

از آن پس آنچه جریان زندگی را در مدینه تعیین می کرد افکار قرآن نبود، اما در هدایت محمد ﷺ در راه خطرناکی که در پیش گرفته بود، اهمیت بسیار داشت و هنگامی که اقدام در باره امری لازم می آمد اجرای اعمالی را دستور می داد که منجر به درك کامل اصول دینی می شد. و یکی از نکات مهم این پیشرفت مناسب بودن افکار محمد ﷺ با وضع مدینه است هر چند که این افکار در مکه بیان شده باشد

در پیشرفت و رشد تمام ادیان بزرگ دنیا معلوم شده است که افکاری که برای يك جامعه كوچك بیان شده است غالباً جنبه عمومیت و کلیت دارد . مطابقت اصول دین اسلام در مکه و مدینه نمونه بارزی از این حقیقت است . موضوع مهمی که در مکه مورد توجه بود افزایش ثروت و تجارت و استفاده های فردی بود . در مدینه چنین چیزی که بامکّه قابل مقایسه باشد وجود نداشت . تنها وجه مشترك آنها این بود که در هر دو شهر مردم چادر نشین که دارای اخلاق و افکار بیابانی بودند می کوشیدند که زندگی آرامی داشته باشند دین اسلام هر چند سعی کرده بود که در مکه این مسئله را حل کند موفق نشده بود ، ولی اهالی مدینه که نیز با چنین مسئله ای روبه رو شده بودند ، به آن توجه کردند و همین توجه سبب شد که محمد ﷺ را نبی یا پیامبر بدانند . اساس زندگی مسلمانان مدینه بر عوامل اقتصادی و مادی چندی گذاشته شده بود . برای مواجه شدن با مشکلاتی که گاه به گاه به وجود می آمد محمد ﷺ از افکار قرآن الهام می گرفت و تناسب این افکار با اوضاع و مشکلات مختلف ، اساس موفقیت او می بوده است . عامل دیگر در موفقیت او حکمت و هنر و صبر و تدبیر خود او بوده است . وقتی شخص جریان وقایع را مرور می کند به اهمیت این افکار پی می برد مخصوصاً به این نکته که چگونه با نیازمندیها و مسائل مردم مدینه مطابقت داشته است .

## خشم مردم مکه

### شکرکشی یا غزوة اول

در سال ۶۲۳ م یکی دو واقعه داخلی رخ داده است که مهمترین آنها ازدواج محمد با عایشه بوده است که در آوریل آن سال صورت گرفت و عروس بیش از نه سال نداشت. يك يا دو سال پیش محمد ﷺ از او در مکه خواستگاری کرده بود ولی او هنوز در خانه پدر می زیست و حتی احتمال دارد پس از آوریل ۶۲۳ نیز چند ماهی در خانه پدر خود مانده و بعداً به یکی از حجره های خانه محمد ﷺ انتقال یافته است. این خانه محل سکونت و دفتر کار محمد ﷺ و مسجدی برای « نماز جماعت » مسلمانان بوده است.

منابع در باره این سالهای حساس چیزی نگفته اند فقط به این نکته اکتفا کرده اند که عایشه در خانه شوهر نیز اغلب سرگرم بازی با بازیچه های خود بوده است و گاهی محمد ﷺ نیز با او همبازی می شده



است، مثلاً از عایشه می پرسیده است (با اشاره به اسمهای بازیچه) اینها چیست و او احتمالاً جواب می داده است « اسمهای سلیمان ». رابطه زناشویی بین مردی پنجاه و سه ساله و دختری ده ساله، که حکم پدر و فرزند را دارند، به نظر عجیب می آید. ولی باید به خاطر داشت در قرن هفتم در عربستان دختران زودتر به سن بلوغ می رسیدند. از این پیوند اولادی به وجود نیامد ولی دلایلی در دست است که نشان می دهد عایشه در بین هووهای خود زندگی خوشی را می گذرانیده است. این ازدواج بیشتر به علت سیاسی و ایجاد خویشاوندی بین ابوبکر و محمد ﷺ صورت گرفته است و همان طور که خود ابو بکر معاون عمده محمد ﷺ به شمار می رفت دختر او نیز زن سوگلی محمد ﷺ بود هر چند که وی پس از وفات خدیجه و سه سال پیش از ازدواج با عایشه با زنی بیوه به نام سوده که سی سال داشت ازدواج کرده بود.

اغلب ازدواجهای خود محمد ﷺ و دختران و دوستانش به علل سیاسی بوده است. در اوت همان سال دختر محمد ﷺ فاطمه به ازدواج علی عیبه پسر عم محمد ﷺ در آمد و این خود نشان آن بود که علی از متحدان نزدیک بوده است. عثمان بن عفان که بعدها خلیفه سوم شد نیز در مکه با دختر بزرگتر محمد به نام رقیه ازدواج کرد.

از بین وقایعی که در سال ۶۲۳ رخ داده و در تاریخ اهمیت بسیار دارد غزوات علیه کاروانهای مردم مکه است که نخستین آنها در ماه ربیع همان سال صورت گرفته است، محمد ﷺ عم خود حمزه

را ( که فقط چهار سال از او بزرگتر بود ) با سی تن شتر سوار مأمور کرد که به سواحل دریای احمر بروند و در کمین کاروانهای مکه که از سوریه باز می گشتند بنشینند. جز این حقیقت که مسلمانان کاری انجام ندادند از جزئیات این واقعه اطلاع دیگری در دست نیست. به طوری که گفته شده است سید مرد ، تحت ریاست ابو جهل دشمن عَلِيٍّ عَلَيْهِ السَّلَامُ ، از کاروان حمایت می کردند و کثرت این عده خود بهترین دلیل بود که مسلمانان اقدامی نکنند. ظاهراً به نظر می رسد که در اقدام به جنگ خطری وجود داشته است زیرا یکی از رؤسای قبایل چادر- نشین که با هر دو طرف متحد بود مداخله کرده و مانع بروز جنگ شده است.

این نخستین غزوه ای است که توسط مُحَمَّدٌ و مسلمانان در سال ۶۲۳ برپا شده است. در آوریل همان سال یکی دیگر از رؤسای مسلمانان به اتفاق شصت نفر در صدد حمله به یکی دیگر از کاروانهای مکه بر آمده است، و حتی به روایتی یکی از مسلمانان تیرهایی نیز به سوی کاروانیان رها کرده است، ولی چون نیروی محافظان کاروان قویتر بوده است احتیاط را بر تهور و شجاعت ترجیح داده از قصد خود روی گردان شده اند. در حمله دیگری که در ماه مه صورت گرفت فقط هشت نفر به جاده ای که از مکه به سوریه می رود رسیدند ولی کاروان يك روز پیش از آن از آنجا گذشته بود. شکست این کوششها موجب ناامیدی مهاجران گردید.

برای رفع یأس و نومیدی مهاجران، یا به علل دیگری مُحَمَّدٌ عَلَيْهِ السَّلَامُ خود فرماندهی لشکر کشیهای دیگر را که در ماههای اوت و سپتامبر و

دسامبر صورت گرفت عهده‌دار شد ولی همه آنها نیز با عدم موفقیت  
 مواجه گردید مشاهده آمادگی مردم در حمله به کاروانهای مکه در  
 شرایط مساعد، ایجاد نگرانی بسیاری در مردم مکه کرد و در ضمن به  
 چادر نشینان آن منطقه نشان داد که عَلَيْهِ السَّلَام مرد کسب و کار است .  
 در نتیجه عده‌ای از طوایف و قبایل کوچک در صدد اتحاد با عَلَيْهِ السَّلَام  
 بر آمدند که احتمال دارد نوعی پیمان عدم تجاوز بوده است . علت  
 شکست عَلَيْهِ السَّلَام احتمالاً بیشتر به این جهت بوده است که دشمنان  
عَلَيْهِ السَّلَام در مدینه قبلاً اطلاع لازم را به مردم مکه می‌دادند.  
 واقعه‌ای که در سپتامبر رخ داد اوضاع و شرایطی را که عَلَيْهِ السَّلَام در  
 آن کار می‌کرد روشن می‌کند. دسته‌ای از چادر نشینان که دوست مردم  
 مکه بودند به یکی از مراتع نزدیک مدینه حمله کردند و عده‌ای از  
 شترهای مسلمانان را که در آنجا می‌چریدند به غارت بردند. همینکه  
 خبر به عَلَيْهِ السَّلَام و پیروانش رسید به تعقیب آنها پرداختند و پس از سه  
 روز نتوانستند به غارتگران برسند و آنها به دوستان خود ملحق شدند و  
عَلَيْهِ السَّلَام با پیروانش به مدینه باز گشتند. هر چند این وقایع ساده به  
 نظر می‌رسد ، ولی اثر بسیاری در آینده جامعه اسلام داشته است که  
 تحقیق و درك آن حایز کمال اهمیت است. نخستین سؤالی که پیش  
 می‌آید این است که عَلَيْهِ السَّلَام و پیروان او انتظار داشتند که زندگی  
 خود را پس از رسیدن به مدینه چگونه بگذرانند. این انتظار را نداشتند  
 که بتوانند در واحدها کشاورزی کنند و نیز متوقع نبودند که همیشه  
 متکی به مهمان نوازی مسلمانان مدینه باشند ، حتی مخالفت یهودیان  
 را نیز از نظر دور نداشتند. زیرا عَلَيْهِ السَّلَام تا زمان هجرت و حتی

چندین ماه پس از آن امیدوار بود که یهودیان او را به پیامبری قبول کنند. پس چنین بر می آید که محمد انتظار داشت مسلمانان زندگی خود را یا از راه تجارت یا از طریق حمله به کاروانهای مکه بگذرانند. البته احتمالات دیگری نیز وجود دارد، احتمال دارد درك کرده بودند که تازمانی که تجارت مکه با سوریه قطع نمی شد فرستادن کاروان به سوریه از طرف مسلمانان غیر ممکن بوده است و این کار هنگامی عملی می شده است که طوایف اطراف جاده مطمئن شده باشند که مسلمانان به اندازه کافی قوی هستند و، به جای حمله به کاروانها، می توانند از کالای آنان (در برابر دریافت مزد) حمایت کنند. دلایلی درست است که نشان می دهد که بعضی از مسلمانان از همان آغاز کار به کسب در بازار یهودیان مدینه می پرداختند.

چون به این مطالب توجه کنیم به خوبی آشکار می شود که محمد ﷺ حتی پیش از ترك مکه حمله به کاروانهای آن را به نظر امکان یا احتمال می نگریسته است. در حمله ها مسلمانان جنبه دفاعی داشتند. محمد ﷺ ممکن نبود از تشخیص این نکته غافل مانده باشد که اگر موفقیتی نصیب آنان می شد مردم مکه را به اقدام متقابل وامی داشت. پس مقصود اصلی او از این حمله های کوچک تنها بر انگیزختن مردم مکه و دعوت آنان به مبارزه بوده است. فهم این نکته برای وجدان صلحجوی عصر مابسی دشوار است که چگونه ممکن است يك پیشوای دین در جنگهای تهاجمی دخالت کند و حالت تجاوز در پیش گیرد (۱).

---

(۱) مؤلف کتاب در این باب اشتباه کرده است و خود آیه قرآن جواب آن را می دهد (سوره توبه آیه ۱۳) الا تقاتلون قوما نكثوا ايمانهم\*

نخستین توضیحی که درباره این طرز فکر عَلَيْهِ السَّلَام می توان داد آن است که حمله یا غزوه از اصول طبیعی زندگی اعرابیان است و حکم نوعی ورزش است نه جنگ. اعراب البته جنگهایی داشتند ولی جز در موارد مهم و جدی به آن دست نمی زدند، غزوه ها بیشتر به منظور شترها یا دیگر دامهای طوایف دشمن (و فقط در موارد جدی) به قصد گروه زنان صورت می گرفت. عده ای از حمله کنندگان سعی می کردند که طرف را غافلگیر کنند و شترها و شتربانان آنها را برابند و بقیه طایفه از دور مراقب یاران خود می شدند. در عین حال حمله کنندگان دارای نیروی فوق العاده بودند و مقاومت بسیاری در برابر آنها نشان نمی دادند. حمله کنندگان مجبور بودند فوری پیش از آنکه نیروی بیشتری برسد خود را به قبیله خود برسانند. اعراب معمولاً در صورت تساوی شرایط از جنگ تن به تن خودداری داشتند هرگز حمله نمی کردند مگر آنکه قبلاً از غفلت طرف مطمئن می شدند یا از لحاظ نیرو به برتری خود اعتماد داشتند هر چند این برتری موقتی باشد. از این جهت کشتار در غزوات بسیار کم و نادر بود. کشتن بسیار خطرناک بود چه ممکن بود طرف در صدد انتقام برآید لذا اگر دشمنی بین دو قبیله وجود نداشت حتی المقدور سعی می کردند از خون ریختن خودداری کنند. در قرن هفتم رسم بر این بود که اگر کسی بر حسب تصادف کشته می شد طایفه مقتول خونبایی را که شتر بود قبول می کرد و بعضی این کار را اهانت می دانستند و آن را قبول شیر

---

\* و هموا باخراج الرسول وهم بدؤ کم اول مرة. پس آغاز جنگ از طرف مشرکان بود نه از جانب مسلمانان.

به جای خون تلقی می کردند.

نکته دیگری که باید در نظر گرفت این است که محمد ﷺ و معاصران او به جامعه دینی نظر دیگری غیر از علمای مغرب زمین داشتند. در این دوره به نظر ما گروه دینی عده ای از افراد هستند که برای پرستش گروهی، دورهم جمع می شوند و شاید هدف و منظورهای محدود دیگری نیز داشته باشند.

ولی در نظر محمد ﷺ جامعه دینی مرکب از گروهی مردم بود که از هر جهت باهم متحد شده باشند و يك واحد سیاسی را تشکیل دهند. اصولاً فکر می کرد پیامبر کسی است که برای يك طایفه یا مردم مخصوص که يك واحد سیاسی باشد فرستاده می شود. از آنجا که عسیره محمد ﷺ هیچيك از آنها را نداشت او به کار بردن کلمه «امت» یا «جامعه» را برای گروه دینی و همه کسانی که پیام پیغمبر برای آنان بود و آن را پذیرفته بودند معمول کرد. در مکه جامعه اسلامی بی شباهت به جامعه دینی نوین غرب نبود ولی با هجرت این عقیده توسعه بیشتری پیدا کرد. اسلام اسمی است که باشد، دین يك جامعه سیاسی شد و این جامعه دیگر تنها يك جامعه سیاسی نبود بلکه دین به مرور زمان در اغلب جنبه های زندگی مردم رسوخ کرد. اعضای این جامعه سیاسی و دینی از آن پس راه دیگری جز انتخاب کلمه «امت» برای وصف جمعیت خود نداشتند، زیرا نه طایفه بودند و نه اتحادیه ای از طوایف و نه سلطنتی داشتند و اینها تنها واحدهای سیاسی بود که آنها می شناختند،

در غزواتی که ذکر شد تمام امت شرکت نمی جستند بلکه این کار فقط بر عهده مهاجران بود. غزوه بدر که در ماه مارس ۶۲۴ رخ

داد نخستین غزوه‌ای است که انصار (با مسلمانان مدینه) نیز در آن شرکت جستند. هر چند ممکن است بعضی از آنان در غزوات سابق نیز شرکت کرده باشند به‌طور کلی بیشتر افرادی که در غزوات شرکت می‌کردند، از مهاجران مدینه بودند خصوصاً هنگامی که رهبری غزوه با خود محمد ﷺ بود. امتیاز بین فعالیت‌های مهاجران و انصار در قرآن (سوره ۸ آیات ۷۳ تا ۷۵) منعکس شده است که درباره مهاجران چنین می‌گوید: «ان الذین آمنوا و هاجروا و جاهدوا باموالهم و انفسهم فی سبیل اللّٰه» و درباره انصار می‌گوید: «و الذین اوواو نصروا» ...

علت آنکه مهاجران در غزوات شرکت می‌کردند آن بود که محمد ﷺ تصور می‌کرد که با آنان بدرفتاری کرده‌اند. در یکی از آیات قرآن درباره آنان چنین می‌گوید: «هاجروا من بعد هافتنوا ثم جاهدوا و صبروا» (سوره ۱۶ آیه ۱۱۱) مقصود از «جاهدوا» به جنگ رفتن و جهاد کردن است. و در آیه دیگر «سوره ۲۲ آیه ۴۰» علت این گونه رفتار با مردم مکه را دشمنی‌های آنان تفسیر می‌کند و می‌گوید:

«اذن للذین یقاتلون بانهم ظلموا و ان اللّٰه علی نصرهم لقدير. الذین اخرجوا من ديارهم بغير حق الا ان یقولوا ربنا اللّٰه...» می‌توان گفت که این آیه پاسخی است به شکایت بعضی از مسلمانان اسمی مدینه که عقیده داشتند غزوات امنیت تمام مدینه را در خطر افکنده است. در جواب آنان می‌گوید که چون با آنان به علت ایمان به خدا بدرفتاری شده است خداوند جبران آن را تصویب می‌کند.



پس خواه محمد پیروان خود را وادار به این کار کرده و از اشتباه آنان برای صحیح جلوه دادن آن استفاده کرده است و خواه در اثر فشار آنان تصمیم به چنین اقدامی گرفته است در هر صورت «غزوه» که کار عادی اعراب بود در جامعه اسلام از سر گرفته شده است ولی اندکی بعد تبدیل و تغییر پیدا کرده یعنی به صورت مبارزه با مؤمنان علیه اهل کفر در آمده و رنگ دین به خود گرفته است. در باره مهاجران گفته می شد که با مال و جان در راه خدا کوشش می کنند آنان می کوشیدند که پیشرفت یکی از هدفهای جامعه اسلامی را با ایجاد منطقه ای که در آنجا خدا از روی حقیقت پرستیده شود تأمین کنند. و چون هدف این کوشش آشکار شد مهاجران دلیلی بر عدم شرکت انصار در این کار نمی دیدند زیرا اگر کار کار خداست تمام مسلمانان باید در آن سهمی داشته باشند.

از طرف دیگر چون مردم مکه بر تعداد محافظان کاروانها افزوده بودند لذا برای پیروزی در غزوها احتیاج به مردان بیشتری بود. یکی از آیات که ظاهراً به تشویق انصار برای شرکت در غزوات نازل شده است از این قرار است. «یا ایها الذین آمنوا اتقوا الله وابتغوا الیه الوسیله وجاهدوا فی سبیلہ لعلکم تفلحون» (سوره ۵ آیه ۳۹). پس به علت دینی بودن غزوات بود که از مردم مدینه دعوت شد که در آن شرکت جویند. این تبدیل و تغییر غزوه چادر نشینی دارای معانی وسیعتر از آن است که در انگلیسی ترجمه شده است. کلمه ای که معادل کوشش انگلیسی (Strive) به کار رفته است، جهد است که اسم مصدر آن «جهاد» است این کلمه بعد به معنای «جنگ مقدس»



در آمده است . چنین به نظر می رسد که کلمه «غزوه» به «جهاد» تغییر نامی بیش نیست جز آنکه جنبه دینی به آن داده است . ولی باز هم کاملاً این طور نیست بلکه با تغییر زمان تغییری در طرز عمل نیز پیدا شده که دارای اهمیت بسیار بود . غزوه مبارزه طایفه‌ای با طایفه دیگر بود . حتی اگر دو طایفه دوست هم بودند دوستی آنها سرد و خشک بود و مکن بود هر چند سالی غزوه‌ای نیز بین آنها رخ دهد، در صورتی که جهاد مبارزه دینی جامعه مسلمان علیه اعضای غیر مسلمان و هدف آن توسعه جامعه بود . اگر اعضای طوایفی که از طرف مسلمانان مورد حمله قرار می گرفتند به اسلام آوردن خود اقرار می کردند فوری از خطر حمله‌های بعدی معاف می شدند . در نتیجه توسعه جامعه اسلامی ، آماج حمله‌های مسلمانان نیز توسعه پیدا کرده است . این خاصیت جهاد بود که نیروی عرب را چنان به کار انداخت که در کمتر از نیم قرن امپراتوری وسیعی از اقیانوس اطلس و جبال پیرنه در غرب تا دره جیحون و پنجاب در شرق به وجود آوردند و به طور یقین می توان گفت که بی جهاد این توسعه صورت نمی گرفت .

#### نخستین خونریزی:

آثار شرکت در غزوات علیه کفار مکه هنگامی آشکار شد که خون مردم مکه در غزوه زانویه ۶۲۴ ریخته شد . داستان این غزوات نکات چندی را بر ما آشکار می سازد . دسته کوچکی مرکب از هشت تا دوازده مهاجر تحت رهبری عبدالله بن جحش مأمور شدند که به فاصله دو روزه راه به سمت مشرق بروند و سپس نامه سر به مهری را که به عبدالله داده شده بود باز کنند و مطابق دستورهای آن رفتار نمایند بدین

ترتیب هیچکس در مدینه نمی توانست از مقصد این عده آگاه باشد و اهالی مکه را مطلع سازد. وقتی عبدالله نامه را باز کرد دید به وی دستور داده شده است که به نقطه‌ای به نام «نخله» واقع در جنوب راه مکه برود و در آنجا در کمین کاروانی که از یمن به مکه بازمی گشت بنشیند. و همچنین به او دستور داده شده بود که اعضای گروه را از مقصد آگاه سازد و به آنان فرصت دهد که هر یک می خواهند باز گردند زیرا اقدامات ممکن است خطراتی در بر داشته باشد و تمام کسانی که در آن شرکت می کنند باید از روی میل تن به این کار در دهند. نخست هیچک از اعضای گروه کناره گیری نکردند ولی چند لحظه بعد دوتن از آنان ناپدید شدند. پس از دو روز که از بازگشت موفقیت آمیز گروه مدینه می گذشت آنان نیز باز گشتند و داستانی ساخته بودند که چگونه شترهایشان آنها را به راه دیگر برده و از گروه جدا کرده است. ممکن است این ماجرا حقیقت داشته است ولی گمان نمی رود که کسی آن را باور کرده باشد.

عبدالله و بقیه گروه به نخله رسیدند، کاروان را یافتند و بدان ملحق شدند. در این کار دچار اشکالی نشدند زیرا چنین وانمود کردند که زواری هستند و می خواهند به مکه بروند و در یکی از ماههایی بودند که در آن خونریزی حرام است. بدین ترتیب با کاروان همراه شدند تا فرصتی برای حمله به دست آورند. شاید در اول قصد داشتند حرمت ماه مقدس را بشکنند، و یا شاید امیدوار بودند از خونریزی در این ماه خودداری کنند، ولی فوری متوجه شدند که پیش از آنکه ماه به آخر برسد کاروان به محوطه مقدس مکه خواهد رسید که خونریزی

در آنجا از محرمات به شمار می‌رود . وضع از چه قرار بوده نمی‌دانیم فقط اطلاع داریم که مسلمانان در ماه مقدس به محافظان کاروان حمله کردند. چون وقوع چنین حادثه‌ای اصلاً در جاده جنوبی مکه انتظار نمی‌رفت بیش از چهار محافظ با کاروان نبود. یکی کشته شد دو نفر اسیر گردیدند و چهارمی فرار کرد و اخبار را به سرعتی که می‌توانست به مکه رسانید ولی مسلمانان در رسانیدن کاروان و دو اسیر خود به مدینه دچار هیچ گونه مانع و مشکلی نشدند.

بی‌شک مردم مدینه مخصوصاً مهاجران از این دو حادثه شادمانیها کردند ولی بعضی نیز ناراحت بوده‌اند و ظاهراً عده این گروه اخیر بیش از آنچه عَلَيْهِ السَّلَام انتظار داشت بوده است و چنانکه گفته شد از توزیع غنایم ممانعت کرد و حتی از پذیرفتن يك پنجم که به او تعلق می‌گرفت احتراز نمود تا موضوع روشن شود (تردید است که آیا دادن يك پنجم غنایم به عَلَيْهِ السَّلَام هنوز معمول بوده است یا خیر). مخالفت بیشتر در اثر شکستن حرمت ماه مقدس بود. بعضی فکر می‌کردند که دعوت عَلَيْهِ السَّلَام به پرستش خدا با اقدام او به شکستن حرمت ماه حرام منافات دارد، عده دیگر تصور می‌کردند که این عمل سبب خواهد شد که خشم و بالای خداوند بر آنان نازل شود. گروه دیگر هر چند درباره بلیات خدایی گفتگو می‌کردند ولی مقصود آنان بیشتر مردم مکه بود زیرا از این می‌ترسیدند که علاوه بر انتقام شخص مقتول و کاروان غارت شده، مردم مکه از اینکه این غارت در زیر چشم آنان صورت گرفته است بیشتر خشمگین شوند. از مردم مدینه نیز کسانی که با عَلَيْهِ السَّلَام همراه نبودند این آتش را دامن می‌زدند و شک نیست مردم مکه نیز

کاملاً بر افروخته شده بودند و به زودی در صدر انتقام بر می آمدند.  
 تردید و نگرانی محمد ﷺ از مردم مدینه هنگامی پایان پذیرفت  
 که آیه‌ای بر او نازل شد (سوره ۲ آیه ۲۱۴) مبنی بر اینکه هنگامی  
 که جنگ در ماه‌های حرام ممنوع است بازداشتن مردم از راه خدا و  
 ایمان نیاوردن به او و آزار رسانیدن به ایمان آوردندگان از کشتن  
 بدتر است. در آن ذکری از خطرات مادی و دنیوی مردم مکه نشده و  
 تعجب آنکه مقدس بودن ماه نیز انکار نگردیده است. آنچه مورد  
 توجه است این است که شکست حرمت این ماه از بعضی از انواع  
 مخالفت با دین اسلام بهتر تلقی شده است احتمال دارد که خود محمد ﷺ  
 اعتقادی به مقدس بودن این ماه‌ها نداشته است چه تقدس ماه‌ها به دین  
 مربوط نبوده است و دیگر جای آن نبود که مخصوصاً در میان پیروان  
 خود در مدینه به این موضوع اهمیت بدهد. از طرف دیگر محمد ﷺ  
 از همان زمان اول خدا را رب الکعبه معرفی کرده (سوره ۶ آیه ۳) و  
 بعدها گفت که مقدس بودن سر زمین مکه ناشی از فکر خود اوست  
 (سوره ۲ آیه ۱۱۹ و سوره ۳ آیه ۹۱) و همچنین است مقدس بودن بعضی  
 از ماه‌ها (سوره ۹ آیه ۳۶). با توجه به ماه‌ها برای يك مسلمان دو حالت  
 که با اصول دین و فقه می‌داد امکان داشت. نخست آنکه مطابق آنچه در سوره  
 ۹ آیه ۳۶ ذکر شد، این خدا بود که ماه‌ها را مقدس اعلام کرد و بی  
 ایمانان نمی‌توانند از مقدس بودن ماه‌ها استفاده کنند دوم آنکه مقدس  
 بودن ماه‌ها از بقایای کفر و شرک است و مسلمانان احتیاجی به حفظ  
 آن ندارند ظاهراً محمد ﷺ به نکته دوم بیشتر توجه داشته است چه سعی  
 می‌کرده است دین خود را بیشتر به دین یهود شبیه کند. با وجود این

در همان هنگام که دربارهٔ هیئت مأمور حمله به کاروان می اندیشیده مجبور شده است از یهود دوری کند و دین خود را بیشتر به صورت يك دین عربی در آورد و این کار را با مصالح روز سازگار تر می دیده است.

غزوۀ نخله را تاجایی که اطلاع در دست بود شرح دادیم ولی هنوز نکات بسیاری هست که تاریک است. آیه ای که دربارهٔ جزئیات آن بحث کرده باشد فقط یکی از چند آیه است و انگیزه های آن باید از حقایق خارجی استنباط شود اما آنچه مسلم است این است که عَلَيْهِ السَّلَام کم یا بیش تقصیر را به گردن اهالی مکه افکنده است زیرا آنان قوی ترین و ثروتمند ترین مردم این ناحیهٔ عربستان یا شاید جهان بودند. هر چند این واقعه کوچک بود ولی به حیثیت و اعتبار آنها لطمه وارد می ساخت چنانکه تحمل آن برای آنان دشوار بود و از آن ساعت در صدد کشیدن نقشه ای بودند که درسی به عَلَيْهِ السَّلَام نودولت بدهند.

### قطع رابطه با یهودیان

روایتی است مبنی بر اینکه روزی عَلَيْهِ السَّلَام رهبری نماز جماعت را بر عهده داشت وحی بر او نازل شد که به وی دستور می داد که به جای اورشلیم رو به مکه بایستد. او و مسلمانان نماز را رو به اورشلیم شروع کرده بودند اما چون این وحی نازل شد همگی برگشتند و رو به مکه ایستادند.

این واقعه در مصالای ناحیهٔ قبیلهٔ سلیمه رخ داد و آنجا را بعد مسجد قبلتان نامیدند آنچه جالب است این است که چرا این تغییر باید در آنجا صورت گیرد، زیرا پیش از هجرت یکی از اعضای همین

قبیله سلیمه تقاضا کرده بود که به جای اورشلیم رو به مکه بایستند.  
تاریخ این واقعه ۱۱ فوریه ۶۲۴ ذکر شده است.

در حقیقت این واقعه و تغییر قبله به همی سادگی و فوری صورت  
نگرفته است. آیاتی که درباره این تغییر در قرآن آمده است (سوره  
۳ آیات ۱۳۶ تا ۱۴۷) نشان می دهد که این آیات در زمانهای مختلف  
نازل شده است لذا برخی عقیده دارند که بین فسخ قبله اورشلیم و  
قبول مکه فاصله زمانی بوده است. اگر چنین هم نباشد ﷺ بیش  
از این تغییر، اندکی در این باب تردید داشته است.

علاوه بر موضوع دینی و عقلی ممکن است علت این تغییر بر  
اساس تغییر گروه بندی طوایف نیز بوده که ﷺ به یکی از آنها متکی  
بوده است. منابع در این باره چیزی نمی گویند ولی اگر کسی به دقت  
به آنان که در ظرف ماههای مارس و آوریل ۶۲۴ به ﷺ یاری  
کردند توجه کند در خواهد یافت که تغییرات سیاسی نیز در کار بوده  
است. مخصوصاً قطع رابطه با یهود که تغییر قبله آن مشخص است منتج  
به بیزاری و خشمگین شدن عبدالله بن ابی گردید که با عده ای از  
یهودیان روابط دوستانه داشت و محتملاً امیدوار بود به یاری آنان به  
آرزوی خود برسد و حاکم مدینه شود. در این مورد بود که منافقان  
دشمن و مخالف سیاست ﷺ شدند بی شک دلیل خشم و برافروختگی  
ﷺ از مردم مکه به علت مخالفتی است که با او داشته اند. در  
عین حال یکی از افراد بسیار مهم و برجسته مدینه سعد بن معاذ با ﷺ  
ﷺ که در این هنگام کاملاً آشکار شده بود آغاز کرد. او رئیس  
قبیله بنی عبدالاشهل بود و هر چند قبیله او با قبیله سلیمه در جنگ

بودند با قسمت مهمی از آن روابط دوستانه نیز داشتند. حمایت سعد از محمد ﷺ شامل دویست نفر از انصار می شد که در جنگ بدر شرکت جستند و علیه قبیله قینقاع اقدام کردند و از این تاریخ به بعد نام او همیشه جزء پیشقدمان انصار یا مسلمانان مدینه ذکر شده است. لذا می توان گفت که مخالفت با وقایع نخله و قطع رابطه با یهودیان ورو گردانیدن از عبدالله بن ابی و رو آوردن به سعد بن معاذ همه به هم مربوط است و همچنین می توان گفت که تغییر قبله نیز نتیجه اقدام بعضی از قبایل ضد یهود مدینه بوده است و خواسته اند بدین وسیله وانمود کنند که از محمد ﷺ حمایت می کنند و او نیز خود را تسلیم آنان کرده است.

قطع رابطه با یهود جنبه های چندی داشته و موجب تغییرات دیگری نیز شده است. تا این زمان مسلمانان مخصوصاً انصار روزه روزمسخ یهودیان را نگاه می داشتند و محمد در سال ۶۲۳ ( شاید ژوئیه ) دستور عمل به آن را داده بود در ولی فوریه یا مارس ۶۲۴ در این روزه منسوخ گردید و روزه ماه رمضان برای تمام مسلمانان اجباری شد. روزه رمضان در ۲۶ فوریه ۶۲۴ آغاز گردید و بعضی از منابع می نویسند که عده ای از مسلمانان حتی هنگام جنگ بدر که در آغاز مارس روی داد آن را نگه داشتند. اما ظاهر امر نشان می دهد که روزه تا بعد از جنگ بدر برقرار نشده بود و آن را به شکرانه پیروزی بجای آوردند همچنانکه روزه یهود شکرانه و علامت نجات ملت اسرائیل از دست فرعون و سپاه او، در دریای احمر بود.



مهمترین جنبه قطع رابطه با یهودیان جنبه عقلی آن بوده است  
 چه آنان به تمام افکاری که موقعیت محمد ﷺ بر آنها استوار بود حمله  
 می کردند می گفتند که بسیاری از مطالب قرآن با آنچه در کتب قدیم  
 نوشته شده و درست آنهاست مغایرت و مبینت دارد بنابراین دروغ است و  
 نمی توان آنها را وحی و محمد ﷺ را پیغامبر دانست. این موضوع بسیار  
 مهم وجدی بود، چه اگر عده ای از مسلمانان معتقد می شدند به این،  
 که آنچه یهودیان می گویند صحت دارد سازمان جامعه ای که محمد ﷺ  
 آن را با زحمت تأسیس کرده بود درهم می ریخت، مخصوصاً با افزایش  
 مخالفت با سیاست او احتیاج به حمایت مردانی داشت که از صمیم قلب  
 به دین او ایمان آورده باشند ولی اقدامات یهود سبب می شد که اواز  
 ابن حمایت محروم گردد و چون یهودیان دارای کتاب بودند نمی توانستند  
 این عمل را به طور مؤثری انجام دهند.

حمله یهودیان بیشتر در حول عقاید دین ابراهیم متمرکز شده  
 بود. در قرآن محمد ﷺ همیشه گفته بود که پیامهای او نظیر انبیای  
 پیشین است مخصوصاً از موسی و عیسی، بنیان دین یهود و مسیحیت،  
 به احترام یاد کرده است. این عقیده را نمی توان از اسلام جدا دانست و  
 قسمت مهمی از ادعای محمد ﷺ است، که به کفار مکه پيشهاد شده و  
 چندین آیه قرآن به آن اختصاص یافته است. با وجود این برای  
 یهود مشکل نبود که نکات مورد اختلاف را تعیین کنند. تنها راه دفاع  
 در برابر این، که یهود می گفتند قرآن دروغ است، این بود که بگویند  
 این انحراف و خطا از جانب یهودیان است، گر چه محمد ﷺ خود



می دانست که این روش کافی نیست ، ولی ابتدا که این فکر به خاطر او رسید ، آن را مناسبترین فکر در وضع موجود یافت .

اعتراف شده است که دین ابراهیم از حیث صفا و سادگی دین حقیقی خداست و شباهت بسیار با ادیان انبیای دیگر دارد که صلی الله علیه و آله نیز یکی از ایشان است. اگر یهودیان و مسیحیان اختلافی دارند مربوط به خود آنهاست . بعضی از قوانین مخصوص یهود ممکن است از جانب خدا فرستاده شده باشد ولی این دستورها فقط برای یهود صادر شده است و برای تنبیه آنها بوده است . بعضی از مطالب که یهود ادعا می کنند ، وحی منزل است ، این طور نیست بلکه چیز هایی است که خود به کتاب افزوده اند ، و ظاهراً اشاره به قانون شفاهی یهود است . قرآن یهود و مسیحیان را متهم می کند که در کتابها دست برده و در کتمان و اخفای آنها کوشیده اند . مقصود قرآن از این جمله آن است که یهودیان و مسیحیان بعضی از آیات کتاب را غلط ترجمه و تفسیر کرده اند ، ولی بعدها در اسلام بدین معنی در آمده است که در تمام یا قسمت اعظم انجیل انحرافات رخ داده است و قابل اعتماد نمی باشد . مراد از این بیان آن است که یهودیان در باره بعضی از آیات که ظهور صلی الله علیه و آله را پیشگویی کرده است سکوت اختیار کرده اند .

این طرز بیان مطالب چنان با حقیقت وفق می داد که یهود نمی توانستند آن را انکار کنند . این بیان مسلمانان قابل انکار نبود که ابراهیم یهود نبود زیرا یهودیان مجبور بودند بپذیرند که ابراهیم پیش از ظهور دین یهود می زیسته است چه دین یهود با یعقوب آغاز شد و

مسلمانان آن را از موسی می دانستند. وقتی مسلمانان دلیل می آوردند و می گفتند اعتراض یهودیان به عَلَيْهِ السَّلَام شگفت انگیز نیست زیرا آنها بسیاری از انبیای دیگر را نیز با اینکه در کتب یهود ذکر آنها آمده است رد کرده اند یهود نمی توانستند آن را انکار کنند و این حقیقت بود. از طرف دیگر قرآن یهود را از باب این ادعا که قوم برگزیده خدا هستند سخت مورد انتقاد قرار داده است. در قدیم در میان عرب رسم بر این بود که اگر کسی ادعایی می کرد از او می خواستند که قسم بخورد تا اگر ادعای او دروغ باشد مرگ و نکبت او را دریابد. لذا از یهود دعوت شد که سوگند یاد کنند که دوست خدا هستند و تنها آنها می توانند به بهشت بروند. این دعوت در یهودیان تولید نگرانی نکرد ولی جواب ندادن به آن ضعف آنان را در برابر عرب نشان داد. یکی دیگر از دلایل قرآن علیه یهود این بود که مسیحیان نیز ادعایی نظیر آنها دارند پس هر دو دروغ می گویند.

تشبیه دین اسلام به دین ابراهیم انجام دادن بعضی از تشریفات را آسان می کرد چه عقیده داشتند که کعبه توسط ابراهیم ساخته شده است و نیز معتقد بودند که عرب از اولاد اسماعیل هستند این عقیده را نیز از عهد عتیق گرفته بودند. دین ابراهیم در ابتدا حنیفیه یا دین حنیف نامیده شد. درباره کلمه حنیف علمای مغرب زمین بحث بسیار کرده اند. گویا قبلا یهودیان و مسیحیان آن را به جای کلمه «مشرک و کافر» به کار می بردند. به پیروان یونانی مآب دین سابق «عربی-سوری» نیز اطلاق می شده است. پیش از اسلام در عربستان کسانسی بودند که علاقه به یکتاپرستی داشتند. نویسندگان اسلامی این گروه

را حنفیان نامیده‌اند ولی آنان این کلمه را در مورد خود به کار نمی‌بردند در قرآن این کلمه دوبار به کار رفته است و به معنای کسی است که نه یهودی است و نه مسیحی. مسیحیان «حنفی» را به جای مشرک و کافر به کار می‌بردند و با آن مسلمانان را تهدید می‌کردند و شاید علت آن که مسلمانان به آن توجه داشتند از این جهت بوده است و برای مدتی فقط به این قانع بودند که بگویند. تابع دین ابراهیم یعنی حنفی هستند و بعدها حنیف و مسلم را به عبارت دین ابراهیم ترجیح دادند. مسلم معنی وصفی دارد و به معنای «تسلیم شونده به خدا» است و این کلمه برای ابراهیم مناسب بود زیرا به اتفاق پسرش که خدا گفته بود او را قربان کند خویشان را تسلیم به خدا کرد (قرآن سوره ۳۷ آیه ۱۰۳). اسلام مصدر آن و به معنای «تسلیم شدن به خدا» است و نام خوبی برای دین است، هر چند می‌توان این نام را از همان آغاز کار برای دین محمد ﷺ به کار برد ولی تا دوره مدینه به کار برده نشده است.

تصور آنکه اسلام باز گشت به همان دین ابراهیم است با نظریه علمای تاریخ مغرب زمین وفق نمی‌دهد ولی از نقطه نظر جامعه شناسی باید قبول کرد که دین مذکور در محیط اصلی خود مؤثر بوده است و محمد ﷺ با مختصر اصلاح، افکاری به دست آورد که اساس دین خود را بر آن استوار ساخت و از انتقاد خصمانه یهود نیز خود را رهایی بخشید. کار محمد ﷺ تطبیق دادن افکار جدید با شرایطی بود که در آن عادات و فعالیت‌هایی که مبتنی بر نظریات بود دیگر دوام و مناسبتی نداشت. با رفتاری که یهود در پیش گرفته بودند محمد ﷺ نمی‌توانست

بیش از این به اتکالی شهادت انجیل ندای پیغمبری در دهد چنانکه در مدینه کرده بود. پس مجبور بود در عقیده خود نسبت به یهودیان تجدید نظر کند (؟) اما فرضیه دین ابراهیم نیز پس از تعمق بسیار برای پیشرفت کار او مناسب به نظر نمی رسید. وضع طوری بود که محمد ﷺ در اثر پیشامدها مجبور بود نظریه جدیدی نسبت به یهودیان و آن دسته از اهل مدینه که علاقه به یهود داشتند (مانند عبدالله بن ابی)، و گروهی که ضد یهود بودند (مانند سعد بن معاذ)، اتخاذ نماید. در ضمن می بایست کاری نکند که موجت سستی ایمان پیروانش گردد. در چنین موقعیت محمد ﷺ نمی توانست تصمیم عملی بگیرد مگر آنکه فکری پیدا کند که بتواند بر روی آن بایستد. تصمیم بر خودداری مصالحه با یهودیان و دوستان آنها و قبول این فرضیه که دین او مانند دین ابراهیم است دو جنبه يك تصمیم بود.

محقق مغرب زمین باید اقرار کند که فرضیه دین ابراهیم نیز کاملاً بی پایه و بی اساس نیست. شاید اسلام کاملاً با آنچه در باره دین ابراهیم تصویری کنیم مطابقت نکند ولی اصول آن از بعضی از جهات به اصول یهود و مسیحیت بستگی دارد و این اصول همان سستی است که در زمان ابراهیم آغاز شده است. پس اسلام شکلی از دین ابراهیم به شمار می رود و این شکل با دید مردمی که رسم و زندگی آنان با روش ابراهیم نزدیکتر از رویه جامعه یهود و مسیحیت بوده است، سازگارتر است.

## غزوة بدر ( ۱۵ مارس ۶۲۴ )

هنگامی که محمد ﷺ سرگرم مسائلی بود که ذکر آن گذشت آگاهی یافت که کاروان بزرگی متعلق به اهل مکه از غزه به مکه باز می گردد. احتمال دارد که کاروانهای کوچکی از ترس مسلمانان با هم ملحق شده تشکیل کاروان بزرگی را داده بودند زیرا حمایت از يك کاروان بزرگ آسانتر است تا حمایت از کاروانی کوچک. بنا بر روایات ارزش کالای این کاروان هزار شتری ۵۰۰۰ دینار بوده است و تقریباً تمام تجار مکه سهمی در آن داشته اند و در حدود هفتاد نفر آن را بدرقه می کرده اند، و ریاست کاروان با ابوسفیان بن حرب بوده که یکی از قوی ترین افراد مکه به شمار می رفته است.

از نقطه نظر اهمیت کاروان محمد ﷺ سعی کرد تا می توانست نیروی بزرگتری برای گرفتن آن گسیل دارد و در این قسمت اینک سعد بن معاذ نیز از او پشتیبانی می کرد. بنا بر روایات محمد ﷺ توانست ۳۰۰ نفر آماده کند و بنا بر فهرست دیگری ۳۲۸ نفر از انصار و ۸۶ نفر از مهاجران را آماده ساخت. این عده بزرگترین واحدی بود که تا آن وقت به رهبری محمد ﷺ تشکیل یافته بود و نخستین نیرویی بود که انصار رسماً در آن شرکت داشتند ، اگر عدد ۱۵۰ تا ۲۰۰ مبارز که سابقاً در تحت ریاست محمد ﷺ جنگیده اند صحیح باشد ناچار در آن لشکر کشیها هم عده ای از انصار شرکت داشته اند ولی بی شك از اهالی فقیر مدینه بوده اند که طمع غارت و به دست آوردن غنایم آنان را به جنگ کشانیده بود. گفته شده است که در پیمان محمد ﷺ با مردم مدینه مقرر بود که فقط در داخل مدینه از او

دفاع و پشتیبانی کنند. اگر چنین باشد پس در غزوات و لشکر کشیهای اول فقط مهاجران شرکت می جستند و اهل مدینه به طور قبیله ای توجّه و علاقه ای بدان نداشتند هر چند ممکن است عده ای شخصاً در آن مداخله کرده باشند. حضور سعد بن معاذ و بیش از ۲۰۰ تن از انصار در غزوۀ بدر آنهم در دنبالۀ وقایع دو ماهه گذشته نشانه آن است که تغییری در سیاست انصار پیدا شده بوده است و عده ای حاضر شده اند از سیاست محمد ﷺ در برانگیختن مردم مکه پشتیبانی کنند.

در عین حال شاید به وسیله دشمنان محمد ﷺ در مدینه، اهالی مکه از خطری که کاروان را تهدید می کرد آگاه شدند و بهره بری ابوجهل به آماده کردن نیروی بزرگی پرداختند. رئیس یکی از طوایف مجاور که با اهل مکه دشمنی خونی و قبیله ای داشتند، قول داد که حتی اگر مکه بی دفاع بماند به آن حمله نخواهد کرد. در نتیجه ۹۵۰ نفر عازم شدند. ابوجهل امیدوار بود که محمد ﷺ و پیروان او را تار و مار سازد به طوری که دیگر یارای حمله به کاروانهای مکه را نداشته باشد.

قسمتهای مختلف در محلی موسوم به بدر که دارای چند حلقه چاه بود جمع شدند. بهترین راه برای رسیدن از مدینه بدانجا راه ساحلی سوریه به مکه بود. محمد ﷺ روز پیش از جنگ و ابوجهل نه روز پیش از آن عازم محل شدند. هدف اصلی محمد ﷺ کاروان بود. آبوسفیان که از مقاصد او آگاه بود با رفتن از بیراهه توانست از برخورد با مسلمانان خودداری کند. ظاهر امر چنین نشان می داد که ممکن است این لشکر کشی با شکست مواجه شود و برای مسلمانان

با دست خالی برگشتن بسیار سخت و ناگوار بود. چه ممکن بود آن را بر ترس و ضعف آنان در برابر نیروی مکه حمل کنند. لذا در همان نزدیکی باقی ماندند و در شب چهاردهم مارس در کنار چاههای بدر اردو کردند.

در این هنگام خبر به ابوجهل رسید که کاروان نجات یافته است. روایت بر این است که عده‌ای از اهالی مکه آهنگ بازگشت داشتند زیرا می‌گفتند تنها علتی که ممکن است جنگ بین محمد ﷺ و آنها را روشن کند قصاص خون مردی است که در نخله کشته شده بود و یکی از رؤسای طوایف مکه حاضر شد برای حفظ صلح خونبهای او را بپردازد. ولی ابوجهل با مهارت او را وادار کرد که پیشنهاد خود را پس بگیرد زیرا او بهتر از همه می‌دانست که تجارت مکه تا چه اندازه از طرف محمد ﷺ به خطر افتاده است و سعی داشت کاری کند که راه این خطر را ببندد یا لاقط تغییری در آن بدهد.

محرك دیگر او مسائل شخصی بوده است، حق فرماندهی جنگ به ابوسفیان داده شده بود و فقط در غیاب او بود که ابوجهل می‌توانست بر چنین نیروی بزرگی فرمانروایی کند و اینک او می‌خواست از فرصت استفاده کند. بقیه مکیان که از محرك واقعی ابوجهل و رقابت او با ابوسفیان آگاهی داشتند قبلاً حاضر به ماندن در میدان حرب نبودند لذا دو طایفه کاملاً خارج شدند و از بقیه درخواست شد که در بازگشت به خانه‌های خود شتاب نکنند. در شب چهاردهم مارس اردوی مخالف از اردوی مسلمانان چندان دور نبود.

هیچیک از دو طرف علاقه شدید به جنگ نداشتند بلکه بنا بر

عادت غرب هر طرف می‌گوشید بی آنکه دست به جنگ بزند طرف دیگر را تحت تأثیر قرار دهد. اکثر مسلمانان تصویری کردند برای غارت کاروانی آمده‌اند که عده نگهبانان و بدرقه کنندگان آن کمتر از عده آنان است. اغلب مکیان هم فکری کردند به اندازه‌ای قوی هستند که مسلمانان از نزدیک شدن به آنان خودداری خواهند کرد حتی ممکن است خود ابو جهل نیز چنین تصویری داشته است هر چند بی میل نبود تصادمی رخ دهد. به دشواری می‌توان گفت که در فکر محمد ﷺ چه می‌گذاشته است. اگر سیاست او برانگیختن مکیان بوده و تصور می‌کرده است که مسلمانان از عهده کفار بر نمی‌آیند پس سعی داشته است وضعی به وجود آورد که مسلمانان بی آنکه به شرافت آنان لکه‌ای وارد آید از جنگ اجتناب کنند.

این در حقیقت آن چیزی است که رخ داده است هر دو طرف به طور غیر منتظره چنان خود را نزدیک دشمن یافتند که باز گشت بی‌رسوایی ممکن نبود. دسته‌ای از افراد دیده‌بانی اردوی مسلمانان یکی از سقاهاى مکیان را اسیر کردند و وقتی از او باز پرسى شد حقایق نیروی ابو جهل آشکار گردید ولی تعداد افرادی که او ذکر می‌کرد به اندازه‌ای بود که مسلمانان تصور کردند دروغ می‌گوید و او را تنبیه کردند. سپس محمد ﷺ به باز پرسى پرداخت و دریافت که حقیقت می‌گوید. و شاید خود او قبلاً اطلاعاتی در باره تعداد نیروی مکیان داشته است. به هر صورتی که باشد اطلاع محمد ﷺ در باره نیروی دشمن بیش از اطلاعاتی بود که آنان در باره نیروی مسلمانان داشتند و این امر سبقت در اقدام را به محمد ﷺ می‌داد.



عَلَيْهِ السَّلَامُ چون دریافت که ابو جهل چندان دور نیست دستور داد تمام چاه‌ها را به استثنای يك چاه که نزديك مکه بود و مردانش دور آن چادر زده بودند ببندند. در این صورت بود که دشمن که احتیاج به آب داشت مجبور به جنگ می شد مخصوصاً در زمینی که عُمَرُ عَلَیْهِ السَّلَامُ انتخاب کرده بود. صبح پانزدهم مارس به طرف چاه‌ها پیش رفتند البته می دانستند که عُمَرُ عَلَیْهِ السَّلَامُ در همان نزدیکی است ولی هنگامی متعجب شدند که می دیدند بی جنگ نمی توانند آب به دست آورند حتی اگر احتیاج به آب هم نداشتند نمی توانستند دیگر باز گردند زیرا این اقدام موجب بی آبرویی می شد.

جنگ ظاهراً چنانکه رسم عرب بود با مبارزه تن به تن آغاز شد که در آن امتیاز و برتری با مسلمانان بود و عده‌ای از رهبران مکه که ابو جهل نیز جزء آنان بود کشته شدند. از هر دو طرف تیر اندازی نیز صورت گرفت و موجب کشته شدن چند تن شد. در پایان هر دو نیرو به هم ریختند و کار منجر به فرار مکیان شد. هر چند منابع فراوان است ولی بیش از این درباره این غزوه چیزی نمی توان گفت تردیدی در باره جنگ وجود نداشت. نیروی ۳۰۰ نفری محمد صلی الله علیه و آله تقریباً نیروی مکیان را که عده بیشتری بودند کاملاً از پای در آورده و عده‌ای از رؤسای آنها را کشته بود. تعداد کشتگان دشمن را از ۴۵ تا هفتاد نفر نوشته‌اند و همین مقدار هم اسیر شدند (در فهرست‌ها از ۶۸ تا ۶۹ نفر نام برده‌اند) برای به دست آوردن این پیروزی مسلمانان فقط چهارده نفر کشته دادند شش تن از مهاجران و هشت تن از انصار. عُمَرُ عَلَیْهِ السَّلَامُ خود

در جنگ شرکت نداشت ولی در حالی که ابو بکر در کنارش ایستاده بود آن را از سنگر نزدیکی هدایت می کرد و بیشتر اوقات را سر گرم دعا بود و بنا بر بعضی از روایات اعمال دینی نیز داشت. مسلمانان غنایم بسیاری به دست آورده بودند و برای آنکه علاقه به غنایم مانع تعقیب دشمن نشود عَلَيْهِ السَّلَام اعلام کرد که تمام غنایم به استثنای کشتگان و خونبهای زندانیان به طور مساوی بین کسانی تقسیم خواهد شد که در جنگ شرکت جسته اند. مبلغ خونبها نیز سنگین بوده است زیرا عده بسیاری از اسیران از خانواده های ثروتمند بودند. کسانی که به اندازه کافی با نفوذ یا ثروتمند نبودند عَلَيْهِ السَّلَام آنان را بی دریافت خونبها آزاد کرد. سخاوت به هر شکل که باشد همیشه مورد تحسین عرب بوده است ولی عَلَيْهِ السَّلَام می دانسته است که باید روزی مردم مکه را در کنار خود داشته باشد. چند هفته بعد عده ای از اهالی مکه به مدینه رفتند تا ترتیب خونبها و آزادی اسیران را بدهند.

اما زندگی کاملاً خوشایند نبود. با یک یادو تن اسیران باسختی و خشونت رفتار شد که واقعاً نمونه خشونت عصر بوده است. نظر عمومی بر این بود که شخص هر طور که بخواهد می تواند با اسیر خود رفتار کند ولی همیشه این نکته را در نظر داشتند که چه رفتاری در خور او و قبیله اوست. در بدر لاقل یک کافر که به دست یک مسلمان اسیر می شد مورد حمله قرار می گرفت و به دست گروهی از مهاجران که خصوصاً از او نفرت داشتند کشته می شد. البته دستگیر کننده اسیر نیز از فدیة آزاد کردن اسیر خود محروم می ماند.

چون خبر به محمد ﷺ رسید در صدد منع این گونه قتلها بر آمد اما به دستور او دو تن اسیر دیگر اعدام شدند. یکی از آن دو اشعاری در باره محمد ﷺ نوشته بود و دیگری گفته بود که داستانهای پارسی که می داند، از داستانهای قرآن بهتر است. این مطلب خشم محمد ﷺ را بر انگیزت چه وی در تمام مدت عمر از این گونه جمله های ادبی ناراحت می شد و در نظر او گناهی نابخشودنی به شمار می رفت . موضوعاتی مانند رفتار با اسیران دارای اهمیت بسیار است چه طرز فکر محیطی را که اسلام در آن متولد شده بود نشان می دهد .

نبودن اتحاد در بین مردم مکه به شکست آنان یاری کرد. از ۹۵۰ نفری که از مکه بیرون رفتند فقط ۶۰۰ تا ۷۰۰ نفر باقی ماندند که البته همه آنان به حکمت سیاسی ابوجهل معتقد نبودند، و در عین حال قسمتی به علت ثروت خود و تسلط بی رقیب بر عربستان غربی بی اندازه به خود اعتماد داشتند آنان، تا حدود سال (۵۹۰) در هیچ کار جنگی و جدی دخالت نداشتند و زندگی آسوده و متجملی آنان را مردمی ملایم و آرام بار آورده بود. اما هنگامی که یاد داشتهای مهاجران مکه و انصار مدینه را تحت مطالعه قرار دهیم در بین آنها از لحاظ جنگاوری امتیازی وجود ندارد، پس نمی توان گفت که کفار مکه زندگی آرامی داشته اند.

پس آنچه حقیقت دارد این است که کفار مردمی بودند سالخورده در صورتی که مهاجران جوان و دارای نیروی جوانی بودند . از طرف دیگر مسلمانان به علت عقیده ای که به زندگی آینده داشتند با

شجاعت می جنگیدند و اعتماد صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ که بر ایمان ثابت او به خدا استوار بود در پیروانش ایجاد اعتماد می کرد.

### مشخصات و اهمیت غزوه بدر

شکست بدر برای اهل مکه واقعه غم انگیزی بود. از پانزده تا بیست نفر افراد با نفوذ و محبوب مکه دوازده تن کشته بودند. ابو سفیان زنده بود، و البته بر سیاست مکه در سه سال بعد نظارت داشت، و مردان جوان دیگری بودند که به تدریج رو می آمدند و جای گذشتگان را می گرفتند. با وجود این از دست دادن قدرت و تجربه امکان پذیر نبود.

از دست رفتن حیثیت و اعتبار نیز بسیار مهم بود، هر چند که اثرات آن فوری ظاهر نشد. با اینکه مردم مدینه با نیروهای کمی در جنگ وارد شدند و پیروز گشتند، باز این شهر، نه آن قدرت و نه آن مهارت لازم را داشت که بتواند جای مکه را در تجارت بگیرد و پایتخت عربستان بشود با وجود این در اعتبار مکه تزلزلی رخ داده بود. دشمنان قدیم مانند طایفه هوازن در فکر بودند که چه وقت مجدداً با مردم مکه زور آزمایی خواهند کرد ولی این بر خورد بین صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ و اهل مکه اجتناب پذیر نبود.

ابو جهل در نظریه خود حق داشت که می گفت، مبارزه محمد صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ برای به دست گرفتن موقعیت مکه است. مکیان فقط هنگامی می توانستند اعتبار خود را دو باره به دست آورند و حفظ کنند که محمد صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ را خرد کرده باشند. و می بایست تمام کوشش آنها متوجه این امر باشد.

پس محمد ﷺ در انتظار واکنش شدیدی از طرف مردم مکه بود و در مرحله نخست می بایست کارها را طوری مرتب کند که بتواند با این واکنش روبه‌رو شود. آیا می توانست در مدت کوتاهی به شماره پشتیبانان خود بیفزاید و از عده مخالفان بکاهد؟

این اشتباه است که به حادثه بدر فقط به نظر یک واقعه سیاسی سیاسی نگاه کنیم. زیرا این غزوه برای محمد ﷺ و پیروانش دارای معنای دینی عمیقی بوده است ابتدا سالهای سخت و خسته کننده و توأم با مخالفت مکه بوده است. پس از آن ماههای طولانی مدینه پیش آمد که در آن همه چیز ناراحت کننده بود. حال با چنین پیروزی شگفت انگیزی رو به روشده بودند و آن را اثر ایمانی می دانستند که آنان را در روزهای ناامیدی حمایت و نگهداری کرده بود. این خدا بود که به سبب ایمان به او آنان را پیروز گردانیده بود. قرآن تفسیر دینی این واقعه را در قسمتهای مختلف آورده است و می گوید:

فَلَمْ تَقْتُلُوهُمْ وَلَكِنَّ اللَّهَ قَتَلَهُمْ وَمَا رَمَيْتَ إِذْ رَمَيْتَ وَلَكِنَّ اللَّهَ رَمَى وَلِيُمْلِي الْمُؤْمِنِينَ مِنْهُ بَلَاءً حَسَنًا إِنَّ اللَّهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ .  
(سوره ۸ آیه ۱۷)

پس در نظر مسلمانان پیروزی بدر نجاتی بود که خدا برای مسلمانان آورد همان طور که یهود را از دریای احمر گذرانید . شکست فرعون و نیروی او و فرار بنی اسرائیل «فرقان» یا (نجاتی) بود که به موسی داده شد ( لغت عربی فرقان از لغت سریانی پورقانا گرفته شده است) . بدبختی مکیان نیز همان بود که قبلا در قرآن

پیشگویی شده بود و پیروزی محمد فرقان او و دلیل پیامبری او بود. با توجه به این تفسیر مسلمانان پیروزی خویش را افتخار بزرگی می دانستند. محمد ﷺ و متفکران قوم متوجه خطری که درپیش داشتند بودند و تمام نیروی خود را برای مقابله با آن به کار بردند و ظاهراً تمام مردم به منظور تحصیل افتخار و مباحات عمومی آن را اجرا کردند.

## شکست و اکنش مکیان

### محکم کاری در مدینه؛ اخراج قبیله قینقاع

از مهمترین کارهایی که پس از غزوه بدر عَلَيْهِ السَّلَام با آن روبه رو بود تثبیت مقام خود در مدینه و بر طرف ساختن بعضی از نقاط ضعف بود. پیروزی بدر که نتیجه تصمیم سعد بن معاذ در پشتیبانی از عَلَيْهِ السَّلَام بود موقعیت مهم او را تقویت کرد. در منابع دلیلی که جهت بادرانشان دهد بسیار کم است. در این هنگام عده بیشتری از انصار حاضر بودند در لشکر کشیهای او شرکت جویند. طمع غنایم، چادر نشینان فقیر حوالی مدینه را به شهر می کشانید. بعضی از شیوخ قبایل مدینه نیز تجدید نظر در افکار خود را آغاز کردند. یکی از این شیوخ که رقیب سعد نیز بود و پیش از واقعه بدر فکر می کرد که نفع او در آن است که بر کنار بماند، پس از این حادثه پیش عَلَيْهِ السَّلَام آمد و پوزش خواست و گفت، که فکر می کرده است که جنگ بدر فقط حمله‌ای

برای به دست آوردن غنیمت است. اگر می دانست که جنگی در گیر است او محققاً در آن حاضر می شد. محمد صلی الله علیه و آله با این گونه اشخاص با مهربانی رفتار می کرد و برای کاستن از میزان مخالفت آنان آنچه می توانست به کار می بست و در عین حال به هنگام لزوم از خشونت و درشتی نیز خودداری نمی کرد. چنانکه پس از پیروزی چون زن و مردی از اهل مدینه اشعاری علیه او گفته بودند به دست افرادی منتسب به وی کشته شدند، زن متعلق به یکی از قبایل بود که اسلام نیاورده بودند و از قبیلۀ مردنیز بعضی مسلمان نبودند. مضمون اشعار آن دو تن این بود که، «برای مردم مدینه موجب بی حرمتی و بی احترامی است که اجازه دهند يك نفر بیگانه و خارجی نظارت کارهای آنان را در دست گیرد، کسی که بین درست و نادرست امتیازی قایل نیست (شاید هدف آنان شکستن حرمت ماههای حرام بوده است)، و هدف او پادشاه شدن است» احتمال دارد که محمد صلی الله علیه و آله قبلاً از نقشه قتل آن دو آگاه بوده است ولی پس از اطلاع اعتراض نکرد و هیچیک از خویشان آن دو تن نیز در صدد خونخواهی بر نیامدند و برعکس عده ای از کسانی که هنوز مردد بودند به اسلام گرویدند و شاید در نتیجه این وقایع بود که تمام قبایل عرب مدینه رسماً دین اسلام را پذیرفتند.

قتل سیاسی دیگری که قابل تذکر است قتلی است که پنج ماه بعد یعنی در سپتامبر (۶۲۴) صورت گرفته است. مقتول کعب بن اشرف پسر یکی از بدویهای عرب است که مادرش یهودی بود و معمولاً قتل او را چنین نوشته اند که، وی پس از پیروزی محمد صلی الله علیه و آله در بدر به اندازه ای ناراحت شد که به مکه رفت و اشعاری بر ضد اسلام ساخت که به زودی



انتشار و رواج یافت، محمد ﷺ که همیشه از این گونه جمله‌ها ناراحت می‌شد یکی از شاعران مسلمان را، به نام حسن بن ثابت، واداشت که میزبانان مکی کعب را هجو کند. این موضوع چنان اثر برنده‌ای در این میزبانان داشت که کعب مجبور شد به مدینه باز گردد؛ ولی از تبلیغ بر ضد مسلمانان باز نایستاد (همه این مطالب قدرت شعر را در آن زمان می‌رساند).

ظاهراً محمد نشان داده است که بی‌میل نیست از شر کعب‌رها شود لذا پنج تن از مسلمانان که یکی از آنان برادر رضاعی کعب بود علیه کعب کنگاش کردند و از محمد ﷺ رخصت خواستند که بتواند آنچه لازم باشد، از نیک و بد دربارهٔ محمد ﷺ بگویند. برادر رضاعی کعب و دوستانش به عنوان نارضایی از اوضاع و نداشتن قوت و غذا اعتماد کعب را به خود جلب کردند. کعب حاضر شد مقداری پول در برابر اسلحه به آنان قرض دهد و برای دریافت اسلحه نیمه شب از خانه بیرون رفت. در محل هر پنج نفر به او حمله بردند و آهسته و بی‌سرو صدا او را کشتند. این پنج تن از افراد قبایل متحد نضیر بودند و از این جهت مسئلهٔ خونبهای وجود نداشت.

در عصر آرامش یا (شاید بگوییم؟) اندکی مردانه منش که مازندگی می‌کنیم این گونه رفتار به نظر ناپسند می‌آید و ممکن است شخص به آن با دیدهٔ تعجب بنگرد و مخصوصاً آن را شایستهٔ یک رهبر دینی نداند. ولی این گونه رفتار در عصر محمد ﷺ و در کشور او کاملاً طبیعی بوده است هیچ کس بر اساس انسانیت عمومی حقی بر کسی نداشت. افراد هر قبیله و قبایل متحد آن و کسانی که تحت

حمایت آنها بودند توقعات و حقوق محدودی داشتند و در بیرون از آن دایره هیچ کس را ابداً حقی نبود و به طور دیگر بگوییم اگر کسی میل کشتن دشمن یا بیگانه‌ای را می کرد هیچ گونه دایلی وجود نداشت که او را از این کار باز دارد تنها چیزی که ممکن بود مانع این کار بشود ترس انتقام از بستگان او بود و یا احترام قوی بود که به کسی می داد و او را بی آنکه بشناسد به عنوان مهمان خود می پذیرفت. مردم در قبال مردی مانند کعب بن اشرف که دشمنی او با جامعه اسلامی بود هیچ گونه تعهدی نداشتند و چون کسانی که او را کشتند از افراد قبیله خود او بودند از این جهت موضوع خونبها نیز منتفی بود. مسلمانانی که او را کشتند به اندازه‌ای در این اقدام خود از ترس و واهمه فارغ و بری بودند که یکی از آنان در وصف بیان کارشان نوشت:

« پنج مرد سرافراز و استوار و در ایمان خود راستگو ، که خداوند نفر ششم آنان بود، باز گشتند » به این وسیله مردم باور کردند که آنان خداوند را خدمت کرده اند و اقدامشان در قتل کعب مورد قبول و تصویب خدا بوده است.

طرف دیگر این مطلب آن است که محمد ﷺ نیز مجبور بوده است همیشه خود را در برابر يك قاتل احتمالی حفظ کند. و داستانی در این خصوص هست که یکی از افراد فقیر مکه به علت اصرار رئیس قبیله در صدد کشتن محمد ﷺ برآمد و به ظاهر ترتیب پرداخت دیت پسرش را بهانه کرد. مرد شمشیر خود را تیز و زهر آلود ساخت و هنگامی که به مدینه رسید و به حضور محمد ﷺ بار یافت هر چند عده‌ای

از مسلمانان به سبب داشتن شمیر نسبت به او ظنین بودند اما محمد ﷺ از خود ترسی نشان نداد و از او خواست که پیشتر برود و مطلب خود را بگوید. مرد گفت که فقط برای ترتیب خونهای پسرش آمده است ولی محمد ﷺ از پیمانی که آن مرد باریس قبیله برای قتل او داشته است سخن گفت و جزئیات قرارداد را آشکار کرد به طوری که مرد به علم فوق طبیعت محمد ﷺ ایمان آورد و همان جا به پیامبری او اقرار کرد و مسلمان شد.

از وقایع مهمی که در سال ۶۲۴ یعنی پس از جنگ بدر رخ داد و موجب توسعه قدرت محمد ﷺ گردید اخراج یا ازهم پاشیدن قبیله قینقاع بود که در آوریل همان سال ( شاید يك یا دوماد یرتر ) رخ داد علت ظاهری آن جنگی بود که بین عده ای از یهود قینقاع و مسلمانان رخ داد که در بازار به کسب اشتغال داشتند. هنگامی که يك زن عرب در دکان زر گری نشسته بود مردی یهودی بی آنکه آن زن متوجه شود گوشه دامنش را با خاری محکم به زمین دوخت به طوری که زن چون برخاست لباس وی پاره شد و قسمت اعظم بدن او عریان ماند. همه ناظران خندیدند ولی مسلمانی که در آنجا حاضر بود این حیل را بی حرمتی دانست و به کسی که مرتکب این عمل شده بود حمله کرد و او را کشت و خود نیز کشته شد. از آن پس یهودیان به قلعه و استحکامات خود پناه بردند ولی محمد ﷺ و مسلمانان فوری قلعه را در محاصره گرفتند.

اعتماد چندانی بدین داستان نیست چه نظیر آن در داستانهای پیش از اسلام نیز دیده شده است ولی چنین داستانی نشانه آن است که

اختلافات و منازعاتی بین یهود و مسلمانان وجود داشته است. و دلایل عمیق‌تر بر شدت عمل محمد ﷺ علیه آنان خود آشکار است. یهودیان حاضر نبودند جزء امت او بشوند، محمد ﷺ نیز با آنان قطع رابطه کرده بود با این همه يك نوع پیمان‌هایی بین آنان وجود داشت و محمد ﷺ نیز همیشه مواظب و مراقب بود که از هر گونه قصور استفاده کند و مفاد پیمان را اجرا نماید. و اما آنچه رخ داده از این قرار بوده است: محمد ﷺ از رابطه نزدیک یهود با عده ای از مخالفان که بر ضد سیاست دشمنی او با مردم مکه بودند اطلاع داشت. شاید محرك دیگر او برخورد منافع بین قینقاع و بازار آنها با مهاجران بوده است چه احتمال بسیار می‌رود که پس از آن بیشتر تجارت داخلی مدینه به دست مهاجران افتاده است.

محاصره پانزده روز طول کشید و سرانجام یهودیان مجبور به تسلیم شدند و قرار شد مدینه را با زن و فرزندان خود ترك گویند ولی اسلحه و وسایل زرگری خود را به جای گذارند، و سه روز به آنان مهلت داده شد که طلبهای خود را وصول کنند. پس از سه روز یهود مدینه را ترك گفتند و ابتدا به نقطه ای که چندان از مستعمره یهودی وادی القرا دور نبود رفتند و سپس پس از يك ماه به سوره منتقل شدند. این دسته از یهودیان، متحد عبدالله بن ابی و دیگر اعراب مدینه بودند ولی قبایل دیگر در این زمان مسلمان شده و اتحاد خود را فسخ کرده بودند و کوششهای عبدالله بن ابی برای ممانعت از این پاشیدگی به جایی نرسید. عبدالله در صد ملاقات با محمد ﷺ برآمد و چون خواست به زور وارد شود نگهبان او را چنان به عقب راند

که صورت وی زخمی شد و خون جاری گشت اما موقعیت اجازه انتقام گرفتن یا جبران اهانت را نمی داد . پس از حضور ، عبدالله در باره اهمیت مساعدتی که ممکن است قبیله قینقاع در صورت بروز جنگ دیگری با مردم مکه با مسلمانان بکنند سخن گفت و اطلاع داد که در حدود ۷۰۰ مرد جنگی در اختیار دارد که نیمی از آنان مسلح هستند . ولی عمر بن الخطاب اصرار داشت که یهودیان باید مدینه را ترک گویند هر چند در باره شرایط دیگر کمی ملایمت نشان داد . این شکست متحدان که خود نشانه ضعف عبدالله بن ابی بود ، آنان را متقاعد ساخت که بهتر است به شرایط تسلیم شوند . تمام این اوضاع نشان می دهد که وضع سیاسی مدینه از سال ۶۲۴ به بعد تا چه اندازه تغییر یافته بود .

موضوع دیگری که پس از بدر موجب استحکام مسلمانان گردید ازدواج بین رؤسای مهاجران بود . ازدواج پسر عموی عمر بن الخطاب علی عنه السلام با دختر او فاطمه عليها السلام ظاهراً تا ژوئن ۶۲۴ صورت نگرفته بوده است .

نخستین کودک این ازدواج حسن عليه السلام بود که نوۀ عمر بن الخطاب است و در اول اول مارس ۶۲۵ قدم به جهان گذاشت . در سپتامبر ۶۲۴ عمر بن الخطاب یکی دیگر از دختران خود یعنی ام کلثوم را به ازدواج عثمان در آورد که بعدها خلیفه سوم شد . عثمان قبلاً با خواهر ام کلثوم یعنی رقیه ازدواج کرده بود ولی رقیه در زمان جنگ بدر در گذشت و این ازدواج تجدید رشته سابق بود . آخر الامر در آخر ژانویه ۶۲۵ خود عمر بن الخطاب با حفصه دختر عمر که بعد خلیفه دوم شد ازدواج کرد . این ازدواج را بطلای بین عمر بن الخطاب و یکی از بزرگترین اصحاب او ایجاد کرد و

برای حفصه نیز که شوهر خود را در جنگ بدر از دست داده بود شوهری مناسب پیدا شد. این ازدواج‌ها مانند ازدواج‌های دیگر عَلَيْهِ السَّلَام یا پیروان او هدف سیاسی داشته است.

**شکر کشی سال ۶۴۶ پس از غزوه بدر، آمادگی‌های مردم مکه**  
یکی از کارهای مهم عَلَيْهِ السَّلَام مستحکم ساختن موقعیت خود در مدینه بود. یکی دیگر از کارهای او آماده شدن برای مقابله با حمله و واکنش مکیان بود که اجتناب از آن امکان نداشت. اهالی مکه برای حفاظت و صیانت کارهای تجارتی خود مجبور بودند به همسایگان خود نشان دهند که واقعه بدر موقتی بوده است و هنوز قدرت آن شهر از مدینه بیشتر است و می‌توانند هر گونه تهدیدی را که نسبت به بازرگانی آنان پیش آید برطرف سازند. از طرف دیگر عَلَيْهِ السَّلَام از اهالی مکه انتظاری جز جنگ نداشت و مجبور بود بیشتر وقت خود را به این شکل مصروف دارد. با در نظر گرفتن این موضوع است که می‌توان به اهمیت وقایعی که در بقیه سال ۶۲۴ رخ داد پی برد.

در مکه اخبار بدر ابتدا با شکست و تردید تلقی شد ولی چون به وقوع و اهمیت این فاجعه پی‌بردند سخت تحریک شدند. اما ابو-سفیان فوری نظارت بر کارها را در دست گرفت. زاری و ندبه بر مردگان را ممنوع ساخت تا مانع آن باشد که مسلمانان از پیروزی خود شادمان شوند و از طرف دیگر مردم نیروی خود را که برای انتقام لازم است از دست ندهند ولی شاید علت اصلی آن بود که خواسته است مانع ضعف روحی مردم بشود و خود رسماً اعلام کرد تا زمانی

که انتقام این حمله را از محمد ﷺ باز نگرفته از خوردن روغن و مقاربت با زن خود<sup>۱</sup> داری کند و از صاحبان کالا که کالای آنها به سلامت وارد شده بود موافقت گرفت که منافع آن را به مصرف تهیه جنگ برسانند.

پس از چندی احساسات خاموش شد. محدودیت سوگواری را برطرف ساخت کعب بن اشرف یهودی مدینه ای برای آنکه حس انتقام جویی مردم مکه را برانگیزد در اشعار خود از سوگواری و غم تمجید کرد. رؤسا نیز در صدد طرح نقشه ای برآمدند که چگونه موقعیت سابق خود را به دست آورند در عین حال هنوز اسیرانی در مدینه بودند که می بایست فدیة آنها را بپردازند و آزادشان سازند.

در حدود ده هفته پس از بدر یعنی تقریباً آخر ماه مه ابوسفیان برای انجام دادن قولی که داده بود به اتفاق ۲۰۰ نفر عازم حمله به مدینه شد. نخستین هدف او ایجاد اعتماد در بین اهالی مکه بود و می خواست به دنیا نشان دهد که روز مکه به آخر نرسیده است. احتمال دارد خواسته است اطلاعاتی درباره موقعیت سیاسی مدینه نیز به دست آورد. البته ابوسفیان خود می دانست که با این عده کم (که حتی از تعداد مسلمانان در بدر هم کمتر بود) نمی تواند صدمه کلی به محمد ﷺ وارد سازد، و ظاهر آن انتظار هم نداشت که عده ای از اهالی مدینه به او ملحق گردند. نظارت او بر اینکه خبر حرکت او از مکه منتشر نشود بسیار خوب و دقیق بوده است چه بی آنکه محمد ﷺ اطلاعی حاصل کند خود را به حدود مدینه رسانید یکی از دوستان سابق او، رئیس بکی از قبایل یهودی النضیر، مقداری غذا و اطلاعاتی درباره



موقعیت محل به او داد که البته کافی نبود و ابوسفیان تصمیم گرفت فوری باز گردد و برای آنکه نشان دهد که به قول و قسم خود عمل کرده است دو خانه را آتش زد و مقداری از مزارع را غارت کرد . این حمله از نظر همان غزوه های معمولی بود که سرعت و ناگهانی بودن از مشخصات آن به شمار می رفت ، هر چند نتیجه آن ناچیز بود .

محمد ﷺ همینکه از آمدن ابوسفیان آگاه شد به اتفاق ۲۰۰ نفر آهنگ او کرد و به تعقیب وی پرداخت ولی سرعت عمل به خرج نداد و نتوانست به مکیان برسد . امامکیان نیز چون با شتاب بسیار در حرکت بودند مقداری از آذوقه اضافی خود را که بیشتر غذای سویق (مخلوطی از آرد جو و روغن خرما ) بود به جای گذاشتند . مسلمانان آن را تصرف کردند و به همین مناسبت این غزوه را «غزوة السویق» نامیدند .

در همان سال ( در ژوئیه و در سپتامبر و آخر اکتبر ) محمد سه لشکر کشی کرد . عده شرکت کنندگان را از ۲۰۰ تا ۴۵۰ نفر نوشته اند و این عده نشان می دهد که در تعداد نفرات محمد ﷺ پس از غزوة بدر افزایشی حاصل شده بوده است و علت آن از يك طرف میل و علاقه مردم به شرکت در حمله های مسلمانان و از طرف دیگر آمدن چادر نشینان به مدینه بوده است که ارزش مطالعه و مذاقه دارد .

هر چند تعیین آمار آنان دشوار است ولی از این تاریخ به بعد در اطراف محمد ﷺ افرادی دیده می شوند که بیشتر به طوایف فقیر و ضعیف نواحی غربی مدینه تعلق دارند یعنی طوایفی که مسلمانان از ۶۲۳ در قلمرو آنها بوده اند . عده ای از این افراد از اشران محمد ﷺ نگهداری می کردند و محمد فکر می کرد در غیاب خود می تواند



نگهداری از مدینه را به آنها واگذار کند. این مردم خود را به محمد ﷺ نزدیک می دانستند و از او در مقابل هر گونه مخالفت که از طرف اهالی مدینه می شد محافظت می کردند. به عده ای از آنان رسماً لقب و عنوان مهاجر داده شده بود و عده دیگر که کسانی بودند که تحت حمایت قبیله «مهاجران» قرار داشتند.

برخلاف لشکر کشی ۶۲۳ سه لشکر کشی ۶۲۴ علیه طوایف شرقی و جنوب شرقی مدینه بود که در لشکر کشی اول و سوم نام طایفه سلیم برده شده است. این طایفه رابطه نزدیک با مردم مکه داشت چه مکیان به معادنی که در قلمرو آنها کشف شده بود علاقه مند بودند. لشکر کشی سوم علیه یکی دیگر از طوایف شمالی سلیم بود که ممکن است همان قبیله ای باشند که دو سال بعد نیروی عظیمی برای یاری به مردم مکه به آن سامان فرستادند. نتیجه آنکه هدف این سه لشکر کشی آن بوده است که این طوایف را تهدید کنند و مانع از آن بشوند که در آینده از مکیان حمایت نمایند. همچنین می خواستند به آن طوایف ثابت کنند که اگر به اقدامی علیه محمد ﷺ دست بزنند قدرت آن را دارند که از آنها انتقام بگیرند.

در این هنگام کوشش و همت مکیان بر این بود که آنچه از دست داده اند بار دیگر به دست آورند در تابستان کاروانی از جاده ساحلی که از بین مدینه و دریا می گذشت عبور نکرد. پس از لطمه ای که به حیثیت و اعتبار تجارت مکه وارد آمد عده ای از طوایف کنار جاده مخصوصاً آنهایی که نزدیک مدینه بودند به محمد ﷺ بیش از مکیان علاقه مند شده بودند، برای صیانت و محافظت یک کاروان مجبور بودند

عده کثیری محافظ با آن همراه کنند و تازه این مقدار ضامن ممانعت از برخورد با مسلمانان نبود زیرا هرچه عده بیشتر می شد اختفای آن دشوارتر بود. در این حال بود که ابوسفیان بهتر آن دید که نیروی خود را صرف کاروانها ننماید بلکه از آنها برای آماده کردن و فرستادن لشکری به مدینه استفاده کند.

در این هنگام عده ای از تجار مکه که رقیب ابو سفیان بودند تصمیم گرفتند کاروانی را از جاده مشرق مدینه گسیل دارند. ابتدا راهنمای معتمدی یافتند و کاروانی را با کالایی به ارزش صد هزار درهم (نقره) همراه او روانه کردند. متأسفانه خبر این کاروان به محمد صلی الله علیه و آله رسید و او پسر خوانده خود زبیدن حارثه را با صد مرد جنگی برای مقابله با کاروان فرستاد و آنان توانستند تمام کاروانیان را اسیر کنند. کسانی که همراه و بدرقه کاروان بودند چون از آنچه در بدر رخ داد آگاه بودند از نبرد با مسلمانان هراس داشتند و فرار را بر قرار ترجیح دادند. این واقعه در نوامبر ۶۲۴ رخ داد.

### جنگ احد (۲۳ مارس ۶۲۵)

در حدود ۱۱ مارس ۶۲۵ بود که سپاه اصلی از مکه عازم گشت و امکان دارد که در بین راه قوای متحد نیز به آن ملحق شده باشند. هنگامی که مکیان به مدینه نزدیک شدند دارای سپاهی مجهز در حدود ۳۰۰۰ نفر بودند که ۷۰۰ تن از آنان زره در برداشتند. همه سوارشتر بودند و یک نیروی ۲۰۰ نفری اسب سوار همراه داشتند. از طوایف بزرگ تقاضای الحاق نشده بود. اغلب طوایفی که با فرستادن نفر به مکیان یاری کردند از طوایف کوچکی بودند که هر چند اسماً مستقل بودند ولی در حقیقت وابسته به مکه به شمار می رفتند. ابوسفیان

شخصاً ریاست و رهبری سپاه را بر عهده داشت و نه تنها تمایل و اراده او این لشکرکشی را ایجاد کرده بود بلکه امتیاز فرماندهی نیز به قبیله او داده شده بود. ابوسفیان شخصاً تمام امور را در دست نگرفت بلکه آنها را بین اشخاص دیگر تقسیم کرد که یکی از آنان صفوان بن امیه بود که رقیب ابوسفیان بدشمار می رفت و فرماندهی کاروان شکست خورده نوامبر ۶۲۴ را به عهده داشت .

سپاه آرام پیش رفت و در پنجشنبه ۲۱ مارس به واحه های اطراف مدینه رسید. بهترین مسیر برای سپاه عبور از وادی مغرب واحه ها بود که می توانستند به آسانی خود را به واحه های گوشه شمال غربی برسانند این راهی بود که مکیان در پیش گرفتند، از طرف مردم مدینه برای متوقف ساختن این سپاه اقدامی نشد و آنان بی آنکه با مخالفت یا مقاومتی مواجه شوند به قسمت شمالی واحه ها رسیدند و در محلی در جنوب کوه احد اردو زدند. در نزدیکی محل، مزارع غلات وجود داشت که در آن موقع همه به بار آمده بودند و مکیان از آنها برای چرانیدن دواب خور استفاده می کردند تا مردم مدینه را بر انگیزند و به جنگ بکشانند .

عصر پنجشنبه بود که یکی از پیمانهنگان اخبار کامل نیروی مکیان را به عبدالله بن عباس رسانید و تعدادی از انصار تمام شب را از اقامتگاه عبدالله بن عباس محافظت می کردند. روز جمعه صبح زود مسلمانان شورای جنگی تشکیل دادند، عبدالله بن عباس و عبدالله بن ابی و شیوخ قوم تصمیم گرفتند، در مرکز استحکامات و بناهای دیگر که نزدیک هم قرار داشت بمانند و بدین ترتیب دشمن مجبور بود آنان را محاصره کند

یا به جنگ خانه به خانه تن دردهد. عده‌ای از جوانان و دو تن از رؤسای با ارزش استدلال می‌کردند که اگر اجازه دهند مکیان مزارع را از بین ببرند نشانه ترس آنان است و حیثیت و شهرت آنان در مقابل طوایف چادر نشین لطمه خواهد خورد. پس بهتر آن است که از سنگرهای خود بیرون بروند و به جنگ پردازند. بعضی از افراد سرسخت آرام بودند و دستور ها و نقشه‌های محمد ﷺ را قبول کردند. ولی محمد نظر جوانان را قبول کرد و گفت اگر پیغمبری لباس جنگ در بر کرد دیگر نباید آن را بیرون آورد تا خدا بین او و دشمنانش تصمیم بگیرد.

دیر وقت بود که نیروی مدینه به طرف اردوگاه حرکت کرد بنا بر روایات، محمد ﷺ از قبول یاری و همکاری یکی از طوایف یهود که از متحدان عبدالله بن ابی بودند خودداری کرد زیرا از مؤمنان نبودند. شب را در نزدیکی دشمن به سر بردند. سحرگاهان بسیار زود با استفاده از اطلاعاتی که از وضع محل داشتند بی آنکه دیده شوند خود را به سرازیرهای کوه احد رسانیدند بدین ترتیب اردوی دشمن بین آنان و ساکنان اصلی واحه ها قرار گرفت. محمد ﷺ برای محافظت جناح چپ پنجاه تن از تیر اندازان خود را در بر آمدگی مشرق گمارد.

کمی پیش از آنکه جنگ آغاز شود عبدالله بن ابی و پیروانش میدان را ترك گفتند. ظاهراً بنا بر آنچه گزارش شده است این اقدام واکنش مخالفی بوده است که با پیشنهاد او مبنی بر باقی ماندن در استحکامات شده بود. ولی اگر چنین باشد چرا تا نیمه راه با محمد ﷺ

همراهی کرد؟ فکر او هر چه باشد ناشی از خود خواهی بوده است؛ آیاتی چند در این باب نازل شده است که می گوید:

وَمَا أَصَابَكُمْ يَوْمَ التَّلَاقِ الْجُمُعَانِ فَيَاذَنَ اللَّهُ وَلَيَعْلَمَ الْمُؤْمِنِينَ  
وَلَيَعْلَمَ الَّذِينَ نَافَقُوا وَقِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا قَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ  
أَوْ ادْفَعُوا قَالُوا لَوْ نَعْلَمُ قِتَالًا لَا تَبَعْنَاكُمْ هُمْ لِلْكَفَرِ يَوْمَئِذٍ  
أَقْرَبُ مِنْهُمْ إِلَّا يَأْنِي يَقُولُونَ بِأَفْوَاهِهِمْ مَا لَيْسَ فِي قُلُوبِهِمْ وَاللَّهُ  
أَعْلَمُ بِمَا يَكْتُمُونَ ، الَّذِينَ قَالُوا لِإِخْوَانِهِمْ وَقَعَدُوا لَوْ أَطَاعُونَا  
مَا قَاتِلُوا قُلْ فَادْرَؤْا عَنْ أَنْفُسِكُمُ الْمَوْتَ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ .  
(سوره ۳ آیات ۱۶۰ تا ۱۶۲)

این قسمت دارای اهمیت خاصی است زیرا در آن به روش جدیدی از مخالفان عَدُوِّ اللَّهِ که تا آن زمان به عبارتی نظیر «آنان که قلبشان بیمار است» یاد می شد به عنوان «منافقان» یا کسانی که ریاکاری و دو رویی می کنند نام برده شده است . این تغییر عنوان علامت بروز مخالفت شدید بین دو طرف است مخصوصاً وقتی که عبدالله بن ابی خوشحالی خود را از ناراحت بودن عَدُوِّ اللَّهِ پنهان نکرد . با وجود این جدایی، محمد صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ نیرویی بزرگتر از آنچه در بدر داشت، آماده کرده بود که برخی شماره نفرات آن را تا ۷۰۰ نفر نوشته اند . مکیان به مراتب بیشتر از این عده بوده اند اما حالت و روحیه عده کثیری از آنان خوب نبوده است.

محمد ﷺ محل خود را در میدان نبرد بامهارت انتخاب کرده بود. قسمت اعظم واحه‌ها را به دست دشمن سپرده بود ولی حساب کرده بود که استحکامات پراکنده بر روی واحه‌ها می‌توانستند در مقابل حملهٔ مکیان استقامت نمایند و مکیان وقت خود را صرف گرفتن و تسخیر این استحکامات نخواهند کرد و مجبور خواهند شد به نیروی محمد ﷺ حمله کنند و برای چنین اقدامی ناچار خواهند بود از کنار وادی بگذرند و به طرف تپه‌ها بروند و در این حالت شیب کوه مانع از آن خواهد شد که سواره نظام بتواند وارد عملیات شود و از تفوق عدد نفرات نیز سودی نخواهند برد.

احتمال دارد که جنگ با حملهٔ سواره نظام مکیان به اردوی محمد صلی الله علیه و آله آغاز شده است و آنان در اثر تیر اندازی سر بازان محمد ﷺ به عقب رانده شده اند. سپس علمدار به قصد جنگ تن به تن پیش آمده است ولی طولی نکشیده که جنگ همگانی خونینی در میدان در گیر شده است و افراد قبیله‌ای که امتیاز حمل علم را داشتند، با کمال شجاعت در برابر حمله‌های سنگین دشمن مقاومت کرده و جنگیده‌اند و نه تن از این افراد در راه حفظ علم کشته شده‌اند و این عده برای يك قبیله کوچک خسران بزرگی بوده‌است با وجود این علم به دست مسلمانان نیفتاده ولی پیاده نظام مکه در برابر حملهٔ مسلمانان تاب مقاومت نیاورده پایه فرار گذاشته‌اند. مسلمانان تا چه حد پیش رفته‌اند معلوم نیست. بعضی از گزارشها حکایت از آن دارد که وازداردو گاه مکیان شده‌اند ولی عدهٔ دیگر عقیده دارند که غنیمتی به دست نیاورده‌اند (هر چند این دو مطلب مخالف و مباین یکدیگر نیستند).

در همان هنگام که مسلمانان پیروزی خود را از آن خود می دانستند ناگهان ورق برگشت. سواره نظام که در جناح راست و تحت فرماندهی خالد بن ولید بودند چون متوجه بی نظمی نیروی مسلمانان گردیدند و دیدند که تیراندازان از محل خود خارج شده و به بقیه سپاهیان پیوسته اند، فوری بر سر چند تیراندازی که باقی مانده بودند تاختند و عقب نیروی مسلمانان حمله بردند. اغتشاش، در لشکر محمد ﷺ پیدا شد مخصوصاً وقتی که فریادی شنیده شد که می گفت محمد ﷺ کشته شده است. مسلمانان یکدیگر را لاقبل به حد کشت مضروب و زخمی می کردند. گرچه محمد ﷺ در حقیقت کشته نشده بود ولی برای مدتی جنگ تن به تن سختی در اطراف او در گرفت چنانکه در ناحیه صورت و پا زخم برداشت و او نیز شخصاً با نیزه یکی از مکیان را زخمی کرد که در اثر آن بعداً در گذشت. محمد ﷺ و یارانش کم کم خود را به دامنه تپه رسانیدند در اینجا بود که مسلمانان دور هم گرد آمدند و در کار نقرات خود نظم و ترتیبی دادند. گروهی از نیروی اصلی جدا شدند و اعزام استحکامات نزدیک مرکز واحه ها گردیدند و بیشتر آنان کشته شدند.

در این هنگام موقعیت مسلمانان که کمی از زمان شروع جنگ بهتر شده بود دفاع را آسانتر می ساخت و به همین علت بود که محمد ﷺ آنچه را انتخاب کرد مخصوصاً آنکه از دسترس نیروی ضربتی مکیان یعنی سواره نظام خارج بود و در نتیجه حمله به کوه متوقف گردید. هر چند مکیان مدت دیگری در میدان باقی ماندند ولی سر انجام ابوسفیان پس از آخرین اتمام حجت و تهدیدی که کرده بود نیروی خود دستور

عقب نشینی داد. ابوسفیان در صدد حمله به واحه‌ها بر نیامد و از راهی که آمده بود عازم مکه شد.

در توجیه جنگ احد نخستین سؤالی که پیش می‌آید صرفاً جنبه نظامی دارد. جنگ به نفع کدام طرف بوده است، بعضی از محققان مغرب زمین بی آنکه به گزارشهای نخستین دوره اسلام توجه کنند تصور کرده اند این جنگ به شکست مسلمانان تمام شده و پیروزی بزرگی برای مکیان بوده است. از نقطه نظر نظامی این عقیده اشتباه است. هدف نظامی مکیان انهدام و از بین بردن جامعه اسلام یا چیزی نظیر آن بوده است از قبیل برانداختن محمد ﷺ از مقامی که داشته و یا از بین بردن نفوذ اودر بین اهالی مدینه و نظایر آن، ولی در بر آوردن این هدف کاملاً ناکام مانده اند.

درست است که مکیان در حدود هفتاد و پنج تن از مسلمانان را کشتند و در برابر آن بیش از بیست و هفت تن تلفات ندادند و کم و بیش انتقام جنگ بدر را گرفتند، هر چند مطابق بعضی از روایات عده کشته شدگان مکی در هردو جنگ بیشتر بوده است، ولی همیشه فخر و مباهات می کردند که خونبهای کشتگان بدر را چندین بار بیشتر جبران خواهند کرد و اینک تلافی لا اقل يك بريك بود. مکیان گرچه از حیث تلفاتی که وارد ساخته بودند برتری داشتند ولی نتوانسته بودند هدف خود را بر آورده کنند و اخیراً خواب آن می دیدند که تمام عربستان را تحت نظارت خود در آورند ولی در جنگ احد نشان دادند که حتی قادر به محافظت خود در برابر محمد ﷺ نیستند. چه تحقیق‌ری بالاتر از این برای تجار مکه می شد تصور کرد! این خود



علامت آن بود که پایان امپراتوری تجارتی آنان فرا رسیده است. مطلب دیگری که تصور ناگامی مکیان را به وجود می آورد این است که آنان نتوانستند خبر پیروزیهایی را که در مراحل آخر جنگ به دست آورده بودند به مکّه برسانند. ابوسفیان البته می دانست که باید قدرت عَلَيْهِ السَّلَام را درهم شکند و ظاهراً پیش از آنکه میدان جنگ را ترک گوید اطلاع داشت که شایعه کشته شدن عَلَيْهِ السَّلَام دروغ است. پس چرا عقب نشینی کرد و اقدامی دیگر ننمود؟ جواب آنکه کار دیگری از او ساخته نبود و نمی توانست مجدداً به نیروی عَلَيْهِ السَّلَام حمله ببرد زیرا بسیاری از مردانش و اسبهای آنان به تیر دشمن مجروح شده بودند. علاوه بر این جنگ جمعی و گروهی برخلاف سنتهای جنگی عرب بوده است. همچنین رفتن به جنوب و واحه‌ها خردمندانه نبود. او می دانست که عبدالله ابن ابی وقسمت اعظمی از نیروی مدینه در جنگ شرکت نکرده اند و اگر اقدامی بر ضد آنان بکند امکان دارد که به وی حمله برند. عده دیگر از اهالی مدینه نیز بودند که در جنگ احد شرکت نداشتند ولی بی شک برای دفاع از استحکامات خویش آماده بودند. شاید وی انتظار داشته است که از طریق سیاسی بر عبدالله بن ابی پیروز شود چه مطالبی درباره عدم علاقه او به عَلَيْهِ السَّلَام شنیده بود. شاید علت تصمیم او آن بوده که متوجه شده است که نیروی پیاده نظام او در جنگ با مسلمانان ضعیفتر باشد، اخلاق و روحیه آنان هم در این هنگام می بایست بسیار ضعیف شده باشد. پس باز بین رفتن نیروی سواره نظام بهتر آن دیده است که به مکّه باز گردد.

اما برای عَلَيْهِ السَّلَام از نقطه نظر نظامی نتایج جنگ ناراضی کننده

نبوده است، زیرا مسلمانان نشان دادند که با مکیان مساوی و برابر هستند و پیاده نظام آنان می تواند با دشمن برابری کند. کثرت تعداد کشتگان بیشتر در اثر حمله سواره نظام بوده است و مسلمانان در آن هنگام فقیر بودند و نمی توانستند گردانی از سواره نظام تشکیل دهند. با وجود این ناتوانی، مُحَمَّدٌ صَلَّی اللّٰهُ عَلَیْهِ وَاٰلِهٖ وَسَلَّمَ توانسته بود خود را در مقابل مکیان حفظ کند و این تنها چیزی بود که در هر حال می توانست انجام دهد. آینده وابستگی بدان داشت که چند تن را بتواند به جامعه خود جلب نماید و نیروی جنگی آنها را تقویت کند، از بین کشته شدگان هفتاد تن آنها از انصار بودند که احتمال می رفت بر مخالفت مردم مدینه نسبت به او بیفزاید. از طرف دیگر تعداد کشته شدگان از اعتبار و حیثیت مسلمانان در نظر چادر نشینان می کاست.

به طور کلی آنچه گفته شد در درجه دوم قرار داشت. نکته اصلی آن بود که هنوز به موقعیت مُحَمَّدٌ صَلَّی اللّٰهُ عَلَیْهِ وَاٰلِهٖ وَسَلَّمَ در مدینه لطمه ای وارد نیامده بود جنگ اصولاً نوعی بخت آزمایی بود. گرچه مسلمانان عده بیشتری را از دست دادند، ولی از این که بگذریم این بخت آزمایی به سود آنان پایان یافت. نتیجه عملی آنکه هر دو طرف لازم بود یک بار دیگر روبه رو شوند تا نتیجه قطعی به دست آید و در ضمن هر دو می بایست بر نیروی خود بیفزایند. این موضوع تنها یک مسئله نظامی نبود، هر چند مُحَمَّدٌ صَلَّی اللّٰهُ عَلَیْهِ وَاٰلِهٖ وَسَلَّمَ می توانست از جلب یاریهای نظامی بر خوردار شود، چه او رهبر یک نهضت دینی بود و با جریان نیروهای ضروری اجتماعی پیش رانده می شد. مکیان نیز از طرف دیگر سعی داشتند امتیازی تحصیل کنند که با وضع جدید مناسب باشد هر دو طرف در

ماه‌های بعدچه می‌کردند ؟

اگر جنك احد برای عَلَيْهِ السَّلَام يك شكست نظامی نبوده لا اقل يك شكست روحی بوده است دلیل این نکته آنکه او و مسلمانان پیروزی بدر را نشان مخصوص احسان خدا نسبت به خود و تأیید نشر اسلام می‌دانستند که خداوند آنان را برای انجام دادن آن دعوت کرده بود. از این رو پس از بدر دارای روحی قوی و اذاین پیروزی شاد و سرمست بودند و نمی‌توان آنان را به حق از این باب سرزنش کرد چه در تمام قرون و اعصار این تمایل در تمام ادوار دینی دیده شده است.

داود پیغمبر در حالی که مرد خدا ترس را مخاطب قرار می‌دهد می‌گوید :

نه هیچ حادثه سوء شیطانی بر تو رخ خواهد داد  
و نه هیچ بلایی با تو دست به‌گریبان خواهد شد  
زیرا خدا فرشتگانش را بر سر تو خواهد گمارد  
تا ترا در همه راه‌ها که در پیش داری از بلا  
نگهدارد (۹۰-۱۰۴)

مسلمانان چنین نتیجه گرفته بودند که در آینده همیشه پیروز خواهند شد. در قرآن آیدای است (سوره ۸ آیه ۶۷) که نه تنها اعتماد آنان را به قدرت نظامی که دارند تأکید و تأیید می‌نماید بلکه مسلمانان را ملتی مغلوب نشدنی معرفی می‌کند و آن آیه این است :

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ حَرِّضِ الْمُؤْمِنِينَ عَلَى الْقِتَالِ إِنْ تَكُنْ مِنْكُمْ  
عِشْرُونَ صَابِرُونَ يَغْلِبُوا مِائَتِينَ وَإِنْ يَكُنْ مِنْكُمْ مِائَةٌ يَغْلِبُوا  
أَلْفًا مِنَ الَّذِينَ كَفَرُوا بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَا يَفْقَهُونَ .

شاید محمد ﷺ در آغاز کار فکر می کرد بهتر آن است که جنگ نکند احساس می کرد که این کار نا خردمندانه و نوعی زیاده روی خواهد بود و یا هنوز عده ای از مسلمانان را در ایمان خود «پایدار» نمی دید و به همین علت این جنگ اثر نامطلوبی در اکثر مسلمانان داشت. اگر بدر نشانه رحمت خدا به شمار می رفت پس کثرت کشتگان جنگ احد نشانه عدم رحمت او بود؟ یا خدا اصولاً در کار این جنگ بیطرف بود؟ شك نیست که اغلب مسلمانان از این گونه افکار ناراحت بوده اند و از خود می پرسیده اند که چگونه خدا تعداد کشتگان را می داند ولی از مکان جنگ و لشکر کشی محمد ﷺ بر ضد مکیان آگاه نیست. در قرآن آیاتی است که نشان می دهد محمد ﷺ چگونه این را برگزار کرده است. نکته اصلی این است که وی می بایست توضیح دهد، چگونه خدا بی آنکه مسلمانان را ترك گوید اجازه داده است که چنین بدبختی بزرگی برای آنان پیش آید. البته ممکن نبود که بگوید این بدبختی نتیجه برتری نفرات یا افزونی قدرت حمله سواره نظام دشمن بوده است زیرا به مسلمانان گفته شده بود که خدا آنان را بر نیروهای عظیمتر پیروزی خواهد داد. نکته قابل توجه آنکه آیه بالا که می گوید هر فرد مسلمان برابر ده فرد دشمن است آیه

دیگری است که می گوید خدا از میزان توقع خود از مسلمانان کاسته است چون از ضعف آنان آگاه است و اینک از فرد مسلمان انتظار دارد که بادی در دشمن برابری کند با وجود این اصلاح و تغییر نظر هنوز يك مسئله باقی بود که عَلَيْهِ السَّلَام آن را به وسیله متوجه ساختن تقصیر به خود مسلمانان حل کرد و گفت :

وَلَقَدْ صَدَقَكُمُ اللَّهُ وَعْدَهُ إِذْ تَحُسُّونَهُمْ بِإِذْنِهِ حَتَّى إِذَا فَشِلْتُمْ وَتَنَازَعْتُمْ فِي الْأَمْرِ وَعَصَيْتُمْ مِنْ بَعْدِ مَا أَرَاكُمْ مَا تَحِبُّونَ ، مِنْكُمْ مَنْ يُرِيدُ الْآخِرَةَ ثُمَّ صَرَفَكُمْ عَنْهُمْ لِيَبْتَلِيَكُمْ وَلَقَدْ عَفَا عَنْكُمْ وَاللَّهُ ذُو فَضْلٍ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ ، إِذْ تَصْعَدُونَ وَلَا تَلُونِ عَلَى أَحَدٍ وَالرَّسُولُ يَدْعُوكُمْ فِي أَخْرِيكُمْ فَأَصَابَكُمْ غَمًّا بِغَمٍّ لِكَيْلًا تَحْزَنُوا عَلَى مَا فَاتَكُمْ وَلَا مَا أَصَابَكُمْ وَاللَّهُ بِيَا تَعْمَلُونَ .

خلاصه آنکه معائب جنگ احد به دستور خدا بوده است قسمتی از باب تنبیه به سبب عدم اطاعت و قسمتی به عنوان آزمایش ثبات و ایمان آنان. در عین حال مسلمانان را متذکر ساخته است که (Ib ۱۷۲f) موفقیت نسبی مکیان نشانه رحمت خدا به آنان نیست و این توفیق به خیر و صلاح آنان پایان نخواهد یافت بلکه سبب خواهد شد که بر عدم اطاعت از خدا بیفزایند و این موجب بروز خشم خدا و تنبیه آنان خواهد شد.

این مسائل نظامی و دینی بود که جنگ احد ، برای محمد ﷺ ، ایجاد کرد . این مشکلات غیر قابل تحمل نبود اما محمد ﷺ و مسلمانان را به اندازه کافی ناراحت می کرد . این آزمایش مسلمانان را قادر ساخت که از فرصتهایی که پیش می آمد حد اکثر بهره را بگیرند .

### بعد از احد

محمد ﷺ و مسلمانان کشتگان خود را در میدان نبرد به خاک سپردند و دیری از شب ۲۳ مارس گذشته بود که به خانه های خود باز گشتند . شب هنگام محمد ﷺ فرصت آن را داشت که درباره موقعیت واقعه فکر کند و این نکته را دریابد که فاجعه احد غیر قابل علاج نیست و به اقدامات بعدی او بستگی دارد . از این جهت صبح فردای آن روز کسانی را که با وی در احد بودند احضار کرد و به تعقیب مکیان فرستاد . این اقدام برای عربی که مورد غارت و دستبرد واقع شده بود امری طبیعی به نظر می رسید ولی محمد ﷺ قصد حمله به مکیان نداشت بلکه منظور وی فقط نشان دادن قدرت بود .

مکیان شب را در مکانی به نام حمراء الاسد گذرانیدند که بیش از چند میل تا مدینه فاصله نداشت و صبح یکشنبه ، پیش از آنکه مسلمانان برسند ، آنجا را ترك گفته بودند . آنان مدتی را در اطراف گذرانیدند زیرا نمی خواستند چنین وانمود کنند که از برادر محمد ﷺ و نیروی او گریخته اند . محمد ﷺ نیز برای آنکه گفته خود را مؤثر تر سازد و به افراد خود اطمینان دهد که مکیان را دیگر یارای بازگشت نیست افراد خود را به کار فراهم آوردن چوب بر گماشت و در شب

چندین توده آتش بر افروخت تا نشان دهد که نیروی او بیش از آن است که می‌کمان تصور کرده‌اند. این حیلۀ مؤثر واقع شد و یکی از اصحاب نیز در صدد بر آمد که روحیه می‌کمان را با انتشار اخبار اغراق آمیز درباره تعداد مسلمانان تضعیف کند. ابوسفیان البته سعی داشت مسلمانان را به وسیله شایعات بر انگیزد ولی عَلَيْهِ السَّلَام ناراحت نشد و کوشش ابوسفیان برای کشاندن آنان به جنگ عقیم ماند و پس از يك يا دو روز می‌کمان عازم شهر خود شدند.

مدتی پیش از آنکه ابوسفیان و رهبران دیگر به مکه برسند می‌دانستند که با انتقادات شدیدی رو به رو خواهند شد. کوششی به کار برده بودند ولی توفیقی به دست نیامده بود و اگر در صدد جبران بر نمی‌آمدند بدبختی در انتظار آنان بود. در لشکر کشی احتمام افراد جنگی مکه و طوایف دوست مجاور را جمع کرده همراه آورده بودند. تنها راه تشکیل يك سپاه قوی‌تر، جلب حمایت بعضی از طوایف چادر نشین مشرق و شمال شرقی بود، می‌کمان با تمام نیرو بدین کار پرداختند و از تمام وسایل که در دست داشتند استفاده کردند مانند تبلیغ درباره ضعف عَلَيْهِ السَّلَام تذکر اعتبار و حیثیت مکه، وعده غنائم و حتی رشوه مستقیم.

عَلَيْهِ السَّلَام دارای دستگاه خبر گزاری خوبی بود و در ظرف دو سالی که گذشت وی هر اقدام دشمن را پیش بینی و پیشگویی می‌کرد. همینکه اطلاع یافت که طوایف جمع شده‌اند و مدینه را تهدید می‌کنند سپاهی برای درهم شکستن آن گسیل داشت و این لشکر کشی در ژوئن سال ۶۲۵ به قطن صورت گرفت. طوایف چادر نشین از نزدیک شدن

مسلمانان دچار وحشت شده پراکنده گشتند و اندك غنیمتی به دست مسلمانان افتاد. شاید در نتیجه همین فعالیت‌های مسلمانان بود که نه تن از یکی از طوایف آنجا نیز به دین اسلام در آمدند و به مدینه منتقل شدند. این افراد حتی اگر این اقدام را به سبب رقابت در بین طایفه خود انجام داده باشند نمونه خوبی است که نشان می‌دهد قدرت محمد ﷺ تا چه اندازه پیشرفت کرده بوده است. مجدداً در آخر ژوئن بود که محمد ﷺ اطلاع یافت که نیروی عظیمی از بدویان در تحت ریاست سفیان لحيانی جمع شده‌اند. به این اجتماع نیز با صدور دستور قتل سفیان، به وسیله یکی از مسلمانان، پاسخ داد.

جمع کردن و برانگیختن بدویان بر ضد محمد ﷺ نشانه آن است که مکیان در این کار تا اندازه‌ای موفق بوده‌اند هر چند محمد ﷺ مانع ادامه آن شده است. دو واقعه تأثر آوری که بعد از آن برای مسلمانان رخ داده از این قرار است.

نخستین آنها در ژوئن ۶۲۵ در کنار چاه معونه رخ داد و طایفه عمیر در آن شرکت داشتند که عم و برادر زاده‌ای بر سر ریاست آن با یکدیگر رقابت می‌ورزیدند. در آن موقع قدرت عمومی‌تر بود و می‌توانست قسمت اعظم قبیله را همراه داشته باشد و برادر زاده نیز پیروانی داشت. عم و تمایل به اسلام داشت و شك نیست که فکرمی‌کرد با حمایت محمد ﷺ می‌تواند موفقیت خود را در بین قبیله تثبیت کند برای رسیدن به این هدف لازم بود عده کافی از افراد قبیله نیز مانند او مسلمان بشوند. از این جهت از محمد ﷺ درخواست کرد افرادی را برای تعلیم در میان طایفه او بفرستد و رسماً حمایت آنان را بر



عده گرفت. این حمایت می‌بایست به تصویب تمام طایفه برسد و غمو با وجود مخالفت برادرزاده خود از افراد طایفه درخواست که به تعهدات او احترام گذارند.

برادرزاده که خود را شکست خورده می‌دید نزد بعضی از قبایل طایفه دیگری به نام «سلیم» که نزدیک بودند، رفت و آنها را از نزدیک شدن مسلمانان آگاه ساخت و تحریک کرد که به مسلمانان حمله برند. در این حمله تمام مسلمانان به استثنای دو نفر کشته شدند که یکی از آن دو نفر از بدویان مجاور مدینه بودند که احتمال دارد با حمله کنندگان نسبتی داشته است و دومی را هم مرده انگاشتند در حالی که زنده بود و خود را به مدینه رسانید. این نفر اخیر که نجات یافته بود، در راه با دو تن از افراد طایفه عمیر مصادف شد و آنان را به انتقام خون دوستان خود کشت ولی این دو مرد متعلق به طایفه‌ای بودند که با محمد صلی الله علیه و آله اتحاد داشتند و او از آن آگاه نبود. محمد صلی الله علیه و آله در وضع عجیبی قرار گرفته بود زیرا با آنکه چهل تن از مردان خود را از دست داده و چیزی دریافت نکرده بود اینک می‌بایست خونبهای این دو تن را نیز بپردازد و منابع می‌گویند که مجبور بود. این خونبها را به همان کس یعنی برادرزاده بپردازد که در حقیقت مسؤول مرگ مسلمانان بود. این مشکل را بدین گونه حل کرد که هر چند اخلاقاً برادر زاده مسؤول بوده است ولی خون توسط طایفه دیگری ریخته شده بود.

صرف نظر از معماهایی که در این داستان هست، و در اینجا چندان بدانها توجه نکرده ایم، نکات برجسته چندی نیز وجود دارد. محمد صلی الله علیه و آله

می‌کوشید که در قسمتهایی از عربستان که در آنها هنوز نفوذ و حیثیتی به دست نیاورده بود جای پای باز کند، یعنی جاهایی که مردم هنوز از قدرت او وحشتی نداشتند تا در برابر آن مقاومت نشان دهند. ضعف نسبی او در اینجا بی‌شک قسمتی نتیجه تبلیغ مردم مکه و رابطه مکیان و طایفه «سلیم» بوده است. آنچه مورد توجه محمد ﷺ بود و برای او اهمیت داشت این بود که تا می‌توانست بر شماره متحدان خود می‌افزود و برای مقابله با خطراتی که ممکن بود به علت دخالت در سیاست داخلی طوایف پیش آید آماده بود. بی‌شک او از رقابت عمو و برادر زاده نیز آگاه بود زیرا معاون اول او ابوبکر در نسب‌شناسی خبره‌ای بوده و به روابط سیاسی قسمتهای مختلف هر طایفه علم کامل داشته است. پس فرستادن آن دو جوان به طایفه عمیر فداکاری حساب شده‌ای بود و خطرات آن را نیز پیش بینی کرده بودند. نتیجه برای هر دو شوم بود، ولی طایفه عمیر دشمن محمد ﷺ نشدند.

يك يا دو هفته بعد در ژوئیه ۶۲۵ واقعه ای نظیر آن برای مسلمانان رخ داد که چند نفر را از دست دادند. قربانیان این حادثه هفت نفر بودند که محمد ﷺ آنان را برای تعلیم طایفه‌ای که می‌خواستند اسلام را بپذیرند فرستاده بود. ولی این بهانه‌ای بیش نبود. زیرا در نقطه‌ای در جاده عربستان مرکزی راهنمایان طایفه این هفت تن را ترك کردند زیرا یکی از افراد آنها توسط مسلمانان به قتل رسیده بود. پس از آنکه راهنمایان آنها را ترك کردند افراد قبیله به مسلمانان حمله آوردند و چهار تن از آنان را که مقاومت کردند کشتند و سه تن دیگر را که تن به تسلیم دادند به عنوان زندانی به مکه بردند

در راه یگی از سه نفر خود را آزاد کرد و در حالی که شمشیری در دست داشت کشته شد. دو تن دیگر را در مکه به اقوام کسانی که در مکه کشته شده بودند و تصور می‌رفت که هنوز انتقام خون آنان گرفته نشده است فروختند، پس از آنکه دو ماه حرام سپری شد این دو تن را از منطقه حرم بیرون آوردند و از آنان خواستند که دین اسلام را انکار کنند و چون آنان امتناع کردند با زجر و آزار بسیار به قتل رسیدند. وضع کلی و خصوصیات این واقعه شباهت بسیار به واقعه معونه دارد. محمد سعی داشت قدرت خود را در همه جاحتی در نواحی که با خطر توأم بود گسترش دهد.

### اخراج دوم یهود

خبر کشته شدن دو گروه مسلمان ناچار مردم مدینه را ناراحت کرده بود گرچه از لحاظ تعداد چندان مهم نبوده است. فهرستی از اسامی کشته شدگان معونه در دست است که از بیست نفر تجاوز نمی‌کند و تمام از مهاجران یا انصار بوده‌اند، این خود دلیل آن است که اگر عده کشته شدگان بیشتر بوده است از بدویان متحدان مسلمانان بوده‌اند و در این صورت این تلفات در بین مردمی که فرد آن فردی شمرده می‌شده اثر بخش بوده است. هر چند ممکن است در آن مدت پیشرفتهای بسیاری صورت گرفته باشد ولی همان، به اندازه ای بوده که جبران این خسارات را می‌کرده است. امکان آن هست که این وقایع چندان موجبات نگرانی محمد صلی الله علیه و آله را فراهم نکرده باشد چه او با اصول و حقایق جنگی آشنا بود ولی افراد عامی مسلمان که هنوز از تأثرات روحی جنگ احد خلاص نشده بودند اثر این وقایع نامطلوب بود و

مخالفان محمد ﷺ در مدینه نیز تصور می کردند که به زودی از دست او خلاص خواهند شد.

با توجه به این سوابق است که اینک می کوشیم علت رفتار محمد ﷺ را با قبیله یهودی النضیر کشف کنیم . روزی در تاریخ اوت ۶۲۵ محمد ﷺ به محل سکونت این قوم رفت و از آنان خواست که در پرداخت خونبهای که می بایست به طایفه عمیر بپردازد به او مساعدت کنند . این خونبها بابت دو قربانی بود که به دست کسی که در واقعه معونه نجات یافته بود کشته شده بودند . در این باب اطلاعات نارساست چون قبیله نضیر متحد عمیر بودند و محمد ﷺ فکر می کرده است آنان باید بیش از دیگر سکنه مدینه در این قسمت یاری و مساعدت کنند و قبیله نضیر عکس آن را فکر می کردند . نکته اصلی هر چه باشد قبیله نضیر قول دادند که جواب مساعد بدهند و از محمد ﷺ خواستند دقیقه ای استراحت کند تا غذا حاضر شود . محمد ﷺ و همراهانش نشستند و به دیوار یکی از خانه ها تکیه کردند . چند دقیقه بعد محمد ﷺ آهسته بیرون آمد و دیگر باز نگشت و پس از چندی همراهان او نیز آنجا را ترك گفتند . وقتی به خانه رسید گفت : که خدا به او اطلاع داد که مردم نضیر در صد طرح نقشه حمله خائنانه علیه او هستند . چه می توانستند همان طور که نشسته بود سنگ گرانی را از بام به سرش بکوبند و او را بکشند . محمد ﷺ فوری اتمام حجتی برای قبیله نضیر فرستاد که باید مدینه را در ظرف ده روز ترک گویند و الا همه کشته خواهند شد . با وجود این حق مالکیت آنان بر نخلهایی که دارند محفوظ است و قسمتی از محصول آن از آن آنان خواهد بود .

چنین اتمام حجتی ظاهراً تناسبی با تقصیر یهود نداشت زیرا خیانتی انجام نگرفته بود و تنها گمان اینکه یهودیان در اندیشه چنین خیانتی بوده اند کافی نبود یا شاید مسئله برای نویسندگان مغرب زمین کاملاً روشن نیست. هر دو طرف از رفتار مسلمانان با کعب بن اشرف اطلاع داشتند و بنا بر عقایدی که آن روز در عربستان رایج بود محمد ﷺ هر آن انتظار داشت که اگر فرصت به دست مخالفان افتد او را بکشند تاخیر قبیله در دادن جواب ایجاد چنین فرصتی را می کرد و در حکم اقدامی خصمانه به شمار می رفت.

یهودیان ابتدا در صدد بر آمدند که تسلیم شوند خصوصاً که آورنده پیام یکی از رؤسای قبایل مهم عرب بود و آنان خود را امتکی بدان قبیله می دانستند، اما رئیس کل قبیله نصیر به نام حبی به مخالفت با رؤسای دیگر برخاست و از انجام دادن دستور سرباز زد. در حالی که حبی در شك و تردید به سر می برد عبدالله بن ابی برای او پیام فرستاد و قول حمایت داد و در ضمن آمادگی بعضی از بدویهای متحد خود را برای حمله به محمد ﷺ به اطلاع او رسانید. لذا یهود از پذیرفتن دستور محمد ﷺ باز ایستادند و او آنان را محاصره کرد. محاصره پانزده روز طول کشید و چون مسلمانان شروع به انهدام نخله‌ها و نخلستانها کردند یهودیان خود را باختند. عبدالله بن ابی نیز اقدامی دریاری آنان نکرد و یهود دریافتند که اگر نتوانند موقعیت خود را در مدینه حفظ کنند زندگی آنان از بین خواهد رفت لذا پیامی برای محمد ﷺ فرستادند که حاضرند دستور های او را بپذیرند. ولی شرایطی که در این بار محمد ﷺ پیشنهاد می کرد

سختتر شده بود بدین معنی که می بایست اسلحه خود را به زمین گذارند و از نخلستانها صرف نظر کنند. یهود ناچار موافقت کردند و به اتفاق کاروانی مرکب از ۶۰۰ شتر عازم خیبر شدند که در هفتاد میلی شمال مدینه است و یهود املاکی در آنجا داشتند. تمام شمشیرها و جوشنها و کلاه خودهای خود را به محمد ﷺ واگذار کردند تا در آتیه از آنها برای مسلح کردن مسلمانان فقیر استفاده شود بنا بر پیمانی که با انصار بسته شد تمام خانه ها و نخلستانها به مهاجران تعلق گرفت (ودو انصار فقیر) ، این خود دلیل آن است که مهاجران در آن موقع می توانستند خود را اداره کنند و دیگر نیازی به مہما نـداری انصار نداشتند.

اخراج یهود محرکهای چندی داشته است که نمی توان گفت کدامیک در ذهن محمد ﷺ قویتر بوده است، شاید دلیل اصلی، کوشش یهودیان برای کشتن او. بر همه مقدم باشد. از نظر مصیبت اخیر جمع کثیری از اهالی مدینه نیز به علت نزدیکی یهودیان با قبیله عمیر به مخالفت برخاسته اند. احتمال دارد علت دیگر این اقدام آن بوده که محمد ﷺ خواسته است پس از اتفاقات ناگواری که برای مسلمانان رخ داده روحیه مسلمانان را تقویت نماید و مقام خود را در مدینه حفظ کند و در این کار موفق شده است.

### اصلاح ازدواج وارث

کشته شدن چند تن از مسلمانان در جنگ احد ایجاد مسائل اجتماعی چندی کرد که مهمتر از همه تدارک زندگی زنان و دخترانی بود که بیوه یا یتیم شده بودند. اساس و مستند تعدد زوجة در اسلام یکی

از آیات قرآن است (سوره ۴ آیه ۳۵) که پس از جنگ احد نازل شده است  
به این شرح:

«وَإِنْ خِفْتُمْ أَلَّا تُقْسِطُوا فِي الْيَتَامَىٰ فَانكِحُوا مَا طَابَ  
لَكُمْ مِنَ النِّسَاءِ مِمَّنْىٰ وَ ثَلَاثَ وَ رُبَاعَ فَإِنْ خِفْتُمْ أَلَّا تَعْدِلُوا  
فَوَاحِدَةً أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ ذَلِكَ أَدْنَىٰ أَلَّا تَعُولُوا » .

آنچه در این آیه تعجب آوراست آنکه به اشخاصی که شش یا  
ده زن داشتند گفته شده است که نباید بیش از چهار زن داشته باشند  
بر عکس کسانی را که فقط يك (یا شاید دو) زن داشته اند تشویق  
می کند که تا چهار زن بگیرند . این موضوع را چگونه می توان  
توجیه کرد.

در این خصوص جزئیات بسیاری در منابع متعدد وجود دارد ولی  
ترجمه و تفسیر آنها کار آسانی نیست و آنچه در پایین خواهد آمد  
شرح مختصری از آن است نخستین موضوعی که باید در نظر داشت  
شرایط موجود در عربستان پیش از ظهور صلی الله علیه و آله است و مشکل عمده  
از همین جا بر می خیزد.

شواهدی در دست است که نشان می دهد در قسمتی از عربستان  
روابط اجتماعی مردم بر اساس اصول مادر نهادی بوده است . مردان و  
زنانی نام برده شده اند که تعلق به قبیله مادر داشته اند حتی طوایفی هستند  
که جد عمومی آنها زن بوده است . این گونه روابط در مدینه بیش  
از مکه دیده می شود چه در مکه اساس اجتماعی بیشتر بر اساس بدوی  
می بوده است .

پس آنچه در پیش از اسلام در عربستان دیده می شود مخلوطی است از این دو نظام که در گروه های مختلف مردم وجود داشته است. فرضیه دیگر آنکه جامعه وسیع همجنسی وجود داشته که در مرحله عبور از مرحله مادر نهادی به مرحله پدر نهادی بوده است و این مسئله با موضوعی که در بالا ذکر شد مطابق است که گفتیم در آن هنگام اصول فردی در مکه و قسمت های دیگر عربستان در حال رشد و نمو بوده است. معنای فردی آن است که شخص می تواند از آنچه مایملک عمومی بوده است استفاده شخصی بکند هر چند آنها را برای گروه ترتیب داده باشد. در عین حال طبیعی است که شخص به فرزندان خود علاقه مند است و می خواهد که ثروت خود را به آنان منتقل کند. يك گروه مادر نهادی از يك زن و اولاد مذکر و مؤنث او تشکیل می شد و بر این اساس ممکن بود سازمان های اجتماعی چندی به وجود آید از آنچه در عربستان رخ داده است اطلاع صحیح در دست نیست فقط احتمال می رود چیزی نظیر این باشد که هر وقت زنی می مرد مقام او به عنوان ریاست خانواده به دختر بزرگش منتقل می گردید و پس از او خواهر بزرگترش جای او را می گرفت. املاك تعلق به گروه داشت و برادر آن زن که رئیس بود (از طرف مادر) یا بزرگترین پسرش آن را اداره می کرد. بدین معنی که مرد اداره املاك را به پسر خود واگذار نمی کرد بلکه به پسر خواهرش محول می داشت. ازدواج يك زن مستلزم ترك خانه خانواده خود نبود. شوهر می بایست برای دیدار او به خانه پدر زنش برود، ممکن است فکر کرد که دو طایفه بیابانی برای مدت کوتاهی در نزدیکی هم چادر



زده باشند و بعد از هم جدا شوند و در چند مورد به نظر می‌رسد که يك زن دو شوهر داشته است یکی از طایفه خود و دیگری از طایفه یا قبیله دیگر. گزارشهایی است که می‌گویند که در دوران پیش از اسلام زنانی بوده‌اند که يك شوهر و یا در آن واحد تاره شوهر داشته‌اند و بعضی نیز با هر مردی که به آنان مراجعه می‌کرد روابط جنسی برقرار می‌کردند. ممکن است این داستان حقیقت داشته باشد، ولی ما به طور کلی از سازمان اجتماعی زنان اطلاع نداریم مخصوصاً از گروه اخیر که حکم زنان هر جایی را داشته‌اند. احتمال دارد که تهیه‌کننده این گزارش، هر چند مسلمان بوده، درستی اصول زناشویی عرب پیش از اسلام اغراق کرده است. اما آنچه مسلم است در اغلب موارد داشتن اطلاع درباره پدر کودک مهم نبوده است، همین قدر که مادر او را می‌شناختند کافی بود. کودک با خانواده مادر خود می‌زیست (یا عمه). پدر خاندهای از خود نداشت و هنگامی که برای دیدار زن می‌رفت در خانه خواهر یا عمه مادری خود می‌زیست.

با توجه به این سوابق است که باید اصلاحات ازدواج که در قرآن آمده است مورد مطالعه قرار گیرد. شاید مهمترین و ظاهراً ساده‌ترین دستور این است که وقتی زنی طلاق گرفت باید مدتی که در حدود سه ماه است عده نگه‌دارد تا بتواند مجدداً ازدواج کند. طلاق در عربستان رواج داشته و هنوز هم رایج است و مقصود از این عده آن است که تردید در باره پدر فرزندی به وجود نیاید و هدف اصلی این است که زن در آن واحد بیش از يك شوهر نداشته باشد. قرآن این موضوع را لازم می‌داند ولی در آن اصراری نمی‌ورزد زیرا می‌دانسته

است که در آن زمان کاملاً عملی نبوده است. سازمان يك جامعه را نمی‌توان در ظرف يك یا دو سال کلاً تغییر داد. با وجود این قرآن با طرفداری از قدرت پدر جسمانی قدمهای اول را برای تغییر جامعه مادر نهادی به جامعه پدر نهادی برداشته است. تشویق مسلمانان به گرفتن دو یا سه یا چهار زن دلیل آن است که این زنان در عین حال شوهری نداشته‌اند. نمی‌دانیم که زنان در خانه چه کسی می‌زیستند در بعضی از موارد زن در خانه پدری خود باقی می‌ماند و مرد به نوبت از زنان خود دیدن می‌کرد. اما عَلَيْهَا نمونه و رسم دیگری آورد که طبق آن زن در خانه مرد خود می‌رفت و مهاجران نیز از این روش پیروی کردند و به تدریج مسلمانان دیگر نیز آن را پذیرفتند به طوری که پس از مدتی جنبه عمومی به خود گرفت.

ذکر کلمه یتیمان در آیه قرآن، که گذشت، نشان می‌دهد که تنها مسئله بعد از احد مشکل زنان بیوه نبوده است بلکه دختران شوی نرفته نیز که تحت حمایت عم و پسر عم و اقوام دیگر قرار داشتند جزء این مسئله بودند برای يك فرد خود پسند و بی عاطفه آسان بود که مانع ازدواج دختران تحت حمایت خود بشود تا نظارت نامحدودی بر مایملک خود داشته باشد. او ممکن بود اجازه را بطن نامشروع بدهد و بس. این نامطلوب‌ترین و خسته کننده ترین نوعی از دوره قیمومیت «مادر» در مدینه بوده است که اینک با انتقال حق قیمومیت به «مرد» از میان رفته است. در مواجهه با چنین وضعی است که قرآن مردان را به گرفتن چند زن تشویق می‌کند. البته منظور آن نیست که قیم دختری، خود، با او ازدواج کند (مگر آنکه هر دو از درجات ممنوعه نباشند)

بلکه هدف اصلی آن است که اگر تمام مسلمانان چند زن داشته باشند دختران می توانند وقتی به سن ازدواج رسیدند فوری شوهر کنند. این اصلاحات برای آن بوده است که اساس خانواده را بر اصول فردی استوار کند و عادات قدیم را که در آن ارزش گروه بر فرد می چربیده است از رونق ببندارد. همچنین قواعد و دستورهای قرآن درباره ارث برای آن است که تقسیم دارایی خود را به طور صحیح تضمین نماید و از صورت عمومی خارج کند و به صورت فردی آورد. در چنین دوره انتقال کوشش مداوم برای یافتن مرد مقتدری است که بتواند دارایی خود را از جانب گروه خود اداره کند و با آن مانند دارایی شخصی خود رفتار نماید. دستورهای قرآن در باره ارث مختصر ولی پیچیده است. از دستورهای چندی که در باره این موضوع صادر شده است یکی از این قرار است:

« يُوصِيكُمُ اللَّهُ فِي أَوْلَادِكُمْ لِلذَّكَرِ مِثْلُ حَظِّ الْأُنثَيَيْنِ  
فَإِنْ كُنَّ نِسَاءً فَوْقَ اثْنَتَيْنِ فَلَهُنَّ ثُلُثَا مَا تَرَكَ وَإِنْ كَانَتْ  
وَاحِدَةً فَلَهَا النِّصْفُ وَلِأَبَوَيْهِ لِكُلِّ وَاحِدٍ مِّنْهُمَا السُّدُسُ مِمَّا  
تَرَكَ إِنْ كَانَ لَهُ وَلَدٌ فَإِنْ لَمْ يَكُنْ لَهُ وَلَدٌ وَوَرِثَهُ أَبَوَاهُ فَلِأُمِّهِ  
الثُّلُثُ فَإِنْ كَانَ لَهُ إِخْوَةٌ فَلِأُمِّهِ السُّدُسُ مِنْ بَعْدِ وَصِيَّةٍ يُوصِي  
بِهَا أَوْ دَيْنٍ آبَاؤُكُمْ وَأَبْنَاؤُكُمْ لَا تَدْرُونَ أَيُّهُمْ أَقْرَبُ لَكُمْ نَفْعًا  
فَرِيضَةٌ مِنَ اللَّهِ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلِيمًا حَكِيمًا » . (سوره ٤ آیه ١٢)

آنچه فعلا مورد توجه ماست جزئیات نیست ( هر چند این نکته مهم است که زنان نیز می توانند مانند مردان دارای املاک و دارایی باشند ) بلکه آنچه قابل توجه است این است که در قرآن برای بستگان نزدیک متوفاسهمی قایل شده است و سعی دارد که از قدرت افراد با نفوذ بکاهد و نگذارد که آنان به نفع خود دارایی اقوام ضعیف را تصاحب کنند.

محمد خود این نظریه را در باره خانواده خود به موقع اجرا گذاشت او سه زن داشت و در اوایل سال ۶۲۶ دو زن دیگر گرفت. یکی زینب بنت خزیمه از طایفه عمیر بود که سعی داشت با آن طایفه روابط نزدیکی داشته باشد. او بیوه یکی از مهاجران بود که در جنگ بدر کشته شده بود و قبیلۀ شوی مقتول او با قبیلۀ محمد ﷺ رابطه نزدیکی داشتند زینب بیش از سی سال نداشت و چند ماه پس از ازدواج فوت کرد. دیگری ام سلمه بیوه ابوسلمه بود که در نتیجه زخمهای جنگ احد در گذشت. او و شوهرش هر چند مسلمان بودند ولی تعلق به قبیلۀ مخزوم یعنی قبیلۀ ابوجهل داشتند و به طوری که می دانیم قبیلۀ مخزوم یکی از مراکز مخالف محمد ﷺ در مکه بود. هدف این ازدواج پیدا کردن راهی برای بیوه یکی از مهاجران بزرگ بود و شاید هدف دیگر آن یاری به محمد ﷺ برای آشتی کردن با مردم مکه بوده است.

یکی دیگر از ازدواجهای محمد ﷺ يك سال بعد یعنی در آخر مارس ۶۲۷ صورت گرفت. این ازدواج با زینب دیگری به نام زینب

بنت جحش بود که مورد انتقاد معاصران او قرار گرفته و بعداً نیز بهانه حمله‌ای به دست محققان مغرب زمین داده است. اینک مامی کوشیم این داستان را توجیه کنیم.

زینب دختر عمه محمد ﷺ بود. احتمالاً در زمان هجرت بیوه بوده و به اتفاق برادرانش که مسلمان بودند به مدینه مهاجرت کرده است. در آنجا بر خلاف تمایل وی محمد ﷺ او را مجبور کرد که به ازدواج پسر خوانده او زید بن حارثه درآید. در سال ۶۲۶ روزی محمد ﷺ برای گفتگو به خانه زید رفت. زید در خانه نبود و زینب را دید که نیمه برهنه بود. چنین گمان کرده‌اند که محمد ﷺ عاشق او شده از آنجا برگشته است در حالی که به خود می‌گفته: «سپاس باد خدا را سپاس باد دارنده دل‌هارا». چون زید باز گشت زینب داستان آمدن محمد ﷺ و امتناع او از آمدن به خانه و گفتار اسرار آمیز او را به زید بازگفت. زید فوری نزد محمد ﷺ رفت و تقاضای طلاق زینب را کرد. ولی محمد ﷺ به او گفت او را نگهدارد. از آن پس زندگی با زینب برای زید تحمل‌پذیر نبود و سرانجام مجبور شد او را طلاق گوید. وقتی عده او به سر آمد به عقد محمد ﷺ در آمد و برای صحیح جلوه دادن آن آیه‌ای نازل شد به این شرح:

«وَ إِذْ تَقُولُ لِلَّذِي أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيْهِ وَأَنْعَمْتَ عَلَيْهِ أَمْسِكْ

عَلَيْكَ زَوْجَكَ وَ اتَّقِ اللَّهَ وَ تَخْفِي فِي نَفْسِكَ مَا اللَّهُ مُبْدِيهِ وَ

تَخْشَى النَّاسَ وَ اللَّهُ أَحَقُّ أَنْ تَخْشَاهُ فَلَمَّا قَضَى زَيْدٌ مِنْهَا وَطَرًا

زَوْجِنَا كَمَا لِكِي لَا يَكُونُ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ حَرَجٌ فِي أَزْوَاجِ  
أَدْعِيَائِهِمْ إِذَا قَضَوْا مِنْهُنَّ وَطَرًا وَكَانَ أَمْرُ اللَّهِ مَفْعُولًا .

(سوره ۳۳- آیه ۳۷)

درباره اصل داستان اختلافی نیست فقط بعضی از جزئیات آن مشکوک است و با در نظر گرفتن کلی داستان نظریات مختلف داده اند. در این ازدواج نیز مانند تمام ازدواج‌هایی که محمد ﷺ برای خود یا دیگران ترتیب داده نظریات سیاسی داشته است. زینب از طرف مادر رابطه نزدیک با محمد ﷺ داشت و نسبت به او احساس مسئولیت می کرد خانواده پدری او تحت حمایت پدر ابوسفیان بودند و هنگامی که ابو سفیان لشکر کشی مکیان را علیه محمد رهبری می کرد این موضوع از نظر محمد ﷺ دور نبوده است. در آن هنگام دوتن از خواهران زینب با دوتن از رهبران مهاجر ازدواج کردند و ازدواج زینب با زید نیز نشانه آن بود که وی صاحب شخصیت مهمی بوده است. زیرا زید در نزد محمد ﷺ مقام شامخی داشت. چنانکه، اگر مرگ زودرس او را در نیافته بود شاید جای او را می گرفت. متأسفانه علت آن که چرا زینب ابتدا با ازدواج زید مخالف بود مجهول است. مشکل است تصور کنیم که او را شایسته خود نمی دانسته است. احتمال دارد که چون زینب زن جاه طلبی بوده میل داشته است با خود محمد ﷺ ازدواج کند . امکان دیگر آنکه انتظار داشته است با شخص دیگری ازدواج کند که محمد ﷺ به علل سیاسی با آن موافقت نداشته است. به هر صورت که باشد زینب خود پیش از ۶۲۶ در صدد ازدواج با محمد ﷺ بوده و

نقشه آن را طرح می کرده است داستان برخورد محمد ﷺ با زینب در غیبت زید و مقتون زیبایی او شدن اغراقی بیش نیست و در منابع نخستین ذکر نشده است به علاوه زینب در هنگام ازدواج سی و پنج یا سی و هشت سال داشت و در آن زمان این سن برای يك زن عرب سن طولانی بود. تمام زنهای دیگر محمد ﷺ به استثنای خدیجه هنگام ازدواج با محمد ﷺ از زینب جوانتر بودند. ممکن است که زینب زیبایی خود را حفظ کرده بوده است ولی اگر حقیقتی در این داستان باشد ممکن است برای انسان لااقل این گمان پیدا شود که طی زمان در این داستان دخل و تصرفاتی راه یافته است. بعدها مسلمانان همیشه می گفتند که در اسلام رهبانیت نیست و ریاضت آنان از تجرد ببری است. با در نظر گرفتن این مطلب است که باید توجه و علاقه محمد ﷺ را به جنس زیبا مطالعه کرد. حتی بعضی فخر و مباهات می کرده اند که قدرت جنسی و جسمی آنان به اندازه ای است که می توانند تمام زنان خود را در يك شب راضی کنند.

موضوع عاشق شدن در همان دید اول، به نظر می رسد متعلق به داستان خیال انگیز زندگی محمد ﷺ باشد و با آنکه آن را به زحمت ساخته و پرداخته اند، بسیار بعید می نماید که مردی در سن پنجاه و پنج سالگی عاشق زن سی و پنج ساله بشود.

در هر صورت آنچه مورد انتقاد معاصران محمد ﷺ قرار گرفته این نکته نبوده است، دلیلی در دست نیست که نشان دهد که این رفتار نفسانی و شهوانی برای يك نبی نامناسب باشد خصوصاً که در آن زمان طلاق متداول و امر عادی به شمار می رفت. آنچه در این ازدواج مورد



انتقاد قرار گرفته ازدواج محمد ﷺ با خویشان نزدیک است. ازدواج با زن سابق فرزند حرام بود و معمولاً پسر خواننده حکم فرزند را داشت و این مسئله بود که عده ای از مردم مدینه را علیه محمد ﷺ برانگیخت.

از آنچه رخ داده است به طور قطع اطلاعی نداریم. در آیه قرآن که در پیش ذکر شد نسبت به این موضوع که پسر خواننده حکم فرزند را دارد اعتراض شده است و می خواسته است رابطه حال را با گذشته کاملاً قطع کرده باشد. در این مورد باید به خاطر داشت که «پسر خوانده» در لغت عربی کاملاً دارای آن معنا نیست که امروز دارد، بلکه فقط مشخص رابطه ای است که خود به خود رخ داده باشد، ترجمه کلمه عربی این است: کسی پسر خوانده کسی نامیده می شود که از صلب او نباشد. ظاهراً زید بدین جهت پسر خوانده محمد ﷺ شناخته شده که غلام خدیجه بوده است و هنگامی که خدیجه او را آزاد کرد ابتدا پسر خوانده خدیجه و پس از ازدواج او با محمد ﷺ پسر خوانده محمد ﷺ شد.

پس این رابطه مربوط به اصول خویشاوندی مادری و روابط زناشویی است که همراه آن بوده است. آیه دیگری که در این خصوص نازل شده است می گوید که افراد را باید به پدر حقیقی آنها نسبت داد و این موضوع با اصل کلی که باید پدر هر کس مشخص باشد مربوط می شود و مقرر داشتن عده در طلاق نیز از همین نظر است.

بیش از این در این باره چیزی نمی توان گفت. البته این موضوع اجتماعی محتاج به اصلاح بود اما آیا فوریت نیز داشت؟ آیا ازدواج



با زینب از بعضی از جهات سیاسی و همچنین فوریت آن لازم بوده است؛ از این نکات اطلاعی نداریم. آنچه می‌توان گفت فقط این است که در این مسئله عامل اصلی سیاست و اصلاح مسائل اجتماعی بوده است و عشق را در آن چندان محلی نیست.

پیش از آنکه بحث در مسائل خانوادگی را رها کنیم باید به خاطر بیاوریم که در آن دوره عَلَيْهِ السَّلَام تا چه اندازه از این حیث ناراحت بوده است. در اکتبر ۶۲۵ بزرگترین نوۀ دختری او عبدالله پسر رقیه (که مرده بود) و عثمان، در سن شش سالگی در گذشت. از قضا نوۀ دیگری از فاطمه عَلَيْهَا السَّلَام و علی عَلَيْهِ السَّلَام در ژانویه (۶۲۶)، که نام‌ها را حسین گذاشتند، این ضایعه را جبران کرد.

#### لشکرکشی‌های ۶۲۶

پس از اخراج قبیلهٔ نضیر که در اوت ۶۲۵ صورت گرفت لشکرکشی دیگری تا آوریل سال ۶۲۶ رخ نداد. در روایات هست که در آن سال قحط در مدینه افتاد و شاید علت خودداری از لشکرکشی نیز این واقعۀ باشد و یا عَلَيْهِ السَّلَام در صدد تجدید قوا بوده است. به هر صورت در آوریل ۶۲۶ دارای نیرویی مرکب از ۱۵۰۰ نفر و ده اسب بود که با آن می‌توانست به بدر برود و این نیرو بزرگترین نیرویی بود که عَلَيْهِ السَّلَام تا آن زمان گرد آورده بود، داستان، (که ممکن است درست یا نادرست باشد) این است که ابوسفیان پیش از آنکه میدان جنگ احد را ترك گوید فریاد زد و گفت: «سال آینده شما را در بدر ملاقات خواهیم کرد.» و عمر به نام محمد عَلَيْهِ السَّلَام جواب داد: «در آنجا خواهیم بود.» برای حفظ این وعده تقریباً یکسال پس

از جنگ اخذ هر دو طرف آهنگ بدر کردند. مسلمانان هشت روز در بدر بودند و بازاری به راه انداختند ولی بین آنها و نیروی ابوسفیان که مرکب از ۲۰۰۰ نفر و پنجاه سوار بود برخوردی رخ نداد. ظاهراً هر دو قسمت از جنگ اجتناب داشتند و فقط منظور آنان قدرت نمایی بود. آنچه به نظر می‌رسد مسلمانان از این جهت برتری داشتند که طوایف ناحیه ساحلی را تحت تأثیر قرار دادند و احتمال دارد که در کار تجارت جای تجار مکه را گرفتند.

در ماههای بعد از آن ص از قصد مردم مکه که می‌خواستند از هر فرصتی برای انهدام او استفاده کنند آگاه بود و می‌کوشید که از هر گونه تحریک و حيله ممانعت کند. مردمی که با اهالی مکه همدردی می‌کردند قبیله یهودی نصیر بود که از مدینه تبعید شده بود و جای تعجب نیست اگر بدانیم که رئیس آنها در ۶۲۶ به دست عده کوچکی از مسلمانان به قتل رسیده بود و این خود بیدار باشی بود برای کسانی که علیه ص توطئه می‌کردند. ماه بعد خبر رسید که بعضی از طوایف مشرق مدینه به عنوان مخالفت با ص اجتماع کرده‌اند و او مجبور بود با نیرویی مرکب از ۴۰۰ (یا ۸۰۰) مرد چند گاهی در آن منطقه بگذرانند. آنان به ارتفاعات پناه برده بودند و چون تعقیب ایشان شرط عقل نبود برخوردی رخ نداد و این خود باز هوشداری به ص بود که عده‌ای مخالف داشت.

مهمترین لشکر کشی که در تابستان صورت گرفت در دومة الجندل بود (واحه‌هایی که اکنون بنام الجوف معروف است) که ۲۵هـ روز در اوت و سپتامبر طول کشید این لشکر کشی از چند جهت مهم و

قابل توجه است چه بزرگترین لشکر کشی بود که محمد ﷺ پس از لشکر کشی دوم بدر ترتیب داده بود زیرا عده افراد او به هزار نفر رسید. از طرف دیگر مسافت طی شده نیز طولانی تر بود زیرا دومه الجندل در ۴۰۰ میلی مدینه قرار داشت و این دو نکته است که این لشکر کشی را حایز اهمیت کرده است. وقتی به یاد می آوریم که سپاهیان عرب در ده سال بعد همین راه را برای واژگون ساختن امپراتوریهای بزرگ طی کردند مشکل می توانیم رابطه این لشکر کشیها را با فتوحات بعدی نادیده بگیریم. متأسفانه منابع نسبت به این لشکر کشی و دیگر لشکر کشیهای محمد ﷺ به سمت شمال ناقص است و اعتقاد بر بودن چنین رابطه ای بین آنها تا اندازه ای مبتنی بر حدس است. ممکن است که محمد ﷺ خبر یافته بوده است که نیروی دشمن در دومه الجندل گرد آمده است ولی خردمندان به نظر نمی رسد که افرادی از این محل دور فکر حمله به مدینه را داشته باشند. آنچه محتمل است این است که می توانستند در تجارت و ارتباطات مدینه تأثیر کنند و محمد ﷺ پیش از آنکه اقدامی صورت گیرد قدرت خود را به آنان نشان دهد. حرکت سریع او طی ۷۵۰ میل، با چنین نیروی عظیم، بدویهای اطراف جاده را تحت تأثیر قرار داد، هنگامی که نخستین منظور او، که ممانعت از الحاق و اتحاد طوایف شمالی با مکیان بود، بر آورده شد از اطلاعاتی که در این سفر در باره اوضاع شمال به دست آورده شاید دریافته است که می تواند عملیات خود را در آن جهت توسعه دهد. در لشکر کشیهای همیشه غنایمی به دست می آمد و همین غنیمتها بود که بدویهای فقیر را به همگامی با محمد ﷺ بر می انگیزد و

خود را در اختیار او می گذاشتند .

مسئله دیگری که اهمیت بسیار داشت مسائل سوق الجیشی بود احتمال دارد که محمد صلی الله علیه و آله پیش از این لشکر کشی خود توجهی بدان نداشته ولی به زودی متوجه آن شده است . برای مثال در دسامبر ۶۲۷ طایفه مزینه (در شمال غربی مدینه) مسلمان شدند و تعدادی از طوایف سواحل دریای احمر در تابستان بعد، از آنان متابعت و پیروی کردند . این موضوع برای جامعه اسلام مسائلی به وجود آورد که مهمترین آنها این بود که چگونه می توان از حمله طوایف به یکدیگر ممانعت کرد . غزوه از اصول زندگی بدوی به شمار می رفت و وسیله ابراز و اظهار قدرت بود و ممکن است عامل اقتصادی نیز در آن مؤثر بوده است . عضویت جامعه اسلامی یا اتحاد با آن مانع از آن بود که طایفه ای به اعضا یا یکی از متحدان دیگر حمله کند . پس نیروی خود را کجا باید به کار اندازد؟ تعداد لشکر کشیهای محمد صلی الله علیه و آله به شمال نشان می دهد که او پیش بینی می کرده است که اگر جامعه اسلامی بخواهد از برخوردهای داخلی بر کنار باشد باید سیاست توسعه ماورای عربستان را قبول کند . لشکر کشی دومه الجندل نخستین نشانه اتفاقات آینده بود .

در دسامبر ۶۲۷ بود که محمد صلی الله علیه و آله دست به آخرین لشکر کشی زد و این واقعه پیش از آن بود که اتحادیه بزرگ مکیان بر او حمله آوردند این لشکر کشی علیه طایفه کوچکی بود که در نزدیکی ساحل دریای احمر و شمال غربی مدینه ساکن بود . اینکه محمد صلی الله علیه و آله توانست وارد منطقه ای شود که تحت نفوذ و تسلط مکیان بوده نشان قدرت اوست . و اما علت این لشکر کشی آن بود که رئیس این طایفه

به دستور مکیان مردان خود را مسلح کرد و آهنگ حمله به مدینه داشت. عَلَيْهِ السَّلَام به طور غیر مترقبه و ناگهان بر این گروه حمله برد و پس از مقاومت مختصری که کردند تمام آنها را به اسارت کشید و مسلمانان با غنائم بسیار به مدینه باز گشتند. زنان و کودکان طایفه را به غلامی و کنیزی گرفتند و جویریہ دختر رئیس طایفه نصیب کسی شد که علاقہ‌ای به نگهداری او نداشت و در صد فروش وی برآمد. در این مذاکرات محمد عَلَيْهِ السَّلَام به او پیشنهاد ازدواج داد و او موافقت کرد. این واقعه ظاهراً حاصل موافقت بین او و طایفه بود که در نتیجه تمام زنان و کودکان را میان قبیلۀ خود بازفرستادند. بعضی می گویند که جویریہ در آغاز متعۀ عَلَيْهِ السَّلَام بود و پس از آنکه اسلام آورد به عقد ازدواج او درآمد.

پیش از آنکه مسلمانان عازم خانه‌های خود بشوند واقعه دیگری رخ داد که تشویش‌های داخلی مدینه را آشکار ساخت و این واقعه بسیار ساده آغاز شد. مهتر عمر که از يك طایفۀ بدوی و فقیری بود اسب خود را آب می‌داد بدوی دیگری که متحد بعضی از انصار بود و امکان دارد که آب برای او می‌برده است او را کنار زد. هر دو به نزاع پرداختند و یکی از مهاجران و دیگری از انصار استمدار جست. پس عدۀ کثیری گرد آمدند و در جنگ شدند و مقداری خون ریخته شد. عبدالله بن ابی منافق که در لشکر کشی شرکت کرده بود برای وخیمتر ساختن این حادثه از فرصت استفاده کرد و مردم را برانگیخت و گفت این مرد (مقصودش عمر عَلَيْهِ السَّلَام بود) که ظاهراً برای صلح آمده است مردم را به جان هم می‌اندازد. مردم مدینه داریی خود را به این بیگانگان (مهاجران) داده‌اند و اینک این بیگانان می‌خواهند بر

آنان برتری فروشد. و چون به مدینه باز گشتند مطالبی نیز درباره استعمار قوی از ضعیف ایراد کرد. چون خبر به عبدالله بن ابی رسید آن را با خونسردی تلقی کرد و برای آنکه دیگران را نیز آرام کند به آنان دستور داد که فوری مراجعت کنند و در بیست و چهار ساعت همه را به حرکت واداشت و چون پسر عبدالله بن ابی و یک تن مسلمان دیگر پیشنهاد کردند که عبدالله بن ابی را بکشند آن را رد کرد. هنگامی که مسلمانان به مدینه رسیدند این مسئله کاملاً فراموش شده بود ولی پیشامد دیگری باز فرصتی به عبدالله بن ابی داد که به عبدالله بن ابی حمله کند.

عبدالله بن ابی را عادت بر این بود که در سفرهایک یا دو تن از زنان خود را با خود می برد. در این سفر عایشه همراه او بود. در آخرین لحظه پیش از ورود به مدینه عایشه مدت کوتاهی از انتظار دور شد زیرا بر حسب اتفاق گردن بند او در شنها افتاده بود و عایشه که مدتی برای پیدا کردن آن صرف وقت کرد، موقعی به اردو گاه رسید که همه رفته بودند. عایشه در هودجی سفر می کرد و هنگامی که افراد هودج را برداشتند تا بر شتر بگذارند چون عایشه بسیار کم وزن بود متوجه غیبت او نشدند. بنا بر گفته خود عایشه وی ناچار شد مدتی منتظر بماند تا کسی از پی او بیاید و سر انجام یک نفر مسلمان جوان و زیبا که او نیز از قافله عقب مانده بود عایشه را دید و او را سوار شتر خود کرد و مستقیماً به مدینه برد.

در عربستان نیز مانند هر نقطه دیگر جهان همه تصوری کردند که اگر زن و مردی تنها بمانند امکان وقوع رابطه جنسی بین آن دو

بسیار است از این جهت زبانها دراز شد و عبدالله بن ابی تا توانست موضوع را بزرگ جلوه داد و تعجب در این است عده‌ای او را یاری کردند حتی زنان و مردانی که منافق نبودند، و ظاهر اختلافات شخصی با خانواده عایشه داشتند، شایعات چندین هفته ادامه داشت تا سرانجام بزرگ شد و نزدیک بود در بین جامعه مسلمان شکاف عظیمی به وجود آید. مخصوصاً محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ حس می کرد که دیگر نمی تواند از مساعدت یارهای ابوبکر به عنوان معاون استفاده کند. ابوبکر پدر عایشه بود.

آخر الامر محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ شخصاً به حمایت از عایشه برخاست زیرا در حقیقت دلیلی علیه او وجود نداشت. خصوصاً که مدتی هم گذشت و ثابت شد آستن نیست. فقط می بایست جواب کسانی که دروغ گفته بودند داده شود. از قرار روایات کسانی را که دروغ کمتر گفته بودند شلاق زدند و با عبدالله بن ابی سختگیری دیگری داشت. عده ای از رؤسای انصار را دعوت کرد و اجازه خواست که یکی از آنان را که به خانواده او توهین کرده است تنبیه کند. این موضوع نشان می دهد او هنوز حاکم مطلق مدینه نبوده است و اگر پیش از جلب رضای طایفه یا قبیله علیه یکی از رؤسا اقدامی می کرد با مخالفت مواجه می شد. تقاضای محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ ایجاد تشویش و خشم کرد. دو گروه از طوایف انصار درباره وفاداری خود نسبت به محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ به مشاجره پرداختند. هر یک دیگری را به بی ایمانی متهم می ساخت و نزدیک بود که کار به جنگ بکشد و احتمال دارد که خود محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَسَلَّمَ آنها را تحریک کرده باشد تا خشم خود را نسبت به مهاجران فراموش کنند. در هر حال



هرچه بود کار به سازش پایان یافت.

در این ملاقات روشن شد که اکثر انصار اینک از محمد ﷺ پشتیبانی می کنند و عبدالله بن ابی پیروان کمی دارد. هرچند وی تنبیه نشد (گرچه بعضی از مورخان می نویسند که او را شلاق زدند) ولی درك کرده بود که دیگر نفوذی ندارد و کاری از او ساخته نیست و نمی تواند برضد محمد ﷺ اقدامی کند. او پیر بود و نمی توانست مسلمان فعالی باشد و امکان دارد که فقط گاه به گاه قر و لندی می کرده است. عبدالله به سال ۶۲۸ در لشکر کشی به حدیبیه شرکت جست و چون اهالی مکه خواستند امتیاز زیارت را که از مسلمانان دیگر دریغ می داشتند به او ارزانی دارند وی از قبول آن امتناع کرد و همکاری خود را با مسلمانان اعلام داشت. هنگام مرگ او که در آغاز سال ۶۳۱ رخ داد محمد ﷺ شخصاً در تشییع جنازه او شرکت جست و آیین دینی را اجرا کرد.

قضیهٔ تهمت (همراه با شکست محاصرهٔ يك ماه بعد) نشانۀ خاتمه مخالفت عبدالله و پیروان منافق او با محمد ﷺ است و علت ضعف او آن بود که کارهای وی اساس عقلایی و منطقی نداشت. از قراری که یکی از رؤسای یهود گفته است عبدالله خود نمی دانست چه می خواهد او قلباً نه تابع اسلام بود نه پیرو یهود و نه از يك دین قدیم عرب تبعیت می کرد. محرك او در حقیقت حس جاه طلبی بود که نه سیاست و تدبیری همراه داشت تا موضوعات را با دید وسیعتری ببیند و نه بصیرت کافی که راهی را بگزیند تا مردم به سوی او جلب شوند. احتیاج به صلح را در مدینه حس می کرد ولی نمی توانست چگونه آن را به دست



آورد. وی در نتیجه مخالفت با محمد صلی الله علیه و آله نتوانسته بود بازماند پیش  
برود. چنانکه در یکی از منابع آمده است در بین منافقان فقط يك  
مرد جوان بود و این خالی از اهمیت و معنایی نیست.

### محاصره مدینه

محاصره مدینه که در نزد مسلمانان به نام جنگ خندق معروف  
است در ۳۱ مارس ۶۲۷ آغاز شد و در حدود دو هفته طول کشید و  
حد اعلای کوشش مکیان برای درهم شکستن قدرت محمد صلی الله علیه و آله به شمار  
می رفت. مکیان برای این کار اتحادیه بزرگی تشکیل داده بودند و  
حتی عده ای از طوایف بدوی که هیچ گونه تبعیت و بستگی به آنها  
نداشتند در آن شرکت جسته بودند. طایفه یهودی نضیر که اینک در  
خیبر به حال تبعید به سر می بردند و علاقه به بازگشت به خانه های  
خود داشتند اهالی مکه را در ایجاد این اتحادیه یاری کردند؛ و حتی  
به بدویایی، که در حمله شرکت کنند، قول دادند که نیمه ای از  
خرمای خیبر را به آنها بدهند. بنابر گفته مورخان سپاه مکیان ۱۰۰۰۰ نفر  
نفر بوده است که به قسمتهای مختلف تقسیم شده بود در صورتی که  
جمع نفرات دسته های مختلف آنچه ذکر شده از ۷۵۰۰ نفر تجاوز  
نمی کند. مکیان در حدود ۳۰۰ اسب داشتند و تعداد اسبهای قبایل بدوی  
نیز همین اندازه بود. چون مسلمانان هنوز دارای نیروی سواره نظام  
نمودند (گفته شده است که هنگام رفتن به بدر در سال ۶۲۶ ده اسب  
داشتند) از سواره نظام دشمن وحشت داشتند، مکیان از همان راهی  
که دو سال پیش طی کرده بودند به مدینه نزدیک شدند و قسمتی از  
اردو گاه خود را در دامنه های ملایم کوه احد قرار دادند تا مانع از آن

شود که مسلمانان از ارتفاعات استفاده کنند، چنانکه در جنگ سابق کرده بودند.

محمد ﷺ و مسلمانان هر چند امیدوار بودند ولی نمی توانستند نگرانی خود را پنهان دارند. کوششهای آنان در ظرف دو سال گذشته نتوانسته بود مانع تشکیل اتحادیه بشود؛ فقط توانسته بودند از ملحق شدن بعضی از طوایف به آن اتحادیه ممانعت کنند و در عین حال بر قدرت خود نیز افزوده بودند. افراد و گروههای کوچکی از نواحی مختلف در مدینه آمده و سکونت اختیار کرده بودند. و با مسلمانان همکاری داشتند. ساکنان قدیم مدینه یعنی انصار نیز از مصمیم قلب از سیاست محمد پشتیبانی می کردند فقط جمعی از منافقان از روش محمد ﷺ انتقاد داشتند و در موفقیت او مردد بودند. چنانکه در قرآن آمده است عده ای از آنان میل داشتند از جنگ خودداری کنند و اگر فرصتی دست می داد حاضر بودند به دشمن پیوندند. طایفه یهودی قریظه (که در مدینه باقی مانده بودند) سعی داشتند بیطرفی خود را حفظ کنند، به طور کلی محمد ﷺ نتوانست بیش از ۳۰۰ نفر برای این نبرد آماده کند.

با برتری افراد و تفوق نیروی دشمن که دو برابر نیروی محمد ﷺ بود و داشتن سواره نظام قوی، او نمی توانست با آنان در فضای باز رو به رو شود، لذا یک نوع دفاعی که در عربستان مرسوم بود اختیار کرد. در نقاطی که مدینه باز بود و سواره نظام می توانست از آن بگذرد و حمله خود را آغاز کند خندق می کردند. چون واحه ها از طرف مشرق و جنوب و مغرب باتوده های گدازه محصور بود، و عبور از سه سمت امکان نداشت فقط خندق در سمت شمال لازم بود تا از آن سمت نیز مانعی

به وجود آید از طرف دیگر در شمال واحه‌ها تپه نسبتاً مرتفعی بود به نام کوه «سلع» که محمد صلی الله علیه و آله از آن برای دفاع استفاده کرد. بدین معنی که ستاد خود را در آنجا قرارداد تا بتواند تمام جبهه را زیر نظر داشته باشد، اگر دشمن از خندق عبور می کرد مدافعان می توانستند از کوه «سلع» همان فایده ای را ببرند که در جنگ احد از کوه احد بردند.

فکر حفر خندق يك فکر ایرانی بوده و چنانکه نوشته اند ایرانی مسلمانان به نام سلمان در طرح نقشه آن سهم مهمی داشته است، همینکه خبر عزیمت مکیان به محمد صلی الله علیه و آله رسید حفر خندق شروع شد (بر انگیختن و وادار کردن مسلمانان به این کار پیش از دریافت خبر عزیمت مکیان مشکل بود) و اغلب مسلمانان شش روز کار کردند تا آن را به اتمام رسانیدند (احتمال دارد که بعد آن را امتداد داده به طرف حاشیه غربی واحه‌ها برده اند). مکیان برای مقابله با این مانع به کلی غیرمجهز بودند در جنگ‌های عربستان محاصره مرسوم و معمول بود تنها کاری که مکیان می توانستند انجام دهند این بود که گروه سواره نظام به سوی خندق بتازند شاید راهی باز شود ولی اهالی مدینه در عقب خندق - موضع گرفته بودند و خندق به آنان تفوق اندکی در برابر سواره نظام می داد.

روزی گروه کوچکی از سواره نظام از خندق گذشتند ولی تعداد آنها به اندازه ای کم بود که نتوانستند کاری انجام دهند و سرانجام با اذ دست دادن دوتن باز گشتند و پس از آن عبور از خندق اصلاً ممکن نگردید. چندین بار خواستند در شب حمله ببرند ولی مسلمانان شب و

روز از آن محافظت می کردند. بعضی را عقیده بر آن است که بهتر بود مکیان پیاده نظام خود را در امتداد خندق مستقر می کردند و خط دفاع مدینه را بدین ترتیب درهم می شکستند ولی ظاهراً پیاده نظام از روبه رو شدن مستقیم با مسلمانان امتناع داشته است چه آنان را در جنگ تن به تن از خود برتر می دانستند در تحت این شرایط تنها امید مکیان آن بود که در آن واحد از چند نقطه حمله کنند، آنها سعی داشتند طایفه یهودی قریظه را وادار کنند که از جنوب به مسلمانان بتازند ولی از مذاکره با آنان نتیجه ای گرفته نشد.

در حدود يك هفته بدین گونه سپری شد. مسلمانان ثابت کردند که عده آنان کافی است و دارای سازمان مرتبی هستند که می توانند تمام حملات شمال را دفع کنند و برعکس روحیه دشمن متزلزل شد. رؤسای آنها از موفقیت خود ناامید گشتند، اتحادیه بزرگ به دسته های کوچک تقسیم گردید و متدرجاً آهنگ بازگشت کردند. بر حسب تصادف هوا نیز سرد و توفانی شد و آنها را در بازگشت مصمم تر ساخت. در اواسط آوریل بود که تهدید مدینه بر طرف شد و کوشش مکیان به جایی نرسید. هر چند این عملیات نظامی دارای اهمیت بسیار بود ولی بنا بر گفته مورخان عده کشته شدگان آن فقط شش تن از مردم مدینه و سه تن از مکیان بوده است. از لحاظ نظامی علت شکست مکیان تفوق قدرت سوق الجیشی و و احتمالاً قدرت اداره جاسوسی و نمایندگان سری او بوده است. استفاده از خندق با موفقیت کامل همراه بود، امیدواری مکیان در پیروزی فقط به سواره نظام بود زیرا جنگهای سابق نشان داده بود که جز با کثرت عده نمی توان در يك

جنگ بر مسلمانان غلبه کرد. امید سواره نظام را نیز خندق از میان برد و مکیان به اجبار در جنگی شرکت جستند که شرایط آن اجازه استفاده از ۶۰۰ تن سواره نظام را نمی داد.

در این جنگ مکیان از امتیاز دیگری نیز محروم بودند. در جنگ احد ده روز پیش از آنکه محصول درو جمع آوری شود به اطراف مدینه رسیدند و اسبها توانستند در مزارع بچرند و بدین ترتیب مشاهده خرابی و تضییع مزارع اهالی مدینه را برانگیخت چنانکه از سنگهای خود بیرون آمدند و به دشمن حمله بردند. اما در این سال محصول يك ماه پیش از آنکه مکیان برسند درو و جمع شده بود، (شاید در اثر پیش بینی عَلَيْهِ السَّلَام زودتر از موعد معمول)، و اهل مکه در تهیه علوفه برای اسبان خود دچار مشکل بودند و چون دیگر محلی برای برانگیختن صاحبان مزارع نبود انصار بهمانندن در آن سوی خندقها راضی بودند. این نکته نشان می دهد که رهبران مکی فاقد هر گونه بصیرت و آال اندیشی بوده اند.

مسلمانان از لحاظ اتحاد و انضباط نیز بر مکیان برتری داشتند. چه در بین گروههای مختلف آنها اعتماد متقابل وجود نداشت و سیاست عَلَيْهِ السَّلَام از این عدم اعتماد حداکثر استفاده را کرد. اکثر بدویان اتحادیه را با پول و دادن رشوه همراه آورده بودند و عَلَيْهِ السَّلَام به آنان قول مساعدت و رشوه بیشتری داد تا تفرقه در میان به وجود آمد. بدین معنی که قول داد ثلث محصول خرماي مدینه را به آنان واگذارد. در ابتدا آن جماعت نصف محصول خود را می خواستند ولی چندی بعد به ثلث رضا دادند. در این هنگام بعضی از رؤسای انصار اعتراض کردند

که مدینه تا کنون تا این اندازه در بدنامی فرو نرفته بوده است و اصرار داشتند که مذاکرات قطع شود، محمد ﷺ مذاکرات را قطع کرد . ولی جزئیات واقعی هر چه بود بدویان با مذاکره در باب این مسائل سرانجام با محمد ﷺ مصالحه کرده اند. این جنگ مجموعاً يك جنگ هوش وزیر کی بود که مسلمانان بهترین آن را داشتند و بی آنکه برای آنان مستلزم خرجی باشد دشمن را ضعیف کرده و خود را قویتر ساخته اند.

یکی دیگر از نظایر آن تحریکاتی بود که قبیلهٔ یهود قریظه در آن شرکت داشت و نتایج تأثر آوری به بار آورد. این قبیله ظاهراً معاهده‌ای با محمد ﷺ داشتند ولی شرایط آن بر ما معلوم نیست تا روشن شود که آیا در صورت حمله به مدینه تعهد پشتیبانی از محمد ﷺ را داشته اند یا خیر. از قراری که گفته شده برای حفر خندق ابزار هایی فراهم کرده اند بعداً یکی از یهودیان خیبر نزد آنها آمده و گفته است که محمد ﷺ بی شک مغلوب خواهد شد و در نتیجه آنان تغییر عقیده داده اند و چون می دانستند که اگر اتحادیهٔ مکیان نتواند محمد ﷺ را معدوم کند، محمد ﷺ در صد تلافی و انتقام بر خواهد آمد ، لذا از مکیان و متحدان بدوی آنان تقاضای گروگان کردند . مذاکرات در این باره مدتی به طول کشید. یکی از عمال محمد ﷺ به اشارت او در هر دو دسته تولید تردید و سوء ظن کرد چنانکه مذاکرات به نتیجه نرسید و « جبههٔ دوم » باز نشد. اهمیت این موقعیت سیاسی را از نظر نمی توان دور داشت زیرا اگر از پشت سر از طرف قریظه حمله‌ای به مسلمانان می شد امکان داشت که زندگی محمد ﷺ را به پایان برساند.

شکست و از هم پاشیدن سپاه اتحادیه مکّه نشانه شکست مکّیان در برابر محمد ﷺ بود و آینده را برای آنان تاریک می کرد، آنان نهایت کوشش را به کار بردند که محمد ﷺ را از مدینه برانند ولی موفق نشدند و با پاشیده شدن اتحادیه محمد ﷺ هر روز از روز پیش قویتر می شد. تجارت آنان با سوریّه قطع گردیده و از حیثیت و اعتبارشان کاسته بود. حتی اگر محمد ﷺ هم به آنان حمله نمی کرد باز امیدی به تحصیل مجدد ثروت و مقام خود نداشتند ولی هر لحظه انتظار آن می رفت که محمد ﷺ علیه آنان دست به حمله زند و در صدد از بین بردن آنان بر آید. همچنانکه آنان در صدد از بین بردن محمد ﷺ بر آمده بودند. تعجب نیست اگر بعضی از مکّیان (مردانی که عملی فکر می کنند) به این فکر افتاده اند که آیا بهتر نیست که محمد ﷺ و دین او را بپذیرند.

### اعدام یهودیان قریظه

به زودی معلوم شد که اتحادیه مکّیان حرکت کرده و رفته اند و محمد ﷺ به مسلمانان که در صدد استراحت بودند دستور داد که پیش از غروب آفتاب در برابر پناهگاهها و سنگرهای قبیله قریظه گرد آیند. مسلمانان فوری اطاعت کردند و قبیله را در محاصره گرفتند. این محاصره بیست و پنج روز طول کشید علت این اقدام آن بود که قبیله قریظه با وجود حسن رفتار که به ظاهر داشتند در باطن با دشمنان محمد ﷺ مربوط بودند و در يك مورد قصد آن داشته اند که از پشت سر به محمد ﷺ و سپاه او حمله کنند. پس متهم به اعمال خیانت آمیز علیه جامعه اسلامی بوده اند و محمد ﷺ نیز که پس از شکست مکّیان



موقعیت او استوارتر شده است دیگر نمی توانست چنین رفتاری را تحمل کند لذا در صدد برآمد این منبع ضعیف را از مدینه براندازد و درس عبرتی به دشمنان خود بدهد.

قبیله قریظه مقاومت چندانی نشان ندادند و ظاهراً در بین آنها نفاق و دو دستیگی رخ داد که ناچار و فوری پیامی برای محمد ﷺ فرستادند و تسلیم خود را بر اساس قراردادی که با قبیله نضیر داشت اعلام داشتند. ولی محمد ﷺ جواب داد که باید بی قید و شرط تسلیم شوند. سپس تقاضا کردند با یکی از دوستان مسلمان خود به نام ابولبابه مشورت کنند و محمد ﷺ اجازه داد. وقتی از او پرسیدند که آیا تسلیم را مصلحت می داند؟ گفت: «بلی» ولی دست خود را بر گردن گذاشت تا به آنان بفهماند که کشته خواهند شد. منابع ظاهراً مطالبی را حذف کرده اند زیرا چنانکه نوشته اند ابولبابه در مراجعت از نزد یهودیان دریافت که به مسلمانان خیانت کرده است. شاید او نخواسته بود منکر اتحاد قدیم طایفه خویش یا طایفه قریظه بشود و از نفوذ خود به نفع آنان استفاده کرده است.

با وجود تذکار ابولبابه طایفه قریظه بی قید و شرط تسلیم شدند. گفته شده است که بعضی از طوایف عربی اوس از محمد ﷺ خواش کردند که به خاطر آنان از گناه قبیله قریظه در گذرد چنانکه سابقاً به خواش عبدالله بن ابی و قبیله خزرج از گناه قبیله قینقاع در گذشت ظاهراً قبیله اوس می خواستند به اتحاد قدیم خود با قریظه احترام بگذارند محمد ﷺ در جواب این پیشنهاد گفت که سر نوشت یهود باید توسط متحدان مسلمان مدینه تعیین گردد و بدین ترتیب از خونریزی اجتناب



گردد. یهودیان با این پیشنهاد موافقت کردند و محمد ﷺ سعد بن معاذ را که در بین اوس و به طور کلی در بین انصار شهرت و معروفیت داشت به قضا و داوری برگزید. (سعد بن معاذ در محاصره مدینه به سختی مجروح شده بود و پس از مدت کوتاهی در گذشت)، وقتی او را نزد محمد ﷺ آوردند تمام افراد قبایل اوس و دیگر حاضران سوگند یاد کردند که طبق دستور و تصمیم او رفتار نمایند. او حکم داد که تمام مردان قریظه باید به قتل برسند و زنان و کودکان آنان به بندگی و غلامی به مسلمانان فروخته شوند. این دستور روز بعد به موقع اجرا گذاشته شد. بعضی از نویسندگان اروپایی به این دستور انتقاد و اعتراض کرده و آن را وحشیانه و غیر انسانی شمرده اند. اما باید به خاطر داشت که در آن زمان در عربستان هنگامی که طوایف باهم در جنگ بودند یا پیمانی بین آنها نبود تعهدی نیز از هیچ باب نسبت به هم نداشتند و آنچه ما آن را کمال انسانی می نامیم برای آنها مفهومی نداشت. برای دشمن و بیگانگان حقی قائل نبودند. اگر کسی از کشتن و از ظلم خودداری می کرد از باب نوع دوستی نبود بلکه از ترس آن بود که مبادا مورد خشم و انتقام خویشاوندان او قرار گیرد آنچه موجب تعجب معاصران محمد ﷺ گردید این بود که چگونه محمد به کشتن تمام مردان قریظه رضا داد و چگونه از نتایج این اقدام وحشت نکرد هر چند که رفتار این قبیله به هنگام محاصره مدینه به پیمان شکنی و ابطال پیمان نامه با محمد ﷺ تلقی شد.

اما در مورد مسلمانانی که در این قتل و کشتار شرکت داشتند باید توجه داشت که بنابر عقیده آنان سنت قدیم عرب بر این بود که

هر قبیله از متحد خود حمایت می کرد و رفتار او با دیگران هر چه بود مبتنی بر طرز رفتار آنها با متحدان او بود. قبیله اوس که شفاعت قریظه را می کردند معتقد بودند که آنها با محمد ﷺ بیوفایی کرده اند نه با آنها. و معنای این عقیده آن است که قبیله اوس در مرحله نخست خود را عضو قبیله می دانست نه جامعه اسلامی. احتیاجی بدان نیست که تصور کنیم محمد ﷺ به سعد بن معاذ فشار آورده است که رأی به تنبیه قبیله قریظه بدهد. چه مرد پیش بینی مانند سعد خود درک می کرده است که اگر اجازه دهد وفاداری با قبیله، برتر و بالاتر از وفاداری به جامعه اسلامی باشد، منجر به نا رضاییهایی خواهد شد که انتظار داشتند محمد ﷺ پس از آمدن به مدینه آنها را از بین ببرد نوشته اند وقتی سعد را برای اعلام رأی و حکم خود به حضور محمد ﷺ بردند به وی گفته شد که این نکته را متذکر باشد که مرگ را با او فاصله ای نیست، بنابر این بالاتر از همه باید فقط به وظیفه ای که در برابر خدا و جامعه اسلامی دارد توجه کند هر چند این توجه به قیمت به هم خوردن پیمانهای گذشته پایان گیرد،

از جزئیات آنچه بعد رخ داد جدی تلقی شدن این موضوع به خوبی آشکار است. پس از چندی دو تن از رؤسای طایفه عربی خزرج توجه محمد ﷺ را به ناخشنودی که در نتیجه این قتل و کشتار در قبیله اوس به وجود آمده بود جلب کردند مقصود آن دو این بود که از حدت قبیله اوس بکاهند و سعد بن معاذ به محمد ﷺ اطمینان داده بود که تمام مؤمنان قبیله اوس با حکم او موافقت دارند. در نتیجه به هر يك از شش قبیله دو تن محکوم شدگان داده شد که آنها را به قتل

رسانند. بنابر این تمام قبایل در ریختن خون افراد قبیله قریظه شرکت داشتند اکثر محکوم شدگان (که عده آنها ۶۰۰ نفر بوده است) به دست مهاجران کشته شدند وعده‌ای از افراد قبایل خزرج که اتحادی با قبیله قریظه نداشتند با مهاجران همکاری کردند. نخلهای قبیله بین افرادی که در عملیات جنگی شرکت کرده بودند تقسیم شد. این سند که حاکی از فشار مصرانه و وابستگیهای قبیله و عقاید قدیم مربوط به آن است نشان می‌دهد که در تعیین سعد به عنوان حکم، محمد ﷺ در صدد پنهان ساختن آن نبوده است که می‌خواهد آن قدرت آمریت مطلق را، که هنوز به دست نیاورده بود کسب کند، و از هر فرصتی که پیش می‌آمد برای به دست آوردن آن استفاده می‌کرد.

پس از قتل عام مردان قریظه قبیله مهم دیگری از یهودیان در مدینه باقی نماند و شاید گروههای کوچکی وجود داشته است. نام يك تاجر یهودی برده شده که تعدادی از زنان و کودکان قریظه را خریداری کرد. یهودیانی که باقی مانده بودند ناچار بسیار محتاط بودند و سعی داشتند هیچ گونه رفتار خصمانه از آنان سر نزنند و با مسلمانان روابط نزدیک داشته باشند، هر چند هنگام لشکر کشی به خیبر عواطف آنان طبعاً با همکیشان خود همراه بوده است. باقی ماندن چند یهودی در مدینه خود دلیل مخالف نظریه بعضی از محققان اروپایی است که می‌گویند، در سال دوم هجرت محمد ﷺ سیاستی در پیش گرفت که مدینه را از وجود یهود به علت یهود بودنشان پاک سازد و این سیاست را با خشونت انجام داد. محمد ﷺ دارای این گونه سیاست نبود او همیشه می‌خواست بی اصول سیاست روز و هدفهای آینده و نهایی تعادلی بر

قرار باشد و نقشه‌های خود را با تغییر عوامل و اتفاقات مطابقت می‌داد. حمله‌های او علیه دو قبیله یهودی جز پیشامدی نبوده گرچه علل دیگری نیز در نهان داشته است. یهود به طور کلی، با انتقاد شفاهی از آیات قرآن، سعی داشتند. اساس جامعه اسلامی را درهم بریزند و با دشمنان و مخالفان محمد صلی الله علیه و آله نظیر منافقان همکاری سیاسی می‌کردند. زمانی که یهود این روش خصمانه را ترك گفتند محمد علیه السلام نیز به آنان اجازه داد که بی زحمت و تشویش در مدینه زندگی کنند.

## پیروزیهای مکیان

### افقهای تازه

آنچه پس از پایان یافتن محاصره مدینه، قتل عام یهود قریظه و امضای پیمان حدیبیه در مارس ۶۲۸ قابل توجه می باشد تغییرات جدیدی است که در سیاست محمد ﷺ دیده می شود. از نقطه نظر تغییر جهت و موقعیت عراق است اگر بگوییم که تا کنون کسی سیاست او را چنانکه باید درك نکرده است. تا آن زمان سیاست او متوجه مبارزه با مکه بود و طبیعی است که بگوییم فکر دیگری جز شکست دادن مکیان و گرفتن شهر آنها نداشت. لیکن پس از رفع محاصره مدینه دیده می شد که هدفهای او وسیعتر و مدبرانه تر شده است و چون کسی سالهای زندگی او را تحت مطالعه قرار دهد خواهد دید که این هدفها همیشه وجود داشته است یا حداقل آنکه پیروزی در بدر نشان داد که این تغییرات ممکن است حاصل شود.

برای مطالعه در باره هدفهایی که عَلَيْهِ السَّلَام از اقدامات خود داشته است لازم است نوعی فکر تحلیلی و برهانی به کار ببریم، هرچند خود عَلَيْهِ السَّلَام همیشه به طریق حسی و مکاشفی و غیر تحلیلی فکر می کرد نه به طریق تجزیه و تحلیل. او از تمام عواملی که ما به زحمت می توانیم نام ببریم آگاه بود، و بی آنکه آنها را در مفکره خود از هم جدا کند، قادر بود در جریان کار تصمیم بگیرد، تصمیمی که جواب مناسب به همه عوامل بود. حتی در مواردی که از عواقب سیاسی امری مطلع بود، جنبه دینی وقایع برای او مهمتر به شمار می رفت و بی شک هدف اصلی خود را در آن زمان دعوت مسلمانان به اسلام بیان می کرد . اتحاد سیاسی تمام اعراب نیز از نظر وی دور نبوده ولی در درجه دوم قرار داشته است.

صحبت از تمام اعراب شاید نوعی زیاده روی باشد زیرا در آن موقع اسلام فقط با چند طایفه مجاور مکه و مدینه بیشتر تماس نگرفته بود ، ولی عَلَيْهِ السَّلَام دارای آن اندازه بصیرت بود که مسائل آتی را مورد توجه قرار دهد و طبیعی است که برای تکمیل واحد خود شبه جزیره عربستان و به طور کلی طوایفی را که نام عرب بر خود نهاده اند از نظر دور نداشت. روایات اسلامی ادعا می کنند که در سال ۶۲۸ فرمانروایان امپراتوریهای اطراف را به اسلام دعوت کرد ولی این ادعا را چندان اعتباری نیست.

آنچه مسلماً رخ داد این است که بعضی از طوایف چادر نشین اطراف مدینه در صدد بر آمدند که تقدیر و سر نوشت خود را با عَلَيْهِ السَّلَام یکی سازند. در بین آنان می توان طایفه اشجع ( یا قسمتی از

آن) را نام برد. آنها گروهی از افراد خود را مرکب از ۴۰۰ نفر به مکه فرستاده بودند تا در محاصره مدینه شرکت جویند. اما در همان هنگام یکی از رؤسای آنها به اسلام گرویده بود و در پنهان به عنوان عامل محمد ﷺ کار می کرد چه هنوز مسلمان بودن او آشکار نشده بود. پس از شکست، مکیان نماینده ای نزد محمد ﷺ فرستادند و تقاضای صلح کردند و علت آن را چنین توجیه کردند که محل سکونت آنها به محل محمد ﷺ از محل متحدان ایشان نزدیکتر است و عده آنها نیز کمتر است همچنین از جنگ ناراحت و متنفرند. لذا محمد ﷺ آنها را به عنوان متحد پذیرفت و مدرکی که در دست است اگر مربوط به این مطلب باشد محمد اصراری در مسلمان شدن آنها نکرد و از آنها مطالبه زکات، که از دیگر متحدان خود می خواست، ننمود، از قرار معلوم طوایف دیگر نیز در صدد اتحاد با محمد ﷺ آمده اند ولی تاریخ آن معلوم نیست.

از وقایع این دوره پیشامدی است که می توان آن را واقعه پس از شکست مکیان دانست، و آن حمله ای است که یکی از رؤسای خشمگین قبایل، به گله اختصاصی اشتران محمد ﷺ برد. این شخص عینه بود که احتمال دارد قبلاً معاملاتی با محمد ﷺ داشته و سپس در اثر تحریک و رشوه به اتحادیه مکیان پیوسته است. محمد ﷺ وعده داده بود که يك سوم محصول خرماي مدینه را به او بدهد و چون وی به وعده خود وفا نکرد و غنیمتی نیز به عینه نرسید وی بی اندازه ناراحت شد و برای گرفتن انتقام از این رفتار غیر عادلانه چهل تن از سواران خود را به مراتع نزدیک مدینه فرستاد و در حدود بیست شتر به غارت

برد، هشت تن از مسلمانان سواره به تعقیب آنان پرداختند. ده نفر از  
 شترها را باز گرفتند و چهارتن از غارت کنندگان را کشتند و در  
 برابر يك تن نیز از خود آنان کشته شد. ظاهراً محمد ﷺ آن را نشانه  
 حمله بزرگتری دانسته و به وحشت افتاده است لذا ۵۰۰ (یا ۷۰۰) تن  
 گرد آورده و نماینده‌ای با ۳۰۰ نفر برای محافظت مدینه گماشته است.  
 معلوم نیست که آیا واقعاً تهدیدی وجود داشته است یا خیر، ولی  
 اقدام محمد ﷺ نشان می‌دهد که نگرانی در مدینه بوده است.  
 چندی بعد (در حدود ماه نوامبر) برای زید بن حارثه و گروه کوچک  
 او اتفاقی رخ داد که قسمتی از طایفه عیمیه در آن شرکت داشتند و بعد  
 در ژانویه ۶۲۸ انتقام آن را گرفت. در این دوره لشکر کشی‌های  
 دیگری صورت گرفت و اغلب آنها علیه طوایفی بود که با مکیان  
 یاری کرده بودند. از قراری که منابع نوشته‌اند در آن سال باران و  
 علوفه کم بوده است و بعضی از طوایف مشرق مدینه در نتیجه کمی  
 باران مراتع خود را ترك گفته و به واحه‌ها نزدیکتر شده بودند. لذا  
 می‌توان گفت که حمله‌های مسلمانان، تنها جنبه انتقامجویی نداشته  
 بلکه هوشداری به آنها بوده است که به مدینه نزدیک نشوند. در بین  
 اعراب رسم بر این بوده است که همیشه می‌خواستند نشان دهند که از  
 عهده کشیدن انتقام صدماتی که به شخص یا طایفه یا متحد طایفه آنها  
 وارد آید بر می‌آیند همین محرك ممکن است در لشکر کشی ژوئیه  
 ۶۲۷ وجود داشته است که تحت ریاست خود محمد ﷺ علیه طایفه  
 سفیان لحيانی صورت گرفت، چه دو سال پیش به‌طور خیانت آمیزی  
 علیه گروه کوچکی از مسلمانان حمله کرده بودند.



یهودیانی که در اتحادیه مکه شرکت داشتند به تحریکات خود ادامه می دادند و طوایف عرب را با دادن رشوه تشویق می کردند که همکاری نظامی بکنند. اتفاقاً یکی از طوایف تمایلی پیدا کرده بود که چنین کاری بکند و چون مسلمانان آگاه شدند لشکری فرستادند (در حدود دسامبر ۱۶۲۷) و در حدود ۵۰۰ شتر و ۲۰۰۰ گوسفند آنها را به غنیمت بردند و در ضمن خواستند به آنها هوشداری دهند که همدردی با دشمنان اسلام برای آنان گران تمام خواهد شد. این هوشداری بود که با کشته شدن رؤسای آنان در خیبر (در فوریه ۱۶۲۸) به یهود نیز داده شد. وقایع دیگری که در همان فاصله رخ داد نشانه بهبود روابط با طوایف کنار جاده سوریه می باشد زیرا پس از لشکرکشی به دومة الجندل (در اوت و سپتامبر ۱۶۲۶) محمد ص به اهمیت سوق الجیشی این منطقه پی برد. چون دیگر خطری از طرف مکیان مدینه را تهدید نمی کرد توجه خود را معطوف این جاده شمالی کرد.

بعد از آن وقایع دیگری رخ داد که مردی به نام دحیه بن خلیفه کلبی و طایفه جرهم در آن شرکت داشتند. از قراری که نوشته اند دحیه را به رسولی نزد قیصر فرستادند که ظاهراً باید نزدیکترین حکومت نشین بیزانس یعنی «بصری» باشد. این واقعه به احتمال در سال ۱۶۲۷ رخ داده است ولی از متن پیام اطلاعی در دست نیست.

احتمال دارد که پیام شامل شکست مکیان بوده و خواسته است مانع استمداد آنان از این حاکم بشود. در بازگشت از بیزانس دحیه مورد دستبرد دزدان واقع شد و هدایایی که بیزانس برای محمد ص فرستاده بود به دست افراد جرهم افتاد. دحیه چون به مدینه رسید

ماجرای را به محمد ﷺ گزارش داد و محمد ﷺ نیز زید بن حارثه را مأمور سرکوبی طایفه جرهم کرد. در این موقع عده‌ای از قبیله جرهم در صدد پذیرفتن اسلام برآمده بودند و به محمد ﷺ شکایت کردند که اقدامات تنبیهی زید غیر قانونی بوده است و تقاضا کردند برای بهبود اوضاع، علی ﷺ به آن حدود فرستاده شود. جزئیات تاریک است فقط آنچه می‌دانیم این است که سرانجام قسمتی از طایفه جرهم با محمد ﷺ پیمان بستند.

چندی بعد (در حدود نوامبر ۶۱۷) زید برای تجارت عازم سوریه شد و این نخستین مسافرت تجارتي مسلمانان از مدینه بوده است هر چند در راه مورد تجاوز بدویان قرار گرفت و خود نیز زخمی شد. اموالش به غارت رفت ولی از اهمیت این اقدام هرگز کاسته نشد، يك ماه بعد عبدالرحمن بن عوف که به زیرکی و ثروت در بین مسلمانان مشهور بود با عده‌ای مرکب از ۷۰۰ نفر عازم دومة الجندل شد. ظاهراً مقصود او تجارت نیز بوده است. چندی بعد یعنی پس از رحلت محمد ﷺ نام این شخص مکرر برده شده و دارای کاروانی مرکب از ۵۰۰ شتر بوده است، در سال ۶۲۷ شاهزاده دومة الجندل پیمان اتحادی با محمد ﷺ منعقد ساخت و دختر خود را به ازدواج عبدالرحمن درآورد. هر چند احتمال دارد که عبد الرحمن مسیحی باقی مانده باشد.

تمام آنچه گفته شد علاقه محمد ﷺ را به جاده شمال می‌رساند و این علاقه اتفاقی نبوده است. از طرف دیگر نمی‌توان گفت که علاقه محمد ﷺ به طوایف شمالی از نقطه نظر اسلام آوردن آنها يك جانبه بوده

است، بلکه ممکن است آنها بیش از کفار جنوب به دین اسلام علاقه نشان داده اند زیرا طوایف شمالی تاحدودی مسیحی بودند و از اینکه سوریه به تصرف ایرانیان درآمده بود (از سال ۶۱۴ تا ۶۲۹) نومید و ناراحت بودند. پس علاقهٔ محمد ﷺ به جادهٔ شمالی به علت اهمیت است که در تجارت و اقتصاد مکه داشته است. در اثر حمله‌های متوالی به کاروانها جادهٔ شمال به روی مکیان بسته شده بود و اتحاد با طوایف شمالی این آرزوی محمد ﷺ را بهتر برآورده می کرد. احتمال دارد که هدف اصلی از حمله‌های زید و عبد الرحمن بن عوف آن بوده است که قسمتی از تجارت سوریه را به مدینه منتقل سازد اهمیت این تجارت در زندگی واحدها بیش از آن چیزی است که در منابع ذکر شده است به این معنی که اولاً با توسعهٔ اسلام و افزایش جمعیت جامعه اسلامی وارد کردن آذوقه ضرورت پیدا کرده بود ثانیاً چنانکه ذکر شد لزوم نظارت بر انگیزه‌های یغماگران اعراب نیز توجه به جادهٔ شمالی را ایجاب می کرده است. بامرور زمان این موضوع برای محمد ﷺ اهمیت بیشتری پیدا کرده است و این حقیقت مسلم است که علاقهٔ او به این جاده حتی پس از فتح مکه نیز باقی مانده و ادامه داشته است.

پیشامدهای دیگری نیز رخ داده است که مربوط به رابطهٔ مستقیم محمد ﷺ با مکه است. محمد ﷺ بر خلاف تمام کوششهایی که در اطراف شمال و شرق مدینه به کار برد کوششی برای حمله به خود مکه به کار نبست. ظاهراً در هنگام لشکر کشی ژوئیهٔ ۶۲۷ حمله‌ای به مکه کرده ولی هدف آن فقط ایجاد آشفتگی بوده است و بس

حمله جدی تر در دو ماه بعد به یکی از کاروانهای مکه صورت گرفت. این حمله به ریاست زید بن حارث و به یاری ۱۷۰ نفر انجام شد. کاروانی از سوریه به مکه باز می گشت و در جزء کالای آن مقداری نقره بود که به صفوان بن امیه تعلق داشت و ما با او بیشتر آشنا خواهیم شد. تمام دارایی کاروان به غنیمت برده شد و عده ای نیز به اسارت افتادند. رفتار ملایم بایکی از اسیران نشانه آن است که عَلَيْهِ السَّلَام سیاست جدیدی در پیش گرفته بوده و می خواسته است بدین وسیله بر مکیان پیروز آید. این مرد که با او به ملایمت رفتار شد ابو العاص بن ربیع شوهر زینب دختر عَلَيْهِ السَّلَام بود. وی آشکارا خواستار و پذیرای حمایت «جوار» زن خود زینب شد، هر چند این عمل احتمالا برخلاف قانون اساسی اسلام بوده است. عَلَيْهِ السَّلَام منکر آن شد که قبلا از اعلام زینب در آن باب آگاه بوده است ولی اظهار کرد که حاضر به قبول آن می باشد و دارایی ابو العاص را که در بین غنایم بود به او بازگردانید.

این وقایع که در سال ۶۲۷ رخ داد و آنچه بعدها پیش آمد نشان می دهد که عَلَيْهِ السَّلَام آماده حمله مستقیم به مکه نبوده است. سیاست او در این بود که با ممانعت از حرکت کاروانها از سوریه به مکه را ضعیف کند و در عین حال بر تعداد طوایف متحد خود بیفزاید و قدرت این گروه را افزونتر و ثابت تر کند. تسلیم و اطاعت اشجع یکی از طوایف ضعیفی که در محاصره شرکت کرده بودند نشانه آن است که مکیان و متحدان آنها چنانکه باید دیگر قادر به حمایت از متحدان خود نبودند و بر عکس عَلَيْهِ السَّلَام چنین اقتداری پیدا کرده

بود. اسلام در دست آه‌نین ﷺ موجب کامیابی و سعادت اعراب شده بود و فقط می‌بایست که وسایل آن فراهم می‌شد. اما افزایش تعداد شتران و گوسفندهای بیابان دیگر ممکن نبود در صورتی که دولت اسلام ناچار بود دائماً بر محیط نفوذ خود بیفزاید. در نتیجه از این پس محمد ﷺ بیشتر از آنچه به فکر شکست مکیان باشد، که یک هدف منفی بود، در فکر توسعه قدرت مالی و دارایی اسلام افتاده بود و به زودی خواهیم دید که مکیان نیز سهم بزرگی را در این سیاست مثبت پیدا کردند.

### لشکرکشی و پیمان الحدیبه

بدین شکل بود که رابطه محمد ﷺ با مکیان قطع گردید و با لشکرکشی محمد ﷺ به الحدیبه کار دشوارتر شد. نکات اصلی این داستان از این قرار است: بر اثر رؤیائی محمد ﷺ تصمیم گرفت برای عمره (حج کوچک) به مکه برود و از مسلمانان (و شاید دیگران) دعوت کرد که با او همراه شوند و تعدادی دواب برای قربانی همراه ببرند. در ۱۳ مارس ۶۲۸ به اتفاق ۱۴۰۰ تا ۱۶۰۰ نفر آهنگ مکه کرد که در بین آنان افرادی از قبیلۀ خزاعی بودند ولی طوایف دیگر به بهانه‌هایی از رفتن خودداری کردند. چون مکیان از نزدیک شدن این عده آگاه شدند گمان کردند که هدف محمد ﷺ خصمانه است و دوستانه نفوذ سواره نظام برای بستن راه بر لشکریان او روانه داشتند. محمد ﷺ با عبور از یک بیراهه در کنار تپه‌ها اقدامات سواره نظام مکیان را عقیم گذاشت و خود را به الحدیبه در کنار حریم مکه رسانید در آن نقطه شتر او از رفتن باز ماند و محمد ﷺ تصمیم گرفت در همان جا توقف کند.

مکیان عَلَيْهِ السَّلَام را تهدید کردند که اگر بخواهد زیارت کند با او خواهند جنگید. پیامهایی بین دو طرف رد و بدل شد و سرانجام به پیمانی منجر گردید و بنامش در آن سال مسلمانان باز گردند و در سال آینده مکیان سه روز شهر را خالی کنند تا مسلمانان بتوانند این عمره را به جای آرند. در همان آنی که ظاهراً چنین به نظر می رسید که مذاکرات قطع خواهد شد مسلمانان با پیغمبر پیمانی بستند که به پیمان بیعت رضوان یا پیمان «تحت الشجره» معروف است. در نتیجه این پیمان محمد صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ قربانی هارا کشت و موی سر خود را تراشید و مسلمانان نیز پس از اندک تردیدی از او تبعیت کردند. سپس به مدینه باز گشتند اینک جای آن دارد اندکی در جزئیات این واقعه دقت شود تا معلوم گردد در ماورای آن چه وقایع و نظریاتی نهفته است چون یکی از آیات قرآن (سوره ۴۸ آیه ۲۷) در باره خدا چنین می گوید،

«لَقَدْ صَدَقَ اللَّهُ رَسُولَهُ الرُّؤْيَا بِالْحَقِّ لَتَدْخُلُنَّ الْمَسْجِدَ الْحَرَامَ إِنْ شَاءَ اللَّهُ آمِنِينَ مُحَلِّقِينَ رُؤُسَكُمْ وَمُقَصِّرِينَ لَا تَخَافُونَ فَعَلِمَ مَا لَمْ تَعْلَمُوا فَجَعَلَ مِنْ دُونِ ذَلِكَ فَتْحًا قَرِيبًا».

می توان این ادعا را باور کرد که رفتن به زیارت در خواب بر محمد صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ آشکار شد. این موضوع را وعده ای از خدا دانست که می تواند آیین حج را به جا آورد و چون مکیان مانع او شدند طبعاً متعجب گردید، اما اگر این فکر در عالم رؤیا به او الهام شده بود دلایل علمی سیاسی نیز در بر داشته است. محمد صَلَّى اللَّهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ امید بسیاری

به مغلوب ساختن مردم مکه نداشت زیرا می دانست که روحیه آنها هنوز خوب است و نیروی او نیز هنوز به اندازه ای نیست که بتواند آنها را مغلوب سازد. البته هدف و قصد اصلی او چنانکه خود گفته بود زیارت بوده است ولی این زیارت مقاصد سیاسی نیز دربر داشته و احتمالاً علاقه او نیز بیشتر از این لحاظ بوده است. انجام زیارت تجلی آن بود که اسلام يك دين بيگانه نیست بلکه اصولاً دين عربی است مخصوصاً از این جهت که مرکز و کانون آن در مکه می باشد. چنین تظاهری در آن موقع مکیان را تحت تأثیر قرار می داد و به آنان می گفت که اسلام تهدیدی برای اهمیت دینی مکه نیست. از طرف دیگر نشان می دهد که محمد ﷺ به ایجاد روابط دوستانه با مکیان آماده بوده است اما طبق شرایط خود او، نه آنچه مکیان مایل بودند، متأسفانه شرایط محمد ﷺ طوری بود که اگر مکیان قبول می کردند ضعف آنان آشکار می شد این واقعه در یکی از ماههای محرم اتفاق افتاد که خونریزی در آن ماه حرام بود. ولی محمد ﷺ نشان داد که توجهی به ایام محرم ندارد و به تقدس فصل و ایام نیز متکی نیست بلکه فقط به تعداد پیروان خود امیدوار است. با شکست اتحادیه بزرگ مدینه عدم پیشرفت محمد ﷺ در مکه جلوه خوبی در انظار نداشت، پس اهالی مکه می دانستند که باید مخالفت کنند. پیمانی بسته شد که ظاهراً حیثیت و اعتبار آنها را حفظ کرد و محمد ﷺ نیز آنچه را می خواست در حقیقت به دست آورده بود.

شرط اول آن بود که هر دو طرف برای مدت ده سال دست از خصومت بردارند. این موضوع علاقه صلح جو یانه محمد ﷺ را نسبت



به مکیان نشان می داد و آنها را از مبارزه برضد قدرت روز افزون او آزاد می کرد. شرط به تأخیر افکندن زیارت به مدت يك سال نیز از يك طرف حیثیت مکیان را حفظ کرد و از طرف دیگر با کسب اجازه برای انجام دادن آیین حج در سال بعد محمد ﷺ هدف خود را که نشان دادن مقاصد و نظریاتش بود به دست آورد.

شرط دیگر آنکه محمد ﷺ می بایست هر فرد مکی را که بی رضای حامی خود نزد او می رود باز گرداند ظاهراً مقصود پیر و ان مکیان و غلامان بوده اند والا اگر مسلمانی از مکه نزد محمد می رفت محمد الزامی به باز گردانیدن او نداشت. این شرط مخالف احساسات مکیان بود و ارزش بسیاری برای مسلمانان نداشت. هنگامی که مذاکرات ادامه داشت پسر یکی از سفیران نزد محمد ﷺ آمد و خواست با او برود اما به او گفته شد که باید در مکه بماند. ولیکن محمد ﷺ از دو سفیر دیگر خواست که امنیت و سلامت را در وضع جدیدی که بین پدر و پسر ایجاد شده است تأمین و تضمین کنند. در اینکه این شرط متقابل و دو جانبه نبوده است دلیل آن است که محمد ﷺ اعتقاد داشته است که اسلام برتر است.

باز شرط دیگر این پیمان آن بود که طوایف و افراد آزاد باشند تا با محمد ﷺ یا مکیان هر کدام که بخواهند وارد اتحاد شوند. در این شرط ضرری دیده نمی شود ولی ظاهر آن فریبده است و محمد ﷺ اهمیت بسیاری برای آن قایل بود، چه هنگام عزیمت به مکه گفته بود حاضر است با مکیان صلح کند به شرط آن که دست او را در موضوع طوایف بدوی آزاد بگذارند. ظاهراً شرایط



پیمان برای هر دو طرف مساوی است و شرط شناسایی تساوی محمد ﷺ با مکیان است. اما عملاً این شرط امتیازی است که به محمد ﷺ داده شده است، چه طبق این پیمان مکیان به طوایف متحد خود اجازه می‌دهند که اتحاد خود را به خاطر محمد ﷺ با آنها قطع نمایند چنانکه طایفه خزاعی فوری از این امتیاز استفاده کرد.

این وقایع قسمتی از برنامه محمد ﷺ برای تثبیت قدرت و متحد کردن طوایف با خود بود، بی آنکه مکیان را ضعیف کرده باشد. وی با عقد پیمان عدم تجاوز برای ده سال موافقت کرد در ضمن دست از محاصره تجارتی آنان برداشت و مکیان از آن پس توانستند کاروانهای خود را به سوریه بفرستند هر چند که انحصار تجارت را از دست داده بودند و چنین چیزی وجود خارجی نداشت. اما محمد ﷺ اگرچه اسلحه را کنار گذاشته بود ولی قدرت نظامی خود را بیشتر کرده بود چنانکه در صورت لزوم می‌توانست در آینده نزدیکی با مکیان روبه‌رو شود و امید موفقیت او بسیار بود. از طرف دیگر از فشار خود بر مکه می‌کاست و بدین وسیله خود را دوست آنها نشان می‌داد، دوستی که حاضر بود به احساسات مردم مکه احترام بگذارد این حقایق نشان می‌دهد که محمد ﷺ بیش از آن در صدد مبارزه با مردم مکه نبود بلکه هدف او بیشتر آوردن آنها به سوی اسلام بود. بی شک هدفهای دیگری نیز در ماورای آن داشته است. شاید وی از اینک که بعضی از طوایف بدوی دعوت او را برای مهاجرت رد کرده بودند آزرده خاطر بوده و حس می‌کرده است که می‌تواند اعتماد همشهریان خود را جلب کند و آنان شالودهٔ بهتری برای سیاست جدیدی که در

نظر داشت خواهند بود. شاید هم فکر می کرد در دولت جدید اسلامی قدرت اداری و سازمانی آنها مورد نیاز خواهد بود. شك نیست که از این زمان به بعد بی توجه به آنچه سابقاً گذشته است محمد ﷺ هدف این بوده است که اهالی مکه را به آیین اسلام بکشاند و آنان را در حلقه دولت اسلامی در آورد پس معاهده الحدییه با هدف قدیم محمد ﷺ متوافق بوده است ولی در آن موقع مجبور بود ناامیدی و یأس پیروان خود را ، که از عدم موفقیت در لشکر کشی پیدا شده بود، به نوعی مرمت و مداوا کند . در این حالت بحرانی بود که آتش نارضایی خود محمد ﷺ نیز شعله ور گردید و او را به شدت عمل واداشت. این آتش هنگامی شعله ور تر شد که عده ای از بدویان متحد از ملحق شدن به او امتناع ورزیدند و علت آن بود که غنیمتی به دست نیاوردند و فکر کردند که شاید مسلمانان اصلاً نتوانند به سلامت باز گردند. علاوه بر کاستن از تأثیر نقشه محمد ﷺ با این اقدام ناچیز بودن توجه و علاقه خود را به اسلام و سست عهدی نسبت به محمد ﷺ را نیز نشان دادند.

در چنین موقعیتی بود که محمد ﷺ از فرصت استفاده کرد و در صدد برآمد که موقعیت خود را در جامعه اسلامی تقویت کند . وقتی گفتگو با مردم مکه دچار اشکال شد، محمد ﷺ عثمان را ، که بعدها خلیفه سوم شد، به نمایندگی خود در مذاکرات تعیین کرد . عثمان متعلق به همان قبیله ابوسفیان بود از این رو حامی بزرگی در مکه داشت زیرا در آن روزها فرستادگان امنیتی نداشتند. چون باز گشت عثمان به درازا کشید همچنین شایع شد که وی کشته شده است.

محمد ﷺ مسلمانان را زیر درختی گرد آورد و آنان را تشویق کرد با او عهد وفاداری ببندند. داستانهای چندی در باره اهمیت این عهد و پیمان نوشته شده است ولی به طور کلی مفاد آن با آنچه محمد ﷺ در فکر خود می داشت مطابق بوده است و آن پیمان را رضای خدا (بیعت رضوان) نامیده اند زیرا چنانکه در قرآن آمده است، (سوره ۴۸ آیه ۱۸):

«لَقَدْ رَضِيَ اللَّهُ عَنِ الْمُؤْمِنِينَ إِذْ يُبَايِعُونَكَ تَحْتَ الشَّجَرَةِ فَعَلِمَ مَا فِي قُلُوبِهِمْ فَأَنْزَلَ السَّكِينَةَ عَلَيْهِمْ وَأَثَابَهُمْ فَتْحًا قَرِيبًا».

این پیمان و بیعت مؤمنان با محمد ﷺ موجب رضا و خشنودی خداوند شده است. بنای پیمان بر آن بود که تصمیم محمد ﷺ را در تمام کارها بپذیرند یا لااقل به خاطر امنیت هم که باشد در این مورد بی اجازه او اقدامی نکنند، این تنها چیزی بود که موقعیت خود آن را ایجاب می کرد، احتمالاً يك فرد عادی لشکری می دانست که چه خطری متوجه محمد ﷺ است و از عدم امکان زیارت نیز آگاه بود. چنین فردی محتملاً نمی توانست به وسعت اهمیت موفقیت سیاسی محمد ﷺ پی ببرد و از آن قدردانی کند. این موضوع خود نشانه قدرت محمد ﷺ است که چگونه در این گونه موارد توانست پیروان خود را متقاعد کند که با تأخیر زیارت، به مدت یکسال، موافقت نمایند نظارت او بر مسلمانان اثر بسیاری در فرستادگان مکیان داشت مخصوصاً وقتی که می دیدند مقاومت دربارۀ این تصمیم در بین افراد و طبقات نیز وجود دارد چنانکه حتی عمر هم به آن اعتراض کرد و مدتی پس از

امضای پیمان بعضی از مسلمانان حاضر نبودند چارپایان خود را قربانی کنند و موی سر خود را بتراشند و این خود واکنشی است که قسمتی از آن بر اساس معتقدات دینی قرار داشت و قسمتی بر عدم رضامندی از مواد پیمان.

محمد ﷺ وقتی در آخر مارس به مدینه بازگشت. از نتایج لشکر کشی خود کاملاً راضی بود. با انعقاد يك معاهده متساوی دو جانبه با مکه مقامی را که پس از شکست محاصره مدینه به دست آورده بود تثبیت کرد و مردم آن را شناختند. مهمتر آنکه با خاتمه دادن به جنگ بامکه، آزادانه می توانست نفوذ سازمان سیاسی و دینی خود را گسترش دهد و کارهای آن را به طور مطلق تحت نظر خود در آورد. از این تاریخ به بعد شرایط اتحاد با خود را قبول اسلام و اطاعت از پیامبر خدا معین کرد.

از طرف دیگر با برداشتن محاصره، محمد ﷺ گذشت اقتصادی و نظامی بسیار کرده بود و آنچه در عوض به دست آورده بود بسیار ناچیز بود. اما این پیمان فقط از نظر مسلمانان و احتمالاً کسی که به اسلام و قدرت جالب توجه آن اعتقاد داشت، راضی کننده بود. اگر محمد ﷺ نمی توانست قدرت خود را در میان مسلمانان از راه دین و افکار دینی گسترش دهد، نمی توانست دیگران را به اسلام بکشاند و در آن صورت معاهده به نفع او نبود. مسائل مادی نیز بی شک در گرویدن عده ای از اعراب بدین اسلام مؤثر بوده است. اما آنچه از همه مهمتر بود ایمان خود محمد ﷺ به پیام قرآن و ایمان او به آینده اسلام بود که آن را يك دین و روش سیاسی می دانست و کوشش

خستگی ناپذیر برای رواج آن به کار می برد زیرا عقیده داشت که خدا او را به این کار دعوت و مأمور کرده است، این نظرها در سیاستی نهفته است که عَلَيْهِ السَّلَام در الحدیبیه به کار برد.

این لشکر کشی و عهدنامه نشانه آغاز کار دیگری است. او پس از هجرت شروع به اقداماتی کرد که مکیان را برانگیخت و واکنش آنان با شکست مواجه شد اینک بهترین راه برای عَلَيْهِ السَّلَام آن بود که شروع به کار کند و نفوذ مکیان را درهم شکند، ولی به جای آن کار دیگری آغاز کرد.

### فتح خیبر (مه - ژوئن ۶۲۸)

احتمال دارد که فکر حمله به ناحیه ثروتمند یهودی نشین خیبر پس از بازگشت از زیارت نیمه کاره مکه به فکر عَلَيْهِ السَّلَام خطور کرده است. مسلمانان ظاهراً از لشکر کشی بی ثمر خود به الحدیبیه مأیوس شده بودند و برای شخصی مانند عَلَيْهِ السَّلَام مسلم بود که نمی بایست بگذارد که این احساسات ریشه پیدا کند لذا هنگامی که شش هفته بعد از بازگشت از مکه عازم خیبر شد فقط به کسانی اجازه داد که همراه او باشند که در پیمان «بیعت رضوان» شرکت داشتند.

هرچند ممکن است این فکر در عَلَيْهِ السَّلَام بود ولی لشکر کشی به خیبر دلایل نظامی مهمی نیز داشته است. یهود خیبر مخصوصاً رؤسای قبایل النضیر که از مکه تبعید شده بودند هنوز مخالف عَلَيْهِ السَّلَام بودند آنها با استفاده از ثروت خود اعراب را علیه عَلَيْهِ السَّلَام تحریک می کردند و همین دلیل برای حمله به خیبر کافی بود.

مردم خیبر از آمادگی عَلَيْهِ السَّلَام برای حمله به آنجا اطلاع

یافتند ولی این حمله به اندازه‌ای سریع و پنهانی صورت گرفت که یهود غافلگیر شدند و قدرت مقاومت چنین محاصره‌ای را نداشتند . خیبر شامل پنج رشته استحکامات یا قلعه بود که بعضی از آنها در قلعه کوهها قرار داشت و غیر قابل تصرف به نظر می‌رسید. تیراندازی و مبارزات تن به تن چندی صورت گرفت و وقتی محاصره شدگان حمله کردند مسلمانان به شدت مبارزه کردند و يك بار آنها را تا دروازه قلاع تعقیب کردند. مقداری از موفقیت مسلمانان نتیجه یاری خود یهود بود که می‌خواستند بدین وسیله امنیت و سلامت خانواده خود را تضمین کرده باشند. وقتی دو قلعه اول سقوط کرد دیگر مقاومت چندانی صورت نگرفت و شرایط تسلیم فوری پیشنهاد شد.

در عهدنامه منعقد بین محمد ﷺ و مردم خیبر اصل جدیدی نمایان شده است که اساس امپراتوری آینده اسلامی گردید. بنا بر این عهد نامه قرار شد یهود به کسب و زراعت بپردازند و آن را ادامه دهند ولی محصول را به مالکان مسلمان تسلیم کنند. عده این مالکان ۱۶۰۰ نفر بود که در لشکر کشی شرکت کرده بودند یا کسانی که سهم این عده را خریده بودند. زمینها به افراد ( یا چنانکه بعداً معمول شد) به جامعه تعلق نداشت. آنها را به هجده قرعه تقسیم کردند و هر قرعه‌ای را به يك قبیله یا بیشتر دادند. افراد از محصول خرما یا دیگر محصولات زمین متعلق به خود سهمی دریافت می‌کردند. محمد ﷺ بنا بر قاعده و رسم يك پنجم غنایم را دریافت کرد و از محصول خرما که سالانه دریافت می‌کرد هر سال چندین بار (بار شتر) به هر يك از زنان خود، به مهاجران قبیله بنی هاشم و کسان دیگری کدمسئولیت

نگهداری آنها را داشتند می‌داده و جمع‌آوری و فروش محصول به‌عهده ناطری بود که از طرف محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ تعیین می‌شد.

با این قرارداد نفوذ سیاسی یهودیان خیبر به پایان رسید و از لحاظ اقتصادی و سیاسی تابع مدینه شدند، اگرچه می‌خواستند به نیرنگ و دسیسه خود ادامه دهند دیگر ثروت و پولی برای این کار نداشتند و از طرفی رهبری هم که آنها را هدایت کند در کار نبود. عده‌ای از رؤسای آنها در محاصره کشته شدند و دو تن نیز که باقی مانده بودند پس از تسلیم اعدام گردیدند زیرا بر خلاف عهدنامه ثروت خانوادگی خود را پنهان کرده بودند. سه یهودی نشین کوچک دیگر بنا بر همان شرایط به محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ تسلیم شدند.

عوامل چندی به پیروزی مسلمانان در این جنگ یاری کرد. نخست آنکه یهودیان به استحکام موقعیت خود در خیبر سخت اعتماد داشتند ولی از ذخیره کردن آب که بتوانند مدتی محاصره را تحمل کنند غفلت کرده بودند. از لحاظ جنگ تن به تن مسلمانان تفوق داشتند ولی این امر در محاصره چندان اهمیت نداشت مگر موقعی که محاصره شدگان به علت بی‌آبی مجبور شدند استحکامات خود را ترک گویند. از قرار معلوم مسلمانان نیز مدتی از لحاظ غذا در مضیقه بودند تا یکی از قلاع را تصرف کردند و آذوقه کافی به دست آوردند عدم اتحاد در بین یهود نیز موجب تضعیف آنها شده بود و عده‌ای حاضر بودند که به محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ یاری کنند. متحدان عربی یهود نیز که از نقطه نظر مالی با آنها ارتباط داشتند به زودی در اثر ترس از مسلمانان یا مهارت سیاسی محمد صَلَّى اللهُ عَلَيْهِ وَآلِهِ وَسَلَّمَ از آنها جدا شدند.



سقوط خیبر و تسلیم یهودی نشینهای دیگر نشانه خاتمه کار یهود در زمان محمد ﷺ بود زیرا اخراج یهود از حجاز در زمان خلافت عمر مربوط به زمانهای بعد است. یهودیان که با تمام قدرت با محمد ﷺ مخالفت کرده بودند به طور کلی خرد شدند، وعدهای که هنوز در خانه های سابق خود در مدینه و جاهای دیگر می زیستند ثروت خود را کاملاً از دست داده و از لحاظ سیاسی فاقد هر گونه قدرتی شده بودند. بررسی این مطلب که اگر یهودیان در عوض مخالفت با محمد ﷺ با او کنار می آمدند نتیجه چه می شد مشکل و در عین حال جالب است. در بعضی از موارد می توانستند شرایط بهتری به دست آورند و حتی در دین خود آزاد باشند و بر این اساس ممکن بود در امپراتوری عرب و اسلام سهمی داشته باشند. اگر چنین می شد وضع دنیا اینک صورت دیگری داشت. در ماههای اول اقامت محمد ﷺ در مدینه بذر این فاجعه کاشته شد و یهود اقبال و فرصت بزرگی را از دست دادند. علت آنکه قضایا بدین گونه درآمد چه بود؟ آیا بر خورد یهودیان و مسلمانان در حقیقت غیر قابل اجتناب بود؟ پاسخ دادن به این سؤال آسان نیست، فقط می توان در چهارچوب فلسفه به آن جواب گفت، آنچه از يك مورخ ساخته است این است که عواملی را که این وقایع را به وجود آورده است بیان دارد و اهمیت نسبی آنها را برآورد کند.

علت اساسی جنگ بین محمد ﷺ و یهود تضاد افکار و عقاید آنها بود در ضمن عوامل مالی نیز از هر دو طرف وجود داشت. محمد ﷺ بی شك از دارایی یهود اطلاع داشته و می دانسته است که تصرف این دارایی



چه فواید و مزایایی برای او در بر خواهد داشت. دور از حقیقت است اگر گفته شود که محرك عَلَيْهِ السَّلَام، قسمتی، بهبود بخشیدن به وضع مالی نبوده است. این موضوع در تعیین تاریخ حمله‌های او بر یهودیان نیز اثر فراوان داشته‌است. از آن طرف یهودیان نیز امیدوار بوده‌اند که شاید با وساطت و یاری عبدالله بن ابی برتری سیاسی خود را به دست آورند ولی فروغ این امید با پیشرفت سریع عَلَيْهِ السَّلَام خاموش گردیده است. کسانی که عقیده دارند محرك بشر تنها عوامل مالی است، با نکاتی که ذکر شد به علل تصادم یهودیان و مسلمانان به خوبی پی می‌برند ولی این نکته از نقطه نظری که نویسنده دارد بیگانه و بعید است. هر چند گفتدیم که عوامل مادی موقعیتی ایجاد کرد که موجب به وجود آمدن اسلام گردید اما در ضمن گفته‌ام که نارضایی اجتماعی که معلول این وضع است موجب نهضت اجتماعی نمی‌گردد مگر آنکه افکاری در آن مرکوز شود. لذا با وجود این تأکید که عوامل مادی موجب تولید اسلام گردیده است اختلاف بین یهودیان و عَلَيْهِ السَّلَام تنها بر سر امور مالی نبوده بلکه بر اصل افکار با هم تباین داشته‌اند و اجازه می‌خواهد به این موضوع بادیید وسیع‌تری نگریسته شود.

نظریه‌ای که اساس این کتاب بر آن گذاشته شده است این است که يك موقعیت جدید (که مخلوق عوامل مادی است) احتیاج به افکار جدید دارد. وسعت این تجدّد در افکار تقریباً به نسبت وسعت تجدّد موقعیت تغییر می‌کند. گاهی از اوقات، نظیر مواقعی که دین جدیدی تأسیس می‌یابد، آنچه هرگز زندگی آدمیان به شمار می‌رود تحت تأثیر قرار می‌گیرد، سپس تجدّد در افکار و عقاید مورد توجه واقع می‌شود.

وقتی عقاید، مانند عقاید يك دين جديد، نه با شرطی خاص، بلکه با  
مجموع رشته شرایطی که به نسلها متعلق است مناسب پیدا کند، با  
تار و پود زندگی اجتماعی و فرهنگی کسانی که آنها را می پذیرند  
به هم بافته می شود. هنگامی که چنین اتفاقی بیفتد افکاری که مدت  
درازی مردم را راضی کرده و قسمتی بازندگی آنان به هم بافته است  
به آسانی قابل تغییر نیست. این چیزی است که برای یهود اتفاق  
افتاد. آنان معتقد و مؤمن بودند به این که قوم برگزیده خدا هستند و  
خدا فقط به وسیله آنان خود را بر آدمیان آشکار ساخته است بنا-  
براین درك این مطلب برای آنها مشکل بود که، چرا این عقیده را  
به خاطر بیسوادی (به خیال خودشان) مانند محمد ﷺ تغییر دهند.

برای محمد ﷺ، این فکر، که وی پیغمبر بود و پیامهایی از  
جانب خدا دریافت می کرد و ماموریتی از طرف او داشت. اساس همه  
جنبشهای سیاسی و دینی بود که او آنها را رهبری می کرد. با تغییر و جا  
کردن این عقیده، نهضت اسلام، با اینکه بیست سال از تولد آن گذشته  
بود، از هم می پاشید. قسمتی از افکار اسلام هنوز منجمد نشده بود و بنا-  
براین محمد ﷺ می توانست به وسیله دین ابراهیم با اعتراضات یهودیان  
مبارزه کند و بگوید این دین توسط یهود منحرف شده و او باریگر  
آن را به صورت نخستین در آورده است. مبارزات فکری و مرامی بین  
محمد ﷺ و یهودیان هر روز سختتر می شد زیرا هر يك به افکار دینی  
یکدیگر حمله و آن را تهدید می کردند. اگر محمد ﷺ بر یهودیان  
پیروز می شد آنها دیگر قوم برگزیده خدا نبودند و دینی برای آنها  
باقی نمی ماند. اگر محمد ﷺ پیامبر و نبی خدا نبود پس از نظر مردم

شخص فریبکاری بیش به شمار نمی آمد ، ریشه مبارزه بین آنها همین بود.

مطالب به اینجا ختم نمی شود. روابط افراد و گروهها؛ مخصوصاً در امور دینی اغلب دوره هایی است که خصوصیات رابطه آنها نا معین است. سپس ناگهان یا به تدریج به نقطه ای می رسند که در آنجا لااقل رابطه برای یکی از آنها معین و روشن است. آنان قبول می کنند که آنان و دیگران دوست هستند یا دشمن، به یکدیگر تعلق دارند یا به یکدیگر متعلق نیستند. از همین نقطه است که قضا یا صحیح و یا غلط پیش می رود. احتمال دارد که یهودیان از زمان هجرت به این نقطه رسیدند که دیگر جای برگشت برای آنها نبود درحالی که محمد صَلَّى اللّٰهُ عَلَيْهِ وَاٰلِهٖ وَسَلَّمَ تا يك يا يكسال و نیم بعد به این مرحله نرسیده بود همینکه یهود تصمیم گرفتند که محمد صَلَّى اللّٰهُ عَلَيْهِ وَاٰلِهٖ وَسَلَّمَ را رد کنند لازم بود حداقل برای این تصمیم خود دلیلی بیاورند و به همین علت بود که در انتقاد از محمد صَلَّى اللّٰهُ عَلَيْهِ وَاٰلِهٖ وَسَلَّمَ زیاده روی کردند و محمد صَلَّى اللّٰهُ عَلَيْهِ وَاٰلِهٖ وَسَلَّمَ چون پس از کوششهای بسیار نتوانست فکر آنها را عوض کند با آنها قطع رابطه کرد و وقایعی که می دانیم رخ داد.

### افزایش قدرت

دوره بین سقوط خیبر در مه ۶۲۸ و تسلیم مکه در ژانویه ۶۳۰ دوره ای است که محمد صَلَّى اللّٰهُ عَلَيْهِ وَاٰلِهٖ وَسَلَّمَ سعی داشت، به هر طریق که ممکن بود بر قدرت خود بیفزاید و دولت خود را به طور آرام و صحیح سازمان دهد. در حقیقت هدف اصلی او پس از شکست محاصره مدینه همین بوده است اما پس از معاهده ای که با مکیان بست نتوانست آن

را باشدت بیشتر و در تمام جهات ادامه دهد،

روایات تاریخی معمول اسلامی بر این است که عَلَيْهِ السَّلَام بلافاصله پس از امضای عهدنامه، شش فرستاده (که اسامی آنان برده شده است) نزد حکمرانان کشورهای همسایه فرستاد و آنان را به قبول دین اسلام دعوت کرد. روش انتقادی کنونی نشان می دهد که این بیان قابل اعتماد نیست و احتمال دارد علت اصلی آن علاقه مفراط مسلمانان به این نکته بوده است که عَلَيْهِ السَّلَام دین خود را دین جهانی می دانست (و شاید برای منطقی جلوه دادن جنگهای خود علیه ایران و بیزانس بوده است) چه این جنگها پس از دعوت آنها به اسلام صورت گرفت. حقیقتی که ورای این داستان است آن است که محمد عَلَيْهِ السَّلَام رسولانی به نزد حکمرانان ایران و روم و غیره فرستاده است. بعضی از این فرستادگان چند ماه پیش از انعقاد عهدنامه مکیان و بعضی چند ماه بعد از آن تاریخ رفته اند. از متن پیام اطلاعی در دست نیست فقط احتمال دارد عَلَيْهِ السَّلَام شرحی از آنچه در عربستان رخ داده بود بیان داشته است و پیش بینی خود را در اینکه ممکن است اهالی مکه از آنها استمداد کنند شرح داده و تقاضای نوعی توافق سیاسی کرده است. البته عَلَيْهِ السَّلَام خود را برای انعقاد چنین عهدنامه هایی به اندازه کافی قوی و معتبر می دیده است.

پیام عَلَيْهِ السَّلَام به نجاشی سلطان حبشه منجر به ازدواج او با ام حبشیه گردید و همچنین موجب شد که جعفر پسر عم عَلَيْهِ السَّلَام وعده دیگری از مسلمانان که هنوز در حبشه می زیستند به وطن باز گردند، این عده باقیمانده مهاجرانی بودند که در سال ۶۱۵ به حبشه رفتند.

از اقامت دوازده ساله آنان در حبشه چنین بر می آید که زندگی در آنجا برای آنها مساعد بوده است و محمد ﷺ مجبور شده است انگیزه - هایی به کار برد تا آنان را به وطن باز گرداند. آنان در خاتمه موفقیت آمیز جنگ خیبر باز گشتند و سهم خود را از غنایم به دست آوردند.

ام حبیبیه که با این گروه به مدینه باز گشت بیوه برادرزینب بنت جحش یکی از مسلمانان بود که به دین مسیح گرویده بود. ام حبیبیه که خود مسلمان بود دختر ابوسفیان بود و ازدواج محمد ﷺ با وی، که بلافاصله پس از بازگشت او انجام شد، به منظور ایجاد صلح و آشتی با ابوسفیان بوده است.

فرستاده محمد ﷺ به مصر، از این سفر بازگشت ( بن ژانویه ۶۲۷ و آوریل ۶۱۹) و هدایایی برای محمد ﷺ آورده بود که در بین آنها دو کنیز زیباروی بودند که محمد ﷺ یکی از آن دورا، به نام ماریه به عنوان متعه برای خود نگهداشت و چون وی از گرویدن به اسلام خودداری کرد زن محمد ﷺ نشد. پس از فتح خیبر محمد ﷺ صفیه دختر یکی از رؤسای قبیله النضیر را به عنوان متعه پذیرفت و ظاهراً پس از آنکه وی به اسلام درآمد زن شرعی محمد ﷺ شد. در این مورد نیز محمد ﷺ فکر کرده است که شاید بتواند با یهود صلح کند. محمد ﷺ به هر ترتیب بود متوسل می شد تا مردم او را به ریاست دولت قبول کنند.

از لشکر کشیهایی که در فاصله فتح خیبر و فتح مکه صورت گرفته است بعضی علیه طوایفی بوده که عملاً از مخالفت با محمد -

ﷺ دست برداشتند ولی کاملاً آرام نشده بودند. از جمله آنها قسمتی  
 از طوایف معروف به غطفان و سلیم بود. در بعضی از موارد عده‌ای از  
 طایفه که مسلمان شده بودند گروهی را تجهیز می‌کردند تا به دسته  
 دیگر طایفه که کافر باقی مانده بودند حمله کند و ظاهر همیشه بین  
 طوایف محارب‌بانی نظیر همان جنگ‌های قدیم، نهایت به نام اسلام تعقیب  
 می‌شده است. لشکر کشی‌های دوم علیه طوایف هوازن صورت گرفته  
 است. ممکن است این لشکر کشی‌ها خود به خود اهمیتی نداشته باشد  
 ولی مقدمه توسعه جغرافیایی قدرت محمد ﷺ به شمار می‌رود  
 که منجر به مقاومت طایفه هوازن شد و جنگ حنین را به وجود آورد.  
 از لشکر کشی‌هایی که در ژوئیه و سپتامبر و اکتبر ۶۲۹ صورت  
 گرفته است سه فقره آن از فقرات دیگر مهم‌تر است و در امتداد جاده  
 سوریه واقع شده است اما اطلاعات ما درباره آنها کم است. در لشکر  
 کشی اول گروه کوچکی از مسلمانان مرکب از پانزده نفر کلا کشته  
 شدند و فقط رئیس آنان نجات یافت. لشکر کشی دوم علیه موته بود  
 که کاری بزرگ به شمار می‌رفت و محمد ﷺ مدتی در فکر  
 بوده است که خود فرماندهی آن را بر عهده گیرد ولی بعد تغییر  
 عقیده داده این کار را به پسر خوانده خویش زید بن حارثه واگذار  
 کرده و ۳۰۰۰ نفر را در اختیار او گذاشته است. آنچه در این جنگ رخ  
 داده است کاملاً پوشیده است. اطلاعات مختصری هم که مورخان  
 داده‌اند، در کوششی که برای بدنام کردن خالد بن ولید به کار  
 رفته، محو شده است. آنچه مسلم است برخورد با نیروی دشمن رخ داده  
 است و زید و دو معاون نزدیک او و عده کمی از مسلمانان کشته

شده‌اند و ارتش مکه به فرماندهی خالد بن ولید سالم به مکه بازگشته است. آنچه به نظر عجیب می‌آید این حقیقت است که چگونه ممکن است برخوردی بین دو گروه مرکب از ۴۰۰۰ نفر از يك طرف و ۱۰۰۰۰ نفر از سوی دیگر (یکی از منابع، نیروی طرف را ۱۰۰۰۰ نفر نوشته است) رخ دهد و ضایعات آن فقط دو رئیس و در حدود ۱۲ نفر مرد باشد. آیا این نبرد حمله ناگهانی بوده است؟ نمی‌دانیم لشکر کشی دیگری در ماه بعد صورت گرفته است که هدف آن پاك کردن هر گونه بی‌حرمتی و توهین از مسلمانان بوده است. مجموعاً این لشکر کشی نشان می‌دهد که محمد ﷺ به جاده شمال همواره علاقه داشته است.

اینك محمد ﷺ با داشتن تسلط بر محوطه وسیعی از عربستان می‌توانست هر آن که فرصت دست‌می‌داد به مکه حمله کند.

### مکه در سراشیب زوال

چند سال بود که در بین تجار بر جسته مکه دو گروه رقیب وجود داشت. یکی از آنها گروه مخزوم بود که رئیس آن ابوجهل بود و در سال ۶۲۴ در بدر کشته شد و ریاست گروه دیگر با ابو-سفیان بود. از حادثه بدر تا لشکر کشی بی نتیجه‌ای که منجر به عقد معاهده با مکیان شد. سیاست ابوسفیان بر مکه مسلط بود، علت آن یکی از بین رفتن عده‌ای از رؤسا در بدر بود و نسل جوان طایفه مخزوم هنوز رشد نکرده بودند. البته امارات و نشانه‌هایی است که لااقل در موارد جزئی مخالفت مردم را با ابوسفیان می‌رساند ولی فوریت و ضرورت موقعیتی که برای مکه پیش آمده بود آنها را

و اداری به اتحاد می‌گردد. ابوسفیان پس از به هم ریختن اتحادیه در سال ۶۲۷ در چشم عده کثیری از مردم مکه حتی طایفه خود بی اعتبار شد و احتمال دارد خود نیز به وضع خویشتن اعتماد نداشته‌است زیرا حس می‌کرد که انهدام مکه قابل احتراز نیست و از طرفی در اثر کوششهای فراوان خسته شده بود و می‌خواست اشخاص جوان‌تری زمام امور را در دست گیرند.

در زمان لشکر کشی محمد ﷺ به الحذیبیه زمام امور ظاهراً در دست گروهی مرکب از سه تن بوده است صفوان بن امیه - سهیل - بن عمرو ، و عکرمه پسر ابوجهل، که همگی متعلق به طایفه مخزوم بودند ولی به اصطلاح چشم دیدار یکدیگر را نداشتند. صفوان از همه مهمتر بود و از جنگ بدر به بعد رقیب ابوسفیان به شمار می‌رفت ولی عکرمه با نظریات او شدیداً مخالفت می‌کرد. ظاهراً سهیل حد تعادل بین این دو را نگاه می‌داشت و مذاکرات نهایی معاهده با محمد ﷺ به او واگذار شد.

پس از آنکه عهدنامه امضا شد شهر مکه در یأس و ناامیدی فرو رفت. شیوخ شهر و سرمایه داران میل به ادامه زندگی داشتند ولی جوانان می‌دیدند که این شهر برای آنان آتیه‌ای ندارد. گفته شده است که پسر سهیل بن عمرو راه خود پیش گرفت و به اردو گاه مسلمانان رفت تا دین اسلام را بپذیرد، در حالی که پدر او سرگرم تنظیم عهدنامه بود. چنانکه در گذشته گفته شد، بنا بر مواد عهدنامه او را نزد پدرش باز گردانیدند. این نخستین فرد از عده کثیری بود که اسلام آوردند. برای کسانی که تبعه بودند هیچ مانعی نبود که در



صورت تمایل خود را در دامن محمد ﷺ بیندازند ،

وقایع چندی که پس از امضای عهد نامه رخ داده است نشان می دهد که رسوم و عادات عرب تا چه اندازه در کارها مؤثر بوده است شخصی به نام ابوبصیر که در تحت حمایت یکی از قبایل مکه بود به علت ابراز همدردی با مسلمانان زندانی شد اما توانست فرار کند و خود را به اردوی مسلمانان برساند ، ولیکن در اندک زمانی رسولی با نامه ای از طرف قبیله نزد محمد ﷺ آمد و تقاضا کرد که طبق مفاد عهد نامه او را باز گردانند . محمد ﷺ به صحت این تقاضا اعتراف کرد و چون ابوبصیر اعتراض کرد ، گفت که خدا راهی برای نجات او از سختیها ارائه خواهد کرد ، و اجازه نخواهد داد که او از دین خود باز گردد .

فرستاده و غلام او و زندانی هنوز چند میلی به سوی مکه نرفته بودند که ابوبصیر فرصتی به دست آورد و به هنگام توقف برای ناهار سهم خرمای خود را بین دیگران تقسیم کرد و اعتماد آنها را جلب کرد . مکیان فقط نان خشک داشتند و خرما محصول مدینه بود . فرستاده شمشیر خود را بیرون آورد که راحتتر باشد و ابوبصیر شمشیر را برداشت و به تحسین آن پرداخت و اجازه خواست آن را امتحان کند و ببیند که تیز هست یا نه و در ظرف یک لحظه نگهبان بی احتیاط خود را به قتل رسانید ولی غلام فرار کرد و نزد محمد ﷺ رفت . پس از چندی ابوبصیر نیز پیدا شد و محمد ﷺ به غلام آزاده اجازه داد که همراه ابوبصیر به مکه برود ولی او امتناع کرد . ابوبصیر چون تحویل قبیله مکیان شده بود دیگر عضو جامعه

اسلامی به شمار نمی‌رفت و محمد صلی الله علیه و آله اصولاً مسئولیتی در ازای نگهبان مقتول و خونبهای او نداشت.

مکیان اینک بیشتر از بیش علیه ابو بصیر بر انگیزه شده بودند و او را، اگر در مدینه می‌ماند از محمد صلی الله علیه و آله می‌خواستند، بنابر این محمد صلی الله علیه و آله او را به نوعی تشویق کرد که به نقطهٔ نزدیک ساحل که به جادهٔ مکه به سوریه مسلط بود برود. در اینجا نیز (احتمال دارد بی تحریک و تشویق محمد صلی الله علیه و آله) در حدود هفتاد تن از مسلمانان مکه دور او جمع شدند و آنها کسانی بودند که اگر به مدینه می‌رفتند محمد صلی الله علیه و آله مجبور بود آنها را به مدینه باز گرداند این گروه کوچک به کاروان کوچکی از مردم مکه حمله بردند و هر کسی را که در دسترس بود کشتند. بدین ترتیب محمد (ص) بی آنکه مواد عهدنامه را نقض کرده باشد محاصره را دوباره برقرار کرد. این مردان رسماً از جامعهٔ او نبودند و اومسئولیتی از لحاظ اقدامات آنها نداشت. از طرف دیگر هر چند آزادی هر گونه شدت عمل داشتند ولی به اندازه‌ای ضعیف بودند که مشکل می‌توانستند کاری در این نقطهٔ دور افتاده انجام دهند سر انجام از محمد صلی الله علیه و آله خواستند که این اشخاص را به جامعهٔ خود وارد کند و موافقت کردند که حقوق آنها را تحت مواد عهدنامه به رسمیت بشناسند. متأسفانه ابو بصیر پیش از آنکه نامهٔ محمد (ص) به او برسد در گذشت. در تمام این جریانات هر چند علمای مغرب زمین از محمد (ص) انتقاد می‌کنند که او این اشخاص را تحریک کرده و یکی از مواد عهدنامه را شکسته است ولی بنا بر سنت قدیم عرب رفتار او کاملاً درست بوده است و رسماً نیز مورد باز خواست خود مکیان قرار

نگرفته است.

در مارس ۶۲۹ ع صلی الله علیه و آله به اتفاق ۴۰۰ نفر برای انجام دادن مراسم حج عازم مکه شد این حج به جای سفری بود که در سال پیش انجام نگرفت و بنا بر مواد عهدنامه الحدیبه مکيان برای احترام از هر گونه پیشامد ناگوار سه روز از شهر خارج شدند، عده کثیری از اهالی مکه تحت تأثیر قدرت روز افزون اسلام قرار گرفتند و بی شک همین موضوع بود که موجب اسلام آوردن دوتن از بزرگان مکه شد اول خالد بن ولید از قبيله مخزوم بود و دیگری عمر بن عاص از قبيله سهيم. اولی از لحاظ قدرت اداری، مخصوصاً در سالهای پس از رحلت ع یکی از ایجاد کنندگان امپراتوری عرب محسوب است و دومی شخصی بود زیرک و سیاستمدار و او را فاتح مصر می دانند. ع صلی الله علیه و آله نیز به قدرت آن دو اعتماد داشت چه يك يادو ماه پس از ورود به مدینه آنان را به تصدی لشکر کشیهای مسلمانان برگماشت. هنگامی که ع صلی الله علیه و آله در مکه بود سعی کرد که با بقیه خاندان بنی هاشم که خود نیز از آنان بود صلح کند. ابولهب که عموی ع صلی الله علیه و آله بود، و ع صلی الله علیه و آله به سبب بدبینی حمایت خود را از او باز گرفته بود، در سال ۶۲۴ در گذشته بود و در این زمان ریاست قبيله با عموی دیگر اوعباس بود. می گویند که او از ابتدا مسلمان بوده ولی دین خود را مخفی می داشته است، اما این کوششی است که مورخان خلفای عباسی (۷۵۰ تا ۱۲۵۸ م) در آثار خود به کار برده اند تا جاد این سلسله را از کفر بری سازند. احتمال دارد که عباس حتی علیه ع صلی الله علیه و آله به مبارزه برخاسته باشد. وی مانند خزانهدار و بانکدار ساده ای متصدی آب زوار بوده و ناچار اهمیتی

دو کارهای مکّه داشته، ولی زندگی او چندان راحت نمی گذشته است. جای آن بوده است که او بیش از دیگر مکّیان به افزایش قدرت برادر زاده خود به دیده امید بنگرد، و این موجب آن شده است که محمد صلی الله علیه و آله نیز از گذشته‌ها چشم بپوشد.

محمد صلی الله علیه و آله با تبعیت از اصل خود، که هر جا ممکن باشد باید سازش کرد. به زودی نشان داد که عباس نباید از نظریات خود ترسو و اهمه ای داشته باشد و فوری ترتیبی داد که می‌مونه خواهرزن عباس را به ازدواج خود در آورد تا ایجاد رابطه محکمی بین آن دو بشود، زیرا برعکس اغلب خانواده‌های مکّه در خاندان عباس خویشاوندی مادری تسلط داشت. تشریفات ازدواج پیش از خروج محمد صلی الله علیه و آله از مکّه به پایان نرسید و در راه مدینه انجام گرفت. عباس نیز به اسلام گروید ولی در مکّه باقی ماند تا به نفع آن کار کند.

وقایعی که منجر به قطع رابطه محمد صلی الله علیه و آله با مکّه و شکستن پیمان صلح گردید از نوامبر ۶۲۹ آغاز شد و علت آن منازعات قدیم قبیله‌ای بود که بار دیگر شعله‌ور شده بود و مکّیان و مسلمانان در آن دخالت داشتند. یکی از طوایف خزاعه با استفاده از مواد عهد نامه الحدیبه خود را متحد محمد صلی الله علیه و آله اعلام کرد و مردی را از قبیله دیگر که اشعاری علیه محمد صلی الله علیه و آله سروده بود گشت. این قبیله دیگر قبیله‌ای به نام بکر - بن عبد منات از متحدان قدیم مکّیان بود و محرمانه مقداری اسلحه از پیشوایان بنی مخزوم به دست آورده بود. نقشه به خوبی طرح شده بود طایفه خزاعه عاف‌گیر شدند، و پس از آنکه عده‌ای کشته دادند به خانه هم قبیله‌های خود در مکّه گریختند. یکی از اعضای طایفه ترتیبی داد

که این اخبار فوزی در مدینه به محمد صلی الله علیه و آله برسد.

اهالی مکه پس از فرو نشاندن نایره جنگ و بیرون کردن مردان بکر از شهر پی بردند که اوضاع وخیم است و اگر محمد صلی الله علیه و آله کشف کند که آنها به این افرادیاری کرده و با کنگاش کنندگان همراه بوده اند کار بدتر نیز خواهد شد. اگر آنان نمی بایست تسلیم محمد صلی الله علیه و آله شوند می بایست یکی از این سه راه را انتخاب کنند: طایفه را از خود ندانند و اجازه دهند محمد صلی الله علیه و آله هر گونه مایل است با آنها رفتار کند، یا خونبها بپردازند، و یا علیه محمد صلی الله علیه و آله اعلان جنگ بدهند. در هر يك از این سه راه مشخصاتی وجود داشت به طوری که توافق مشکل بود، پرداختن خونبها موجب آبروریزی می شد و شکستن مواد عهد نامه نیز موجب شکست اقتصادی بود و امیدی به مغلوب کردن محمد صلی الله علیه و آله نیز نداشتند.

سرانجام ابوسفیان که اینک مجدداً وارد صحنه می شود به مکینان اصرار کرد که کوششی برای سازش کنند و خود او برای انجام دادن این کار به مدینه فرستاده شد. این خود نشانه آن است که قدرت مکه تا چه اندازه کم شده بود که مجبور بودند متواضعانه برای جلب نظر محمد صلی الله علیه و آله به مدینه بروند. از آنچه مکینان می خواستند و امیدوار بودند که به دست آورند اطلاع درستی نداریم، اما احتمالاً راه حلی که ارائه شده از نوع همان اصولی بوده است که محمد صلی الله علیه و آله در مورد ابوبصیر از آنها استفاره کرد. مکینان اعتراف کرده اند که اشتباهی رخ داده است ولی مسئول آنها نبوده اند، زیرا محتملاً خطا کاران جزء معاهده نبوده اند و یا خود سران به این کار دست زده بودند، پس لازم

می آمد که در معاهده تجدید نظر کنند تا شامل این عده نیز بشود. از بخت بد مکیان محمد صلی الله علیه و آله حاضر نبود که قانون آنها را رعایت کند و موقعیت خوبی داشت که می توانست نیروی خود را علیه قبیله بکر به کار برد بهتر از آنچه قبیله بکر علیه ابوبصیر به کار بردند. پس ابوسفیان و همراهان با سه و یا چهار شرط و پیشنهاد از مدینه بیرون رفتند، اما ابوسفیان ماده چهارم یعنی اطاعت از محمد صلی الله علیه و آله را پذیرفت.

سهمی که ابوسفیان در تصرف مکه توسط مسلمانان داشته است مهمتر از آن چیزی است که تا کنون تلقی شده است. مورخان اسلامی حقیقت را مکتوم داشته اند تا نگذارند معلوم شود که او سهمی بیشتر از عباس داشته است. شرح مسافرت ابوسفیان را به مدینه به صورت خیال انگیزی در آورده و گفته اند او ابتداء نزد دخترش أم حبیبه که در این زمان زن محمد صلی الله علیه و آله بود رفته است اما أم حبیبه حتی اجازه نداده است که پدرش روی بستر وی بنشیند زیرا او کافر بود و بستر مورد استفاده پیغمبر قرار می گرفته است. همچنین می گویند که محمد صلی الله علیه و آله نیز از دیدن و پذیرفتن او امتناع کرده است و او از دیگر رؤسای مهاجر نیز ناامید شده و اجباراً بی آنکه کاری انجام داده باشد مدینه را ترک گفته است.

در این داستان انحرافهای چندی دیده می شود و حقیقت طوری دیگر است. سیاست و تدبیر ابوسفیان بیش از همگان و رقیبان او در مکه بود، لذا پس از شکست اتحادیه به بی نتیجه بودن مقاومت پی برده است. شاید هم عقیده به کاهش اهمیت و پایین آوردن سطح زندگی

داشته و پیش از محاصره و پس از آن خواسته است از نفوذ خود برای اصلاح و ایجاد اتحاد داخلی استفاده کند. ازدواج عَلَيْهِ السَّلَام با دختر او نیز او را امیدوار ساخته که بتواند بی آنکه حیثیت و اعتبار خود را از دست بدهد با عَلَيْهِ السَّلَام سازش کند. او پیش از آنکه به مدینه برود این افکار را داشته است و چنانکه وقایع بعدی نشان می دهد وی هنگام اقامت در مدینه با عَلَيْهِ السَّلَام تفاهم پیدا کرده است که مکه را بی جنگ به او تسلیم کند. او در «جوار» بودن را برای همه آزاد گذاشته و عَلَيْهِ السَّلَام نیز آن را قبول کرده است که از آنها حمایت کند. البته چنین قرار دادی با نظریات و هدفهای عَلَيْهِ السَّلَام مناسب بوده است.

#### تسلیم مکه

تصرف مکه مطلوب عَلَيْهِ السَّلَام نبوده است چه همان طور که گفته شد عَلَيْهِ السَّلَام در نظر داشت قلمرو خود را در خارج از عربستان به سمت شمال توسعه دهد اما مکه و مکیان برای او دارای اهمیت بسیار بودند. مکه از همان زمانهای قدیم به عنوان کانون جغرافیایی اسلام انتخاب شده بود و برای مسلمانان نیز واجب بود که آزادانه بتوانند بدانجا آمد و شد کنند اگر مکه به تصرف آنها در می آمد بر قدرت و اعتبار آنها افزوده می شد و بی در دست داشتن مکه موقعیت آنها نسبتاً ضعیف بود. از طرف دیگر هر چه بروسعت امور جامعه اسلامی افزوده می شد عَلَيْهِ السَّلَام به قدرت اداری و نظامی مکیان بیشتر احتیاج پیدامی کرد و بنابراین کوشش او تمام معطوف بر این بود که روزی آنها با طیب خاطر با وی همکاری کنند.



در ظرف یکسال و نیمی که از امضای عهدنامه الحیدریه می گذشت قدرت مسلمانان به سرعت افزایش یافته بود. وقتی متحدان محمد صلی الله علیه و آله یعنی طایفه خزاعه از او طلب یاری کردند وی دریافت که هنگام عمل رسیده است. بازدید ابوسفیان از او نشان داد که عده کثیری از مردم مکه مقاومت نخواهند کرد و رؤسای نیمه جان گروه مخزوم چندان حمایتی معمول نخواهند داشت لذا شروع به جمع آوری نیرویی کرد که بتواند مکه را از پای در آورد و مطمئن گردد که فقط مخالفان سر سخت پایداری خواهند کرد.

هنگام تجهیز اقدامات احتیاطی انجام گرفت، تا این موضوع کاملاً مخفی بماند. در مدینه کسی از هدف لشکرکشی آگاه نبود، ابتدا برای اغفال عده ای به سوی سوریه فرستاده شدند و راهپای مکه بسته شد. یکی از مجروحان جنگ بدر بر اثر يك سهو عجیب ( که بعداً اقرار کرد در اثر نگرانیهایی بوده است که از زن و فرزندان در مکه داشته) در صدر برآمد اطلاعاتی را به مردم مکه برساند، ولی نامه او ضبط شد. به طور کلی محمد صلی الله علیه و آله در اول ژانویه ۶۳۰ با سپاهی که عده آن به اضافه افرادی که در راه به آن ملحق شدند به ۱۰۰۰۰ نفر می رسید عازم مکه شد.

اهل مکه اطلاعات کمی درباره این نیروی عظیم و مقصد آن دریافت کرده بودند و حتی هنگامی که در دو منزلی مکه اردو زدند تصور می کردند ممکن است هدف آنها طوایف مشرق مکه باشد. برای گمراه کردن مکیان به دستور محمد صلی الله علیه و آله ده هزار آتش روشن کردند. در این موقع ابوسفیان به اتفاق جمعی از رؤسای مکه، جز طایفه مخزوم



نزد محمد ﷺ رفتند و خود را رسماً در اختیار او گذاشتند. در عوض محمد ﷺ نیز وعده عفو عمومی داد، یعنی تمام کسانی که مدعی بودند که تحت الحمايه ابوسفیان هستند و یا کسانی که خانه‌های خود را بستند و از آنجا بیرون نیامدند، در امان بودند. با این اعلامیه ابوسفیان به مکه بازگشت.

شب بعد محمد ﷺ اردوگاه خود را به نزدیک مکه منتقل ساخت و سحرگاهان نیروی خود را به چهار دسته تقسیم کرد و از چهار جهت به سوی مکه به پیشروی پرداخت. فقط ستونی که تحت ریاست خالد بن ولید بود با مقاومت برخورد کرد ولی آن نیز به زودی شکسته شد. پس از آنکه بیست و چهار تن از مکیان و چهار تن از متحدان آنها کشته شدند بقیه فرار کردند و فقط دو تن از مسلمانان کشته شدند که علت آن هم این بود که به اشتباه در بین سپاه دشمن رفتند. با این کمی تلفات محمد ﷺ پیروزی بزرگی به دست آورد.

تنی چند از کسانی که نام آنان معین شده بود از عفو عمومی محروم شدند، که همه آنان جز عکرمه پسر ابو جهل هر یک به خیانت و جنایت خاصی متهم بودند. چند تن از آنها نیز بعداً مورد عفو قرار گرفتند و عده‌ای اعدام شدند با اعلام عفو عمومی حتی از فرار مشرکان نیز ممانعت جدی نشد. رؤسای گروه مخزوم نیز که در صدد مقاومت بودند چون در یافتند که امنیت آنها تضمین شده است از نپا نگاهها بیرون آمدند و به مکه بازگشتند، بعد محمد ﷺ از بعضی از ثروتمندان تقاضای قرضه کرد. او با آنان بزرگوارانه رفتار کرده بود و چون غارت نیز ممنوع شده بود پیروان فقیر وی اینک در احتیاج بودند و از

قرضه‌ای که گرفت به هریك پنجاه درهم داده شد.

محمد پانزده یا بیست روز در مکه اقامت کرد و نیروهایی برای مطیع ساختن طوایف اطراف و خراب کردن دو بتخانهٔ مهم منات و عزی روانه کرد. در مکه نیز کعبه و خانه‌های خصوصی از وجود بت‌پاك و منزّه گردید. مسائل اداری چندی هم مورد بحث قرار گرفت مخصوصاً حدود سرزمین مقدس مکه تعیین شد. اغلب ادارات و امتیازات مکیان از بین رفت ولی ادارهٔ کعبه در همان خانواده باقی ماند و عباس سمت سقایه و رساندن آب به زوار را برای خود حفظ کرد.

یکی از علل اصلی موفقیت محمد ﷺ کشش و جاذبهٔ دین اسلام و مناسب بودن آن با نیازمندیها و اصول اجتماعی عرب بود. رؤسای قبایل ممکن بود از عادات و رسوم قدیم عشیره‌ای استفاده کنند، ولی مردم معمولی به طور کلی از سستی و مضرات اصول قدیم آگاه بودند و چون در اثر محاصرهٔ مسلمانان کار سخت شد منافع شخصی رؤسا با هم تصادم کرد و حفظ اتحاد بیش از پیش دشوارتر گردید.

مهارت سیاسی و قدرت اداری محمد ﷺ نیز مؤثر بوده است. ازدواج او با میمونه و أم حبیبه سبب گردید که عباس و ابوسفیان از او پشتیبانی کنند شاید امتیازات دیگری نیز از اختلافات و عدم توافق داخلی مکیان به دست آورده است که از آنها اطلاعی نداریم. برتر از همه آنکه مهارت کامل او در ادارهٔ اتحادیه‌ای که اینك بر آن حکومت می‌کرد و معتقد ساختن همه، جز يك اقلیت ناچیز، به این، که با آنان منضانه رفتار شده است تضاد هماهنگی و رضا مندی و رغبت موجود در جامعهٔ اسلامی را با نارضایتی و بیقراری جوامع دیگر آشکارتر

و عمیق تر کرد و این حقیقت بوده است که برای عده کثیری روشن شده و آنان را در گرایش به اسلام بر انگیزته است.

به طور کلی ایمان عَلَيْهِ السَّلَام به کار خود و بصیرت و حکمت و پیش بینی و دور اندیشی او بسیار مؤثر و گیراست. هنگامی که جامعه او بسیار کوچک بود، و همه نیروهای خود را بر آن گمارده بود که از خرابی و انهدام احتراز شود، ایجاد عربستان متحدی را در دماغ خود می پروراند که در آن مکیان می بایست نقش نوینی ایفا کنند، نقشی که از نقش سابق آنان در امور بازرگانی کمتر نباشد عَلَيْهِ السَّلَام مکیان را بر انگیزته بود و سپس تهدید کرده بود و اینک همه آنان از بزرگ و کوچک مطیع او بودند. محمد عَلَيْهِ السَّلَام با مشکلات عجیب ولی با اطمینان خاطر به سوی هدف رفته بود. اگر دلایل تاریخی این مسائل را اثبات نمی کرد عده کمی باور می کردند که محمدی که مورد نفرت مردم مکه بود بار دیگر چگونه توانست فاتح پیروزمندی به این شهر باز گردد.

### جنگ حنین (۳۱ ژانویه ۶۳۰)

هنگامی که محمد عَلَيْهِ السَّلَام سرگرم رتق و فتق امور مکه بود و مسئولیت کارها را خود به عهده داشت خبر رسید که از سوی مشرق مورد تهدید قرار گرفته است و در فاصله دو یا سه روز راه طوایف معروف به هوازن مشغول گردآوری سپاهی دو برابر سپاهیان محمد عَلَيْهِ السَّلَام هستند. این طوایف با مردم مکه دشمنی قدیم داشتند و در زمان محمد عَلَيْهِ السَّلَام جنگهایی بین آنها رخ داده بود و طایفه ثقیف که در طایف می زیستند جزء آنها بودند. تجارت این شهر در دست تجار مکه

بود که به وسیله دسته‌ای از مکیان انجام می‌گرفت. کاهش قدرت مکه  
تبادل قوا را به نفع مخالفان آنها به هم زد و در ژانویه تمام طایفه  
ثقیف به طایفه هوازن پیوستند در حالی که عده کثیری از آنان امیدوار  
بودند که استقلال خود را از دست مکیان آزاد سازند. انتظارات و  
آرزوهای باقی طوایف هوازن، که بدوی بودند، تاریک و نامعلوم  
است ولی به طوری که مورخان نوشته‌اند همینکه هوازن از تجهیز محمد  
ﷺ در مدینه آگاهی یافتند خود را آماده کردند. شاید توسعه  
قدرت محمد ﷺ را برای خود تهدیدی می‌دانستند و یا امیدوار  
بودند از امتیازات گذشته که به مکیان داده بودند آزاد شوند. یا  
احتمال می‌رود انتظار داشتند که پس از آنکه محمد ﷺ و مکیان  
از جنگ خسته شدند غنیمتی به آنها برسد.

مکیان نیز تا این اندازه متوجه این خطر بودند و هیچ‌ذکری  
نشده است تا دلالت کند که رؤسای قبایلی که می‌خواستند در برابر  
محمد ﷺ مقاومت کنند از هوازن استمداد کرده باشند حتی هنگامی  
که فرار کردند هیچ‌یک بدان طرف نرفتند. ناچار بین این طوایف و  
اهالی مکه احساسات مخالف شدید وجود داشته است و در نتیجه وقتی  
محمد ﷺ مکه را فتح کرد قهرمان مخالف سپاهی شد که مکرراً تهدید  
می‌کرد: پس آنچه کفار مکه را وادار کرد که با محمد ﷺ به حنین  
بروند در مرحله نخست حفاظت جان و حیات بود نه امید تحصیل  
غنیمت. صفوان بن امیه اطاعت از محمد ﷺ را بر اطاعت از ثقیف یا  
هوازن ترجیح داد و پول و اسلحه‌ای را که محمد ﷺ می‌خواست در  
اختیار او گذاشت. محمد ﷺ مجموعاً دوهزار نفر بر نیروی خود افزود و

احساس کرد که به اندازه کافی قوی است و می تواند با دشمنی که تعداد افرادش به ۲۰۰۰۰ نفر می رسید مصاف کند .

محمد بن اسحاق در تاریخ ۲۷ ژانویه از مکه حرکت کرد و در شب سیام در حنین نزدیک منطقه دشمن اردو زد . صبح روز بعد مسلمانان به سیاق جنگ به سوی وادی به حرکت درآمدند ، پیمشتازان به ریاست خالد بن ولید و از طایفه سلیم بودند . مسلمانان هر چند اعتماد کامل داشتند ولی از دیدن آن همه اسب و نفر نگران شدند زیرا طایفه هوازن تمام زنان و کودکان و دواب را همراه آورده بودند . ناگهان سواره نظام دشمن که شب در کنار وادی موضع گرفته بودند به جبهه مسلمانان حمله بردند .

افراد سلیم ، که بعدها اعتراض کردند و گفتند که با شجاعت جنگیده اند ، از قرار معلوم یکباره پا به گریز نهادند و آشفتگی آنان در قسمت اعظم سپاه محمد بن اسحاق مؤثر شد .

در همین لحظه خطر ناک بود که محمد بن اسحاق و عده کمی از مهاجران و انصار به مقاومت پرداختند و وضع بیدرنگ عوض شد و طولی نکشید که دشمن به هزیمت رفت . تعدادی از افراد ثقیف نیز مدتی با شجاعت جنگیدند و سپس فرار کردند و به خانه های خود پناه بردند . رئیس اتحادیه مالک بن عوف مجبور شد با طایفه خود مدتی مقاومت نماید تا پیاده نظام عقب نشینی کند و بدین طریق در برابر اردوی دشمن جنگ دیگری در گرفت . آخر کار تمام کوششها بی ثمر شد و جنگاوران یا کشته یا اسیر و یا متفرق شدند و زنان و کودکان و دواب و کالاها همه به دست مسلمانان افتاد .

شماره کسانی که در جنگ حنین شرکت داشتند از تمام جنگهای سابق عَلَيْهِ السَّلَام بیشتر بود. این جنگ شدید و سخت نبود و در آن کمتر به مبارزه تن به تن پرداخته اند در نتیجه ضایعات مسلمانان کم و با این همه پیروزی کامل قطعی بوده است. جنگ حنین بزرگترین برخوردی بود که در زمان حیات عَلَيْهِ السَّلَام بین مسلمانان و طوایف بدوی رخ داد. گرد آوردن يك نیروی ۲۰۰۰ نفری و مرکزیت بخشیدن به آنها از چالاکی يك رئیس بدوی حکایت می کند و پس از شکست مالک بن عوف هیچیک از رؤسا جرئت نکردند که آن را بار دیگر علیه عَلَيْهِ السَّلَام تکرار کنند.

#### تحکیم پیروزی

عَلَيْهِ السَّلَام از حنین فوری عازم طایف شد و به محاصره آن پرداخت. او در این محاصره چند دستگاه منجنیق محاصره داشت که احتمال دارد از رومیان دریافت و یا تقلید کرده باشد. اما با این همه پیشرفت مختصری کرد. پس از پانزده روز تصمیم گرفت محاصره را بردارد. اهالی طایف با شجاعت جنگیدند و ضایعاتی نیز به مسلمانان وارد ساختند. عَلَيْهِ السَّلَام می دانست که اگر محاصره به درازا کشیده شود سربازان او خسته خواهند شد و خونها ریخته خواهد شد، و بنابر این مصالحه با طایف دشوارتر خواهد گشت. از طرف دیگر محاصره طولانی ممکن بود اعتباری را که در حنین به دست آورده بود کم کند همچنین می بایست به کار هوازن و غنایم جنگ حنین نیز رسیدگی شود پس با برداشتن محاصره چیزی از دست نخواهد داد و می تواند به وسایل دیگر طایفه ثقیف را به سوی خود بکشاند. با وجود این گویا

ناامید یا ناراحت بوده است و شاید علت بدرفتاری او با شخصی که اتفاقاً او را به هنگام مراجعت لکد زده بود همین باشد.

غنایم را در محلی به نام الجیرانه گذاشته بودند که محمد صلی الله علیه و آله از ۲۴ فوریه تا ۹ مارس در آنجا گذرانید. علاوه بر چند زنی که به رؤسای اسلام داده شده بود تعدادی اسیر و مقداری غنیمت نیز بود که به هر يك از سپاهیان چهار شتر یا معادل آن می رسید. سازمان توزیع کار دشوادی در پیش داشته است و تعجبی نیست که از این حیث مشکلاتی پیش آمده و شکایاتی به سبب تأخیر در توزیع غنایم شده است رؤسای قبایل و رهبران مکی هر يك بنابه رتبه و مقام صد یا پنجاه شتر دریافت کردند. ابوسفیان و مردی که همراه او نزد محمد صلی الله علیه و آله رفته و به اطاعت از او اقرار کرده بودند محتمل است هر يك ۳۰۰ شتر دریافت کرده باشند و این پاداش آنان در برابر حفظ صلح مکه بوده است. دادن این هدایا به رؤسا نشانه آن است که عضو فنی جامعه محمد صلی الله علیه و آله نبوده اند بلکه فرماندهان نیروهای متحد بوده اند.

مذاکرات با طایفه هوازن به هنگام محاصره طایف ادامه داشت و موقعی که محمد صلی الله علیه و آله در الجیرانه بود. مالک بن عوف و هوازن تصمیم به قبول اسلام گرفتند و تقاضا کردند زنان و کودکان آنها پس داده شوند. این تقاضا مورد اجابت واقع شده و ظاهراً آنان مبلغی درازای آن پرداخته اند.

محمد صلی الله علیه و آله از الجیرانه برای انجام دادن مراسم حج به مکه رفت و از آنجا به مدینه بازگشت. در غیبت خود برای اداره امور



مکه جوانی را از طایفه ابوسفیان گماشته بود و این خود نشانه آن است که خواسته است نشان دهد هر چند با مردم مکه روابط دوستانه دارد ولی ابوسفیان را بر رقبای او ترجیح می دهد .

یکی از بزرگترین موفقیت‌های محمد ﷺ که نبوغ اورامی رساند مصالحه او با رؤسای مکه است ، همان کسانی که تا چند ماه پیش دشمن او بودند. لذا تعجبی نیست که می بینیم ابوسفیان در خراب و منهدم کردن بتخانه لات در طایف یاری کرده و مدتی حکومت ناحیه جنوب عربستان را داشته است و بعدها نیز در جنگ یرموک (۶۳۶) حضور داشته و تا سال ۶۵۲ می زیسته است . تعجب آور تر آنکه پس از رحلت محمد ﷺ وقتی که نفوذ او در بعضی از طوایف کم شده بود سهیل بن عمرو سعی کرده است مکیان را نسبت به او و فسادار نگه دارد و جالبتر از همه داستان عکرمه پسر ابوجهل است که در ابتدا نام او جزء اعدام شدگان بود و محمد ﷺ از تقصیر او در گذشت و وی اسلام آورد و مقامات مهم سیاسی و نظامی به او واگذار گردید . علاقه او به اسلام به اندازه ای افزایش یافت که می گویند گفته است: « معادل پولی که در جنگ با شما مصرف کردم در راه خدا صرف خواهم کرد . حیات خود را برای لات و عزی به خطر افکندم آیا از در خطر افکندن آن در راه خدا امتناع دارم ؟ » ظاهراً عکرمه در یکی از جنگهای سوریه به شهادت رسیده است .

تمام رؤسای مکه اگر در حقیقت مسلمان نشدند رسماً اسلام را قبول کردند. این واقعه چه وقت رخ داد معلوم نیست شاید پس از



تقسیم عنایم در الجیرانه صورت گرفته باشد، ولی بیان مورخان بعدی اسلام که می نویسند همگی به سبب هدایایی که در آنجا دریافت کردند مسلمان شدند محققاً يك تهمة «ضد اموی» است. به طوری که در بالا ذکر شد ممکن است تحت تأثیر این حقیقت قرار گرفته اند که عَلَيْهِ السَّلَام با دشمنان آنها یعنی هوازن و طایف جنگیده اند.



## حاکم عربستان

### موفقیت پس از حنین

تصرف مکه و پیروزی حنین تأثیر چندانی در موقعیت محمد ﷺ در مدینه نداشت او هنوز رئیس قبیله مهاجران و پیامبر خدا بود که گاه به گاه وحی‌هایی بر وی نازل می‌شد که مناسب جامعه اسلامی بود. وی پیامبر خدا و فرمانده کل بود، زیرا لشکر کشی‌های مسلمانان همه «چهار در راه خدا» به شمار می‌رفت. با افزایش حیثیت و اعتبار مسلمانان به تدریج اختلافات کمی پیش آمده ولی اصولاً تغییری رخ نداده است. اینک اغلب رؤسای قبایل مدینه می‌دانستند که کدام طرف قوی‌تر است و هیچ علاقه‌ای به ترك محمد ﷺ و مخالفت با او نداشتند و احتمال دارد هنگامی که پیمان را در الحدیبیه قبول کردند قسم خوردند که همیشه از او اطاعت کنند.

اختلاف دیگر آنکه تعداد قبیله مهاجران افزایش بسیار یافته

بود و تنها افرادی مانند خالد بن ولید به اسلام گرویده بودند بلکه عده‌ای از طوایف بدوی نیز به مدینه رفته و در لشکر کشیها شرکت کرده بودند، زیرا این شغل از کار فعالی مانند شترچرانی سودمندتر بود. بعدها این افراد در ردیف مهاجران در آمدند، زیرا مستقیماً تحت حمایت خود محمد ﷺ بودند. در يك یا دو مورد نیز به نام طایفه یا قبیله اجازه داده شد که خود را مهاجر بنامند و این کلمه عنوان افتخار شده بود. لذا احتمال دارد که در جنگ حنین ۷۰۰ تن مهاجر حضور داشته‌اند در صورتی که در جنگ بدر بیش از ۹۰ تن نبودند.

مهمترین تغییری که رخ داد آن بود که تمام طوایف و قبایل یا شعب مهم آنها رسولانی به مدینه فرستادند و تقاضای اتحاد با محمد ﷺ کردند. پس از بازگشت محمد ﷺ از حنین به مدینه آمد و شد تدریجی این رسولان به صورت آب جاری درآمده کار محمد ﷺ و مشاوران او را سنگین کرده بود. در حدود چندین دوجین طایفه و نیم طایفه گروههای کوچک بودند. در هر گروه نیز، کوچک یا بزرگ حد اقل دو عامل رقابت یا دسته بندی وجود داشت، اگر هیئتی از جانب قبیله‌ای به مدینه می‌آمد، از يك شعبه قبیله‌ای بود که به ندرت در تلاش سبقت بر هیئت نمایندگی شعبه دیگر نبود. برای بر خورد با این رسولان ناچار محمد ﷺ دانش و سیاست کامل داشته و از سیاست داخلی آنها نیز آگاه می‌بوده است. نکته مهمتر این است که معاون او ابوبکر نیز شجره شناس و نسابی استاد بود و از روابط بین گروهها آگاهی داشت. این کارها چنان به آرامی صورت گرفت که نشاندای از قدرت محمد ﷺ در اداره امور به شمار می‌رود.

در این ایام تحول بود که مردم به جامعه اسلامی به نظر دیگری نگاه می کردند. کلمه امت که ما آن را به جامعه ترجمه کرده ایم دیگر در قرآن و اسناد این دوره به کار برده نشده است، مقصود از اسناد متن عهدنامه ها و نامه ها است ( که به نظر نگارنده اصیل است ) که در آنها به جای امت از جامعه و حزب الله نام می برد که به معنای گروه و حزب خداست. عملاً احتیاجی به داشتن کلمه مخصوص برای جامعه یا دولت اسلامی نبود، زیرا کارهای اداری و سیاسی به نام محمد ﷺ و یا به نام خدا انجام می گرفت.

در باره روابط طوایف مختلف با محمد ﷺ مواد بسیاری در دست است مخصوصاً هنگامی که ما خدمت بوط به اعضای قبایل جمع آوری شود. جای تأسف است که مقدار کثیری از این مواد تاریخ ندارد و بعضی از قسمتهای آنها محو شده است. تعدادی از عهدنامه ها و نامه ها را نمی توان ترجمه کرد زیرا به زبان عربی قدیم و مغلق نوشته شده و در بعضی از آنها تحریقاتی نیز رخ داده است.

وضع کلی از قرار معلوم به این شرح بوده است : در روز های نخست ( شاید تا سال ۶۲۷ ) محمد ﷺ حاضر و آماده بوده است که عهدنامه های دوستی و عدم تجاوز با قبایل غیر مسلمان منعقد سازد و وقتی قوت گرفت می توانست برای شرایط دیگری از قبیل شناختن او به نام « پیامبر خدا » و دادن جزیه به خزانه خدا ( بیت المال ) اصرار بورزد. این شرایط نسبت به طوایف تفاوت می کرد. در اواخر مایل بوده است با طوایف قوی ( مخصوصاً آنها که قدرت حمله به عراق داشتند ) عهد اتحاد ببندد، بی آنکه اصراری در مسلمان شدن آنها داشته باشد.

نخستین طوایفی که با محمد ﷺ تشکیل اتحادیه دادند طوایف کوچک مدینه بودند. پس از جنگ اغلب طوایف نزدیک مکه و مدینه قرارداد هایی با او منعقد ساختند. سپس دایره اتحادیه توسعه پیدا کرد تا تمام عربستان را در بر گرفت.

در این هنگام که جامعه اسلامی به صورت اتحادیه بزرگی در آمده بود لشکر کشی به نام غزوه، دیگر جا نداشت. دویاسه لشکر کشی از این نوع در تابستان ۶۳۰ صورت گرفته و پس از آن خاتمه یافته است. نتیجه یکی از این غزوها آن بود که یکی از طوایف نماینده ای نزد محمد ﷺ فرستاد و تقاضای عقد اتحاد کرد و نتیجه غزوه دیگری خراب کردن یکی از بتخانه های مهم بود.

با توسعه این گونه اتحادیه ها بر ثروت محمد ﷺ نیز افزوده شد تا زمان فتح خیبر وضع مالی جامعه اسلامی مشکوک و ناپایدار بود و زندگی مهاجران بیشتر با صدقه و مهمان نوازی انصار می گذشت ولی مساعدتهای مالی متحدان جدید در آمد محمد ﷺ را بالا برد و در نتیجه به مسئولیتهای او نیز افزوده شد.

یکی از نشانه های جالب افزایش ثروت محمد ﷺ تعداد اسبهای است که در لشکر کشیها به کار برده است. در بدر یعنی به سال ۶۲۴ بیش از ۳۰۰ نفر و فقط دوا سب داشت. در سال ۶۲۶ که مجدداً بدانجا بازگشت تعداد نفرات او به ۱۰۰۰ می رسید ولی دارای ده اسب بود. دو سال بعد تعداد نفرات در خیبر همان عده بود اما ۲۰۰ اسب سوار همراه داشتند، دو سال پس از آن در حنین مهاجران ۳۰۰ اسب و انصار که عده خود آنها ۴۰۰۰ نفر بود ۵۰۰ اسب داشتند سپس توسعه بزرگی

آغاز شد و چنانکه نوشته‌اند در همان سال ۶۳۰ در لشکر کشی تبوك عدۀ افراد به ۳۰۰۰ و عدد اسبان به ۱۰۰۰۰ رسیده بود. اهمیت نظامی این ارقام از آنجا پیداست که سواره نظام مکه که در جنگ احد سهم بزرگی داشت ۲۰۰ نفر از ۲۰۰۰ نفر بوده است. پس از جنگ حنین قدرت و ثروت محمد ﷺ از دوران پر اقتدار مکه نیز بیشتر بود.

### زوال موقت ایران و نتایج آن

مقارن با هجرت، ایرانیان دولت روم را شکست داده و مصر و سوریه و آسیای صغیر را تصرف کرده بودند، و حتی بربرها را به حمله و غارت ایالات اروپایی امپراتوری روم تشویق و ترغیب می‌کردند در همان زمان بود که اوضاع برگشت. از ۶۲۲ تا ۶۲۵ هرا کلیوس امپراتور روم در آسیای صغیر اردوزده و موقعیتهایی به دست آورده بود. يك محاصره کوتاه قسطنطنیه از طرف ایرانیان در سال ۶۲۶ با شکست مواجه شد. در سال بعد هرا کلیوس به امپراتوری ایران حمله کرد و در دسامبر همان سال در نزدیکی نینوای قدیم پیروزی بزرگی به دست آورد هر چند مجبور شد به زودی عقب‌نشینی کند. با وجود این شاهنشاهی ایران در اثر جنگهای طولانی به ناتوانی گراییده و در داخل آن شکاف ایجاد شده بود، در فوریه سال ۶۲۸ شاهنشاه آن به قتل رسید و پسرش چون به تخت نشست از آنجا که از موقعیت خود مطمئن نبود تقاضای صلح کرد. در مارس ۶۲۷ هرا کلیوس می‌توانست خود را فاتح بداند اما مذاکرات برای تخلیه امپراتوری روم تا ژوئن ۶۲۹ ادامه یافت. در سپتامبر ۶۲۹ هرا کلیوس به عنوان

فاتح وارد قسطنطنیه شد و در مارس ۶۳۰ صلیب مقدس را به اورشلیم باز گردانید.

محمد ﷺ از این وقایع بی خبر نبود و در افکار طوایف کنار جاده سوریه نیز نفوذ داشت و آنها را حاضر و آماده کرده بود که باوی کنار آیند. در بین طوایفی که در این قسمت پیشقدم شدند جامعه‌های کوچکی بودند که انکای آنان به ایران بود. در امتداد خلیج فارس و جنوب عربستان ایالات کوچکی بود که بیشتر زیر نفوذ احزاب و معمولاً اقلیتهای طرفدار ایران بودند و بالقوه نمی توانستند بی حمایت ایران، خود را نگهدارند. همینکه معلوم شد دیگر از دولت ایران کاری برای آنها ساخته نیست به سوی دوست جدید الولاء عربستان روی آوردند و از محمد ﷺ تقاضای حمایت و پشتیبانی کردند. در مارس ۶۳۰ محمد ﷺ از الجیرانه رسولی به بحرین و مقارن آن رسول دیگری به عمان فرستاد. هر دو محل حزب طرفدار اسلام ضعیف بود و فقط پس از رحلت محمد ﷺ و محاربات «رده» و ورود یک سپاه قوی از مسلمانان به این منطقه بود که اسلام با استحکام تمام تثبیت شد.

حاکم ایرانی یمن و عربستان جنوبی به نام باذان در سال ۶۳۰ با محمد ﷺ قراردادی منعقد ساخت و خود را تحت حمایت او در آورد. اما در اینکه او دین اسلام را پذیرفته است یا خیر جای بحث است، و ظاهراً باید پذیرفته باشد، زیرا ایرانیان آنجا از دولت ایران مساعدتهای منظم دریافت نمی کردند. پس از مرگ باذان محمد ﷺ پسر او را به حکومت منعم منصوب کرد و نمایندگان او را در قسمتهای

مختلف به رسمیت شناخت. لشکر کشیهای خالد بن ولید در ژوئن و ژوئیه و  
لشکر کشیهای مجلی در دسامبر ۶۳۱ باید با ناامنی ها و اغتشاشهای  
این منطقه مربوط باشد.

در مارس ۶۳۲ رئیس یکی از طوایف آنجا به نام الاسود دو  
تن از نمایندگان محمد صلی الله علیه و آله را بیرون کرد و پسر باذان را کشت و  
صنعا را متصرف گردید و قسمتی از یمن را تحت تسلط خود در آورد  
که به نام نخستین جنگ رده در یمن معروف است. این اوضاع بیش از  
يك یا دو ماه طول نکشید زیرا الاسود نیز در اوایل ژوئن، به دست  
یکی از عمال خود به نام قیس بن مکشوح از قبیله مراد کشته شد.  
او نیز احساسات ضد اسلامی داشت چه از اینکه صلی الله علیه و آله شخص دیگری  
را به ریاست قبیله مراد شناخته بود عصبانی بود. موقوف ماندن رده  
دوم که در زمان قیس و پس از رحلت صلی الله علیه و آله صورت گرفت با بحثها  
در اینجا ارتباطی ندارد جز ذکر این نکته که در تمام مدت عناصر  
ایرانی (اولاد پدران ایرانی و مادران عرب) در یمن یکی از بزرگترین  
پناهگاههای سیاست اسلام بوده اند.

تنها در حاشیه دولت عربستان نیست که ضعف دولت ایران به  
پیشرفت دولت اسلامی یاری کرده است. بلکه صلی الله علیه و آله پیش از رحلت از  
امکان حمله به خود عراق اطلاع داشته است و مانع کار فقط طوایف  
مسیحی بکر بن وائل و تغلب بوده اند که قدرت بسیار داشتند. در زمانی  
که تعیین تاریخ آن به درستی ممکن نیست (ممکن است ۶۱۱ یا  
۶۲۴ یا زودتر یا دیرتر باشد) جنگی در ذوقار رخ داده است و سر باذان  
ایرانی از نیروی عرب شکست خورده اند. دسته اصلی این عده از طایفه



شیبان یعنی طایفه منسوب به بکر بوده اند. اهمیت این جنگ در روح جدیدی است که به اعراب دمیده تا بتوانند با ایرانیان روبه‌رو شوند با ضعیف شدن ایران پس از ۶۲۸. این طوایف بار دیگر به فکر افتادند که به داخل سرزمینهای مسکونی آنان حمله‌هایی ببرند. تقریباً در همان موقع، توسعه دولت اسلامی، این طوایف را از منطقه نظر و نفوذ عَلَيْهِ السَّلَام بدر آورد. آنچه رخ داده است به طور روشن در منابع ذکر نشده است ولی احتمال دارد عَلَيْهِ السَّلَام اتحادیه‌ای با این طوایف تشکیل داده و از آنها خواسته است که یا مسلمان شوند و یا جزیه بپردازند. مقصود عَلَيْهِ السَّلَام از این اتحاد حمله به عراق بود و در ضمن فکر حمله به سوزیه نیز داشته است.

اگر این حساب صحیح باشد پس حمله به عراق نه جنبش قبیله‌ای بوده است تا مسلمانان خود را در آن داخل کنند، و نه يك نقشه کاملاً اسلامی که طوایف مجبور به قبول آن شده باشند. تمایل طوایف به جنگ با عراق نتیجه تبلیغ افکار اسلامی بوده است. عَلَيْهِ السَّلَام در سال ۶۳۰ کمتر حدس می‌زد که امپراتوری ایران در ظرف مدتی کمتر از بیست سال از صفحه تاریخ ناپدید شود اما ناچار ضعف آن را حس می‌کرده است و تصمیم گرفته است که مواظب حرکات داخل امپراتوری باشد. در اثر همین الهام بود که دولت اسلامی علاوه بر حکومت‌های دیگر جانشین و وارث امپراتوری ایران نیز شد.

### پیشرفت به سوی شمال

به طوری که گفته شده عَلَيْهِ السَّلَام علاقه بسیار به جاده سوزیه داشته و به اهمیت سوق الجیشی این راه برای پیشرفت دولت اسلامی

واقف بوده است، این نکات در بزرگترین لشکر کشی محمد ﷺ به تبوك در نزدیکی خلیج عقبه مشهود می شود که از اکتبر تا دسامبر ۶۳۰ طول کشیده است. به طوری که گفته شده است برای این جنگ محمد ﷺ نیرویی مرکب از ۳۰۰۰۰ نفر گرد آورد (درمقایسه با جنگ حنین که ۱۲۰۰۰ نفر بود). این جنگ مقدمه جنگهای کشور گشایی محمد ﷺ است نه خاتمه لشکر کشیهای او.

قبایل کنار جاده سوریه کمتر از دیگر قبایل که محمد ﷺ با آنها تماس داشته است حاضر به قبول اسلام بودند. تمام یا اکثر آنها مسیحی بودند و از قدیم با امپراتوری بیزانس رابطه داشتند. هنگامی که ستاره آن دولت رو به افول گذاشت، شاید بعضی از آنها در صدد برآمده اند که خود را در دامان محمد ﷺ اندازند، اما در آن موقع که محمد ﷺ برای چنین پیشنهاد جالبی به اندازه کافی قدرت یافته بود، اعتبار دولت بیزانس نیز پس از شکست ایرانیان به حد اعلای خود رسیده بود. این زمینه لشکر کشی به تبوك است. محمد ﷺ ناچار شنیده بود که چگونه هراکلیوس در ماه مارس صلیب مسیح را با پیروزی بر اورشلیم برگردانیده است، و می دانست که امکان پیروز شدن بر طوایف این منطقه برای او وجود ندارد، مگر آنکه نیرویی بزرگتر از نیروی هراکلیوس به آنجا بیاورد. انجام دادن این لشکر کشی بزرگ در اکتبر مقابله ای با عملیات هراکلیوس در ماه مارس بود. علاوه بر آن می خواست اطلاعاتی از جاده سوریه به دست آورد و چنان وانمود کند که نفوذ دنیای اسلام بر قسمتی از آن سرزمین توسعه یافته است. انعقاد عهدنامه هایی با طوایف کوچک مسیحی و یهودی نزدیک خلیج عقبه و

تضمین حمایت آنان در برابر پرداخت مبلغی این عقیده را تأیید می کند که او میل داشته است که این نقطه منطقه نفوذ دائم مسلمانان باشد. پیمان مشابیهی که در فرماندهی خالد بن ولید به وسیله او با حاکم جوامع اسکان شده دومة الجندل بسته شد از همان اصل کلی بیرون آمده است. تمام این حقایق مبین آن است که، هنگامی که محمد ﷺ در اکتبر ۶۳۰ با سپاه نسبتاً گرانی عازم آن سامان شد، کم و بیش می دانست که ممکن است با امپراتوری بیزانس در افتد.

معاهداتی که نام برده شد قسمتی از سازمان امپراتوری آیندۀ اسلام را تشکیل می داد. از مسیحیان یا یهودیان آن طرف دعوت به اسلام نشد. از آنان خواستند که فقط از دولت اسلام بر اساس شرایط چندی اطاعت کنند و مهمترین آن شرایط پرداخت جزیه سالانه نقدی یا جنسی معادل آن بود.

در عوض به آنها اجازه داده شد که در امور داخلی مانند سابق مستقل باشند و در رابطه با خارج تحت حمایت «خدا و پیغمبر او» یعنی دولت اسلام خواهند بود. اگر جامعه ای بی جنگ تسلیم می شد جزیه ای کمتر از آن مقدار که در خیبر درخواست شد می پرداخت. با این ترتیب برای عده ای از جوامع کوچک بهتر آن بود که تحت لوای اسلام در آیند. فکر چنین رفتار و روشی ممکن است از عادات بدویها گرفته شده باشد که يك طایفه قوی طایفه ضعیف را تحت حمایت خود می گیرد و این برای او نوعی افتخار و شرف به شمار می رود. تاریخ اسلام نشان می دهد که وجود اقلیتهای دینی را بر خود هموار کرده است و این ناشی از این عقیده بوده است که تا قول دادند که

از گروهی حمایت خواهند کرد باید آن را به بهترین وجه به جای آورند زیرا شرف و افتخارشان در گرو آن است. به نظر آنان حتی در عالم سیاست نیز حمایت از اقلیتها بسیار سودمند است. اینک قسمت بزرگی از گرفتاریهای دنیای عرب زبان امروز در حقیقت مربوط به این است که این سنت را از بین برده اند و چیز دیگری جای آن را نگرفته است.

اهمیت لشکر کشی به تبوك برای توسعه عالم اسلام در این است که عَلَيْهِ السَّلَام اصرار داشته است که تمام کسانی که قدرت داشته اند؛ در آن شرکت جویند. بدان هنگام که مدینه در اشعه آفتاب پیروزی تن گرم می کرد، بعضی از کشاورزان با ارج تصور می کردند که دیگر زمان آسایش فرا رسیده است و باید از کامیابیایی که به دشواری به دست آمده بود استفاده کنند و ثروتمندان از اینکه می بایست راحت و آسایش فرو گذارند و در لشکر کشی شرکت کنند و مساعده های مالی بدهند ناراحت بودند. این افراد نمی توانستند درك نمایند که عمر این گونه پیروزیها کم است و برای ادامه آن دولت اسلام باید به سوی شمال پیش برود و نیروی خود را به کار اندازد. عَلَيْهِ السَّلَام تمام این نکات را می دانست و درك می کرد که راه سوره را فقط به وسیله نیروی نظامی می توان در دست داشت و باید تمام پیروان او در آن شرکت جویند و آن را وظیفه دینی خود بدانند، سه واقعه ای که در خلال لشکر کشی به تبوك رخ داده است اهمیت و میزان مخالفت با سیاست جدید عَلَيْهِ السَّلَام را نشان می دهد. چنانکه گفته اند توطئه ای علیه عَلَيْهِ السَّلَام در راه ترتیب داده بودند و

بنا بود در تاریکی شب، در قسمت خطرناکی از راه حادثه ناگواری رخ دهد و صورت آتفاق و تصادف به آن داده شود، واقعه دوم موضوع مسجد ضرار است. پیش از آنکه عَلَيْهِ السَّلَام عازم شود از او درخواست شد که با حضور خود مسجدی را که مسلمانان در یکی از نقاط دور دست واحه‌های مدینه ساخته بودند مفتخر سازد و او این کار را تاباز گشت خود به تأخیر افکند. در راه احساس کرد که نیرنگی برضد او بوده است و همینکه به مدینه بازگشت دو نفر را مأمور کرد تا مسجد را خراب بکنند.

سازندگان مسجد ظاهراً ابوعامر راهب مرتاض بود که احتمال دارد خود او در آن موقع در مدینه بوده است و مسجد را برای آن ساخته بودند که هر وقت بخواهند در آنجا گرد آیند و طرح توطئه خود را بریزند.

در همین موقع کسانی که از شرکت در لشکر کشی خودداری کرده بودند تحت تعقیب قرار گرفتند و به معاذیر و بهانه‌های آنها به دقت رسیدگی شد و سه تن از آنها را که در نیرنگ سازندگان مسجد ضرار شرکت نداشتند به پنجاه روز حبس و تبعید و حبس مجرد محکوم کردند و پس از آنکه وحی نازل شد آنها را آزاد گذاشتند. شدت تنبیه نشان می‌دهد که عَلَيْهِ السَّلَام در این موضوع تا چه اندازه سختگیر بوده و لازم می‌دیده است که برای سلامت روحی جامعه اسلام، مسلمانان سالم، بی‌چون و چرا در لشکر کشی شرکت جویند و اگر لازم باشد که مردان جنگی برای مدتی از کشور دور باشند هیچیک از منافقان نتوانند خود را در مدینه پنهان دارند.

اقدامات شدیدی که در این مدت علیه منافقان انجام گرفت نیز به همین علت بوده است. محمّد بن عبد الله مصمم شد باخشونت با آنها رفتار کند و آنها را به آتش جهنم بفرستد و از جامعه طرد کند. منافقان این دوره دیگر عبدالله بن ابی و گروه او نبودند، اما شاید گروهی بودند که مسئولان مسجد ضرار نیز با آنها همدست بودند. این سختی و خشونت مانع این گونه مخالفتها شد که ممکن بود پس از رحلت پیغمبر به دولت کوچک او لطمه وارد آید.

تجزیه و تحلیلی که از دلایل محمد بن عبد الله در توسعه دولت جدید خود به جانب شمال شد، نباید تصور کرد که خود به طور تحلیلی فکر می کرده است. طرز فکر او بهتر است به الهام تعریف شود (اگر موادی باشد که ما را قادر به چنین تعریفی بکند). جنبه دینی همواره در افکار او مقام اول را داشته است و انگیزه‌ای که او را پیش می برده است شوق و علاقه او به انجام دادن فرمان خدا و گسترش دین اسلام بوده است. اما نمی توان گفت که افکار او (مانند غزوه) و سیاستهایی که آغاز کرد برای بیست سال بعد از رحلتش نیز کاملاً مناسب بوده است، هر چند این افکار در زمینه دین دور می زد. او به حقایق سیاسی نیز آشنایی کامل داشته است و اگر شخصاً نتوانسته است این حقایق را تجزیه و تحلیل کند قدرت آن را داشته است که جواب آنها را بدهد و همیشه می کوشیده است که اطلاعات سیاسی را لا اقل با دو پیرو خود ابوبکر و عمر در میان گذارد. در روزهای خطرناک پس از رحلت او هنگامی که مدینه خود در خطر آشوبگران بود، آن دو برای لشکر کشی که او طرح کرده بود قدم در پیش

نهادند که یکی از آنها فرستادن ۳۰۰۰ سپاهی به موته در مرز سوریه بود.  
وسعت قدرت محمد (ص)

نظر مسلمانان بر این است که محمد ﷺ در سالهای آخر عمر خود حاکم تقریباً تمام عربستان بوده است. اما از طرف دیگر محققان شكك اروپایی می گویند که محمد ﷺ به هنگام رحلت فقط بر قسمت کوچکی از اطراف مکه و مدینه تسلط داشته است. حقیقت بین این دو ادعاست ولی تعیین حدود کامل آن دشوار است، دولت اسلامی در ۶۳۲ ترکیبی از طوایف بود که با محمد ﷺ تحت شرایط مختلف متحد شده بودند و کانون آن مردم مدینه و شاید مردم مکه بودند. پس از آنکه دولت اسلام به صورت امپراتوری درآمد هر طایفه عرب طبعاً می خواست نشان دهد که در زمان حیات محمد ﷺ با او متحد بوده است و بهترین داستانی را که ممکن بود، در این باره اختراع می کرد که چگونه نماینده خود را نزد محمد ﷺ فرستاده اند و مسلمان شده اند. اگر این داستانها را حقیقت تصور کنیم باز اشکالی در بین است که نمایندگان ممکن است از طرف طایفه نبوده اند بلکه مسلمان شده اند و شرایط اتحاد شاید طوری بوده است که اجازه دخالت کامل در کارهای طایفه به محمد ﷺ نمی داده است و شاید شامل اقرار آنها به اسلام نیز نبوده است.

نمونه ای از این داستانها که ضعیف است مربوط به نمایندگی طایفه غسان است که پیش از تسلط رومیان در سوریه می زیستند. نمایندگان مرکب از سه تن از اعضای طایفه بودند که نام آنها برده نشده است. آنان در دسامبر ۶۳۱ نزد محمد ﷺ رفتند و به حقیقت



ادعای او به پیغمبری اعتراف کردند. اما وقتی به وطن خود باز گشتند اقدامی نکردند و فقط یکی از آنها زنده باقی ماند که در سال ۶۳۵ به مسلمانی خود اقرار کرد. اگر این را طایفه غسان اختراع کرده باشد چنین نتیجه گرفته می شود که در زمان حیات محمد ﷺ هیچیک از اعضای آن به او ایمان نیاوردند.

با توجه به همه این نکات می توانیم تصویری از وضع موجود به صورتی که در ذیل ذکر می شود به دست آوریم طوایف اطراف مکه و مدینه همگی با محمد ﷺ متحد شده و اسلام آورده بودند. در يك وضع مشابه طوایف مرکز عربستان و اطراف جاده عراق نیز همین حال را داشتند اما در نزدیکی عراق وضع چنین نبود. در یمن و بقیه جنوب شرقی گروه های بسیاری به اسلام اعتراف کرده بودند. اما معمولاً شامل قسمتی از يك طایفه بودند و مجموعاً نصف جمعیت را تشکیل می دادند و بیشتر تحت حمایت مدینه بودند. اوضاع در جنوب شرقی و امتداد خلیج فارس نیز همان گونه بود و عده مسلمانان نصف جمعیت را شامل می شد. در مرز سوریه و ماورای خلیج عقبه نتوانسته بود برای انتزاع طوایف از امپراتوری بیزانس موقعیت شایانی کسب کند. لذا می توان گفت اگر محمد ﷺ حاکم تمام عربستان نبود توانسته بود تمام عربستان را تا اندازه ای متحد سازد. او با تعلیم قرآن که به زبان عربی است، و با اصول سیاسی و دینی که اتخاذ کرده بود اعراب را هوشیار و بیدار کرد که خود را از لحاظ نژاد و فرهنگ واحد يك پارچه بدانند. قرآن عربی نیز به این واحد نازل شده بود و آنها را از مردم حبشه و روم و ایران و یهودیان متمایز



می ساخت دین جدید نیز با ادیان این ملل برابری می گردد و می توانست سر خوء را در بین آنها بلند نگهدارد و اصول سیاسی که با آن توأم بود از اتکا به بیگانگان و غیر اعراب اجتناب می کرد.

نظر به ترکیب دین با سیاست خواننده ممکن است تصور کند که ورود طوایف عرب در داخل دولت اسلام يك امر سیاسی بوده است دینی. ولی این طور نیست، زیرا خروج بنی اسرائیل از مصر هم با سیاست خاور میانه رابطه نزدیک داشته است، و این بیان که نهضتی جنبه ثابت سیاسی داشته، بدان معنی نیست که فاقد جنبه دینی بوده است (چنانکه در دنیای جدید غرب نیز به همین منوال است).

اسلام يك نظام اقتصادی و اجتماعی و سیاسی به وجود آورد که دین جزء اساسی آن به شمار می رفت. زیرا اساس تمام افکار بر آن استوار بود. صلح و امنیتی که در پشت نظام بود، امنیت خدا و پیغمبرش بود. این نظام قبایل بدوی را به انواع گوناگون جلب می کرد و شامل امتیاز برای کسی نبود. تمام مسلمانان برابر بودند و محمد ﷺ با پیروان خود با ادب و احترام رفتار می کرد، چنانکه يك رئیس قبیله با افراد قبیله خود رفتار می کند، وقتی در امپراتوریهای روم و ایران آثار ضعف پدیدار شد و مردم نیازمند چیزی شدند که آنان را نگهدارد، جامعه اسلامی و عده این ثبات ضروری و لازم را به آنان داد. عرب آن زمان بی شك دین اسلام را به طور کلی در نظر داشتند و جنبه های اقتصادی و سیاسی و دینی آن را تشخیص نمی دادند. مسئله اصلی برای آنان این بود که آیا وارد آن بشوند یا در بیرون

بمانند استفاده از مزایای اقتصادی و سیاسی بی اعتراف و اقرار به ایمان به خدا و پیغمبر ممکن نبود. تازه نفس اقرار و ایمان مؤثر واقع نمی‌شد، مگر آنکه شخص مؤمن عضو جامعه اسلامی بشود، که نه تنها جامعه دینی بود، بلکه جامعه سیاسی نیز به شمار می‌رفت. پس جای هیچ گونه شك و تردید نیست که انتقال مردم به جامعه اسلامی در سالهای ۶۳۰ و ۶۳۱ يك امر دینی بوده است، در تجزیه و تحلیلی که اروپاییان می‌کنند آن را در مرحله نخست يك امر سیاسی می‌دانند اما در حقیقت عوامل سیاسی و دینی قابل تفکیک نیست.

ایجاد يك جامعه اسلامی بی آنکه با مخالفت بر خورد کند ممکن نبود. در آغاز سال ۶۳۲ این مخالفت به صورت مرتبی در آمد. جنبش الاسود را در یمن ذکر کردیم. چندی پیش از آن شخصی به نام مسیلمه خود را به طایفه بزرگ مسیحی حنیفه در مرکز عربستان به عنوان پیغمبر معرفی کرده بود. به طوری که نوشته‌اند وی نامه‌ای به محمد ﷺ نوشت که چنین آغاز می‌شود،

من مسیلمه رحمن الیمامه إلى محمد بن عبدالله بسم الله الرحمن  
که در آن منطقه نفوذی برای هر يك پیشنهاد کرده بود. محمد ﷺ  
در جواب نوشت:

من محمد رسول الله إلى مسیلمة الکذاب بسم الله الرحمن الرحيم  
این دو جنبش و دو یا سه نهضت دحلی دیگر که پس از رحلت پیغمبر به وقوع پیوست به طور کلی سیاسی بوده است. نکته جالب

این است که همه لازم دیدند که ابتدا به جامعه اسلامی حمله کنند و چنین کردند، اما نه به نام مسیحیت یا هر دین موجود دیگر، بلکه به نام انبیای خود ساخته عرب. این خود دلیل بارز و مهمی است که قسمتی از آنچه سبب می شد که دین اسلام مردم را جلب کند آزادی آن از سیاستهای خارجی بوده است. از آنچه گفته شد این نکته آشکار می شود که اگر قبول کنیم مخالفت با دولت اسلام از لحاظ سیاسی بوده است. مسلمانان حق داشتند که به آن با نظر جنگ رده نگاه کنند، چه حمله های آنها متوجه دین اسلام بود.

پس چنین نتیجه گرفته می شود که میدان پیروزی محمد ﷺ در زمینه سیاسی، آن نیست که او حاکم تمام عربستان بوده است بلکه سازمانی خلق کرده است که می توانست تمام نهضت های مخالفت را در ظرف دو سال پس از رحلت او درهم بکوبد و پایه امپراتوری بزرگی را بریزد.

### ماه های آخر

در عین پیروزیهای حادثه آمیز و درخشان محمد ﷺ، زندگی خانوادگی و داخلی او چندان با خوشی قرین نبود. در آوریل ۶۳۰ هجری قمری قطی پسر برای او آورد که نامش را ابراهیم نهادند و موجب مسرت بسیار شد. متأسفانه این پسر در ژانویه ۶۳۲ در گذشت. دو تن از دخترانش نیز در ۶۳۰ در گذشتند. در همان سال نیز، به سبب حسادت فراوان زنانش، دچار تشویش خاطر گردید. احتمال دارد که علت این حسادت افزایش ثروت خود محمد ﷺ بوده است. محمد ﷺ در این واقعه از همه زنان خود به مدت یک ماه کناره گرفت و همراه

را تهدید به طلاق کرد. بعد از نزول وحی به زنان پیشنهاد کرد که بین طلاق و زندگی براساس شرایط او یکی را انتخاب کنند. احتمال دارد که بعضی از زنان، که اخیراً به علل سیاسی از طوایف متحد به ازدواج او در آمده بودند، طلاق را ترجیح داده‌اند، عایشه و هشت زن دیگر در ازدواج وی باقی ماندند و دارای مقام مهم اجتماعی شدند و آنان را «ام المؤمنین» گفتند، اما بدان شرط که پس از رحلت محمد ﷺ با مسلمانان دیگری ازدواج نکنند.

در مارس ۶۳۲ محمد ﷺ شخصاً برای زیارت (حج) به مکه رفت و این نخستین بار بود که محمد ﷺ رهبری حج را به عهده داشت، زیرا در سال پیش رهبری با ابوبکر بود. اینک زیارت جزء آیین اسلام شده بود و بت پرستان در آن حق حضور نداشتند. این زیارت به نام «حجۃ الوداع» معروف است که در آن محلولات تشریفات را معین ساخت هر چند بعدها در بین فقها درباره جزئیات آن اختلاف پیدا شده است. برای مسلمانان تقریباً آسانتر بود که آیین شرك را انجام دهند و معنی و رنگ تازه‌ای برای آن پیدا کنند، و این موضوع مخصوصاً در مورد زیارت صاد قتر است. در این موقع معنای تشریفات فراموش شده بود و اصول اسلامی می‌گفت که این تشریفات توسط خدا معین شده است بی آنکه دلیلی برای آن داده شود. آنچه اسلام هرگز قبول نمی‌کرد هر فکری بود که مخالف اصل «لا اله الا الله» باشد. مثلاً تمام بت‌ها می‌بایست از بین برود. اما رجم ستونهای سنگی هنگام زیارت به عنوان سنگسار کردن شیطان تعبیر می‌شد و آن را بی ضرر می‌دانستند.

هنگامی که محمد ﷺ در اواخر مارس به مدینه بازگشت ضعیف و ناتوان شده بود ، شیوع این خبر موجب بروز شورشهایی علیه او شد و اخبار مربوط به پیامبران دروغین نیز وضع او را بدتر کرد. وی تا اوایل ژوئن به کار خود ادامه داد سپس در اثر تب شدید و سر درد از زنجای خود خواست که او را از گذراندن هر شب در خانهٔ یکی از آنان معاف دارند و تمام وقت را در خانهٔ عایشه به سر برد . ابوبکر جای او را در نمازهای روزانه گرفت و سر انجام در دو-شنبه هشم ژوئن ۶۳۲ هنگامی که سرش در دامن عایشه بود رحلت فرمود.

او برای ادامهٔ کارهای دولت اسلامی دستوری نداد فقط ابوبکر را به عنوان رهبر نماز معین کرد. رحلت محمد ﷺ ناگهانی صورت گرفت و برای مدتی اغتشاش و بی نظمی در مدینه رخ داد و آخر الامر تصمیم گرفته شد که ابوبکر خلیفه یا جانشین او بشود . تشییع و تدفین جنازه در شب بین سه شنبه و چهارشنبه در خانهٔ عایشه صورت گرفت نه در قبرستان عمومی. جالبترین خطبه را ابوبکر ایراد کرد و مسلمانانی را که آفتاب درخشان آنان غروب کرده بود مخاطب قرار داد و گفت ، « ای مردمان اگر در میان شما کسی است که محمد ﷺ را می پرستد محمد ﷺ در گذشت و اگر کسی است که خدا را می پرستد او زنده است و نمی میرد. این ایمان در نتیجهٔ حشر و نشر با محمد ﷺ و تعالیم او-پیدا شده بود.

## مزایا و مشخصات

### منظر و رفتار

بنا بر مدارك و اسناد موثق عَلَيْهِ السَّلَام قدی متوسط یا اندکی بلند تر از متوسط، سینه و شانهای پهن و روی هم رفته بنیه‌ای خوش و قوی داشته است. بازوان او دراز و دست و پایش درشت، پیشانی وی بلند و برجسته و بینی او دارای برآمدگی بود. همچنین چشمانی درشت و سیاه و رنگی تیره داشت. موی سرش بلند و پر و نرم و هموار و مانند کی مجعد و محاسن او انبوه بود و خطی باریک از موی ظریف بر گردن و سینه کشیده داشت. به هیئت و سیما خوشگل و زیبا بود. و هنگام راه رفتن گفتمی به شتاب از تپه‌ای سرازیر می‌شد و دیگران به دشواری با او همراهی می‌توانستند. هنگامی که به سویی بر می‌گشت با تمام تن می‌گردید. او فرزند غم بود و چون به اندیشه‌های عمیق فرو می‌رفت ساعات درازی خاموش می‌ماند و با این همه هرگز آرام نمی‌گرفت و

خود را سرگرم می کرد. جز به هنگام ضرورت سخن نمی گفت و آنچه می گفت واضح و معنای آن آشکار بود و حشو و زاید نداشت از آغاز تا انجام مطالب را سریع و تند بیان می کرد. بر احساسات خود تسلط کامل داشت. وقتی از چیزی نفرت داشت خود را کنار می کشید و چون مسرتی دست می داد چشمان خود را پایین می آورد اوقات وی بر اساس تقاضاها و نیازی که مردم به او داشتند به دقت تقسیم شده بود. در رفتارهای خود با مردم حضور ذهن داشت. در بعضی از موارد شدت عمل نشان می داد ولی قلباً نه تنها خشن نبود بلکه مهربان نیز بود. خنده اش از حدود تبسم تجاوز نمی کرد.

از داستانهایی که درباره ملائمت رفتار و رأفت او نوشته شده است برخی قابل اعتماد است که از آن جمله یکی این داستان است. بیوهٔ پسر عم او جعفر بن ابی طالب شخصاً به نوهٔ خویش گفته بود که **عَدِّیَ اللّٰهُ** چگونه خبر مرگ جعفر را فاش کرد. او گفت روزی سرگرم کارخانه بود که **عَدِّیَ اللّٰهُ** او را احضار کرد. او فرزندان خود را فراخواند (از جعفر سه پسر داشت) صورت آنها را شست و سرووضعشان را پاکیزه کرد. وقتی **عَدِّیَ اللّٰهُ** وارد شد از فرزندان جعفر پرسید. مادرشان آنها را نزد وی آورد و او آنها را در آغوش گرفت و بویید همچنانکه مادری فرزند خود را می بویید. سپس چشمانش پر از اشک شد و گریستن آغازید. زن پرسید: آیا خبری از جعفر دارید؟ پیغمبر گفت که او کشته شده است. سپس به کسان خود دستور داد، برای خانوادهٔ جعفر غذا فراهم کنندو گفت آنان امروز چندان سرگرمند که نمی توانند به فکر خود باشند.

ظاهراً علاقه بسیار به کودکان داشته و با آنان گرم و مهربان بوده است. شاید علت مهربانی فوق العاده او به کودکان آن بوده است که همه فرزندان او در خردی فوت شدند و او این علاقه را به پسر خوانده خود زید منتقل کرد. همچنین تعلق خاطری به پسر عم جوان خود علی بن ابی طالب داشت که مدتی عضو خانواده او به شمار می رفت اما بی شک دریافته بود که علی واجد شرایط و صفات يك سیاستمدار کامروا نبود، برای مدتی علاقه بسیار به نوۀ خود امامه داشت که حتی به هنگام نماز جماعت او را به دوش می گرفت و با خود می برد و هنگام سجود و رکوع او را به زمین می گذاشت و بعد مجدداً او را بر دوش می گرفت. روزی احساسات زنان خود را بر انگیخت و گردن بندی را به آنان نشان داد و گفت آن را به کسی خواهد داد که در نزد او از همه عزیزتر است و چون حس کرد که احساسات آنان به اندازه کافی بر انگیخته شده است آن را به هیچیک نداد و به امامه داد.

او می دانست خود را وارد بازی و روح کودکان بکند و دوستان چندی در بین اطفال داشت. با کودکانی که از حبشه آمده بودند بازی می کرد و به زبان حبشی با آنان سخن می گفت در یکی از خانه های مدینه پسری بود که عَلِيٌّ بْنُ أَبِي طَالِبٍ با او بازی می کرد. روزی کودک را متأثر یافت و علت را پرسید. وقتی به او گفت بلبل محبوب او مرده است آنچه در قدرت داشت برای تسلی خاطر او به کار برد. محبت او حتی شامل حیوانات نیز می شد و این در قرنیه که عَلِيٌّ بْنُ أَبِي طَالِبٍ در آن می زیست و در دنیای آن روزگار شایان توجه بود. هنگامی



که کسان او عازم مکه بودند از گودالی گذشتند که چند توله سگ در آن بود. عَلَيْهِ السَّلَامُ نه تنها دستور داد کسی مزاحم آنها نشود، بلکه کسی را مأمور کرد تا مواظبت کند که این دستور انجام گیرد. آنچه گفته شد اطلاعات ضمنی است که در باره شخصیت عَلَيْهِ السَّلَامُ به دست آمده است و رفتار او را به طور کلی آشکار می سازد. احترام و اعتماد مردم را بر اساس مجاهدتهای دینی و صفات خوب خود مانند جرئت و قدرت تصمیم و استحکام متمایل به خشونت ولی توأم با سخاوت جلب می کرد. علاوه بر اینها دارای اخلاق و رفتار چنان پسندیده ای بود که محبت و دوستی مردم را به دست می آورد و آنان را به فداکاری بر می انگیزخت.

#### نقاط ضعفی که به او نسبت داده اند

از همه مردان بزرگ دنیا هیچکس به اندازه عَلَيْهِ السَّلَامُ مورد بد گویی واقع نشده است. ما علت آن را در گذشته گفتیم و خلاصه آن این بود که اسلام در طی چند قرن دشمن بزرگ مسیحیت بوده است و مسیحیت با دولتهای دیگری که از حیث قدرت و سازمان مانند مسلمانان باشند تماس مستقیمند اشت امپراتوری روم پس از آنکه بعضی از ایالاتش به دست اعراب افتاد در آسیای صغیر مورد حمله مسلمانان قرار گرفت و اروپای غربی از راه اسپانیا و سیسیل تهدید شد، حتی پیش از جنگهای صلیبی، که هدف آن بیرون کردن اعراب از سرزمین مقدس بود، اروپای قرون وسطا در صدد ایجاد ارتش بزرگی بود تا آنجا که کلمه عَلَيْهِ السَّلَامُ را به «مجون» که به معنای تاریکی است تبدیل کردند. در قرن دوازدهم افکار در باره اسلام و دخالت

مسلمانان در جنگهای صلیبی چنان ناروا تعبیر شد که اثر نامطلوبی در روحیه مردم گذاشت، در حالی که دقت و توجه عملی توأم با شرافت و غیرت و امانت تحقیق، برای مطالعه و کسب اطلاعات کامل و صحیح درباره دین محمد ﷺ لازم است.

از آن زمان تا کنون مخصوصاً در دو قرن اخیر پیشرفتهای بسیاری حاصل شده است. ولی هنوز مقداری از داوریهای غلط گذشته ادامه دارد. دردنیای کنونی، که رابطه مسلمانان و مسیحیان از گذشته بهتر و محکمتر شده است، جای آن دارد که هر دو بکوشند تا درباره رفتار محمد ﷺ توافق پیدا کنند، بدنام کردن او توسط نویسندگان اروپایی موجب آن شده است که جنبه خیالی و تصویری او به وسیله نویسندگان دیگر اروپا و اسلام به کمال مطلوب برسد. بدنام کردن یا کمال مطلوب نشان دادن اساس خوب و استواری برای روابط متقابل تقریباً نیمی از جمعیت بشری کافی نیست. حقیقتی در دست است که می توان بنای دآوری خود را بر آن قرار داد. داوریهایی نهایی مآچه باید باشد.

یکی از تهمت هایی که معمولاً به محمد ﷺ می بندند آن است که او را شیطانی معرفی می کنند که برای اقناع حس جاه طلبی و شهوت خود، تعالیم دینی را تبلیغ می کرد که خود به دروغ بودن آن اعتماد داشت. چنانکه در بالا ثابت کردیم اگر این اعتماد و صمیمیت وجود نداشت پیشرفت دین اسلام ممکن نمی شد. این نکته نخستین مرتبه در صد سال پیش در خطابه های توماس کارلایل «درباره قهرمانان» شدیداً مورد اعتراض قرار گرفت و از آن پس مورد قبول محققان نیز واقع

شد که فقط ایمان عمیق به مأموریت خود بود که محمد ﷺ را حاضر  
 کرد سختیها و آزارهای ایام اقامت در مکه را تحمل کند، در حالی  
 که از نقطه نظر اوضاع جاری امید موفقیت در آن بسیار ناچیز بود.  
 او اگر صدقاتی نداشت چگونه می توانست همکاری و فداکاری مردان  
 قوی الاراده و درستکاری مانند ابوبکر و عمر را جلب کند؟ از نقطه  
 نظر يك فرد معتقد به خدائیز این سؤال پیش می آید که چگونه ممکن  
 است خدا اجازه دهد، دینی مانند اسلام، بر اساس دروغ و فریب پیشرفت  
 کند. پس دلایل قوی در دست است که محمد ﷺ در عقاید خود صادق  
 بوده است اگر از بعضی از جهات اشتباهاتی داشته است این اشتباهات  
 بر اساس دروغ یا شیادی نبوده است. تهمت های دیگری که به محمد ﷺ  
 وارد ساخته اند این است که او را خیانتکار و مردی شهوتران دانسته اند و  
 به وقایعی مانند شکستن حرمت ماههای حرام در لشکر کشی نخله  
 ۶۲۴ م. و ازدواج او با زینب بنت جحش زن مطلقه پسر خوانده اش  
 زید استشهاد کرده اند درباره وقوع این امور اختلافی نیست ولی  
 واقعیت آنها طوری نیست که موجب این تهمتها بشود. آیا شکستن حرمت  
 ماههای حرام يك عمل جنایت آمیز بوده است؟ یا يك نقض بجا و درست  
 قسمتی از اصول شرك؟ آیا ازدواج با زینب فقط تسلیم به شهوت بوده  
 است یا بیشتر يك اقدام سیاسی بوده که با اقدام به آن رسم نامطلوب  
 «فرزند خواندگی» که به درجات نازل اخلاق متعلق بود به پایان  
 رسیده است در گذشته در باب تفسیر و توضیح این وقایع به اندازه  
 کافی سخن گفت ایم تا نشان دهیم که دلایل و وقایعی که در رد محمد  
 ﷺ به آنها استناد می شود بیش از حد تصور ضعیف و نامعتبر است.

بحث دربارهٔ این افتراها و تهمتها، سؤال اساسی دیگری را به وجود می‌آورد و آن این است، که، چگونه باید دربارهٔ محمد ﷺ داوری کنیم؟ آیا با معیار زمان و کشور خود؟ یا با روشن‌ترین عقاید امروزی غرب؟ هنگامی که منابع را دقیقاً بررسی می‌کنیم آشکار می‌شود که قسمتی از رفتار محمد ﷺ، که مورد انتقاد محققان کنونی مغرب زمین است، از طرف معاصران او مورد انتقاد واقع نشده است. بعضی از کردارهای او را مورد انتقاد قرار داده‌اند ولی انگیزهٔ آن یا تعصب توأم با خرافات بوده یا ترس از نتایج و عواقب آنها. اگر رفتار محمد ﷺ را در نخله مورد انتقاد قرار داده‌اند علت آن بوده است که از مجازات خدایان مشرکان ترس و واهمه‌ای داشتند، یا از انتقام مردم مکه می‌ترسیدند. اگر از قتل عام یهود قریظه ابراز شگفتی می‌کردند فقط از حیث تعداد و خطر انتقام‌جویی احتمالی خونی است که ریخته شده است. ازدواج با زینب ازدواج با مجرم تلقی شده است ولی این گونه مفهوم به عرف و روش قدیم مربوط بوده و به سازمانهای خانوادگی طبقات پایین تعلق داشته است که نسب و منشأ پدری طفل به درستی تعریف و شناخته نشده بود و این رسم پست عملاً به وسیلهٔ اسلام از میان رفت.

بنابراین از نقطهٔ نظر شرایط زمان نسبت خیانت و نفس پرستی بر محمد ﷺ درست نیست. معاصران به هیچ وجه عیبی در او نیافتند. بعضی از رفتارهای او هم که مورد انتقاد دانشمندان مغرب زمین قرار گرفته است نشان می‌دهد که معیار رفتار محمد ﷺ از معیارهای زمان او بالاتر و برتر بوده است. در روزگار خود و برای نسل خود

مصلح اجتماعی و حتی مصلح عالم اخلاق به شمار می‌رفت. نظام امنیت اجتماعی جدید و همچنین سازمان نوین خانواده که او به وجود آورد هر دو از آنچه در سابق وجود داشت پیشرفته‌تر و مترقی‌تر بود. با انتخاب نکات اخلاقی پسندیده از بدویان و منطبق کردن آنها با احوال جامعه، دین و سرمشق اجتماعی جدیدی برای زندگی نژادهای مختلف بشری بنیاد کرد. این کاری است که از عهدۀ يك خیا تنکار! یا «شیاد پیر»! بر نمی‌آید.

بعضی را عقیده بر آن است که رفتار محمد ﷺ پس از رفتن به مدینه تغییر و تنزل کرد ولی دلایل قاطعی برای اثبات این نظریه وجود ندارد. فقط بر این اصل سست استناد می‌شود که هر قدرتی منحرف می‌شود و انحراف قدرت مطلق انحراف مطلق است. تهمت انحرافهای اخلاقی فقط به اتفاقات مدینه وارد آمده است نه دوران مکه. اما بنا بر تفسیری که از آن وقایع در این کتاب شده هیچ گونه اثری که نشانه ضعف یا قصور محمد ﷺ در عقاید و افکار خود باشد و یا از انحراف او در اصول اخلاقی حکایت کند، مشاهده نشد. واعظ آزار کشیده و ستم‌دیده مکه کمتر از يك فرد زمان خود یا کمتر از حاکم مدینه نبود اگر مدارکی از این واعظ در دست نیست تا نشان دهد که نظریات او با افکار اروپای قرن نوزدهم چه اختلافی داشته است دلیل آن نیست که افکار او از مصلحان دیگر کم‌ارتر باشد (بامعیارهای ما) اما عکس آن صادق است چه این واعظ به زمینه شرك نزدیکتر بوده است. در دوران مکه و مدینه معاصران به او به نظر يك فرد شریف و درستکار نگاه می‌کردند و در نظر تاریخ نیز او يك مصلح اجتماعی و

اخلاقی است. نیکی رفتار محمد ﷺ هنگامی آشکار می گردد که او را با اعراب زمان خود مقایسه کنیم. اما ادعای مسلمانان برعکس این است و محمد ﷺ را سرمشق اخلاق و رفتار برای تمام بشر می دانند. او را بر حسب معیارهای افکار روشن جهانی برای داوری معرفی می کنند. هر چند دنیا اینک به سوی وحدت پیش می رود به محمد ﷺ ، به عنوان يك نمونه اخلاق، کمتر توجه شده است. اما چون عده مسلمانان بی شمار است دیر یا زود باید جداً در صدد بر آمد که آیا می توان از زندگی و تعالیم محمد ﷺ اصولی به دست آورد که به پیشرفت اخلاق بشر یاری کند.

به این سؤال هنوز جواب قطعی داده نشده است. آنچه تا کنون مسلمانان به نفع ادعای خود درباره محمد ﷺ گفته اند مقدماتی بیش نیست که فقط عده کمی از غیر مسلمانان را متقاعد ساخته است. هنوز برای مسلمانان راه باز است که موضوع را بهتر و دقیقتر مورد بحث قرار دهند. آیا آنان می توانند کلیات و خصوصیات زندگی محمد ﷺ را تفکیک نمایند و آن اصول اخلاقی را پیدا کنند که به بهبود اوضاع کنونی جهان یاری کند؟ یا اگر انجام دادن این کار مشکل است آیا می توانند نشان دهند که زندگی محمد ﷺ سرمشق کمال مطلوب برای بشریت بوده است؟ اگر خوب تحقیق کنند مسیحیان حاضرند به آنان گوش فرا دارند. و دانستنیها را فرا گیرند.

در این اقدام مسلمانان با مشکلات عظیمی روبه رو هستند . ترکیبی از تحقیق سالم و بصیرت اخلاقی عمیق لازم است که متأسفانه این ترکیب بسیار نادر است. نظر شخص نگارنده بر این است که

امید موفقیت برای مسلمانان در تحت نفوذ در آوردن عقاید دنیا لا اقل در عالم اخلاق کم است. در عالم وسیع دین شاید بتوانند با جهانیان اشتراك و تفاهم پیدا کنند، زیرا مسائلی هست که درباره آن تأکید دارند مانند مثلاً، حقیقت خدا، که در شعب مهم دیگر ادیان یکتا پرستی فراموش شده است و من شخصاً در این باب خود رامدیون نوشته های مردانی مانند غزالی می دانم. اما برای متقاعد کردن اروپای مسیحی به این که محمد ﷺ مرد کمال مطلوب است اقدامات کم یا نا چیزی صورت گرفته است.

### مبانی بزرگ

شرایط زمان و مکان به نفع محمد ﷺ بود. نیروهای مختلف ترکیب یافت و اساس کار او را ایجاد کرد و موجب توسعه اسلام گردید. مهمترین این شرایط عبارت بود از، نارضایتی اجتماعی در مکه و مدینه، جنبش به طرف یکتا پرستی، واکنش یونان دوستی در سوریه و مصر، انحطاط امپراتوریهای ایران و روم و استفاده اعراب از فرصت برای غارت کردن سرزمینهای اطراف. لیکن این نیروها و نیروهای دیگر خود به خود دلیل ترقی امپراتوری مانند خلافت اموی و پیشرفت اسلام در دنیا نشده و نشر و گسترش اسلام به طور خود کار صورت نگرفته است. بی ترکیب قابل ملاحظه صفات محمد ﷺ، احتمال چنین توسعه ای نمی رفت و قدرت نظامی عرب ممکن بود صرف حمله به سوریه و عراق گردد و بی نتیجه بماند. این صفات به سه دسته تقسیم می شود:

۱. موهبت پیامبری محمد ﷺ - به وسیله او (یا به عقیده مسلمانان

متعصب به وسیله الهاماتی که به او می شد (دنیای عرب دارای قالبی از افکار شد که به وسیله آن از بین بردن ناخرسندیهای اجتماعی امکان پذیر گردید اساس این قالب، توجه به علل ناخرسندیهای اجتماعی زمان و بدکار بردن آن بود. چنانکه مستمع را تا عمق احساسات و وجودش به حرکت درآورد. اگر يك تن اروپایی، هنگام خواندن قرآن، توجهی به آن نکند ممکن است او را معذور داشت اما قرآن کاملاً با احتیاجات زمان مساعد بوده است.

۲- حکمت و تدبیر سیاستمداران عَلَّیهِ السَّلَام - ساختمانی که در قرآن بدو وجود آمد قالبی بیش نبود. این قالب برای آن بود که بتواند سیاستهای واقعی و سازمانهای واقعی را نگهداری کند. در این کتاب درباره قدرت پیش بینی و سوق الجیشی و اصلاحات اجتماعی مُحَمَّدٌ صَلَّی اللّٰهُ عَلَیْهِ وَاٰلِہٖ وَسَلَّم سخن بسیار گفته ایم. حکمت و دانش او در این مسائل با توسعه سریع دولت او نشان داده شده است که چگونه پس از رحلت وی به صورت امپراتوری جهانی درآمد و سازمانهای اجتماعی در بیشتر نقاط از آن کسب و تقلید کردند و سیزده قرن است که این کار ادامه دارد.

۳- هنر و مهارت او در اداره کردن و حکمت و پیش او در انتخاب افرادی است که کارهای اداری را به آنان وا گذار کرد. سازمانهای سالم و سیاست سالم اگر با اجرای امور به طور صحیح توأم نباشد ادامه نخواهد یافت. وقتی مُحَمَّدٌ صَلَّی اللّٰهُ عَلَیْهِ وَاٰلِہٖ وَسَلَّم در گذشت دولتی که او تأسیس کرده بود پایه گرفته بود. چنانکه می توانست فقدان او را تحمل کند و همینکه از این تشویش و سو کواری شفا یافت با سرعت روبه توسعه گذاشت.



هر چه انسان در باره تاریخ محمد ﷺ و آغاز دولت اسلامی تعمق می کند از وسعت پیشرفت او بیشتر متعجب می شود وقایع و فرصتهایی برای او پیش آمده که برای کمتر کسی دست داده است، اما محمد ﷺ کاملاً با دقایق زمان به هم پیوسته بوده است. اگر موهبت پیامبری و تدبیر قدرت اداری و بالآخر از همه اعتماد او به خدایی که او را فرستاده است، نبود فصل مهمی از تاریخ بشریت نوشته نمی شد.

### آیا محمد پیامبر بود؟

آنچه تا کنون گفته شد از نقطه نظر يك مورخ بود. اما از نقطه نظر آورنده يك دین جهانی لازم است که موضوع از نظر الهیات و خدا شناسی بررسی و داوری شود. مثلاً امیل بروئر، عقیده دارد که ادعای پیامبری او « از متن حقیقی الهامات او توجیه پذیر نیست ». ولی اعتراف می کند که اگر محمد ﷺ پیش از مسیحیت در عربستان ادعای پیغمبری می کرد. بیرون کردن او از جرگه پیامبرانی که راه را برای دریافت وحی باز کردند آسان نبود بی آنکه وارد بحث از اشکالاتی بشوم که از نظر علم الهیات در ورای عقیده بروئر نهفته است سعی خواهم کرد با توجه به سطح معلومات افرادی که اطلاع کامل درباره مسیحیت و اسلام ندارند نظریاتی مناسب موضوع بیان کنم.

در ابتدا باید گفت که در بعضی اشخاص نیرویی است که آن را « تخیل خلاق » می گویند که نمونه های آن هنرمندان، شعرا، و نویسندگان خلاق هستند. این اشخاص آنچه را دیگران حس می کنند ولی نمی توانند بیان نمایند ( نقاشی - شعر - نمایش و داستان ) به شکل محسوس در می آورند. کارهای بزرگ تخیل خلاق دارای کلیت است و

فهمین احساسات و تمایلات تمام نسل به شمار می‌رود. البته همه آنها  
تخیلی نیستند زیرا با مسائل واقعی و حقیقی سروکار دارند ولی آنان  
تخیلات را، چه به طور بصری و مصور و چه در قالب کلمات برای بیان  
مطالبی به کار می‌برند که ورای فهم و عقل بشر است.

به عقیده نگارنده انبیا و رهبران دینی جزء این دسته از صاحبان  
تخیل خلاق هستند. افکار و عقایدی را بیان می‌کنند که ارتباط نزدیک  
با عمیق‌ترین و مرکزی‌ترین کارهای بشری دارد و مربوط به نیاز-  
مندیهایی موجود آنها و نسلهای آینده است. نشانه بزرگی یک پیغمبر  
این است که افکار او مورد توجه مردمی واقع شود که مخاطب او  
هستند، این افکار از کجا می‌آید؟ بعضی می‌گویند از «بیخبری و  
بیخودی» مردم دیندار می‌گویند از «خدا» و بعضی قدم فراتر نهاده‌اند  
و همصدا با بارون فردریک فن هگل می‌گویند: «هر حقیقتی باشد  
اصولا از طرف خداست» شاید بتوان گفت که این افکار «تخیل خلاق»  
حاصل زندگانی کسی است که از خود بزرگتر است و بسیار پایین  
تر از بیخودی و بیخبری است. برای مسیحیان مفهوم این موضوع  
اتصال با خداست زیرا بنا بر گفته یوحنا یوحنا «حیات در کلمه بود  
و عیسی گفت: «من حیات هستم».

قبول یکی از این نظریات موضوع را ختم نمی‌کند زیرا در باره  
افکار تخیل خلاق که دروغ و ناسالم است چه باید گفت. بارون فن  
هگل فقط می‌گوید، حقیقت از طرف خداست. سنتهای دینی نیز بر این  
است که بعضی از افکار ممکن است از طرف شیطان باشد. حتی اگر

تخیل خالق ابراری باشد که به وسیله «خدا» یا «حیات» به کار رود باز نشانه آن نیست که تمام افکار آن صحیح و سالم باشد در ادلف هیتلر تخیل خلاق خوب پیشرفت کرد و افکار او مورد توجه قرار گرفت اما عموم را عقیده بر آن است که او عصبانی بود و کسانی که از او پیروی کردند تحت تأثیر عصبانیت وی قرار گرفتند .

باید گفت که در محمد بن عبد الله تخیل خلاق عظیمی وجود داشت و افکاری که او به وجود آورد به میزان قابل توجهی صحیح و سالم است. ولی این دلیل آن نیست که تمام افکار قرآن صحیح و سالم باشد خصوصاً يك نکته آن لا اقل ناسالم به نظر می رسد و آن این فکر است که الهام یا حاصل تخیل خلاق مانند يك منبع صرف حقیقت تاریخی بالاتر از سنتهای عادی بشری است. در قرآن آیات چندی است سوره ۱۱ آیه ۵۱ و سوره ۳ آیه ۳۹ و سوره ۱۲ آیه ۱۰۳ که مفهوم آنها این است: یکی از اخبار غیب است که بر تو وحی می کنیم. بیش از این تو آن را نمی دانستی، نه تو نه مردم تو ، ممکن است کسی بگوید. تخیل خلاق قدرت آن را داشت که وقایع تاریخی را بهتر تفسیر و تشریح کند ولی استفاده از آن به عنوان منبع اغراق و خطاست. این نکته مورد توجه مخصوص مسیحیان است که قرآن منکر این حقیقت است که مسیح بر بالای صلیب جان داد و مسلمانان عقیده دارند که این افکار از شهادت تاریخ که مخالف آن است ارزش بیشتری دارد. نخستین هدف قرآن از این داستان آن بوده است که خواسته است منکر مصلوب شدن مسیح شود که یهودیان آن را پیروزی بزرگی برای خود می دانستند ، اما به طوری که گفته شد موضوع

ریشه‌های عمیق تری دارد. نظیر همین اغراق در اهمیت «وحی» نتایج دیگری نیز به بار آورده است. خدمات عرب را به فرهنگ اسلامی بی جهت بزرگ کرده‌اند و متأسفانه خدمات ملت‌های متمدن مصر و سوریه و عراق و ایران را که بعداً به اسلام گرویدند کوچک نشان داده‌اند.

از این مقولۀ کوچک نباید کوهی ساخت. کدام يك از ماست که از طرف «خدا» دعوت شود که مأموریت مخصوصی انجام دهد و احساس غرور نکند. بلکه به طور کلی عَلَيْهِ السَّلَام عاری از تکبر و غرور بود باوجود این همین اغراق کوچک در عمل خود نتایج بزرگی داشته است که نمی‌توان آنها را نادیده گرفت.

بعد از این همه پاسخ سؤال ما چیست؟ آیا عَلَيْهِ السَّلَام پیغمبر بود؟ او کسی بود که تخیل خلاق وی تا عمیق‌ترین درجات کار می‌کرد افکاری به وجود آورد که بامسائل اساسی بشری رابطه داشت چنانکه دین او نه تنها در زمان خود بلکه در قرن‌های بعد نیز مورد توجه عموم قرار گرفت. تمام افکاری که او طرح و بیان کرد حقیقی و منطقی و معتبر نیست (۱) ولی به فیض و عنایت «خدا» توانسته است میلیون‌ها بشر را به دینی در آورد که از دین سابق آنها بهتر است و همگی

---

(۱) البته مؤلف مسیحی است و نباید انتظار داشت با همه مدح و ستایش

که از پیغمبر مسلمانان کرده به صحت نبوت او معتقد باشد اما آنچه وی دلیل نقص قرآن دانسته و پاره‌ای مطالب آن را غیر منطقی و نامعتبر شمرده حل و جواب آن در نظر مسلمانان آسان است و همه منابع و مدارکی که مؤلف صحیح شمرده و بدان اعتماد کرده واقعاً صحیح نیست.

شهادت داده اند «لا إله إلا الله و محمد رسول الله»

### نکاتی چند در باره منابع

به يك مفهوم نخستين منبع اطلاع در باره زندگی محمد ﷺ قرآن است که معاصر و قابل اعتماد است. متأسفانه مانند يك پرونده تاریخی جزء جزء است و تفسیر آن مشکل است. زیرا قسمت اعظم وحی و الهام در آیات نسبتاً کوتاهی نازل شده است و بعداً آنها را در فصولی به طولهای مختلف جمع آوری کرده و هر يك را «سوره» نام نهاده اند. ممکن است تجدید نظرهایی نیز در آنها شده باشد. گزارشهایی از شأن نزول بعضی از آیات در دست است که هر چند بعضی از آنها کاملاً معتبر است ولی در بعضی از موارد باهم مباینت دارند و به علل چندی مستبعد و نامعقول به نظر می رسد. استفاده از قرآن به عنوان منبع تاریخی اطلاعات کلی در باره زندگی محمد ﷺ به دست می دهد. این اطلاع کلی در شرح حالهای اولیه که در باره محمد ﷺ نوشته شده است یافت می شود مانند سیره ابن اسحق ۷۶۸ که در سال ۸۳۳ توسط ابن هشام تصحیح شده است و مغازی یا لشکر کشیه تألیف واقدی. این کتابها علاوه بر شرح کلی دارای داستانهایی در باره خود محمد ﷺ و همکاران اوست علاوه بر این مجموعه ای از احادیث و روایات موجود است که مربوط به گفته ها و کردارهای محمد ﷺ است که معمولاً از لحاظ فقه و اصول مورد توجه است نه از لحاظ شرح حال محمد ﷺ. محققان مغرب زمین این منابع را مورد انتقاد قرار داده و قابل اعتماد ندانسته اند. بعضی سوء ظن را تا اندازه ای بالا برده اند که می گویند هیچیک از منابع به استثنای خود قرآن قابل اعتماد

نیستند پس چنین نتیجه گرفته می شود که درک زندگی محمد ﷺ ممکن نیست. ولی کتاب حاضر بر اساس مخالف این نظر تألیف یافته است و معتقد است که اقوال مورخان اولیه را باید حقیقت دانست مگر در موارد استثنایی که دلایلی در دست باشد که انحراف داستان یا اختراع آن را نشان دهد که علل سیاسی و مقاصد شرعی یا الهی و فقهی موجب آن شده است. همچنین عقیده داریم مطالبی که از کتابهای مختلف گردآوری شده صحیح است و می توان ادعا کرد که این نظریه ما را به زندگی محمد ﷺ و پیشرفت کارهای او رهبری می کند.

این کتاب خلاصه ای است از دو کتاب دیگر من به نام محمد ﷺ در مکه و محمد ﷺ در مدینه (۱ کسفورد ۱۹۵۳-۱۹۵۶) اختلاف عمده ای که این کتاب با دو کتاب دیگر دارد بیشتر ترتیب تاریخی است که مورد نظر است. ممکن است در بعضی از موارد تغییراتی داده شده باشد ولی این تغییرات اصولی نیست مگر آنکه ترجمه آیات قرآن را نیز اضافه کرده ام، مراجعاتی که به قرآن داده شده است بنا بر اصول شماره گذاریهای قدیم اروپاییان یعنی گوستا و فلو گل است. محققان اینک در صدد هستند اصول شماره گذاری مصریها را قبول کنند ولی هنوز اغلب کتابهایی که در اروپا چاپ می شود از اصول قدیم متابعت می کنند. چون در دو کتابی که نام برده شد ذکر منابع شده است در اینجا احتیاجی به تکرار آنها نمی بیند. فقط آنهایی را ذکر کرده ایم که در دو کتاب دیگر ذکر نشده است.

### تذکراتی درباره کتابها

ترجمه هایی چند از قرآن به زبان انگلیسی صورت گرفته است

نخستین آنها ژرژ سیل است که در ۱۷۳۴ انتشار یافته است و تا کنون چندین بار به چاپ رسیده است ( به طوری که نسخه های دست دوم آن فراوان است) و هنوز ارزش خود را از دست نداده است. در برابر آن ترجمه ریچارد بل قرار دارد که روشهای انتقادی عالیتری در پیش گرفته است. گزارنده کوشیده است ترجمه آیات را چنانکه در مرحله نخست بیان شده است بگوید و هدف آن در مرحله اول تحقیق کامل علمی است. بهترین ترجمه قرآن توسط ا. ج. آربری استاد زبان عربی دانشگاه کامبریج صورت گرفته است. از ترجمه هایی که توسط خود مسلمانان صورت گرفته است ترجمه مارمادوک پیکتال شایسته تحسین است و ترجمه اخیر ن. ج. داود بسیار ساده تر است و معانی قابل فهمی داده است. خواندن قرآن همیشه آسان نبوده است و آنان که بخواهند فقط افکاری از محتویات آن به دست آورند می توانند از ترجمه ۰۱ ج. آربری استفاده کنند. که در آن محتویات قرآن به طرز منظم خلاصه شده و دارای ضمیمه ای است که توسط اچ. یو. و. استاتون تحت عنوان « تعلیم قرآن » نوشته شده است. خلاصه دیگری توسط و. س. مار گولیوت تحت عنوان **عنوان محمد ﷺ** تهیه شده و جزء رشته کتابهای « چه تعلیم دادند » قرار دارد. کتاب « مقدمه بر قرآن » تألیف ریچارد بل که پس از درگذشت مؤلف به چاپ رسیده است و شامل بحث مهمی در باب مسائل مربوط به هیئت و انشا و ترتیب زمانی و تاریخ متن قرآن است.

از دیگر منابع اولیه خوشبختانه ترجمه انگلیسی کتاب ابن هشام در دست است که توسط آلفرد گیوم صورت گرفته است به استثنای

اشتباهات چندی که در تجدید نظرها پیش آمده است قابل اعتـمـاد است. از منابع دیگر برای فهم زمینه‌های عربستان کتاب «عربستان پیش از محمد ﷺ» نوشته دولاسی الیری، قسمت اول تاریخ ادبیات عربستان تألیف ا.ر. نیکلسن و خطابه‌های «تیرانداز» ریچارد بل در باره «ریشه اسلام در محیط مسیحی خود» می‌توان نام برد.

از کتابهایی که درباره زندگی محمد ﷺ به زبان انگلیسی نوشته شده است کتاب سر ویلیام مویر است که جزئیات داستانهای اسلامی را شرح داده است ولی انتقادی از آن نشده است. کتاب محمد ﷺ انسان و ایمان او تألیف «توراندر» که جنبه کاملادینی دارد شاید به حد غیر لزوم به آخرت گرایی متمایل است. «عناصر سری در محمد ﷺ» تألیف ج.ت. آرچر در يك شرح کوتاه. همچنین دایرةالمعارف اسلامی شرحی توسط فرانتس بوهل نوشته شده است که مطالعه مفصلی در این خصوص کرده است.

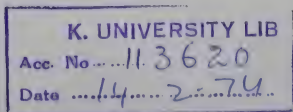
کتاب دیگری که جنبه تحقیق دارد کتاب «عایشه محبوب محمد» است که توسط نابیا آبوت نگارش یافته است. از کتابهای دیگری که در باره اسلام نوشته شده و دارای قسمتهای جالبی درباره محمد ﷺ است اول کتاب «محمدیسم» تألیف هامیلتون گیب و دیگری «دعوت مناره» توسط کنت کراگ است.

انتقاد درباره منابع زندگی محمد ﷺ مسائل چندی را به وجود می‌آورد. قسمت آخر کتاب «زندگی» تألیف سر ویلیام مویر نظریه‌ای را که محققان غربی در آخر قرن هیجدهم داشته‌اند بیان می‌کند. مطالعه دقیق و مهم درباره سنتها و ریشه‌های کردارها و گفتارهای



محمد ﷺ ایگناز گلدزیبر با توجه به این مواد مایهٔ افزایش شک و تردید شد. «اصول رویه‌های قضائی و علمی محمد» تالیف ژوزف شاخت درجهٔ تردید بیشتری را می‌رساند. هنری لامنس عضو فرقهٔ ژرژیت بلژیک در آغاز این قرن کتابهای چندی انتشار داد که حاکی از تردید در زمینهٔ تاریخی محض است. بیان لامنس در شرق شناسان فرانسوی نفوذ کرده است و شکاکی متجددانای اساس «مسئله محمد ﷺ» تالیف راجیز بلاچر قرار گرفته است؛ دوران کاهش تردید که کتاب حاضر بر اساس آن استوار است و در دو کتاب دیگر به نام «محمد در مکه» «محمد در مدینه» نیز از او کاملاً دفاع شده است و همچنین مقالات معروف به «محکومیت یهود بنی قریظه» و منابع مورد استفادهٔ ابن اسحق است. مسائل نوع دیگری نیز هست که توسط ما کسیم رودینسون در کتاب «زندگی محمد و مسائل اجتماعی آغاز اسلام» مورد بحث قرار گرفته است. اصول اساسی جنبه‌های مهم اسلام در کتاب آیندهٔ من تحت عنوان «اسلام و همبستگی جامعه» مورد بحث قرار خواهد گرفت.

پایان



BORROWER'S  
NO.

ISSUE  
DATE

BORROWER'S  
NO.

ISSUE  
DATE



28 Dec 19

Call No. \_\_\_\_\_

Date \_\_\_\_\_

Acc. No. \_\_\_\_\_

**CENTRAL LIBRARY  
THE UNIVERSITY OF KASHMIR**

This book should be returned on or before the last date stamped above. An over-due charge of 10 Paise will be levied for each day, if the book is kept beyond that date.

BORROWER'S  
NO.

ISSUE  
DATE

BORROWER'S  
NO.

ISSUE  
DATE

المہدیے

تعالیٰ فرجہ

ر طاب ثراہ

ی آقا سید رضا صدر

آقای محمد جواد نجفی

ترجمہ

امام دو

تالیف

با مقدمہ فر

وتر

مؤلف در ایر